翼の帰る処2

THE HOME OF THE WINGS

First volume

上

—鏡の中の空—

YUFUKO SENOWO

妹尾ゆふ子

幻狼 FANTASIA NOVELS

GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
Volume two
First volume

翼の帰る処[ところ]2

――鏡の中の空――



妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO

上

Illustration
ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］2——上
——鏡の中の空——

妹尾ゆふ子

THE HOME OF
THE WINGS Volume two
First volume

YUFUKO SENOWO



Illustration
ことき——KOTOKI
GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
2
First volume



翼の帰る処 ——— 11
—鏡の中の空—

第 一 章 ——— 19

第 二 章 ——— 93

第 三 章 ——— 183

あ と が き ——— 266

人物紹介



ヤエト

「過去視」の力を持つ帝国の尚書官　病弱な身



皇女

皇帝の娘であり、北嶺の太守として着任する



エイギル

ルーギンの部下



ルーギン

皇女の騎士団長



セルク

北嶺の民



ジェイサルド

《黒狼公》に仕えていた騎士



グランダク

北嶺の民



イスヤーム

北嶺の民



タルキン

北嶺の民



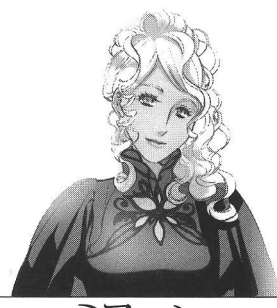
アルサール

北嶺の民



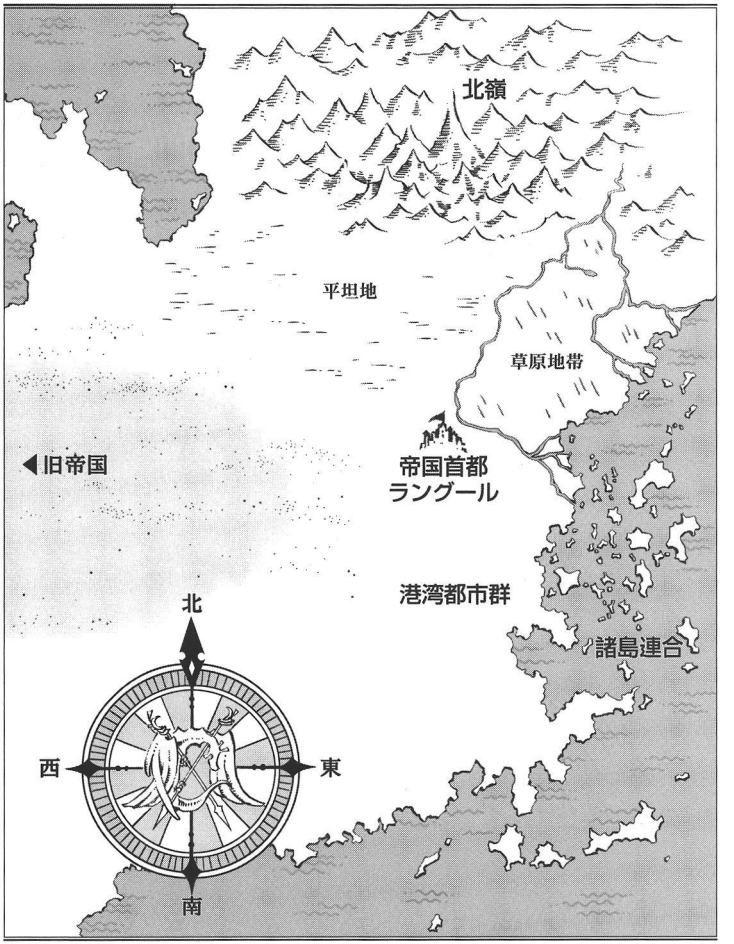
スーリヤ

ヤエトが救った少女



ミアーシャ

《黒狼公》の妹



THE HOME OF THE WINGS
2



翼の帰る処 2

―鏡の中の空―

†

その街は幸運にも戦乱や災害に巻き込まれることなく、創建当時の姿をたもっていた。周辺のどの街とも違う相貌で、人の営みを睥睨（へいげい）している。

帝国が興るより前のものだ、と父は館の礎石の表面を刷毛（はけ）で払いながら教えてくれた。

「こういうのは大事にやらなきゃ駄目なんだ」

少しずつ、名も知れぬ工人が彫った線が見えてくる。時を経て曖昧（あいまい）になったその輪郭を辿（たど）り、父は丁寧に刷毛をはしらせた。おもしろそうだったけれど、たのんでも譲ってくれなかった。

「神の……ここはよく見えないが、たぶん聲だな。定型句だ。神の聲、聴こゆ……だろう」

父は眉根を寄せると、顔を石に近づけた。膝が地面につき、着衣が汚れるのもかまわない。やがて顔を上げると、今度は上半身をぐっと後ろに引いた。

「ああ、やっぱりだ。この壁の石積み自体が、文字になっている。何年も住んでいるのに、気づかないでいたとは」

彼は顔を上げ、父と同じものを見ようとした。

ぼやけた灰色一色と思っていた壁は、よく見ると、微妙にことなる二色の石の組み合わせでできている。灰色を地に見立てれば砂色の石が浮き上がり、図形のようなものが……見えなくもなかった。

だが、それは彼の知るどんな文字とも違っている。アファルからニェトーまでの二十八文字は、もう覚えてしまったはずなのに。

「引き払う前に、調べてみてよかった」

一家は転居を控えていた。遠くへ行くのだとしか、彼は聞かされていない。年が変わる前に越すはずが先延ばしにしていたのは、妹を出産した母の体調がすぐれなかったからだ。

「文字なのですか？」
読めないとは口にできず、ささやくように尋ねて父を見た。その横顔は、ひどく遠く感じられた。
「真実——つまり、大いなる神の御名だよ」
「真実の神様？」
「そうだ。帝国の神とは違う、我らの神だ」
よほど面喰らった顔をしたのだろう、父はこちらを見て笑うと立ち上がり、刷毛を持っていない方の手で彼の髪をかるくかき混ぜた。
「同じといえば、同じ神だ。すべては大いなるひとつ神が数多お持ちになる御名、そして御姿のどれかに過ぎない。我らが祖国である古王国の神は、真実を教えたもう神だ。ただしその軸は時間に依存し、過去へと向かう。帝国の神も真実をお伝えになるが、軸となるのも向かうのも、人の心だ。近しいとはいえないな……我らの神に近しいというなら、同じく時間に依存する、しかし未来へと向かう神だろう」
「その神様は、どこの国に？」
父は遠くを眺めてつぶやいた。
「ずっと遠くかな……未だかつてそんな国があったかどうか、誰も知らない。だが、存在するはずだ。過去の真実を語る我らの神と、対になる神が……」
彼に答えているわけではない、と感じた。父は、自分自身の考えを整理しているだけだ。
父の注意を引き戻したくて、彼は尋ねた。
「でも父上、逆の作用なら、近いのではなく、遠いと考えるべきではないですか？」
「ああ……そう唱える者もいるよ」
「結局ひとつの神様なのに、近いとか遠いとか、どうでもよいことのように思えます」
父は笑った。
「そうだな。……いかん、話が長くなった。そろそろ部屋に戻りなさい、また熱を出すといけない」
まだ戻りたくないな、と彼は思った。
父が相手をしてくれるのは、珍しいことだった。留守がちな人なのだ。

「庭を回るくらい、かまわないでしょう?」
「どれくらい回るかによるな」
そういいながら、父は立ち上がった。せがむと、刷毛を持たせてくれた。
そこでようやく、彼は打ち明けることができた。
「あの文字、読めませんでした」
「そうか。あれは、我々の祖国の文字だ」
「祖国……」
耳慣れない言葉だった。だが、父の表情は真剣だ。
「おまえが習ったのは、沙漠を渡って伝わった隊商都市の文字だ。我々が喋っている言葉がそうであるように、その起源は帝国にはない」
「これは、沙漠の言葉なのですか?」
「もとを辿ればな。沙漠の都市国家群の歴史は古い。古王国ほどではないが、帝国よりずっと古くまで遡れる。当初は都市ごとに違う言葉があったらしいが、隊商たちがその言葉を平均化してしまった。その過程で表音文字を考案した。それが、おまえも知っている二十八文字だ。変化する言葉をあらわしやすいように、音を表現することに特化した文字なのだ」
あれは違う、と父はさっきの壁の方をふり向いて、言葉をつづけた。
「神の与えたもうた文字の原形が、そのまま刻まれている。表音文字ではない、表語文字だ。だから、ひとつの文字がすでに深い意味を内抱している」
「真実……」
「そう、真実。つまり神の御名だな。この家に住む者に神のご加護を、お導きの絶えることのなきように……と、それくらいの意味があるんだよ」
「その文字は、どれくらい数があるのですか?」
「星の数ほども」
「そんなに?」
「そんなにというが、では、おまえは星の数を知っているのかね?」
「いいえ。いくつあるのですか?」
「わからないさ。わからないくらい、たくさん、と

いうことだよ」

答えてから、父はにこりと笑った。

いつものことながら、父の冗談はまわりくどい。姉なら、うまく調子を合わせるはずだ。兄なら……きっと兄はもう、星の数ほどある古い文字を読めるようになっているに違いない。

「興味があるなら、本の部屋の左端の棚に字書がある。さっきの文字も載っているよ。帝国発祥の文字についての本は、その隣に並んでいたはずだ」

もちろん、帰ったらすぐに見に行くつもりだ。昔の文字を自由に書けるようになったら、おもしろいに違いない。

刷毛をふりながら、彼は前庭へと向かった。古い石垣に沿って置かれた飛び石を、ひょこりひょこりと渡っていく。

ふと、石垣の石が途中で変わっているのに気がついて、ふり返った。

「この石も、文字？」

「なんだって？　……いや、これは違うな。ここには小さな門があったんだ」

彼は立ち止まり、石垣を見た。そこに門があったなんて、はじめて知った。

「前の住人はかなり裕福な一家だったようでね、門付を望む芸人が、しきりとこの通用門に来た。きりがないので、門を潰して石垣にしたのだ。住人が変わりましたよという意味でね。たしか、おまえが生まれて暫くしてからだったかな……おまえの兄さんと姉さんは、前の家で生まれたからね」

へえ、と見直してぎょっとした。

石垣が、消えていた。

それだけではない。あたりが妙に暗い。

急に夜になってしまったかのようだと見上げてみれば、空は星を含んで遠く、風にちぎれて流れる雲の向こうには月が淡い虹をかけている。

混乱して視線を戻すと、鋳鉄の門が目の前にあった。しかもその門扉に手をかけて、ひとりの女が中

を窺っている。扉の高さは女の胸まで。喉のあたりで、首飾りがきらりと光った。

「こちらに赤子が授かったと聞いて参りました」

門の内から、返事があった。

「先読みの？」

「危険からは遠ざけ、幸福への道を案内します」

「少しお待ち」

召使いの女が走り去る——マーヤだ、と彼は思った。マーヤに違いない。でも、若い。

門の向こうで待つ女は、もっと若かった。肌はやや浅黒く、爪は染料で赤くいろどられている。大きな眼はあたたかな茶色、布で結んでまとめた髪は艶のない砂色。壁に隠されていた、真実の文字の色だ。

マーヤが腕に布包みを抱いて戻って来た。布の端から小さな手がこぼれている。足早に運ばれたのに、赤子はぐっすりと寝入っていた。

「よい未来が視えますように」

女は門の向こうから身を乗り出し、吸い寄せられるように赤子の手をとった。攫われるとでも思ったのか、マーヤは赤子を抱く手に力をこめて後ずさり、早く済ませようと女をせっついた。

「どうなの？」

「この子の未来は転変が激しい……沙漠の彼方、はるか東……その先は、わたしの力を超えてしまう」

「沙漠ですって？」

マーヤの声の調子が尖った。

この街からは、沙漠は見えない。だが、あり得ないと否定し去るには、近過ぎた。

「どうにかできないの？　ご長男ではないけれど、大事なお子さんなのに……そんな遠くへ」

「運命です。沙漠の向こうは、黒の御子、闇の御子なる忌わしき神の力に覆われし、暗黒の世界。……ですが、この子はそこへ向かうでしょう」

「金欲しさに、いい加減なことを——」

女は傲然と顔を上げ、マーヤを睨みつけた。

「報酬が目当てなら、不吉な言葉は紡がないわ」

負けじと、マーヤも相手を睨んだ。
「馬鹿におしでないよ。あたしだって知ってるんだ。悪い未来を伝えておいて、それを逃れるためにはこの護符をと、金をせびる輩がいることくらいね」
「馬鹿にするなというのは、こちらの台詞。そんな騙りと同じに扱われるとはね。我らは太陽神にして預言神ターンのお言葉を預かる一族。預言者は神の聲を聴き、語る。神の聲は通過するだけ、わたしはそれにどんな色も塗りはしない。この夜が明けるとき、日が昇る方角を誰が変えられましょう？　ひとたびくだった神の聲を、誰が天上に戻せるでしょう？」
マーヤは赤子を抱き直すと、首を左右にふった。
「もういい、お行き！　いくらほしいの」
「真実に値をつけるの？　買い叩けば消えると思っているの？　無駄よ。預言はくだった——」
女は赤子を見下ろして、わずかに眉を曇らせた。
「——東へ行きなさい。そこで太陽をみつけるの。彼の地を覆う闇を晴らし、世界を照らすのよ」
「去ね！」
硬貨を投げつけると、マーヤは走り去った。
女はそれを見送り、薄笑いを浮かべてささやいた。
「気の毒にね、小さな坊や。あなたとわたしは鏡の裏と表のようなもの。もう道は開かれてしまった」
身を屈めて硬貨を拾おうとする、その姿がふっと薄れて消えた。
あとには、色の違う石垣だけが残っていた。

第



章

1

自分が見ているものは、ただの雪に覆われた断崖なのだろうか。

——昔語りに出てくる光の回廊のようだ。

今日は晴れて風もなく、空はまさしく奇跡のような青一色。遠くに浮かぶ山並の幽玄な眺めは思わず吐息が漏れるほどだが、眼前に横たわる峡谷の美には呼吸すら忘れる。もともと奇岩奇石の並ぶ場所なのだろうが、その表面に凍りついた氷雪が陽光を反射する様は金剛石をちりばめたかのごとくで、一帯を絢爛たる光の楼閣となしていた。

「あまり正面からご覧にならない方が。これくらいの日の高さだと、じきに眼をやられてしまいます」

道案内の少年に現実的なことをいわれ、ようやくヤエトは我に返った。

たしかに、まぶしいなどというものではない。

そして寒い。風もないのに、しんしんと冷える。景色に見蕩れてぼんやりしていたのは短時間のことなのに、雪に埋もれた足先が痺れはじめていた。

「気をつけます」

こんな奇景が現実にあるのだなと感心しながら前へ進み、深く抉られた谷底に流れる川を覗き込もうとしたところで、袖を摑まれた。

「それ以上は危険です、尚書官殿」

「端までは、まだ距離がありそうですが」

少年は、生真面目な表情でヤエトを見上げた。

「地面がありません。風で迫り出した雪が凍っているだけなのです。最近、あたたかい日がつづいていますから、ゆるんでいるかもしれません」

——あたたかい？

もちろん、北嶺の冬にしては気温が高いということだろう。理屈はわかるが、承服しがたい。手をすり合わせながら、彼は答えた。

「ありがとう。命拾いしました」
「尚書官殿を死なせたら、生きて城に戻れません」
ああそう、とうなずいて考える。体格差からいって、彼の体重を支えるのは無理だろうに……もろともに落ちる気か。なんと嘆かわしい覚悟だ。
冬用の外套は前任者のお下がりである。古びて黴臭い代物だ。袖がちぎれれば道連れにしないで済むと考えながら、肩越しに尋ねた。
「エイギル殿は、どう思われますか？」
「今にも落ちそうだな、と思います」
騎士は明るい笑顔を見せてうなずくと、ヤエトのもう一方の袖を握った。
「落ちませんよ」
「どうも尚書官殿はあぶなっかしくて。急に目眩でも起こされたら困りますしね」
「起こしません」
たぶん、という言葉を呑み込むと、ヤエトは少し背伸びをして、あたりを見回した。
そんなことをしなくても、一行では彼がいちばん背が高い。伸び過ぎた草のようにひょろりとした印象を与える長身だ。
「お尋ねしたかったのは、そんなことではありません。この地形をどう思われますか、と」
「それは失礼を。そうですね……向こう側とは、かなり高低差がありますね」
少年が、うなずいた。
「このあたりだけは、川向こうの方が高いのです。他の場所では、向こうを見下ろせるのですが」
ヤエトはまた光りかがやく向こう岸を見上げた。
「綱を張った痕跡があるかもしれません」
吹雪で埋もれてしまっただろうが、溶けだしているかもしれない。土地の者が『あたたかい』とか『ゆるんでいる』とかいうのだから。
「探させましょう」
エイギルは、おい、と部下に声をかけた。
ヤエトは眼をほそめ、明る過ぎる景色から眼を庇

うため、紗をかぶり直した。
気をつけないと風で飛んでしまうので、額のあたりをぐるりと紐で巻いたら、変な恰好だと笑われた。土地の者はどうするのかと訊いてみると、鳥に乗ってしまえば眼を閉じても平気だという。
騎士団もあらかた同様の技能を手に入れているようで、おなさけで鳥に乗せてもらえるとはいえ、その心が読めるわけではないヤエトは、ひとり道具にたよるしかないのである。
――変な土地だ。
征服と融合で生まれた帝国という国家には、奇妙な文化をそのまま保有する民も少なくない。帝国は、そういう面では寛大過ぎるほど寛大だ。
それにしても、とヤエトは思う。
――土地自体が変過ぎる。
流されるまま生きていたら、ついにこんな常識の及ばない辺地に漂着してしまった。
任地は帝国の最北端で、ほとんどが寒冷な山岳地帯。土地は痩せ、めぼしい資源もない。必然として帝国の手が入らず、通称を放置区といったほどだ。
彼が北嶺行きの辞令を受けたとき、左遷と思わなかった者はいないだろう。本人もそのつもりだった――なりゆきで、太守の副官を拝命するまでは。
「上からも探させます」
エイギルの言葉にヤエトがうなずくと、即座に命令がくだされ、雪煙がそれに応えた。羽撃きの音を置き去りに、黒い巨鳥が空へと舞い上がる。
――あり得ないだろう、これは。
馬の代わりに鳥が交通の手段となっている時点で、かなりおかしいのだ。それも、心が繋がるだの意が通じるだの、あやしいことこの上ない。その鳥が最近では空まで飛ぶのだから、冗談もほどほどにしろ、といいたくなる。
おかしいのは北嶺に留まらない。川向こうの北方蛮族に至っては、天候をあやつるというのだ。
笑い話で済めばよいのだが、この冬、北方人はそ

の技術を駆使して北嶺に侵攻をはかった。
今回は撃退したが、うかうかと侵入を許してはいられない。今後のことも考えるために、ヤエトは北方人の侵入地点を特定しようとしているのだった。
「ここで渡ったとお考えなのですか？」
「そうかもしれないと思っています」
「でも、今までは……」
少年は言葉を呑みこんだ。僭越だとでも思ったのだろう。
少年の名はアルサール。城の厨房で見習いとして働いているが、彼の一族は代々国境の監視役を自任し、つねに峡谷沿いを哨戒しているのだという。
もの静かで計算が得意な少年が、そんな武闘派一族の生まれとは、意外だった。しかし、城にいるなら使わない手はない。国境沿いの地形を熟知しているというので、今日の案内役をたのんだのだ。
「わたしは、この土地に詳しくない。どんなことでも、気がついたら教えてくださいといったはずです。知ることこそが、財産ですと」
少年は真面目な顔でうなずいた。
「向こう側の崖が険し過ぎて、吹雪の中ではとても降りられません。川を渡るのは無理です」
エイギルが口を挟んだ。
「だが、吹雪をあやつることができれば？」
アルサールはぐっと詰まったが、それでも自分の思うところを述べた。
「天候に恵まれても、あの崖は難しいと思います。過去に、北方人がここを渡ったことはありません」
比較的安全に渡れる場所は限られている。そういう場所は土地の者も見回りを怠らない。
だから、今回は使わなかったと見るべきだ。
「今までに渡ったことがないなら、なおさら疑うべきです。わたしは、かれらは綱を張って谷を渡ったのではないかと考えているのです」
「綱で……」
「確実に吹雪がやむなら、その方が安全だし手軽で

す。峡谷の底まで下りる必要はありません。当然、高い方から低い方へ渡るでしょうから、向こう岸よりこちら側が低い場所を探していたのです」

北方人が神から受けた恩寵の力が以前より増しているなら、戦術もおのずと変わってくる。

しかもここは、はじめに襲撃を受けた村にとても近い。彼の仮説にぴったりの場所なのだ。

ヤエトは少年を安心させようと微笑んだ。

「怠りなく見張られていたからこそ、北方人はあらたな進入路を模索したに違いありません。敵に出し抜かれたのは事実ですが、同じことは二度させぬよう、皆で知恵を絞りましょう」

少年は、こわばった表情でうなずいた。

奇襲を許したことを、気にしているのだ。彼の一族のせいではないと伝えたいが、難しい。アルサールは責任感が強く、とても真面目だ。

「我々は、村へ行きましょう。案内してください」

「はい、尚書官殿」

「お供つかまつります」

エイギルがヤエトに手綱を手渡した。手綱の先に繋がれている鳥は、なにやら眠そうに見える。

心の繋がらない他所者を寛大に受け入れてくれたこの鳥の羽毛は灰色がかり、煤けた感じで見栄えはよくない。だが、非常に賢い。厩舎長曰く、この鳥さえいれば、ヤエトは無事に城へ帰れるそうだ。

ヤエトも厩舎長に同意見である。

「シロバ、たのむ」

ヤエトは鞍の後ろにとりつけた籠を確認した。今日の外出の目的は、この鳥籠を下流の村に届けることだ。渡河地点の確認は、ついでである。

少年の鳥が翼を広げたのに気づき、ヤエトはあわてて声をかけた。

「地面を行きます」

「えっ？」

少年は意外そうな表情を隠さない。わずかのあいだに、鳥が空を飛ぶことが当たり前になっているの

を痛感しつつ、ヤエトは理由を説明した。
「北方人がここで河を渡っていたとしたら、どういう経路をとるかを辿ってみたいのです」
「わかりました」
少年は鳥の頭を斜面の上に向けた。ここからどんどん登るのだろう。徒歩でなくて助かった。
「荷はあまり多くなかったでしょうな」
エイギルがヤエトの横に鳥を寄せながら声をかけた。城で寝込んでいたヤエトと違い、彼は実際に戦ったのだから、相手の軍容も見ているはずだ。
「身ひとつで来ていたようでしたか」
「背負える範囲で。必要なものは現地調達かと」
エイギルは声をひそめ、前を行くアルサールに聞こえないよう、気をつかっている。
少年は籠城組で戦闘には参加していないが、それだけに、地元の被害には心を痛めているはずだ。
——お助けください。
籠城していたとき、彼が膝をついて訴えたことを、ヤエトはまだ覚えている。
——安全な場所にいる自分が嫌で……。
アルサールが思いあまって真情を吐露したその声を、忘れてはならないとも思っている。
村が襲われた、村人の安否は不明……という情報が、慣れ親しんだ日常の崩壊と喪失に直結するものだという実感が、ヤエトには不足している。
他所者だからというだけでなく、たとえ故郷であっても、自分はそんな風かもしれない。
「殺した鳥も、食料に？」
「どうでしょうね。鳥については、とにかく北嶺人の足を奪うのが第一だったかと」
北嶺の民にとって、鳥は家族のようなものだ。この厳しい土地に生きる上での命綱といってもいい。それを奪われるのは、どんな気もちか。ヤエトの想像は、現実に及ばないだろう。
村に行く途中、少年は一回だけ鳥を止めた。
「ここで道が分かれています。隣の村へは、ここを

北へ行きます」

道など見えないと思ったが口にはせず、そうか、とうなずいてヤエトは周囲を見回した。

ふり返れば、渡河地点候補の崖がずいぶん下に見える。痕跡を探す騎士たちや彼らの鳥の姿は、雪原についた塵か埃のようだった。

「そこの灌木の枝は目印なのか？」

エイギルが尋ねた。少年はきょとんとした。

「いいえ、そんなものは……」

騎士は口を引き結ぶと、自分の鳥を木に寄せた。雪か風で折れたとしてもおかしくないが、場所が場所だ。それに、このあたりの木は木質がしなやかで折れづらい。あの折れかたは、不自然だ。

エイギルが断面を確認し、ヤエトをふり返った。

「刃物です。北方人のしわざかもしれません」

――あるいは北方人のために、誰か協力者があらかじめ目印を作っておいたのか……。

北方人が、このあたりの地理に明るいとは思えない。ヤエトはわずかに眼をほそめたが、すぐに顔を上げ、まだ当惑している少年に声をかけた。

「行きましょう。冷えきってしまいます」

「はい。急ぎます！」

村までの道のりはなだらかで、景色もよかった。こんなに寒いのでなければ、ヤエトはこの遠乗りを楽しんだといってもよいほどだった。

だが、村に着いたとたんに空気は一変した。煤で汚れた雪、崩れた壁、散乱する家財道具。住民が連れ去られたときのままの姿だ。

北方との戦いで、北嶺側の死者はおどろくほど少ない。急襲されて反撃もままならなかったことが、そういう意味では幸いした。戦っていれば、犠牲は増えただろう。北方側は、捕虜を奴隷として売るつもりだったらしく、無駄な殺しはしなかった。

真の意味で犠牲になったのは、鳥たちだ。

襲撃された村で飼われていた鳥は、ほとんどが厩舎ごと焼き殺されたのだ。

「呼んできます。……村長様！」

アルサールは村の入口に鳥を残すと、声をかけながら奥に進んだ。ヤエトとエイギルは鳥に乗ったまま、その場で待った。

もっとよく村を観察しようと、ヤエトは紗を顔から除けた。このあたりは今は日陰で、眩しくない。

北嶺では、木材は貴重品である。だから、木造の家は建てられない。岩肌が露出する場所の方が多いくらいで、土も材料として潤沢とはいえない。あるのは岩ばかりだ。

そこで、石を積む技術は発達した。

大掛かりな造成がおこなわれたのであろう城とは違い、民家は不規則な大きさと形の石を利用して建てられている。上へ行くに従って薄くて平らな石を選び、少しずつ内側に傾斜させて積んでいるようだ。屋根はなだらかな球状になっている。表面は雪に覆われ、石が見える箇所は少ない。冬は外壁に雪を叩きこむと聞いた気もするが、吹雪の仕業か人為的なものか、ヤエトには見分けがつかない。

村長を呼ぶ声は、少しずつ遠くなっていく。

「しっかりした子だ」

「アルですか？　いい子ですな。うちの息子も、あんな風にまっすぐ育ってくれればと思います」

エイギルは北嶺に駐留する騎士団の副団長だ。黙って立っていればいかにも強面の騎士だが、子煩悩の愛妻家で他人の恋愛話が大好き、誰と誰をくっつけたらどうかと仲人妄想に余念がない男だ。

女官たちのあいだでは『うっとり眺めるなら団長様、お友だちになるなら副団長』といわれているらしい。本人が、嬉しそうに教えてくれた。

無害認定されて、なにが嬉しいのか。

ついでに教えられたところでは、『結婚するなら副官殿』だそうだ。つまり、ヤエトのことである。牽制しあって本命を口にできない女官たちが、体のよい隠れ蓑に使っているのだろうが、正直にそう口にすると、乙女の純情を云々と説教される。そこで

最近は、光栄ですね、で済ませることにしている。
「大丈夫ですよ、エイギル殿のご子息なら」
「都に置いておくのは不安なので、呼び寄せたいと思っているんですよ」
「ご家族全員を？」
「できればそうしたいところですが、奥は都を動きたくないでしょう……つきあいも多いですし」
「ああ、なるほど。奥方は亡くなられた《黒狼公》様の妹君でいらっしゃいましたね、そういえば」
《黒狼公》とは、真上皇帝の腹心で無二の親友ともいわれた大貴族だが、真帝国の建国後ほどなく逝去している。ヤエトからすれば雲の上の存在だ。
ふと疑問に思ってヤエトは訊いた。
「《黒狼公》家は、どなたが継がれたのですか」
「ご存じないのですか？　御継嗣がないまま先代が亡くなられ、今は陛下のご恩情で空位となっています。いずれ陛下が後継者をご指名くだされば、《黒狼公》家の家名はつづくでしょう」
「それなら奥方のお血筋が継いでもおかしくないのでは？　つまり、貴殿のお子が」
「それは、陛下のお心次第ですね」
エイギルの口調はきっぱりしていた。同じようなことを、さんざんいわれているに違いない。
「失礼を申しました」
「や、とんでもないです。わたしだって、奥の気もちを考えれば……いや、複雑なところですね」
「お察しします」
ヤエトは相続法は専門ではないが、女性が跡継ぎと認められないのは確実だ。当主が亡くなってから養子をとっても、家門は継げない。おかげで貴族は早婚が増えた。ちょっとした都合で離婚されても困るので、その後、離婚が禁じられた。旧帝国の繁栄期に決まった法だ。これらの相続法は、戦が減って貴族が余ったことへの対応策なのだ。
寡婦の再婚が社会的に認められなくなったのも、その流れの上でのことだろう。調べようにも資料が

少なくてどうにもならず、諦めたことがある……。
そこまで考えて、ヤエトは小さく息を吐いた。
アルサールはまだ戻って来ず、声も聞こえなくなった。村はしんとしている。
「遅いですね」
自慢できることではないが、ヤエトのやる気はつねに少なめである。
やることはさっさと終わらせて部屋に戻りたい。そして、だらだらしたい。できれば隠居したい。それが、彼のささやかな願いである。
「危険はないはずですが」
見てきましょうかとエイギルがいわないのは、ヤエトの側をはなれるわけにいかないと考えているからだろう。未来があるという意味ではアルサール少年の方が有望なのだが、現時点では、北嶺太守副官であるヤエトの身の安全が第一だ。
「見回りは一定時間ごとに？」
「はい。村長ひとりでは、いかにも物騒ですから。せめて鳥がいれば、安心できるのですがね」
北方人を撃退しても、真冬の北嶺ですぐさま再建を開始するわけにもいかない。村人は皆、縁者の家か城に避難している。村長だけが、自分は村を守るのだと移動を拒否し、ひとりで居残っているのだ。
襲撃された村はどこも似たりよったりで、かならず頑固爺が居座っている状況だ。鳥もなしに、なにができるのか。村を守るなど寝言に過ぎない。
馬鹿ばっかりだ、というのがヤエトの本心だ。
エイギルが先に村長の姿を認め、小声でヤエトに注意をうながした。
「来ましたね」
馬鹿が、とヤエトは心の中で言葉をおぎなった。
この村の馬鹿は、不機嫌そうな顔つきの老人だった。城にいる尚書官イスヤームの叔父だそうだが、目つきの悪さがそっくりだ。
ヤエトが鳥を下り、エイギルもそれに倣った。
アルサールの肩を借りて歩いて来た村長が足を止

めると、ヤエトは両手を合わせて深々と一礼した。
「突然お訪ねしたご無礼をお許しください。自分は北嶺郡太守の副官で、ヤエトと申します。貴殿はファールーン殿とお見受けいたします」
老人は鼻息ひとつでそれに答えた。肯定の意味だと勝手に判断して、ヤエトは言葉をつづけた。
「まずはお見舞い申し上げます」
「城へは行かん」
ヤエトはうなずいた。
「はい」
「親戚の家にも行かん」
「存じております」
「儂は、どこへも行かん。絶対に、だ」
噛んで含めるようにいうので、笑いたくなった。
「心得ております。村の長としてのご覚悟と伺っております。ご立派です」
「立派なものか。立派な長であれば、村がこんなことにはなっておらん」
本気の口調だ。笑わなくてよかった。
「救援が間に合わなかったことは残念であると、太守も仰せです」
「儂らのことなど見捨てるつもりだったのだろう。門を鎖しておれば、やり過ごせるとでも思うてな」
「伯父さん！」
アルサールが村長の暴言を止めようとして、逆に攻撃の的になった。
「おまえもおまえだ。すっかり帝国の馬乗りどもに迎合しおって。城の暮らしはどうだ？　峡谷沿いに移動しつづけるより安楽か。先祖伝来のつとめを怠った結果がこれだと、わかっておろうな！」
「ファールーン殿、それは違います」
今度はヤエトが割って入る番だった。
「なにが違う。おまえは知らんだろうが――」
「この子の一族が、国境を監視する任を果たしていなかったわけではありません。敵は、いつもとは違う経路を使ったのです。かれらの天候をあやつる能

力が以前より増したこと、ファールーン殿にはよくおわかりなのではないですか？　かつての襲撃についてもご記憶のはず。かれらはこんなにも正確に雷撃をあやつりましたか？　望むままに吹雪を起こし、また風を止めることができましたか？」

村長は苦々しげな顔つきになった。

「それはたしかに、妙なところはあったが……」

「本来なら人の手には及ばぬ不思議の力が、この世に満ちはじめています。敵味方の別なく、それは強さを増しています。従来の方法では、もはや北嶺を守りきることはできぬのです」

アルサールが眼をみはった。初耳のはずだ。ヤエトの後ろに控えているエイギルも同様。確たる証拠のない仮説なので、滅多に口にしていない。

今、それを敢えて言葉にしたのは、老人の鬱屈を晴らすためである。手もなくやられた理由を明かせば、彼の矜持も守られるはずだ。

「籠を」

エイギルが手渡した籠を、ヤエトは村長の前に差し出した。

「《雪鳩》なら一羽、預かっているぞ」

「追加を二羽、お持ちしました」

村長の表情が動いた。吸い寄せられるように、吊り手を握りながらつぶやいた。

「しかし……儂ひとりに三羽もの《雪鳩》を」

どんな言葉より、鳥の方が心に届く。北嶺人は皆、鳥馬鹿だ。

「少しでも異常を感じられたら、城へ飛ばしてください。翼を得た今なら、報せさえあれば急行することが可能です。この場所に敢えて留まる剛胆さに期待する、と太守の仰せです。そしてその意気に応え、次はかならず助ける、と」

つづけて、ヤエトはふところから紙を取り出した。鳥馬鹿籠絡作戦、その二だ。

「これは、城の厩舎長による繁殖計画書です。今年は例年より繁殖を強化します。被害の大きかった村

には、雛を優先して選べるよう配慮せよとの、太守のご命令です。かけあわせを予定している鳥の血統を一覧にしてありますので、ご参考に」

紙を差し出すと、村長はほとんど夢みるような顔つきでそれを摑んだ。識字率が高いのはありがたい。読み上げなくて済む。

「城の鳥もか。アーカイも卵を生むかな？」

旧知の人を呼ぶような調子だが、どうせ鳥の名前に違いない。人は卵を生まない。

「素人のわたしがご説明して、間違いを申し上げてもいけません。詳しくはそこに書かれたものをご覧ください。産卵までに、こちらの再建も進めませんと。まずは厩舎から、でしょうね」

ヤエトがにっこりすると、村長もつられるように笑顔を見せた。

「村の男どもは、いつ返してもらえるんだね」

「それは天候と相談になるかと。無論、本人たちの意志を尊重します」

「そうだな。……わかった、儂はここで異常がないか見張っている。それでいいな？」

「助かります。なにか不足はありませんか？　手配できるものがあれば、お届けします」

村長は籠と繁殖計画書をかるく掲げると、笑みを消して重々しくうなずいた。

「いや、これで十分だ。ただ、村の者が戻って来る時期を知りたいのは、氷の切り出しの時期が迫っておるからだ。村の者たちに伝えておいてくれ」

「おまかせください。では、失礼つかまつります」

ヤエトはまた両手をあわせて一礼した。

「ご苦労だったな」

よく心得たもので、シロバは足を畳んで彼が乗るのを待っている。颯爽と飛び乗ることができればよいのだが、ヤエトの体力と運動能力では無理だ。

行くぞ、と声をかけて鳥の首を来た方に戻す。

「まだ地面を行くのですか？」

エイギルの問いに、ヤエトはうなずいた。

「さっきの目印が気になります。他にもあるかもしれません。上空からでは発見できないでしょう」
来た道を戻る途中で、ヤエトはふと思いだしてアルサールに声をかけた。
「氷の切り出しは、大変な作業なのですか」
「はい。寒いうちに済ませて、城に運びます。村ごとに代表を出して、作業するんですけど……今年は鳥がいないから、切り出しの場所まで行くだけでも……ああ、城にいれば却って近いですね」
「切り出した氷は城に運ぶのですか？」
「備蓄用の飲み水だそうで、城の氷室に入れます」
初耳である。城には井戸があるから、飲み水の確保は心配していなかったのだが。
「渇水で困ったことがあるのかな……」
つぶやいたが、誰も答えない。アルサールは若くて昔の話は知らないだろうし、エイギルは土地の民ではない。そのうち厩舎長か長老にでも訊いてみようと考えていると、アルサールに声をかけられた。
「あの、尚書官殿」
「なんです？」
「ファールーン伯父さんが、すみませんでした。失礼なことを申し上げて」
「気にしませんよ。あの程度で済んで幸運でした」
「あの程度……」
「もっと僻んだり恨んだりしてもおかしくない状況です。ひとりで村に籠っていれば、よけいにね」
「でも、ここが襲われたときは、尚書官殿はお城にいらっしゃらなかったのに。なにも責任なんてないのに、責められて、腹は立たないのですか？」
「わたしが城にいたかどうかは、彼には関係ないことです。わたしは郡太守の代理として彼に会った。そしてあのとき、太守は城にいらした。なのに、どうにもできなかったのですから」
「でも――」
「《雪鳩》は全部の村に配るんでしたよね？」
エイギルが話に入って来てくれたので、ヤエトは

ほっとしてそちらに向き直った。
「そうです」
「で、尚書官殿はそれを南から順番に回ると」
「北からは、セルクが回ってくれています」
地元では名門の若様で通っている真面目な尚書官が手土産持参で挨拶すれば、文句は出ないはずだ。
「つまり、被害の大きい地域は全部ご自分が担当なさるわけですよね」
それはもちろん、直情径行で感情が暴発しやすく、悪意はないが迂闊な言動が多いあの男に、微妙な地域を任せるわけにはいかないからだが、そうはいえない。アルサールが聞いている。
「他所者の自分の方が、被害を受けた村を見ても心を痛めずに済みます。以前の姿を知りませんからね。アルサールには悪いと思いますが……道案内は必要なので。すまないね」
「いいえ！」
少年はすごい勢いで首を左右にふった。
「……大丈夫ですか？」
思わず尋ねると、少年はきょとんとした。
「なにがでしょう？」
そんなに勢いよくふったら、頭が痛くならないかと思ったのだ。ヤエトは曖昧に笑顔を見せた。
「次の村でも恨み言はいわれるでしょうが、わたしは気にしません。はじめからそのつもりで来ていますから。君も気に病まないようになさい。念のためにいっておきますが、今回の一件は、君の一族が責められるようなことではない。北嶺を守るのは、帝国の義務なのですから。そうですね、エイギル殿」
「無論です。しかし、わたしもアルと同意見ですよ。城におられなかった尚書官殿が、責任をとって謝るのは変な感じです。イスヤーム殿にたのんでもよかったのではないですかね。地元なのだし」
「あのときに城にはおらず、この場所に縁がない自分だから、これで済むのです」
「そういうものですかね」

この村の代表として城にいたイスヤームが訪ねて来たら、老人はもっと厳しい言葉を投げただろう。あるいは、声もかけずに無視したかもしれない。

イスヤームが堪えてくれたからこそ、犠牲は最小限で済んだ。あのとき、うかうかと出かけていたらどうなったか。死者が出て、応援が求められ、さらに死者が……という展開になりかねなかったのだ。その彼が責められることこそ、避けるべきだ。

「とにかく、わたしが担当すべき事案ですから」

「……尚書官殿はほんとうに、無駄に勇敢でいらっしゃいますな」

「よくいわれます。自分としては、無駄ではないつもりなのですが」

エイギルは口を大きく開けて笑った。

「無駄にはしませんとも。尚書官殿のお約束は、我らがかならず守りましょう。貴殿の信頼に応え、この剣に懸けて誓います。皇女殿下の騎士団が、いかなる敵もうち払ってご覧に入れましょう」

大げさな口調でいってから、エイギルは少し照れたように頭を掻いた。

「団長殿が、騎士なら約束はこうするものだとね。教えてくださったのですが、なかなか見本のようにはいきませんな」

それはそうだろう、とヤエトは思った。ルーギンの真似が簡単にできたら、びっくりだ。

「ルーギン殿は、おひとりいらっしゃれば結構ですよ。大丈夫、お志は伝わりました」

2

北嶺も変な土地だが、帝国も変な国だと思う。

沙漠の西には多様な文化が花開き、権勢を競った。数多の国が興亡をくり返したが、全土を統一するほどの勢力は出現しなかった――帝国が興るまでは。

今を去ること六百年ほどの昔、高地沿いの小国が次々と攻められ、滅ぼされるという事件が発生した。

小勢力ながら互いに隙を窺い、牽制しあっていたはずの国々である。それが、一気に落ちた。

小競り合いの反復に境界地域の住民は疲れきり、政権を憎んでいた。帝国はそれに乗じて民心を得ると、かれらを使って情報を操作した。

いもしない敵を相手に軍事行動を起こさせ、守兵が最小限になったところで一気に城を落とした戦や、知将と名高いルンハルムを虜囚とした一連の戦闘などは、今も大衆に人気のある語りものだ。

それら小国を糾合したところで、はじめて帝国と名告り、皇帝と号した。そこからが、正式な帝国史だといわれている。

以後数十年で、帝国の版図はみるみる広がった。魔法のように国を滅ぼし、権力者を除いた。

戦えば強いが、大規模な会戦として知られるのは、ほんのわずか。情報操作と謀略戦が帝国の本領だ。

それを可能ならしめているのが、皇家の人間が神から得た恩寵の力だ。かれらは遠方にあっても瞬時に意を伝え合う。皇家の嫡流ばかりではない。神官として訓練を積んだ伝達官を介在させれば、その情報網は広く、しかも深い。

これを出し抜くのは不可能に近いだろう。

とくに皇祖と呼ばれる初代皇帝が没するまでの強さは異様なほどだ。戦わなくても勝ってしまう。

――帝国がというより、逆らう気概を見せなかった国々がおかしい気もするが。

往時の伝達官は、その場に居合わせた人々の気分を左右する力があったというが、心の底から嫌だと思っていることを強制するほどの力は、最盛期ですらなかったと伝えられる。降伏した側はやはり、降伏したくてしたのだろう……そう考えるしかない。

ともあれ、旧帝国はそうして勢力を拡大した。旧帝国が勝てなかったのは沙漠の都市国家群だけで、その沙漠を越えるという偉業を成し遂げたのが、今の真上皇帝である。

しかし彼は沙漠を踏破はしても統治はせず、広大

な無人の緩衝地帯とし、沙漠の東にあらたに国を興してしまった。これが真帝国である。

つまり、帝国は分裂したのだ。

真帝国では沙漠の向こうの帝国を旧帝国と呼び、その存在には可能な限りふれない、という暗黙の了解がある。それならそれで結構だが、せめてこちら側の歴史を調査させてほしい、とヤエトは思う。

本来、尚書とは歴史のことであり、尚書官とは史官であるはずなのだ。しかし、言葉の意味は歪んで久しく、なんでも屋の書記として便利に使われるのが現状である。

ヤエトは、なんでも屋になどなりたくない。むしろ、なんにもしない屋でありたい。

彼が望むのは、穏やかで暇でだらけた余生だけである。つまり、可及的すみやかな隠居だ。

だが今は、と階段を上りながらヤエトは考えた。

――とにかく、休みたい。

体調が思わしくないので休暇をください、と太守に訴えてみてはどうだろう。

つまらない小細工を弄する必要もない。体調は、つねに悪いのだ。ヤエトはびっくり虚弱人間で、なにをやってもすぐに倒れて熱を出す。最近もくり返し死線をさまよって、説得力は満点だ。

――贅沢はいわない、一日でも。いや、一日というのは志が低いか。せめて三日ぐらい……。

「尚書官殿！」

ヤエトは眉根を寄せた。なんという大声だ。ふり向いたところで、また呼ばれた。

「尚書官殿！」

階段を駆け上がって来るセルクを見下ろして、ヤエトはため息をついた。

「……貴殿も尚書官ですよ」

「未だ、その名にふさわしいはたらきができているとは思えず……」

ようやく、少しは声が小さくなった。

「今日は、はたらいてもらったはずですが？」

ヤエトが村々を南から回っていたあいだ、セルクは北から順に訪ねていたはずだ。《雪鳩》の予備を配り、わずかでも異常があれば飛ばすようにと念を押すのが彼の任務だ。そう難しい仕事ではない。
「ああ、それの報告を――」
「なにか緊急に対応せねばならぬことでも？」
「いや、そういうわけでは――」
「でしたら、明日の朝議で報告してください」
次々と言葉を遮られ、気を悪くしたらしい。セルクはむっとした表情になった。
と、不意に背後から声をかけられた。
「儂でよければ、話を伺おう」
ふり返ると、すぐ上の段にジェイサルドが立っていた。ヤエトの護衛役を自任するこの老騎士は、まさに神出鬼没。いつの間に忍び寄られたのか、まったくわからない。気配を消し過ぎだ。
「尚書官殿には儂からお伝えすればよかろう」
セルクが同意しそうな雰囲気を見せたので、ヤエトは急いで口を挟んだ。
「朝議では遅いのですか？」
「いや……そういうわけじゃないが」
「それなら、二度手間になるだけですね」
「わかりました！　では御免！」
風圧でヤエトがよろけるくらいの勢いで身を翻すと、セルクは階段を三段抜きで下りていった。尚武官に鞍替えすればよいのに、と思いながらヤエトはジェイサルドに視線を戻した。
老騎士は、彼の命の恩人である。だが、本人がいくらヤエトの護衛役のようにふるまっていようが、元は皇帝の妹に仕えていた騎士であり、皇妹は無条件に味方ではない。底の知れない人物なのだ。
彼にセルクの手綱を握らせるわけにはいかない。
ジェイサルドはわずかに眉を上げ、笑みを浮かべてヤエトを見下ろしている。
「ご迷惑でしたかな」
「とんでもない。通していただけますか」

「ご随意に」

ジェイサルドは階段の端に寄り、ヤエトはその横を通り過ぎた。老騎士が後をついて来るかどうか、確認はしなかった。好きにするだろう。本来、ヤエトは彼に指図できる立場ではない。

三層まで上ったところで大きく息を継ぎ、ヤエトは壁にもたれて少し休んだ。どうしてこの城は平地に建っていないのか。いや斜面に建てるのはかまわない、天然の要害を利用しない手はないだろう。

だが、とまた階段を上りはじめながら思う。太守の部屋が、どうして天辺なのか。

着任したときに太守の部屋はここと割り振ったのはヤエト自身なのだが、とにかく、と彼は思った。

——太守の部屋は一層にすべきだ。

ちょっと譲って二層でもいい。この呪わしい階段とつきあう時間を減らしたい。だが、まだ若いあるじは副官の意見を重く見て、すぐに助言を求める。

——自室に男性を呼び出すのはよろしくありません、というのはどうだろう。

ものすごく今さらだ。向こうから探しに来られても困る。それでは君臣のけじめがつかない。

なんとか階段を上りきる頃には、なにもかもどうでもよくなっていた。扉を開けて迎え入れてくれたのは女官ではなく、騎士団長のルーギンだった。

「お待ちかねですよ」

おや、とヤエトは顎を引いた。

きな臭い話になりそうだ。ただでは逃げだせそうもないが……階段からころがり落ちてはどうだろう。

だが、それを実行する前に、ヤエトは扉の内に引き入れられてしまった。

「遅いぞ」

うろうろと室内を歩き回っていた少女が足を止め、ヤエトの方に向き直った。今日の装いは騎士見習いの少年のようだが、この小柄な少女こそ彼の直属の上官、北嶺郡太守にして真上皇帝の愛娘である。

申しわけありませんと口にしかけたのを、ぐっと

堪えた。どうせ、ちっとも謝罪している風に聞こえないといわれるだけだ。

「なんのご用でしょうか」

皇女は部屋の奥にある椅子に歩み寄ると、勢いよく座った。せっかく座ったのに、今にもまた立ち上がりそうに前のめりになって告げた。

「聞いておどろけ。陛下より、内命がくだった」

陛下というのは少女の父、真上皇帝のことである。

「内命とは、どのような」

「北嶺を、郡から国へ格上げなさると」

「国……ですか」

ヤエトが赴任したとき、北嶺は自治区と呼ばれていた。自治区といえば自由なように見えるが、自治権は実は大きくなく、帝国の胸先三寸でどうにでもされてしまう、そういう位置付けだ。

皇女の太守着任にあわせて、北嶺は郡に昇格した。領地が欲しいという末娘のわがままに手を焼いた皇帝が、まさか重要な地域に送りこむわけにもいかず、この北辺に赴任させ、皇家の一員がじきじきに治めても体面が悪くないよう郡に格上げしたのだ。この時点で、帝国から与えられる予算も多少は増えた。

国となると、自治裁量にまかせられる部分は非常に多くなる——が、当然、中央からの財政援助も基本的にはなくなってしまう。

つまり、ただでさえかつかつの財政が、さらに厳しくなる可能性が高い。いや、確実にそうなる。

「わたしが北嶺王だ」

皇女は眼をかがやかせているので、そのへんのからくりには気づいていないに違いない。ルーギンの方を見遣ると、この騎士ものんびりした表情だ。

誰か危機感を覚える者はいないのか。

「ルーギンには正式に将軍位を与える」

皇帝そのひとが否を唱えない限り、領内の人事は王にまかされる。ルーギンなら問題ないだろう。

「おめでとうございます」

「そちらもね」

え、と問い返す暇を与えず、皇女が告げた。
「ヤエト、そなたは相になってもらう」
口が開いてしまうのがわかったが、閉じようがない。しかも、なぜかその開いた口から空気が入ってこない。どういうことだろう。
「お待ちください」
「無理だとか駄目だとか遠慮するとか隠居するとかは、すべて却下するからな。それでもいうことがあれば、好きに喋るがよい」
いきなり機先を制されたが、黙って済ませていられる事態ではない。
相とは尚書官の最高責任者で、尚武官における将軍のようなものだ。ヤエトのような、平の尚書官が抜擢されるべき地位ではない。
「力不足で、つとめられるとは思えません」
「そなたに不足しているのは体力だけだろう。それは様子を見ながらつとめてくれればよい」
よい、よい、と皇女はまとめるが、どこもかしこも悪いことだらけだ。ヤエトは食い下がった。
「新規の官吏登用もお考えください。都には、わたしより有能な人材も掃いて捨てるほどおります」
「そなたより有能な誰か、などに興味はない。わたしの副官はそなた以外にあり得ない。王の実質的な副官は将軍と相だ。それゆえ、そなたは相だ」
ヤエトが辞退するのを想定していたに違いない。すらすらと一連の言葉を並べると、皇女はにこりとした。駄目押しのひとことを、口にする。
「そなたは、わたしの翼だ。約束したであろう」
「ですが……わたしには、位階もなく」
尚書局に所属すれば、それなりの位階に分類される。年功序列が基本だが、世渡り下手のおかげで北嶺に左遷されたくらいだから、ヤエトは尚書局内ではさっぱり出世の芽がなく、位階は進んでいない。
地方政体の内部で実質的なとりまとめ役をつとめる程度なら、まあよい。郡太守の副官も、ぎりぎり許容範囲だろう。本来はそれもおかしいが、彼を太

守の副官にというのは皇帝の勅命だ。無理も通る。
「知っておる」
「それに、一国の相ともなれば、貴族の仕事と申しましょうか……古来、臣下は主君の鏡と申します。その代表として表に出るのが、わたしのような者では、太守のご評判にかかわります」
どう説明すれば、わかってもらえるのか。
国となれば、体面が重要になってくる。あくまで帝国内部の一地方ではあり、皇帝の命令には絶対服従であることに変わりはないが、平の尚書官がその代表者として出て行くのは、いかにもまずい。
もっといえば、無位の尚書官を相にすれば、ただでさえ若い女だからと馬鹿にされる皇女の立場が、ますます悪くなる。お遊びの延長線上にあるのだろうと思われてしまう。
しかし、皇女はさらに笑みを深めただけだった。
「うむ。それでな、陛下にお願いしたのだ」
背筋が寒くなった。熱が出たのかもしれない。
「……なにをでしょう」
「そなたを貴族にしてもらえるよう」
息が止まるかと思った。
いや、実際に少し止まった。たぶん、魂がちょっと抜けたに違いない。
大きなお世話ですとか、迷惑千万ですとか、無理だとか駄目だとか遠慮するとか隠居するとかいいたくて口を開いたが、言葉にならない。
「声も出ないほど衝撃を受けられたようですよ」
ルーギンの口調はおもしろがっているようでもあったが、わずかに同情も感じられた。ヤエトが嫌がるであろうことは、彼にもわかっているのだ。
もちろん皇女もわかっているはずで、だから遠慮を禁じたのだろうが、それにしても。
それにしても！
「……わたしが貴族というのは、無謀かと」
苦しい息の下からようやくいった台詞は、さらりと無視された。



「そなたの叙爵もだが、わたしの任命もある。建国を祝う三の月の新年祭に出席せよ、とのことだ」
「三の月……」
来月ではないか。準備に半月もない。
「それでな、鳥のことだ。鳥を使わずに行く方法がない。まだ峠が鎖されているのでな。そなたは都から帰ったが……それだけで死にそうになっていたほどだ、同じ抜け道は使えまい」
あの経路を使えない理由はまったく別の次元の話だが、誤解してくれていた方が助かる。
それより、あと半月でまた都へ行かされ、皇帝に伺候させられ、貴族に列されるのか……ということで、ヤエトは頭がいっぱいだ。
ぼんやりしていると、ルーギンが口を開いた。
「空を飛ぶ化鳥の存在は、隠しきれるものではありません。派手にお披露目してしまえばよいかと」
ここでようやく、ヤエトは皇女が問題にしているのがなにかを理解した。
経路ではない。伝説の《化鳥の騎士団》の復活を広く喧伝すべきかどうか、という話なのだ。
その問題について、考えてこなかったわけではないが、なにしろ展開が急過ぎる。半月で郡が国になり、自分が貴族に……そこで思考が停止してしまう。
それでも、皇女が彼の意見を待っているようなので、思いついたことを口にした。
「どうしてもとおっしゃるのであれば、南麓鎮に鳥を置いて、そこから先は馬でということも可能でしょうが……そう長くは隠しおおせないかと」
ヤエトや皇女が赴任した時点では、鳥は地面を走っているだけだった。空を飛ぶようになったのは、つい最近のことだ。
特に箝口令は敷いていないが、交通が途絶している今なら鳥の話は広まりようがない。だが、季節が変われば難しくなるだろう。話すの話さないの以前に、目撃されたら終わりである。
「どうせ知られてしまうくらいなら、こちらから押

し出して周知させてしまった方がよいでしょう」
皇女はうなずいた。
「そうだな。まあ、その話はそれとしてだ」
まだ、なにかあるのか。これ以上の衝撃を受けると、今度こそ魂が離脱する。窮極の隠居だ。
皇女は椅子の背によりかかってヤエトを見た。
「国に昇格するという話に戻るがな。これまで、国と名のつく地方がいくつあったか知っているか？」
名が浮かんだのはかろうじて沃野国（よくやこく）だけで、これは大河の河口付近のはずだ。他にあるかどうかもわからなかったので、正直に白状した。
「いえ、寡聞にして存じません」
「二か国だ。一の兄上が沃野王、二の兄上が博沙（はくさ）王をつとめておられる。今回、建国記念の三の月にあわせ、北嶺以外にも国が増える。兄上は皆が皆、王になるという話だ。それがちと問題でな……」
皇帝の息子たちは七人、次の帝位を狙ってしのぎを削っているところだ。なるほど、皇帝はついに後継問題に着手する決意をかためたのだろう。
「おめでとうございます、太守」
「うん？」
「皇子様がたと、同格に考えていただけたということではないですか」
女に生まれたことを、皇女はあまり喜んでいない。いつも男装に近い恰好をしているし、剣もふるえば鎧も着込む。自分の領地がほしいとごねたのも、兄たちと同じに扱ってほしかったからだ。
皇帝の勘気にふれるところまで頑張って、ようやく得たのが北嶺郡太守という今の地位だったことを思えば、兄皇子たちと同時に同じ扱いを受けるのは、大躍進といえる。
「喜ばしいことです」
ルーギンがいうと、皇女はうなずいた。
「そなたらのおかげだ。これからも、わたしを補佐してくれ」
「騎士団の剣は姫様にお捧げしました。我らの剣が

折れるまで、姫様のお側で戦います」
　ルーギンはすらすらと答えた。騎士の言葉で『剣が折れる』とは、死ぬという意味だ。
　こういう局面に向いた誓いの言葉を、ルーギンはいろいろ知っているのだろうなぁ、と思う。副官のエイギルをはじめ、部下たちにも教え込んでいるのだろう。ヤエトには、彼の薫陶を受ける気などない。したがって、現実的な応答をすることにした。
「それで、問題とはなんでしょう？」
「陛下はこうも仰せであった――国を繋げ、《天地輪》をなす、と。説明はない。知っているか？」
　ルーギンは眉根を寄せた。
「聞いたことはあるような気がしますが」
「そなたも知らぬか。ヤエトはどうだ」
「書物で見たことはございます。神より賜った恩寵の力が非常に強力であった頃、皇家のかたがたが一気に心を繋いで話をするわざがあったとか。それが《天地輪》です。わたしが知る限りでは、五回ほど記録に残っているはず。はじめは、皇祖の親政が終わる直前の一年間ですね。そのときは――」
　ヤエトの説明が長くなりそうなのを見てとり、皇女がすかさず口を挟んだ。
「わたしにはさしたる力はないぞ。無論、そなたがいうように、以前よりは力が強まった気はするが」
　恩寵と呼ばれる異能は、神との契約により、契約者とその一族に与えられる。だが、時を経過して血が薄れたのか、それとも力自体がすり減ったのか、次第に弱まる傾向にあった。
　皇家の恩寵も例外ではない。
　皇祖による神との契約から数百年が経過して、最近では恩寵の力は弱まっていた……はずなのだが、このところはそうでもない。異常を感じるほど急激に、すべての恩寵の力が強くなっている。
　原因を考えても憶測の域を出ないが、恩寵持ちなら誰でも、力が増していることに気づいているはずだ。それを承知で、皇帝も《天地輪》をやろうと決

めたに違いない。力及ばず参加できない者がいれば、ふり落とされるのかもしれないが。

——ふり落とす……。

ヤエトは記憶をひっくり返してみた。

皇女はひじ掛けにもたれて首をかしげた。

「……なにを難しい顔をしている」

「わたしの記憶にあやまりがなければ、《天地輪》とは、御継嗣の決定に関係が深いものです」

ルーギンが真顔で尋ねた。

「それは、姫様も候補だということですか」

「さあ……なぜご自分は仲間はずれなのかと太守が訴え出られるのに先んじて、手を打たれた……そうお考えいただくのが妥当かと」

皇女はくちびるを尖らせた。

「そこまでわがままではないぞ」

「ご無礼を申し上げました」

とびきり自尊心が強いこの少女を、皇帝が大事にしているのは確実だ。皇女が望むようにではなくても、父は娘を気にかけている。

だが、本人にはどこまで通じているやら。

「しかし、心を繋ぐことがどうして御継嗣の決定に関係あるのです？　恩寵の力の多寡はわかるでしょうが、それが問題になったことはないのでは？」

ルーギンの問いはもっともだ。ヤエトもべつに正解を知っているわけではない。

「人が集まれば、おのずと話の中心になる者がいるではありませんか。皆を引っ張る者が……」

皇女はおもしろくなさそうに断言した。

「それなら、一の兄上で決まりだ」

「ご兄弟の皆様も、今は一の君を長兄として敬っておいでなのでしょう。ですが、一国の王として《天地輪》に臨めば、話は変わってくるはずです」

長幼の序が失われる機会を、皇帝は与えた。第一皇子には継がせない……というほど強い意志表示ではないが、ただでくれてはやらん、といったところか。自分でもぎ取れ、と全員に号令したも同然だ。

「……なるほど。ルーギンはどう思うか？」
「御継嗣をお決めになるのは陛下でいらっしゃいます。我らが考えることではありますまい。陛下の人事に間違いはないと、皆が申します。ここにおいでの副官殿も、その証拠。姫様はただ、王としてのつとめを果たされればよろしいかと存じます」
「なるほど」
皇女は納得したようにヤエトを見た。彼は皇女を見返しながら、今、自分はどんな表情をしているのだろうと思った。
したくない話を、しておかねばならない。
「太守、ひとつ伺っておきたいことが」
「なんだ」
「帝位を、お望みですか？」
皇女は眼をみはった。
あざやかな紫の眼は、竜種に特有のものだ。貴族は皆、程度の差こそあれ竜種の血縁だ。紫が濃いほど皇家に近い血筋だという。ルーギンは眼の色が淡く、薄い水色、ときには灰色に見えるほどだ。
皇女の双眸は、あきらかに直系の竜種の色だ。
「わたしは女だぞ」
「存じております」
ルーギンが吹きだした。なにがおかしいのか。皇女とヤエトが同時に睨むと、彼は咳込んだ。
「いや、失礼。その通りですね」
「女が皇帝になれると思うか」
「なりたいとお思いかを、お尋ねしております」
眼の端でルーギンの様子を窺うと、吹くのを我慢しているらしく、顔が赤くなっている。
皇女はヤエトの問いに手一杯で、部下の胡乱な態度には気づいていない。真剣に考えていたが、やがてぽつりと答えた。
「……わからぬ」
「おわかりになりませんか」
「考えたことがなかった」
「まことに？」

皇女は少し言葉を探すようにしていたが、やがて肩をすくめて答えた。

「そうだな。わたしの中では、一の兄上が陛下の跡を継がれることが、すでに決まっていたようだ。それ以外の可能性を考えたことがない」

だが、と皇女は低くつぶやいた。

「違うのだな」

「御意」

帝位がかかると、肉親の情など儚いものだ。この先、熾烈な争いがあると予測すべきだろう。

「少し、考えたい」

皇女の声には翳りがあった。

実の兄に裏切られたことを思いだしたのだろう。そうさせたのはヤエトである。必要だと思ったから示唆したのだが、あまり気分のよいものではない。

「太守」

「考えさせよと申したはずだ」

「ご自身が帝位をお望みでなければ、どの兄君を推したいと思われるかについてお考えください」

皇女は口を引き結び、厳しい表情になった。

「お決めになるのは陛下であろう。わたしの存念など関係ない」

「そうは参りません。一国を率いる権力をお持ちになり、配下には《化鳥の騎士団》が控えるとあっては、放っておいてもらえるはずがありません」

競争相手とは思われなくても、たやすく扱える味方として、皇女は真っ先に皇子たちの念頭に浮かぶだろう。かれらは妹を取り込もうとするはずだ。

「だが、わたしは……」

——兄たちが争うことなど望んでいない。

皇女はそういいたかったのだろうが、言葉を呑んだ。事態はこの少女が望むか望まないかを超えたところで動いている。その程度のことは、皇女はヤエトが説明しなくても理解してしまう。

気の毒だが、皇女は十四歳にしては十分聡い。

「今すぐにお心をお決めになる必要はありません。

それこそ、《天地輪》を通じて判断なさればよいことです。ただ、つねに意識していただかねばなりません。行き着く果てに、なにをお望みになるかを」

皇女は無言だった。

他人を踏み台にして平気でいられる図太さは、皇女にはない。しかし、生き抜くために、今後はそうした部分も必要になるだろう。まっすぐに育ったのが、こういうときは裏目に出る。

――可能な限りは、引き受けてやりたいが。

守ってやりたくても、容易にそうさせてはくれまい。上っ面のきれいなところだけ見て納得するには、聡明に過ぎる。

もっとも、皇女は強い。ひ弱ですぐに根をあげるヤエトなどより体力があるのはもちろん、考えかたは柔軟なのに、心の芯はしっかりしている。

――守る必要など、ないのかもしれないな。

ときどき、ヤエトは自分がなぜここにいるのかわからなくなる。なりゆきで北嶺に来て、もののはずみで皇女の副官になった。だが、今は自分の意志で皇女に仕えている――そのはずだ。

それが不思議でならないのだ。どうして、そんなことになってしまったのか。

「迷わず、というのは難しいことですが」

いつの間にかふつうの顔色に戻ったルーギンが進み出て、皇女の前に膝をついた。長い髪が肩からこぼれ、その横顔を覆った。

「姫様ならば、おできになると存じます」

「なにをだ」

「お信じになる道を、踏み外さずに歩んで行かれることを。周囲がどうあれ、お気になさいますな。姫様は、姫様です。わたしも、副官殿もよく存じておりますし、どこまでもお供つかまつります」

ですよね、とヤエトをふり向いて見せるのは、引き込まれるような笑顔だ。思わずうなずいてしまう。

これだから『うっとり眺めるなら団長様』などと女官たちにいわれるのだ。眺めるより近い距離感で

は、あまりつきあいたくない相手だ。
「……ひとりで考えたい。そなたらは、退がれ」
「御意」
ヤエトは一礼して退出した。そして階段を見下ろすと、げんなりした。
やはり、ころがり落ちた方が楽なのではないか。死ねそうだし。
「危ないですよ」
官服の袖を、ルーギンが摑んでいた。
相になったら——とヤエトは袖を見下ろして思った——絶対に、この官服の袖を短くする。誰がなんといおうと、独断で決定してやる。
顔を上げると、騎士は華やかな笑顔で告げた。
「いつも以上に死にそうな顔色だ。そんなにおどろかれたのですか、叙爵の一件」
「おどろくもなにも、無理です」
「姫様に却下されますよ。それと、もし体力に余裕があれば、今から勉強しておいた方がいいんじゃないかな。わたしでよければ、お助けしますよ」
「なにをです？」
「貴族の常識という代物です。どこの家とどこの家が姻戚関係が強いとか弱いとか、累代の怨恨がどうとか、金があるとかないとか、どこの当主が体面を大事にするとか、弱味はなんだとか、口にしてはならない言葉はどうとか……うんざりするな」
聞かされる方が、よほどうんざりだ。
「死んでもいいですか、って感じですね」
三十まで生きられまいと診断した医師に、責任とって自分を殺せといいたくなる。
「それも、姫様に却下されるんじゃないかな」
そうですね、とヤエトは口の中で答えた。
ころがり落ちようと思いついたとき、即座に行動に移すべきだったと考えながら。

3

それからの半月は、忙しいなどというものではなかった。

随員の人数の決定や選抜はもちろん、鳥が北嶺をはなれて生きられる期間は正確にわかっているのかといったことまで、すべての問題がヤエトに持ち込まれる。前者はともかく、後者をなぜ他所者のヤエトに尋ねるのか。

「《化鳥の騎士団》の伝説にある、七日というのが目安になるでしょうね。ですが、七という数字は神話や伝説によく登場するものですから、実際にその日数かどうかは……」

わかるはずがないだろう、と癇癪を起こしたい。

彼を厩舎に呼びつけたのは、厩舎長である。北嶺における最高権力者は、この老人かもしれない。

「外に出したら死ぬっていわれてたしな。誰も試してないんだ、もう何十年……いや、何百年かな」

厩舎長は助手と、助手が握った端綱の先に繋がれている鳥を眺めて唸った。

冬のあいだはどうしても運動不足になるので、こうして厩舎の前庭を歩かせるのだそうだ。飛べるようになったといっても、事情はそう変わらない。

「しかし、心が繋がっているのであれば、具合が悪くなったら乗り手に知らせてくれるのでは？」

「変な意地を張らないように、よくいっておく必要があるな」

「お願いします。そういえば、《雪鳩》はどうなのです？　あれも何日もつか、わかりませんか」

「こいつらは生き物だ。一羽ずつ体力も違う。たとえば、セルクと尚書官殿が同じ条件で――」

ヤエトは手をふって、厩舎長の話をやめさせた。

「よくわかりました」

「飲み込みが早くて助かるね」

「太守のお命の次に、鳥の命を優先すると約束しましょう。まずいと思ったら、体面は捨てて実を取ります。それでよろしいですね？」

厩舎長は視線をヤエトに戻した。

「あんたの命も大事にしなさるといい」
「それでは、鳥の次くらいに。しかし、北嶺の者も同行するのです。そう心配なさらずとも、鳥については皆が気をつけるでしょう」
「馬乗りどもの国へ行くんじゃ、鳥が粗末に扱われそうでな。買い取るから置いて行けとか」
いかにもありそうな話だ。
「皇帝陛下の勅命でない限り、わたしが責任をもって断ります。よしんば勅命であっても、太守がお断りくださるでしょう。太守は陛下の末のお子様。しかも、ただおひとりの皇女殿下です」
「ははあ、なるほど……甘いのか」
「ですので、なんとかなるでしょう」
「厩舎はどうなるのかね。馬と同居は難しいぞ」
「それは、ルーギン殿にお願いしてあります」
ほとんど使わない別邸があるというので、そこに鳥を入れさせてもらう約束だ。
「団長さんも行くんだっけな……あんたがたの姫様に、団長さんに、尚書官殿。……副長は？」
「お気の毒ですが、留守居役ですね」
エイギルは愛する奥方や子どもたちに会いたいだろうが、城を守る人間もいないと困る。
エイギルでなくルーギンが都へ行くのは、公式の行事には騎士団長が出席すべきという建前もあるが、貴族に成り上がる予定のヤエトに保護者が必要だから、である。
真帝国の貴族社会で、実質的に二番手といわれる勢力を誇る《金獅子公》の若様が保護者となれば、露骨な嫌がらせは避けられる。家名の高くないエイギルでは、この面でルーギンの代わりができない。
「そういえば、セルクがぶつくさいっていたぞ。自分も都に行きたいとかなんとか」
ああ、とヤエトは曖昧にうなずいた。セルクは帝国贔屓で、都に憧れているのだ。無理もない。
「それも気の毒ですが、やはり留守居は必要です」
「イスヤームの野郎は逆に、なんで自分が都に行か

なきゃならないんだと」

イスヤームは反帝国派で帝国嫌いだから、行きたくないのはわかる。だが、直情径行型の北嶺人の中で、比較的冷静に状況を見ることができる者を選ぶとなると、どうしてもイスヤームの名が挙がる。

皇女の随員を選ぶのは困難な仕事だった。紆余曲折の結果、今回は少数精鋭で行くと決定した。人選も熟慮をかさねた末のものだ。もう変更はない。

「お気の毒ですがね、わたしだって、べつに行きたいわけではないのです。我慢してもらいましょう」

「帝国ってのは、気の毒な人間を量産するんだな」

「なかなか悪くない定義かもしれませんね」

「ところでファールーンの野郎、希望する血統についてくだくだ書いて寄越したぞ。そんなことのために《雪鳩》をやったわけじゃないと思うがね」

名前の主がわからず、ヤエトは少し考えた。《雪鳩》と血統という言葉から対象を絞りこんでようやく、思いあたった。南の村に居座っている村長だ。暇を持て余しているに違いない。

「ほかに考えることがないのでしょう」

「クラルの子が欲しいとぬかしたわ。あんな気位の高い若鳥が、こっちの都合でかけあわせられると思うとはな。考え過ぎて、頭が煮立ったに違いない」

クラルというのは、皇女が乗っている鳥の名だ。

こちらはすぐに思いだせたので、ヤエトは顔をしかめた。人名より鳥の名が先に思いだせるなど、北嶺人のことを笑えないではないか。

「交配はうまくいきそうですか？」

ちょうどこれからが、巨鳥たちの交配の時期だという。鳥たちは、人の都合だけでは相手を選んでくれない。相性が悪ければそっぽを向かれるし、相性が合い過ぎると今度は人のことを忘れてしまう。つまり、乗用にできなくなるらしい。乗って乗れなくはないが、危ないことこの上ないそうだ。

恋をすると周りが見えなくなるのは人と同じだ、と厩舎長はいった。

例年なら乗用と繁殖用の鳥を分け、鳥たちの意向も重視するのだが、今年はそれができない。

鳥が減り過ぎたのだ。

北嶺では、巨鳥の減少は民の死活問題である。鳥にたよらねば、夏場でも交通が途絶しかねない場所もあるのだ。輸送だけなら肩代わりができても、狩りなどの生活に密着した移動に使うには数がたりない。そもそも、複数の乗り手で鳥を共有すること自体が、難しいのだ。

乗り手をこだわりなく受け入れる鳥は、気立てはよくても頭が悪い傾向がある、と厩舎長は容赦なく、しかし愛情をこめて教えてくれた。

「うまくいくかとは、クラルのことか？　あいつは駄目だな、少なくとも今年は。あんたがたの姫様が色惚けしては困るだろう」

「なんですか、それは」

ああ、と厩舎長は腕を組み直してヤエトを見上げた。おもしろがるような表情をしている。

「繁殖の季節ははじめてだったな。乗り手と鳥が未熟だと、発情が伝染するんだよ」

「発情……」

色惚けもだが、仮にも皇家の姫君に使ってよい言葉ではない。だが、厩舎長は遠慮なくつづけた。

「誰彼かまわず男を寝台に引きずりこみはじめたら困るだろう。ハーマンも念のために交配は避ける」

「ハーマンとは？」

「色男の団長さんの鳥だよ。団長さんは鳥に引きずられるような未熟者じゃなさそうだが、ハーマンはいかん。若過ぎる。若い雄は、発情するとまったく乗用に使えなくなるのでな」

「いろいろ難しいんですね……」

「それでだ。シロバを繁殖に使いたいんだが、どう思うね」

なるほど、心が通じないヤエトなら、鳥が発情しようがなんだろうが関係ない。妙なところでようやく利点を発見できた。

「わたしには判断しかねますが」
「シロバは、あんたのことが心配だから、子育てに余力は使えないと考えている」
「……そうですか」
薄々、シロバは自分のことを雛鳥だとでも勘違いしているのではないかと思っていたのだが、まさにその通りだったらしい。
「あいつは、そろそろ交配できなくなる年頃なんだ。確実に卵を産ませるなら、今年が最後だ」
ヤエトは厩舎長の顔をまじまじとみつめている自分に気づき、失礼、とつぶやいて視線を逸らした。
「シロバなら、わたしの面倒をみながら子育てもできると思いますが」
「そういってやってくれ。あんたが説得してくれれば、あいつもその気になるかもしれん」
「ところで、素朴な疑問なのですが」
「なんだ？」
「シロバは雌だったのですか」
今度は、厩舎長がヤエトを凝視する番だった。
「知らなかったのか」
「素人ですから、見分けられません」
「ああ……そうか。なるほどな。雌だよ」
「申しわけありません」
「謝るならシロバにな。たぶん機嫌を悪くするぞ」
「……想像がつきますね」
「あれは、乗り手を亡くしたことがあってな」
「そうだったのですか」
城の厩舎では、元の飼い主が飼えなくなった鳥も預かるのだと聞いたことがあった。たとえば、かつて北嶺を出奔（しゅっぽん）した娘が預けて行った鳥のように……。あまり思いだしたくない記憶に行き当たってしまい、ヤエトは少したじろいだ。
厩舎長の心も昔にさまよっていたらしい。吐息とともに、老人はつぶやいた。
「鳥を意のままに扱わねば気の済まぬ男でな。シロバはよく我慢したんだが……岩場で暴れて、乗り手

が落ちた。打ちどころが悪くてなぁ」
　まあ、と厩舎長は言葉を濁した。
「事故だよ、たぶん」
「それで、わたしなのですね」
　シロバがヤエトを乗せるのは、彼がシロバの心を支配することは愚か、読むことすらできないからなのだ。ようやく得心がいった。シロバの選択はただの酔狂ではなく、理由があったのだ。
　感心しているヤエトに、厩舎長は顔をしかめた。
「乗り手をわざと落としたかもしれない鳥を、よく自分にあてがったなとか……いわんのかね」
　ヤエトは苦笑した。
「事故なのでしょう？　まぁ、そうですね。他所者が鳥に乗るのがどれほど無謀か知らなかったにせよ、いきなり、乗用に一羽貸してくれとたのんだ自分は、さぞ無礼な輩に見えたのだろうと思いますし……。シロバが乗せてくれただけでも奇蹟なのですから」
　いやはや、と厩舎長は頭を左右にふった。
「あんた、それじゃいつか殺されるよ。しかも、なるほどあなたは自分を殺したいんですね、と納得しながら殺されてやりそうだ」
「大丈夫ですよ、殺される前に死にますから」
「シロバよりは長生きしてやってくれ。二度も乗り手を見送るのは嫌だろうからな」
「あなたもですよ、厩舎長。誰にせよ、ふたたび人を乗せてやってもよいだろうとシロバが思えたのは、あなたが面倒をみてくれたからでしょう。北嶺一の鳥飼いでいらっしゃる」
「それはそうだがね」
　厩舎長は誇らしげにうなずいてから、鳥を引いて歩きつづけている助手を眺めてつぶやいた。
「俺がひとりで鳥たちにしてやれることなんて、たかが知れている。最近、考えるんだ。俺が死んだら鳥たちはどうなるのかとね。もっと本気で助手を育てておくべきだった……自分のあとを引き受けてくれる者がいて、ようやく一人前なんじゃないかと思

いはじめてるところだ」
　正確なところ、厩舎長が何歳なのかはわからない。見た目の印象では、長老と呼ばれている尚書官の老人とそう変わらないか、へたをすると厩舎長の方が年上に見える。元気そうだが、老齢ではある。
　――北嶺にとって、手痛い損失となるだろう。
　今までも、北嶺は鳥に依存していた。だが、これから先はその比ではないはずだ。
　巨鳥は翼を得た。その翼は、鳥たちを北嶺の外へと運ぶ。狭い地域だけで完結していた輸送力が、一気に世界へ羽撃くのだ。
　鳥の重要性は飛躍的に増大する。間違いない。
「俺が死んだら、あの若いのを支えてやってくれ」
「半人前にも満たない者でよろしければ」
「あんたは誰からも信頼される立派な人物だ。半人前どころじゃない」
　思いがけない言葉にどう応じるべきか迷っていると、厩舎長は真面目な口調でつづけた。
「人を信じなくなっていた鳥が、あんたのことは乗せたんだ。それ以上の人物保証はあるまいよ」
　いかにも鳥馬鹿らしい基準だ。
　――そういうことか。
　それで、厩舎長は彼のことをやたら高く買ってくれる傾向があるのか。今日は発見が多い日だ。
「シロバに礼をいわねばなりませんね」
「それより、卵を産めといってやってくれ」
「やるだけはやってみますが、指図されるのは嫌うと思いますよ」
　そのあたり、自分とシロバは似ているのだ。
　厩舎長は、大きくため息をついた。
「その通りなんだがな。……まあとにかく、シロバの子どもを取れるかどうかは、やるだけやってみよう。クラルはやらん。それから――」
　放っておくと際限なく鳥の名前を羅列しそうな勢いだったので、ヤエトは急いで辞去した。ほかにも行かねばならない場所があるのだ。

都まで、鳥で飛べば一日だろうといわれているが、正確なところはわからない。まだ、誰も試していないからだ。天候の問題もあるし、余裕をもって途中で休憩を入れるべきだという者もいれば、一日どころか半日で大丈夫という者もいる。

どちらにせよ携行食は必要だろうということで、厨房の料理長に経費と重量の試算を依頼したのだが、随員の人数が何回も変更されたため、最近ではせっつかないと計算し直してくれなくなってしまった。

大きい変更はもうないだろうから、今の人数で概算を出してくれるよう、念を押しておかねばならない。人をやっても埒があかないので、ヤエト自身が行く必要がある。

厨房へ向かう途上、呼び止められそうになるのを手をふって制し、よたよたと辿り着いたところで、また頭を抱えることになった。

厨房の入口に人垣ができていて、入れない。

入れないのはともかく、なぜ人垣が？　中でなにが起きているというのだろう。このまま踵を返したいと思いながら、ヤエトは中を覗きこんだ。

そこに見えた光景はヤエトの理解を超えていた。

グランダクが、なぜか鍋をかぶっている。その横にイスヤームが並び、同じく鍋をかぶっている。

ふたりと向き合っているのは、厨房助手のアルサール少年である。左手に金属製の杓子を持ち、右手には調理用の細身の刃物を持っている。

武闘派一族の出身らしく、アルサールは武器の扱いにも長けているようだ、とヤエトは思った。刃物を持つ手つきが違う。調理用具が、きちんと殺傷能力をそなえた危険な物体に見えるのだ——それがこの場合、歓迎すべきことかどうかはともかく。

尚書官は武器を持ちこまない決まりなので、グランダクとイスヤームのふたりは丸腰である。なるほど、鍋をかぶりたい理由はわかった。

問題は、少年に武器を取らせるようなにが起きたか、ということだ。

「いいかげんにしてください」
アルサールは声変わりしかけている。少し嗄れた感じの声なので、妙に迫力がある。
「俺を黙らせても、なにも変わりゃしないぞ」
グランダクの台詞は勇敢だが、鍋をかぶっている上に腰が引けているので、見栄えはよくない。
それでも、口調は威勢がいい。
「鳥たちは戻って来ない。死んだ人間もな。俺たちが都へ行ってるあいだ、同じことが起きないと誰がいえる？　お偉い騎士様たちが守ってくれると思うのか？　だとしたら、おまえの頭もこの鍋で洗い直した方がいいな、井戸で水を汲んでおけよ」
「自分が城にいれば防げるとでも？　あなたはこの冬、城にいたじゃないですか。なにかできましたか。あなたには、誰かを責める権利などない！」
「俺は、最初から助けを出す方に賛成してたんだ」
「助けを出していたら、皆を救えたと？」
「アルサール、もうよせ。気が済んだだろう」
イスヤームが宥めるような口調で語りかけたが、その努力をグランダクが無駄にした。
「自分に都合が悪い話だから黙れってか、おっさん？　都に行ったらもう戻って来ないつもりじゃないのか。居場所がないもんな、村には！」
「黙るのは、あなただ！」
アルサールが武器を構え直す。なんということだ、もう武器にしか見えない。
うすうす話が見えたので、ヤエトは人垣に割って入った。失礼、と声をかけると皆がふり向き、彼を認めて場所を詰めてくれた。ひとめでわかる異人種であることで、恩恵を蒙る場合もあるのだ。
労せずして人垣を抜けると、ヤエトは口を開いた。
「不満があるなら、わたしが聞きます。ですから、物騒なものを置いてください」
ヤエトに気づいたとたん、少年の雰囲気から剣呑なものが消えた。
「申しわけありません……」



鍋をかぶった大人たちは、ほっとしたように見えた。それくらいなら、売り言葉に買い言葉で怒鳴りあうのはやめろといいたいところだが、これが北嶺人なのだ。そこは諦めるしかない。

「あなたがたも、鍋を置いてください――関係のない者は、それぞれ仕事に戻りなさい。無駄にできる時間はありません」

誰も動かない。ヤエトはため息をついて、人垣を見渡した。野次馬の最前列に、ぽかんとしているセルクを発見し、なにをやっていたんだ、見ていたのならさっさと止めろ、と思いながら命じた。

「セルク殿、皆を監督して仕事をさせてください。昼餉が遅れたら暴動になりますよ」

「あ、ああ、わかった。よし、皆、仕事に戻れ！」

セルクの大声が響くと、ようやくその場に活気が戻って来た。つまり、大声の北嶺人たちが雑談をはじめたわけで、いきなりうるさくてたまらない。

ヤエトはアルサールに歩み寄ると、少年が握っているものを慎重にもぎ取り、調理台の上に置いた。手がこわばっている。ずいぶん長いあいだ握りしめていたのではないだろうか。

「来なさい、ここでは皆の邪魔になる。あなたがたもです――だから、鍋を置いてください」

結局、三人を自分の部屋まで連れて行くことになった。ヤエトの部屋は二層の廊下の突き当たりにある。もっと手前の部屋を自分のものにすればよかったと後悔しきりだ。

「なにがあったのです。説明をお願いします」

三人は黙っている。

ヤエトは椅子に座り、机を挟んで三人を順に見た。誰も疚しいことがあるような顔はしていない。

イスヤームはヤエトより年長の北嶺人で、地元の実力者だった。過去形なのは、救援を急がなかったために、いささか支持を失っているからだ。

帝国の支配を受け入れることには反対だったらしく、ヤエトが赴任したときも反帝国の姿勢を崩して

いなかった。しかし、皇女が騎士団を引き連れてあらわれて以来、反抗は無駄と割り切ったようだ。

グランダクはセルクの親友だ。斜にかまえてものを見るところがあるように感じられる。イスヤームほど、帝国の支配を理屈で割り切っている感じはしないし、セルクのような直情径行とも違う。

「話していただけないと、わたしが勝手に憶測することになりますよ」

「それでかまわないよ。あんたの憶測なら、だいたい正解だろう」

うんざりした気分を顔に出さないよう気をつけながら、ヤエトは答えた。

「あなたを随員に選んだのは失敗だったと思わせたいのでしょうが、都には行ってもらいますよ」

「……ほら、当たってる」

アルサールの表情が変わった。握りしめた手の関節が白くなっている。ヤエトはさりげなく机の上の文鎮を手元に引き寄せた。手の届く範囲で殺傷力が高そうだと思いついたのが、それだったからだ。

「イスヤーム殿、アルサールを連れて外で待っていてください」

イスヤームと少年が出て行くと、ヤエトはようやく少しだけ肩の力を抜くことができた。

グランダクは、若干神経質になっているようだ。いつでも、なんでも遊びの対象にしているような男だが、今はその独特な距離感が感じられない。

「そんなに、嫌われたくありませんか？」

「……なんの話だ」

「城に避難して来ている仲間に、ではないかと思いますが、違いますか？」

グランダクは答えない。

しかたなくヤエトは言葉をつづけた。

「すぐに救援を出さなかったことが、犠牲を少なくしたのは、わかっているはずです。なのに、実際に被害を受けた者たちが身近にいると、認められなくなる。認めれば嫌われるからです。あなたは帝国の

走狗と思われたくないのでは。だから、随員に選ばれたことを迷惑に感じている……違いますか？」

グランダクは、救援を出せなかったことで傷ついているのではないか。本人はそれを意識しておらず、痛みを処理できなくて外へ吐き出した……と、そんなところだろう。だが、彼も子どもではないのだ。無自覚に甘えてばかりでは困る。

かなり長いあいだ、グランダクは黙っていた。もう答えないのかと思いはじめた頃になってようやく、彼は笑みを浮かべてつぶやいた。

「ほらね、俺が自分で考えている以上に、正解に近いんだ。説明なんて、する必要ないだろう」

「わたしは、あなたの言葉で聞きたかったのです」

「だったらもっと我慢すればいい。あんたが指摘すればするほど、こっちは考えなくなるだけだ」

ずいぶんな意見だが、なるほどと思う一面もあったので、ヤエトは肩をすくめて答えた。

「時間に余裕があるときは、そうつとめましょう」

「あんたが忙しくないときなんて、あるのか？」

おまえらのせいだよ、と思ったが口にはしなかった。使える部下がいないなら、育てるしかない。

厩舎長だって、助手を育てているのだ。ヤエトも自分につづく人材を育てねばならない。でなければ、死ぬまでせっせと自分ひとりではたらいた挙げ句、彼が死んだとたんにすべてが崩壊してしまう。

死ぬまではたらくなどという前提は、峡谷に蹴落として雪解け水といっしょに流してしまうべきだ。すべてを押しつけて隠居するために、後継者を育てよう。それには忍耐だ、と考えながら口を開いた。

「嫌われないように立ち回るのは結構。ただ、誰かを貶める方向で自分を正当化するのは困りますね。冷静になれる人物だと見込んだからこそ、随員に推挙したのですよ。光栄に思えとはいいませんが、せめて迷惑顔はしないでいただきたいものです」

「俺が不満なのは、あんなに行きたがっているセルクを連れて行ってやらないことなんだが」

グランダクは真顔である。セルクが随員からはずされたのは、彼が愛すべき馬鹿者で、黙っているべきときに黙っていることができず、口にしてはならないことを口にする光景がありありと想像できるからだが、グランダクにはわからないのだろうか？

――わかってはいるんだろうな。

なんとかなる、と高をくくっているのだ。グランダクは、帝国の怖さを知らない。それをいえば、北嶺人は皆がそうだ。

「彼は、北嶺に必要な人です。皆に慕われ、信頼もされている。ですが、彼に欠けているものもあります。この先、北嶺が郡から国へ昇格することにより、さまざまな変化が起きるでしょう。そのとき、彼を補佐する存在でいてほしいのですよ、あなたには。ですから、頑張ってもらわねば」

「そんな話をしているわけじゃない。セルクが行けない理由はなんだ？」

ため息をつきたいところを、なんとか堪えた。

「都というのは、陰険な場所なのです。彼が耐えられるとは思えません」

「それを、俺に耐えろと」

「親友でしょう。彼の鍋になっておやりなさい」

「……なんで鍋なんだ？」

「盾にもなるし、兜にもなる。煮炊きもできるし、洗いものにも使える。水だって汲める。便利ですよね。納得したら外に出て、ふたりを呼んでください。あなたは仕事に戻って結構」

グランダクは妙な顔をしていたが、ヤエトの命令に従って外に出た。交替で入って来たふたりを見比べながら、ヤエトは考えた――かれらの問題も、自分が当てねばならないのだろうか？

「尚書官殿」

アルサールがぺこりと頭を下げた。

「お騒がせして、申しわけありませんでした」

ああ、これは外で話をつけてくれたのだ、とヤエトは思った。イスヤームを見ると、相手は落ち着き

払った表情で彼を見返した。
「反省しているようだ、もう十分に」
どうせ、グランダクが必要以上に煽ったのだろうが、アルサールにとっても、避難民との暮らしが堪えているのだろう。慣れない環境での窮屈な同居が、不和を招いてしまうのだ。
はじめは、助かったことに感謝する。双方が喜び、無事を祝って涙する。だが、不自由な暮らしがつづくと、どうしても不満が出てくる。もっと早く、もっとうまく、助けてくれることはできなかったのか。助けた側は逆に、こんな風に考えはじめる。さっさと襲撃を察知して反撃か、逃走か、どちらにせようまく対応できなかったのか、と。
誰が悪いという問題ではないし、もう少しの辛抱だ。村の復興作業が進めば、同居も終わる。
「前にもいいましたが、あなたやあなたの一族は、必要以上に責任を感じることはないのです」
北方人の侵入地点について、ヤエトの推測が当っていたことは、ほぼ立証されている。雪の中から、綱の切れ端が掘りあてられたのだ。
しかし、アルサールの表情は硬い。なんとかしてやりたいが、心の中にまで手をさしのべることはできない。少年が自分で納得するしかないのだ。
「料理長に許してもらって、仕事に戻りなさい」
少年は頭を下げて、部屋を出た。悠然とそれにつづこうとするイスヤームに、ヤエトは声をかけた。
「イスヤーム殿、なにかお心にかかっていることはありませんか。わたしでお役に立てれば――」
「自分のことは自分でなんとかする。この歳になって、みっともない話はしたくない」
ふり返りもせずに答えると、イスヤームは部屋を出て行った。
やれやれ、とヤエトは大きく息を吐いた。表面上、イスヤームは協力的といっていい。だが、彼が自身の周囲に巡らせている見えない壁は、むしろ高く、厚くなったような気がする。

——まあ、それはそれでしかたがない。

組織としてうまくまわる程度の人間関係が維持できれば、それだけでも上出来というものだ。

——料理長に催促するのは、また今度にしよう。

さっきの一件で機嫌も悪いだろうし、昼餉の支度で厨房は戦場のようになっているはずだ。とても概算をといえる状況ではないだろう。ではなにをしようと考えはじめたところへ、扉を叩く音がした。

探すまでもない。用事はいくらでも向こうから訪れるのだ。

4

出発の朝は晴天に恵まれた。透き通るような水色の空の下、稜線は銀色に滲んでいる。本来は黒い石で組まれた城も、表面に凍りついた雪や氷のおかげで、今は白く見えた。

その景色の中で、城門の前庭に並ぶ鳥たちだけが黒い。艶のある羽毛は日射しを浴びると玉虫色にかがやいて、見る者の心を奪った。

少数精鋭といっても十六羽。見た目の迫力は満点だ。皇女とルーギン、それにヤエトの三人が一段高いところに立ち、他の随員はすでに自分が乗る鳥の手綱を持って並んでいた。

「はじめての遠出だ、おのおの鳥の様子に気を配り、少しでもおかしいと思えば無理はせぬように」

皇女のための旅だというのに、出発の挨拶は、やはり鳥第一である。これを口にしたのが北嶺生まれの北嶺人ではないあたりが、すでにおかしい。

だが、それを不審に思うような思考回路の持ち主は、そもそもこの場には居合わせないようだ。軍装に身をかためた皇女自身を含めて。

今日の皇女は黄金竜の図案をあしらった軽量の鎧をつけ、すっかり腕を上げた短弓を背に、腰には小振りの剣を佩いていた。それでも少年と見間違う者はいないだろう。はじめて北嶺に姿をあらわしたと

きに比べれば、背丈はそう伸びていないものの、身体つきがいかにも女性らしくなっている。

「それでは、ラングールへ向かう。そなたらの翼に、よい風を祈ろう！」

皇女は段をひらりと下りた。あわてて、ヤエトもシロバのもとへ向かう。彼もいつもの官服は荷物に詰めることにして、女官たちが用意してくれた動きやすい服を着用していた。袖も無駄に長くなく、けっこう気に入っている。

シロバの手綱を持っているのはジェイサルドである。この老騎士は、どうしても同行するといって譲らなかったのだ。なにか秘密の任務でもあるのかと勘繰る気もちもないではなかったが、ヤエトは彼に命を三、四回は救われている。シロバがかまわなければと譲歩したところ、鳥は老騎士を乗せてもよいと態度で示した。ヤエトの予想に反して。

尚書官殿のおかげでしょうな、と老騎士はいった。尚書官殿が儂の意志を尊重してくださるから、鳥も同じようにしてくれるのでしょう、と。

重たい荷を乗せて、若くもないシロバが一行から遅れずに飛べるかどうかは疑問だ。ヤエトは痩せているが上背はあるし、ジェイサルドは頑健な肉体派老人である。背も低くはないし、厚みもある。

しかし、心の繋がらないジェイサルドを同乗させてくれる鳥がシロバ以外にはおらず、そのシロバもヤエトが一緒に乗っていない限りジェイサルドを近寄せようとはしないのだから、シロバに同乗するか、諦めるかの二択である。

そしてジェイサルドには、諦める気がなかった。前の乗り手を故意にふり落として殺したかもしれない鳥であることは、いっておくべきだっただろうか。しかし、それならシロバにもジェイサルドの前身が盗賊団の頭目であり、悪鬼の異名をとる極悪人だったことを教えておかねば不公平ではないか。

ヤエトはため息をついた。

自分もすっかり、鳥と人を同じに扱う癖がついて

いるようだ。

「騎乗！」

ルーギンの号令一下、全員が鳥の背に飛び乗った。いつもなら、ヤエトはシロバを座らせてから乗るのだが、今日はジェイサルドが手を組んで踏み台を作ってくれた。もちろん、ジェイサルド自身はヤエトの後ろに自力でひらりと飛び乗った。

隊列を組んで飛ぶ練習にも参加させられたが、ヤエトの場合、完全に鳥にまかせているだけだ。正直にいって、シロバがどこへ向かおうが、彼には制御できないのだ。

都になど行きたくない、留守居役をつとめたいというのは本音である。それをシロバが感じとって馬鹿正直に解釈し、善意をもって実行してくれたら、おしまいだ。ヤエトは北嶺を出られない。

真上皇帝みずからの発意による叙爵の儀式に欠席では済まされない。今度こそ不敬罪で処刑される。

——たのむぞ、シロバ。

灰色がかった後ろ頭の羽毛を風が逆立て、淡い桃色の地膚がちらりと見えた。

「出発！」

羽撃きの音がして、空気が動いた。先頭に立つ皇女の方から隊列が動きはじめ、一歩、二歩の助走で足が浮き、三歩めはもう空を蹴っている。

シロバも仲間の鳥たちと同じように石畳を蹴ると、その翼に風を孕んでふわりと舞い上がった。

魔法だ、とヤエトは思う。

正確には、神から与えられた恩寵の力だ。

かくも巨大な生き物が、人のような重たい荷物を背に乗せて、やすやすと飛翔できるはずがない。だが、鳥たちは飛ぶ。ほとんど意志の力だけで浮力を得ているのではないかと思うほどだ。

しかも、少し飛ぶと風の冷たさや空気の薄さもほとんど気にならなくなる。シロバと一方通行的にしか繋がりがもてないヤエトだから、多少はそれらの現実にとらわれるのであって、本来あるべき乗り手

と鳥との関係を築いている場合、そうした不快を感じる隙はほとんどないのだという。

鳥がどんなに速く飛んでも、乗り手が気絶してしまっては乗用として意味がない。そうはならないあたりが神意であり、恩寵の真骨頂だ。

だから怖い、とヤエトは思う。

あり得ざる力は、人を惑わせる。飛翔の魅力にとり憑かれていない乗り手を、ヤエトは知らない。おそらく、鳥たちも同様のはずだ。

伝説にいう、《化鳥の騎士団》が国外で戦うのは七日までという禁制は、七日七夜を過ぎても飛びつづけ、鳥が鳥であること、人が人であることを忘れぬようにという戒(いまし)めを含んでいるのかもしれない。

空は、あまりにも美しい。

眼下には、霧とも雲海ともつかぬ乳白色の海が山間を流れ、陽光をはじいてきらめく雪原が、空を映して底知れぬ青さをたたえた湖が合間から覗く。

地上はつくりものめいて、遠く感じられた。

――この距離から、敵を射るのか。

そう思ったとき、興奮がすっと引いた。

これほどの高さから見下ろせば、優越感が無意識に先に立つ。自分は万能だと確信してしまう。

射手は競技の的を狙うように、矢を射込んでいくだろう。相手が血肉をそなえた人であると意識するのは、困難なはずだ。

力とは危険なものなのだ。ふるわれる側にとっても、そして多くは意識されないままだが、それをふるう側にとっても。

「尚書官殿」

背後から声をかけられ、ヤエトは我に返った。

「なにか？」

「お話ししておきたいことが。都に着いてしまえばお忙しくなるかと愚考しましてな」

「貴殿のためなら、いつでも時間はとりますよ」

「そうは参りませんでしょうな。真上陛下じきじきのお声がかりでの叙爵、しかも皇女殿下の副官、北

嶺国の相という官職。儂にも予言できますぞ、急に知り合いが増え、友人面した者どもに囲まれて身動きもできなくなられるに違いないと」

「なるほど……」

いわれてみれば、そうかもしれない。ルーギンという盾にしがみついていろと命じられたのは、皇女やルーギンもそれを案じているからだろう。

「今の儂は、隠居の爺です。皇妹殿下の騎士団長は辞し、将軍職も返上済み——残っているのは貴族という身分のみ。将軍になるために叙爵を受けた一代貴族で、家名は持ちません。さて、この老人を貴殿の騎士団長に召し抱えてくださいませんかな」

「……は？」

思わずふり向いたヤエトを、ジェイサルドはいかにも好々爺然とした笑顔で見返した。

「失礼を承知で申し上げれば、尚書官殿は見た目の貫禄が不足気味でいらっしゃる。血胤の面でも……古王国の血筋が評価されるのは尚書局の中だけですからな。貴族のあいだでは、もの珍しがられこそすれ、畏敬の対象にはなりません。ですから、箔をつけるのに儂を雇われては如何、ということです」

考えたのは一瞬だった。

「俸祿が、お支払いできません」

「それはどうでしょう。ゆたかな所領を得られれば、儂ひとり養う程度のこと、いくらでも」

「今回の叙爵は功あってのことではなく、皇女殿下の副官として、わたしの見事な平民っぷりが問題になったからに過ぎません。土地が与えられるとは、とても。それに、一代貴族に護衛の騎士団など」

「一代貴族ではなかったとしたら？」

「あり得ません」

「賭けましょうか」

ヤエトはシロバの後頭部に向かって顔をしかめながら答えた。

「賭けごとには手を出すなと親に躾けられました」

「立派な親御さんですな。しかし、賭けましょう。

一代貴族でなければ、儂を雇ってください」
「……隠居後は、宿屋をなさるのでは」
「悪鬼の宿など怖くて泊まれないそうです」
真面目な口調でいわれ、つい笑ってしまった。どうせナグウィンの台詞だろう。彼がジェイサルドの前歴を知って用心するのは当然のことだ。行商人が、盗賊を好ましく思えるはずがない。
去年、都から北嶺に無事に戻れたのは、このふたりの協力があればこそだが、ヤエトを挟んで角を突き合わせ、口論ばかりするのには参った。
「看板に『悪鬼の宿』とお書きになるのですか？」
「沙漠の猛将にして皇帝の寵臣、先の正将軍という看板の威光が失せぬあいだに、お仕えしようと申し上げているのですよ。なんなら、悪鬼という看板もおまけにつけて進ぜましょう」
――欲しい。
しかし、やはり先立つものがない。
「ない袖は、ふれません」
ヤエトの官服の袖は、賄賂で重くなったことがない。人にすがられるばかりだ。それに、冷静に考えれば、そんな大それた看板をかけた部下が自分に必要かどうか。むしろ悪目立ちしかねない。
「金のことなら結構。蓄財は、やり尽くしました」
それなら是非一緒に隠居しましょう、といいたいところを我慢して、尋ねた。
「では、なにを求めておいでなのです」
少し間を置いてから聞こえた答は短く、不自然なほど感情を排した口調だった。
「名を」
「すでにご高名でいらっしゃると思いますが」
その高名を売り物にしようと自分自身がいっているのに、この上、なにが必要なのだろう。
「いずれ、お話しする機会もあるでしょう」
それだけ告げて、ジェイサルドは口をつぐんだ。
断るには魅力のある申し出だが、肝心のところで利害が一致しない部下を抱えるほど厄介なことはな

い。そして、ジェイサルドという複雑怪奇な人格の根幹を、ヤエトはまだ判断できずにいる。

——考える材料がたりない。

つまり、悩んでもしかたがないということだ。

ヤエトは足の下にシロバのしなやかな筋肉の躍動を感じ、今はこの自由な時間を楽しもうと思った。

空を飛ぶことに心奪われるのはとても容易で、地上に降りれば彼を待っているはずのさまざまな困難も、すべて置き去りにすることができた。

ヤエトにはシロバの感じることがわからないが、それでもこの瞬間、彼の鳥がこの上なく幸せであることだけは確信できた。

鳥にとって、飛ぶことは生きることと同義だ。

二度と翼を失うことはできない。かれらはその喪失に耐えられないだろう。

——人は、どうか。

ヤエトは自分が幻視したかつての城主の姿を思いだした。人にとっても同様だ。そうに違いない。

彼は前を行く鳥たちを眺めた。先頭を切って飛ぶのは皇女とクラルだ。黄金の巻き毛を光の尾のようになびかせている少女と、艶のある黒い翼の鳥の組み合わせは、まるで神話か伝説からよみがえって来た光景のように見える。

皇女の右に、少し遅れてルーギンが飛んでいる。もとから絵になる男だが、鳥に乗った姿も様になっている。そのルーギンの鳥が前に出て、皇女の鳥が隊列の後方に下がった。

先頭を飛ぶ鳥は負担が大きいので、疲れが見えたら順次交替することになっている。もちろん、これも練習済みだ。吹雪がやんだといっては外に飛び出していく騎士と鳥たちを、ヤエトはなかば呆れて眺めていたものだ。

はじめての長距離飛行である。隊列の組みかたも自分たちで考えねばならなかった。鳥馬鹿の北嶺人が、渡りをする鳥の隊列をつねづね観察していたおかげで、ずいぶん助かった。

あきらかに不利なシロバは先頭を飛ぶ必要がないので、入れ替え候補には入っておらず、基本の位置は中央後ろから二羽目と決められている。

最後尾を飛ぶのは厩舎の見習い、タルキン少年である。まだ十二歳のタルキンを同行させるにあたっては多少悶着があったが、厩舎長がどうしてもと主張した以上、通らないはずがない。

それに、厩舎長の判断は正しい。次の世代には外の世界もどんどん経験させておくべきだ。

タルキンが最後尾なのは、いざとなったらジェイサルドを引き取るためである。タルキンは体重も軽いし、多少は嫌がる鳥でも宥めて飛ばせる実力もある——そうでなければ、厩舎長が助手に選ばない。

しかし、シロバはとくに遅れをとることもなく、少なくとも一回目の小休止の場所までは、ヤエトとジェイサルドを乗せて運びきった。

休憩場所を選定するにあたっては、ナグウィンの意見を聞いた。

商人の情報を参考に選ばれた休憩場所は、小高い丘に囲まれた窪地だった。丘には木が生えていて周囲からの視線を遮るが、窪地は影になりがちな上、粘土質の土のおかげで水が溜まりやすくて新芽が腐るので木が育たず、鳥が地上に降りるのに邪魔になるものはないだろう、という。

雨が降ると湿っぽいですが、泊まるのでなければ問題ないでしょう、と商人はいった。周囲から見られずに休めることの方が、利点が大きい。

同行しませんかと誘ってみたが、商人は同意しなかった。皇帝の眼として、北嶺に留まる必要があるのだろう。公式の伝達官が命を断ってしまった今、竜種である皇女が都へ向かうと、北嶺が皇帝の意の届かない空白地帯になってしまう。

一応、ヤエトはナグウィンが皇帝の非公式の伝達官であるとは知らないことになっている。たぶんナグウィンはヤエトに気づかれたことを察しているだろうが、確認はしていない。

商人の観察と記憶は正確で、たしかに説明された通りの場所だった。地面に足を下ろしてみると、表土は湿っており、粘り気がある。なるほど、これでは丘に茂った木が種を落としても、新芽は育たない。丘の方は吹きさらしで乾燥しているから、その気候にあった木が育っているはずだ。

ヤエトがこわばった背や腕をのばしていると、皇女が近寄って来た。

「大丈夫か？」

「馬車で同じ距離を旅するのに比べれば、天国のようなものです」

ジェイサルドが口の端に笑みを浮かべた。北嶺へ向かったとき、ヤエトがそれで発熱したことを思いだしているのだろう。視線に気づくと老騎士は笑みを消し、皇女に声をかけた。

「思ったより速いようですな」

「時間に余裕がありそうだ。次に休憩をとるのは、もう街道沿いの駅舎だからな。ここでゆっくりすると決めた。あたたかいものを身体に入れた方がよい。じきに粥ができる」

「手伝って参りましょう」

ジェイサルドが申し出ると、皇女は心外だとでもいうように眉を上げた。

「そなたは客人だ。ゆっくりしておれ」

「お言葉はありがたく。ですが、こう見えて儂は料理好きでしてな。是非とも騎士団の料理人の腕前を拝見したく思います。それに……これが本音なのですが、口実をもうけて身体を動かしておかねば、この老いぼれの節々が強張ってしまうのです」

「そうか。わかった、好きにせよ」

「御意」

老騎士を見送ってから、皇女は少し考えるようにヤエトを見て、尋ねた。

「そなたも身体を動かした方がよいのか？　それとも少しでも休んだ方がよいか？」

「動いた方がよさそうです。少し歩いて参ります」

「わたしも行こう」
皇女が気軽について来ようとしたので、ヤエトはおどろいた。
「太守は、窪地をお出になってはなりません。危のうございます」
「なにが危ない。上から様子を窺ってから降りたのだぞ、周辺には危険なものはなにもない。そなたをふらふらさせておく方が、よほど危険だ」
ヤエトはため息をついて、ゆるやかな斜面を登りはじめた。城の階段に比べれば楽だが、喋りながらというわけにはいかない。
斜面を登りきったときには、ヤエトは完全に息が上がってしまっていた。皇女は涼しい顔で木肌にふれ、風に揺れる梢を見上げている。
「こんな背の高い木は、久しぶりだな」
北嶺には灌木しかないが、南方には大樹が多い。都育ちの皇女には、慕わしい風景なのだろう。うっとりと見回してから、ヤエトに視線を戻した。
「大丈夫か？」
どうも皆が自分を過保護にし過ぎる傾向がある気がする。少し前に死にかけたせいだろうか。
「わたしのことより、太守は大丈夫なのですか？」
「そなたと比べられるいわれはないぞ」
「都に行かれれば、兄君とお顔をお合わせにならねばなりません。ご覚悟は、おありですか」
覚悟か、と皇女は小さくつぶやいた。眼を伏せて、笑みをかたちづくるように口角を上げたが、その表情はすぐに消えた。
「わたしはたぶん、兄上の裏切りを、心からは信じていないのだろうと思う。……兄上が誰かに陥れられたのではないと、どうしてわかる？」
いくらでも反駁はできたが、そうはしなかった。
彼はただ、考えていた。
皇女は兄を心から慕い、信頼している。それは察していたし、だからこそ傷つけるだろうと思い、一件のこの側面にはふれないようにしていた。

――間違っていたかもしれない。

ひとたび信じたものは、たやすく見限らない――それは皇女の美徳かもしれないが、弱点にもなる。現に今、皇女はそのために惑っている。

兄を盲信せず、部下の言葉に耳を傾けるのは、立派な態度といってよい。だが、情愛に流される危険は残っている。皇女は兄を信じたいのだ。なにかの間違いだと思いたい。そこを利用されたら、ひとたまりもない。

――三の君が、この信頼に応える人物なら。

痛切に、そう思った。

皇女が兄を信じたいと希うにも増して、ヤエトには一件の黒幕が第三皇子だと確信する理由がある。

なにしろ、彼は殺されかけたのだ。伝達官の身体をあやつって、ヤエトの喉に手をかけた竜気の主は、第三皇子以外の何者でもなかった。

そのことも、ヤエトは皇女には話していない。不必要につらい思いをさせたくなかったからだ。

話していたら信じてくれただろうか。血の繋がった兄と、人種すら違う部下と。皇女はどちらを信じたいと心から思っているだろう。

ゆっくりと、ヤエトは口を開いた。

「その『誰か』とは、わたしのことでしょうか」

皇女ははっとして顔を上げた。

「そういう意味ではない」

「それでは、わたしの言葉をお信じくださると？」

「信じる」

即座に断じた言葉も、その気もちも、嘘ではないのだろう。だから困るのだ。皇女はヤエトを信じたい。同時に、兄も信じたい――矛盾する現実に目をそむけたままでは、前に進むことができない。

「ご納得がいかれぬようでしたら、いくらでもお調べください。陛下のお力をお借りすれば、わたしの知り得ぬこともわかるかと存じます」

「いらぬ。そなたの言葉を信じる」

「なりません」

「なぜだ」
「兄君のことも、わたしの言葉もお信じになるとおっしゃる。相反するものを、どちらもお信じになる、それを認めよと仰せですか？　なりません。そのようなお考えは、あやうい」
　敢えて強い口調で断じた。皇女の表情が、かすかに歪む。だが、ここでやめるわけにはいかない。
「真実は、ひとつ。わたしをお信じくださるならば、兄君はご自分の欲のために太守を利用なさったのだと納得なさったのでなければおかしいのです。太守の伝達官を殺し、陛下の伝達官の心を乗っ取った挙げ句、ためらいもなくお見捨てになったと」
「もうよい」
「太守の魂を害そうとまでなさった。残酷な、呪わしい手段で」
「ヤエト」
「村々を打ち壊し、鳥を殺させたのも、すべて兄君のお考え……それが、わたしの申し上げていることなのです。ほんとうに、お信じになれますか？」
　暫し、沈黙が降りた。
　鳥の声が、高空から降ってくる。雲雀かもと思うが、自信はない。北嶺に赴任するまで、鳥の種類や啼き声には関心がなかったのだ。
　おかげで、第三皇子の庭を守る猛禽とやらが、この世ならざる存在であることにも気づけなかった。
　皇女はヤエトからわずかに顔をそむけている。抑え込んだ強い気もちが、頬のこわばりにあらわれている。不安と怯えが眸を揺らしていた。
「太守が陥れられれば、害は北嶺に及びます。おひとりの身の安全のみの話ではないのです」
「くどい！」
　ぴしゃりというと、皇女は踵を返して丘を下りた。ヤエトは木にもたれて、その後ろ姿を見送った。
　皇女の表情から読み取ったと思ったものは、ヤエト自身の内面を映しているに過ぎないのかもしれない、とふと思った。自分は怯えているのだろうか。

――そうかもしれないな。

皇女には、兄が七人もいる。注意すべきは第三皇子だけとは限らない。同母の関係にある第三皇子に対する愛情は格別として、残りの六人に対しても、皇女は無条件に疑いの眼差しを向けたりはしない。

よくもまあ、まっすぐに育ったものだ。

――第三皇子以外の六人は、どんな人物なのか。

下っ端官吏に、皇子たちの人となりなど知りようがない。あやしげな風説が流れてくる程度だ。貴族になれば、そうした噂に接する機会も増えるだろうし、増やさねばならない。情報こそ力だ。

うまく人脈をつくらねば、と考えると同時にため息が漏れた。

――面倒くさいな。

世渡り下手の自分に、貴族的な社交活動が可能なのだろうか？　大いに疑わしい。

やはり貴族になること自体が間違いなのだと思いながら、ヤエトは丘を下りはじめた。そして、待ち構えていたジェイサルドに、特製の粥ですと差し出された椀を見て、たじろいだ。

見覚えのある緑の葉が、粥の表面に散らしてあったのだ。舌にあのときの酸味と苦味がよみがえり、ヤエトは唾を呑みこんだ。

「これは、その……」

「よくご記憶でいらっしゃいますな。滋養強壮と疲労回復に効能があります。このあたりでは自生しているようです。運が良かった」

さあ、とジェイサルドはヤエトにそれを突き付けた。笑顔が怖い。食べないと殺されそうな勢いだ。

しかたなく、ヤエトは椀を受け取った。

5

真帝国の新年は三の月からとなっている。

新年なのに三の月とは珍妙な話だが、沙漠の西にその文化の根を持つ帝国の暦をそのままに、建国の

日を新年としただけで、深い意味はない。
　土地の者には従来の暦を使うことが許されている。正式の書類には帝国暦を使うか併記するかが必須となるものの、面倒な計算は尚書官にまかせておけばよいというのが帝国の方針である。
　なにごとにも大雑把な民族なのだ。
　人の年齢も、新年ごとに増えていく。生まれてから新年を迎えるたび、歳をかさねる計算だ。
　だから、建国の祝いと同時に、国民すべてが一歳ずつ歳をとる。今日から皇女は十五歳であり、ヤエトは三十七歳である。
　三十まで生きないかもといわれていたヤエトにとっては、望外の長寿といったところだが、本人の表情は晴れない。
　早く隠居して楽に死ぬのが彼の理想なのに、隠居どころか馬鹿みたいに出世している最中だ。
　絶対に、なにか間違っている。
「官服は目立ちますよ。服ならお貸ししますが」
「獅子紋の？」
　ルーギンは自分を見下ろして笑った。
「まさか。いつもはこんな恰好しませんよ」
　騎士の儀式用の鎧には、胸元に大きな獅子の意匠が配され、彼が《金獅子公》家の人間であると示していた。獅子の眼は大粒の金剛石で、それだけで一財産ありそうだ。羽織りものは艶のある白、地模様はやはり獅子紋で、一部分にだけ、獅子の輪郭に沿って金糸で刺繍がほどこされている。剣の鞘にも宝石がちりばめられているが、品のあるしつらえだ。
　どれをとっても非常に美しく格調高い品だが、ヤエトには似合わない。たとえ獅子紋抜きでも。
「ご厚意だけ、ありがたく。わたしは、いつも官服なのです。昨年伺候したときも、これでした」
「ああ、前例があるんですね。でも、叙爵を受けたらすぐに服をつくらせた方が賢明じゃないかな」
「考えておきます」
「出入りの者を呼んでおきますよ。その方がいい」

ヤエトはため息をついた。たしかに、貴族になったら官服で通すわけにはいかないだろう。そんなことは考えてもいなかった。なにかと物入りだ。

ルーギンはヤエトの後ろに立つイスヤームとグランダクを見た。かれらも官服だが、色あざやかな上着をかさねており、ヤエトとはずいぶん印象が違う。飾り玉を縫いとめた細工は北嶺独特のもので、ナグウィン曰く、都では高値で取り引きされるらしい。

宣伝のためにも、せいぜい目立ってもらおう。

「準備はいいかな？　では、馬車を回しましょう」

一行は、かねての予定通り《金獅子公》の別邸に滞在していた。これはルーギン個人の邸で、使用するにあたって問題はない……はずだったのだが、いきなり巨大な鳥が上空から舞い降りたため、使用人たちは混乱に陥った。

鳥は、皇家の恩寵以外のどんな連絡手段よりも速い。通常は利点となるのだが、今回は事前に連絡できなかったせいで騒動になった。予測すべきだったと思うが、後知恵では役に立たない。

よみがえった黒い翼の噂は都を席巻し、少なからぬ人々を恐怖に陥れた。

南方人の召使いの中には、不安に駆られて失踪した者までいたらしい。伝説が今もって多大な影響力をそなえていることを、痛感させられる。他所者のヤエトやルーギンはもちろん、北嶺人たちも預かり知らぬところで、《化鳥の騎士団》の物語は変質しながら人々の心に根を張っていたのだ。

これは皇宮に乗りつけるわけにもいくまいと判断して、騎士たちは馬で、ヤエトとふたりの北嶺人は馬車で、新年祭に向かうことになった。

押し黙った北嶺人たちと馬車に揺られ、思いだすのは先年のことである。皇女の伝達官とともに皇宮へ向かったとき、自分はなにを考えていただろう。

面倒くさいと思っていたのは確実だ。

今もやはり、面倒だと思っている。なんでこんなことに、と苛立っているのも変わらずだ。

——進歩のないことだ。

自分という人間は変化しなくなってしまったらしい。これでは生きていても死んでいるのと同じだ。

死んでいますという看板を首にかけて歩いてはどうだろう。いくら皇帝でも、死者を貴族にはするまい。死んでいるならおとなしく寝ていろと勅命がくだれば、ありがたい——現実逃避もはなはだしい夢想にふけるあいだに、馬車は皇宮の門をくぐった。

中はひどい混雑である。少し進んだところで、ルーギンが差し回した騎士が声をかけてきた。ここからは徒歩で、という。おかげで、遅刻して叙爵されそこなうという淡い希望も潰えた。

グランダクが、呆れたようにつぶやいた。

「やたら広いな」

まったく同感である。

「元来は、南方王国の王城だったらしいですよ」

この場所に手を入れるにあたって、帝国人は往古の姿を復元する方にも多少は力をそそいだらしい。随所に南方らしさが見られる、美しい建築物だ。しかし、場所によってはいかにも実用本意の帝国人らしく、美観など考えず無造作に塔を繋いでいる。たとえば、尚書局のあたりとか。

「泥でこねた泥の家か」

「素材は石ですが」

「南方人が糞泥野郎ってのはな、糞と泥を混ぜて家を建てるからなんだ。本当のことだぜ？」

「その口を閉じていろ、グランダク。いらぬ面倒を起こされるのは御免だ」

「どうせこっちも鳥馬鹿だの鳥頭だのいわれるんだ。何回いわれるか、賭けようか？」

イスヤームは鼻を鳴らしてそれに答えた。

北嶺が郡から国になれば、イスヤームは北嶺国尚書局右筆（ゆうひつ）となる。右筆とは外交関係の責任者で、だから今回の一行に彼をくわえたのだ。

左筆（さひつ）は内政の責任者で、こちらはセルクが内定している。家柄のせいで、土地の民は彼に従うことに

慣れているからだ。もう少し裏表のある局面に対処できる人物であればとは思うが、ものは考えようだ。彼の価値は、その裏表のなさにある。彼の言葉にも行動にも嘘はない。そう考えれば貴重な人材だ。

つまり、裏の部分をまかせられる副官がいればよく、それをヤエトはグランダクに期待している。

「三回くらいかな。なにを賭ける？」

当のグランダクは、賭けを成立させようと必死である。イスヤームは乗ることにしたらしい。

「土産かな。皆にあれこれたのまれただろう。折半せず、一方が買うのでどうだ」

「よし乗った！　数が近い方が総取りだ。そっちは何回にする？」

「十回かな」

どうやらイスヤームの方が悲観的だ。

「尚書官殿は？」

「わたしは賭けません」

「賭けるとしたら？」

「賭けませんが、一回もいわれないと思いますよ」

北嶺人たちは顔を見合わせた。かれらはわかっていない。北嶺の隣接地域に住む者以外、北嶺に巨鳥がいることすら知らなくて当たり前。そしてこれから進む先にいるのは貴族ばかりで、鳥馬鹿だの鳥頭だのという表現など知るはずがないというのに。

そうこうする内に、皇宮の表の領域、すなわち皇帝が政務をとるにあたって使う区域に着いた。

「副官殿、こちらです」

案内役の騎士は、ごったがえす人の波をうまくすり抜けて進む方法を知っているようだった。ヤエトは苦心しながらもついて行けたが、そもそも混んでいるという事態に直面することがない北嶺人は、そうはいかない。人の流れを読む力がないのだ。

ようやくルーギンたちと合流したときには、北嶺人はふたりともげっそりとやつれていた。

「大丈夫か」

皇女が珍しく、ヤエトではなく北嶺人の方を案じ

たほどである。
「大丈夫です」
イスヤームは答えたが、顔は真っ青で、大丈夫には見えない。自分が大丈夫ですと答えるときもこんな感じなのだろうか、とヤエトは思った。
「人の多さにあてられたか。奥は空いておる。安心せよ」
皇女は珍しく女装していた。おそらく、させられたのだろう。腰を締め上げ、幅の広い帯を結んでいるのが女性らしさを暗示しているようでもあり、逆に幼さを強調しているようでもある。着付ける側も、大人と子どものどちらに見せたいのか、心が決まらなかったのではないかと勘繰りたくなるほどだ。
長い髪は結い上げ、花をかたどった簪を飾っていた。女官たちがかぶるような紗の布をその髷に留めつけ、後ろは長く尾を引くように、前は顔が隠れない長さに調節してあり、縁には金箔を含んだ硝子玉がいくつも縫いつけられている。
ヤエトの視線に気がつくと、皇女はいかにも邪魔そうに、額に垂れ下がる飾りをつまんだ。
「じゃらじゃらして、すごいだろう?」
「頭が重そうですね」
答えてしまってから、周囲の視線に気がついた。冴えない尚書官が皇女殿下に不遜な態度を、と見えるはずだ。なるほど、官服は悪目立ちする。
だが、皇女は頓着していない。
「まったくだ。そなたはいつも通りの恰好で羨ましいな。さて、では参るとするか」
皇女は長い裾をさばいて向きを変えると、先に立って歩きはじめた。皇女の動きにあわせてひらひらとたなびく薄雲のような紗の向こう、大きく結ばれた帯は蝶の鱗翅を連想させる。もっとも、金糸銀糸を織り込んで宝石を飾った衣裳はずっしりと重く、風に舞うどころではないだろうが。
ルーギンは、やはり皇女は子どもだというだろうか。視線をやると、騎士は顔をしかめていた。



「なにか？」
「いうにことかいて、重そうですねとはなんです。お綺麗ですとか、お似合いですとか褒めないと」
ひそひそ声で駄目出しをされた。
「それが貴族らしい言動ということですか？」
ルーギンは肩をすくめ、視線を逸らした。
「男性の義務ですよ」
「男らしさとは縁がありませんので」
「……なにが男らしさなのか、先生と話しているとわからなくなってくるな」
「結構なことです。男らしさなどという幻想は、人を不自由にするだけです」
男らしくない、という言葉をさんざん聞かされて生きてきたヤエトとしては、そこは強く主張したい。だが、ルーギンはおもしろそうに彼を見返した。
「そうですか？　でも、生きていくには不自由さもある程度は必要でしょう」
「取捨選択できるなら、自分を規定づける不自由さのひとつとして、男らしさは選びませんね」
「では、なにを？」
「隠居願望です」
ヤエトが即答すると、ルーギンは吹きだした。周囲を気にしてか、咳込んでごまかしている。
「姫様に却下されますよ」
「ご内密に。ところで、こんな奥まで……よいのですか？　騎士団のかたがたはともかく、わたしたち尚書官は貴族でもなんでもないのですし」
「おやおや、これから貴族になるのだということを、お忘れではないでしょうね？」
ヤエトは呻いた。そうだった。
「忘れてもよいなら、今すぐにでも」
「ここまで来たら、もう貴族になったも同然なのですから。そのつもりでふるまえばよいでしょう」
広間を埋めているのは、貴族とその供回りのみである。かれらの仲間入りをするらしいと考えてみても、さっぱり実感が湧かない。

——まあ、貴族といってもいろいろだし。

広間に入れるのは、原則として上級の貴族——つまり、公式の名鑑に家名が載り、家系図がしるされている一族くらいのものだ。かれらは皇帝より所領を賜り、そこから上がる収益で暮らしている。

下級貴族にも家名はあるが、勝手に名告っているも同然で、貴族の子だから貴族、程度の評価しかない。収入も領地経営で得るのではなく、騎士としての俸祿である。尚書官と、そう変わらない。

特別なのはジェイサルドのような一代貴族で、生まれは平民でも皇帝に取り立てられて異例の出世を果たすという存在だ。ヤエトもこれになるのだろうが、この場合、与えられるのは領地ではなく俸祿となるはずだ。額面は皇帝の胸先三寸だが、一介の尚書官でいるよりは儲かるだろう……たぶん。

皇女とその臣下に与えられた席は、貴族たちより一段高かったが、皇家の中では隅の方だ。

玉座を中心に皇子たちは半円状に左右にふり分けられ、右側には玉座に近い方から広間の入口へ第一、第四、第五、第七皇子とその母后。左は同じく玉座から第二、第三、第六皇子とその母后、そして皇女という並び順である。まだ皇帝の姿はない。

第六皇子とその母后を、ヤエトははじめて間近に見た。第六皇子の母は、帝国の都となったラングールを治めていた藩王の娘だという。豊かな髪は漆黒で、肌も浅黒い。ぱっちりとした目もとは、息子に受け継がれていた。第六皇子は十六歳になったと聞くが、表情は大人び、いかにも聡明な少年と見える。

その向こう、第三皇子が占めるべき席は空席のままだった。

——やはり、なんらかの処分を受けたのか。

皇帝は、第三皇子が帝位を狙っていると知っている。あのときの剣幕なら、そのまま殺されてもおかしくはなかった。お咎めなしでは済まないだろう。

空席の奥に見えるのは第二皇子だ。今日で二十三歳。数年前から博沙国をまかされている博沙王だ。

第二皇子の生母は、沙漠越えの前に亡くなっている。西の帝国でも威勢を誇り、今も四大公家で第一位の権力を持つ《銀鷲公(ぎんわしこう)》家の息女だったという。今の《銀鷲公》はこの亡くなった皇妃の兄だ。

向こう側の端、第七皇子のほど近くに座を占めている貴族が、その《銀鷲公》だろう。竜種と見まごうほど紫の強い眼のするどさが、印象的だ。近くに並ぶ第七皇子より、よほど威厳がある。

第七皇子は皇女と同じ十五歳。皇女によれば、親しみやすい性格らしい。一見したところではのどかな表情で、なんとなく憎めない雰囲気がある。

第七皇子と第四、第五皇子の三人は同母で、兄ふたりは似ていない双児である。第四皇子は皇女いわく武力馬鹿、第五皇子はその第四皇子にいじめられているそうだ。がっしりしている方が第四皇子、猫背の方が第五皇子だろう。このふたりはともに十七歳。三人を産んだ母親は、《白羊公(はくようこう)》家の出身だ。十二大公家の中で《白羊公》家がそれなりに有力なのは、彼女が三人も皇子を産んでいるからだ。

その隣には第一皇子の姿がある。

この距離で見るのははじめてだが、皇帝によく似ている。凛々しい顔だちも、恵まれた体格も、見る者に深い印象を刻む。二十七歳、すでに沃野王として立って六年が経過している。

第一皇子に不足しているのは、有力な貴族の後援である。いわゆる十二大公家の大部分が第一皇子を支持しているといわれるが、十二大公家とは数あわせに過ぎない弱小貴族の集まりで、その力は四大公家に比ぶべくもない。

四大公家の第二位といわれるのは、ルーギンの父である《金獅子公》だが、彼はまだ旗幟(きし)を鮮明にしていない。十数年前、ヤエトを学舎からたたき出した張本人であり、かなりの策謀家だ。その考えを正確に推し量るのは、ヤエトには荷が重い。

《黒狼公》は空位だし、残る《灰熊公(はいくまこう)》は、馬狂いの変人で世俗の権力には興味がない。これは衆目の

一致するところである。ヤエトですら、ルーギンに教わらなくても知っていた。

——難しいな。

第一皇子は、次の皇帝にふさわしい年齢と実績を兼ね備えている。だが、それではどうぞといかないのが権力闘争というものだ。

同母の三兄弟が結束すれば、兄たちを蹴落とすことも可能かもしれない。混血の第六皇子なら、皇家が権力を握るために使ってきた常套手段、すなわち地元の反乱勢力と手を結んでこれを煽ることは容易だろう。皇家に比しても遜色ないといわれる《銀鷲公》の権勢を考えれば、第二皇子も有力候補だ。

どう見ても不利なのは、第三皇子。そして、第三皇子以上に帝位から遠いのが、彼が仕える皇女ということになるだろう。

これだけ遠くても殺されかけること複数回、挙げ句に呪われ、兄に裏切られ、副官も殺されそうになったのだ。他の皇子やその近臣がどんな苦労を乗り越えているのか、ヤエトには想像もつかない。

「お静まりを！」

官服は官服でも、やたらときらきらしい飾りのついた衣装を纏った男が声をはりあげた。おそらく、礼部の官吏だろう。礼部は尚書局の中でも特殊な位置を占めている。尚書局礼部というが、実態は神殿の下位組織といったところだ。

「お静まりを！　真上陛下のお出まし！」

それまで着座していた皇家の人々が、次々と立ち上がった。皇帝を出迎えるためだ。

第三皇子はまだ姿を見せない。ヤエトは自分の前に立つ皇女を見下ろした。皇女も気づいて案じているに違いない。彼の警告を、覚えているだろうか。

皇帝が身の丈の三倍はありそうな長い裳裾を引いて姿をあらわし、玉座に向かった。

玉座は、竜種の一族の立ち位置よりも、さらに一段高いところに置かれている。皇帝はその高みから広間を睥睨し、ゆっくりと口を開いた。

「大いなるひとつ神に感謝を。神のすべての御名に、その化身に、与えられし恩寵に。全智の神よ永遠なれ！　過ぎにし年を、善きものとして神に捧げたてまつらん。また、迎える年を善きものとなすべく、全身全霊をもって努力することを誓わん」

皇帝は天を仰いだ。その視界に入るのは、金箔と陶片の渦巻き文様で覆われた壮麗な天井だけだろうが、それをつらぬいて空を見ることができるとでもいうようだ。そのまま、皇帝は両手を広げた。

「ともに誓わん！　善き年を！」

全員が唱和した。

「善き年を！」

ヤエトもあわてて口を動かした。こんな催しに参列したのははじめてなのだ。尚書局では、新年祭といえば休日である。行事など、なにもない。

誰かが万歳を唱えた。真帝国万歳、真上皇帝陛下万歳、永遠なれ！　――広間をどよもす声は、すぐに静まった。

皇帝が、かるく手を挙げたのだ。

「さらなる繁栄を祈り、我が子らにそれぞれ封地を与えることとした。すでに王として国を治めている第一および第二皇子はそのまま、第四、第五の双児は東の草原地帯に、第六皇子はこの都から大河を挟んだ向こう岸の平地に、第七皇子は沿海の国の王となす。また、北嶺太守としてよくつとめた我が娘は、同地の王に封じる」

皇帝の言葉が意味するところは、さざ波のように広間に伝わった。静かに、しかし確実に。端まで行き渡った頃になって、皇帝はふたたび口を開いた。

「第三皇子は体調を崩し、遠国での激務には耐えられぬ。よって、中洲の砦を守らせるものとする」

ヤエトはルーギンと顔を見合わせた。

「どこです？」

「大河の中洲の砦くらいしか、思いあたらないな」

それならヤエトも知っている。都のはずれ、下流側の中洲に、南方人が造った古い砦があるはずだ。

——ほぼ蟄居か。

兄弟たちとは、ひどく差をつけられた。

ヤエトは竜種一族の反応を見ようと視線を巡らせた。第一、第二皇子の表情はまったく読めない。どちらも冷静そのものに見える。第四皇子は得意げで、第五皇子は見るからに不機嫌そうだ。第七皇子はにこやかである。

第六皇子には、母后が顔を寄せてなにか話しかけている。よく似た、そして美しい母子だ。

皇帝は、満足げな表情だった。

「それぞれ、上に立つ者としての器量を見せてくれよう。皆も期待して見守るであろう」

——誰が後継者にふさわしいか見定めろ、と？

これでは、次の皇帝が誰であるか、皇帝の心中は未だにさだまっていないと宣言したも同然だ。事態は昏迷の度合いを増しそうだ。

皇帝のかたわらには、皇妹の姿があった。白一色の装いはいつもと同じだが、今日はひときわかがやいて見える。

——竜気だ。

皇妹からはなたれる竜気の量は、見るだに凄まじい。玉座から遠くてよかった、とヤエトは内心ほっとした。あれでは、絶対にあてられる。この場で昏倒するのは御免である。

——全員の思考を制御しているのか。

北嶺で、ウィーシャを通じて第三皇子がやっていたのと同じ芸当を、皇妹がやっているのかもしれない。とびぬけて竜種としての力が強いあの女性なら、可能なのかもしれないが……それにしても、この広間の大きさ、そして集まった人数を考えると、無謀なのではないか。

「新たな年に、我が忠実なる臣下を新たに迎えん」

皇妹が、こちらを見ている。ああ、ルーギンがいるから、と納得していると、不意に呼ばれた。

「尚書官ヤエト」

誰が呼んだのか、一瞬、わからなかった。

眼をしばたたいていると、皇女がふり返った。
「早く行かぬか。……大丈夫か？」
いや全然、と答えたかったが、急に口の中がからからになってしまい、声にならない。
呼んでいるのは皇帝である。畏れ多くも皇帝そのひとが、衆人環視の中で彼の名を呼んだのだ。
視線まで合ってしまった。皇帝は笑っている。そして、おそろしく機嫌が悪い。なぜか、確信した。
——これは、いじめだ。
ヤエトは広間の中央に押し出された。自分で歩いた気はしないが、移動しているから、たぶん歩いたのだろう。膝をつき、両手をあわせて頭を垂れた。
頭の中は真っ白だが、それを他人事のように眺める自分も感じる。予測しておくべきだったな、と。
皇帝は暇ではない。末娘のために、官吏をひとり貴族に引き上げる程度のこと、行事のついでにこなしてしまいたいだろう。
「本日をもって、そなたを貴族に列す」
広間がざわめいた。だがそれは、皇帝の次の言葉で、完全な静寂へと変化した。
「空位となっていた《黒狼公》の名を与えよう。存分に仕えよ」
顔から血の気が引いた。視界から色が消え、すべてが白と黒、褪せた光と淡い影へと変化していく。
——なんの冗談だ。
「《黒狼公》には今後、我が面前での佩刀（はいとう）と直言を許す。立て、《黒狼公》。顔を上げよ」
その声に引きずられるように立ち上がりながら、死にたい、とヤエトは思った。
今すぐ死ぬ。死なせてくれ。
「我が友よ」
皇帝の眼は笑っていなかった。

第



章

1

皇宮からルーギンの邸に帰ったところで、ヤエトは倒れた。そうなることは皆が予測していたらしく、床と親交を深める暇もなかったようだ。

あれやこれやの行事のあいだは、魂が抜けた状態でやり過ごしていたのだろう。なにがあったか、まったく覚えていない。

気がついたときには翌日の夕刻だった。召使いがルーギンを呼びに行くと、騎士はじきに姿をあらわした。珍しく、疲れた表情をしている。

「太守は……いや、北嶺王には、わたしが倒れたことは……？」

皇女は当然、皇宮に滞在している。ルーギンをはじめとする騎士団の面々は、皇宮の宿舎に泊まることもできたのだが、慣れない環境で不安がっている鳥たちと離れない方がよいだろうという判断で、北嶺からの一行は全員がこの邸に泊まっていた。

「ご存じです。今日、皇宮に呼び出しがあったのをお断りしましたからね」

「ごまかせなかったのですか？」

「どの程度、倒れているかを確認するための呼び出しですよ。ごまかせるものじゃない」

「倒れているのは前提ですか」

それもどうなのかと思うが、ルーギンはぞんざいにうなずいて、話を次に進めた。

「それより面会希望者が列をなしていますよ、公」

「意識を取り戻していないことにしてください」

ヤエトが呻くと、ルーギンは笑った。

「だいたいはもう引き取ってもらいましたが……」

なぜ、逆接で言葉が終わるのか。いや、つづくのだろうと身構えていると、ルーギンは少しだけ顔を寄せ、声を低めて尋ねた。

「ジェイサルドを、召し抱えると約束を？」

なんの話だろうと思った次の瞬間、都に来る途上の会話を思いだし、ああ、と声が漏れた。
「約束させられたかもしれません」
「おやおや。なるほどね。しかしそうか……不安なような安心なような、微妙なところかな」
ヤエトはため息をついた。
「彼が本気になったら、阻止できる気がしません。つまり、どうしても仕えるといわれたら、召し抱えずに済ますことができる気がしないのです」
「わかります。白状すると、わたしも彼のことは追い払いそこねてね。まだ、この邸にいます。しかし、使えますか？　ずいぶん癖のある人物ですよ」
「悪鬼を使いこなす自信など、ありませんよ。皇妹殿下とは違います」
淡い色の眼に、ちらりと影が過った。
「悪鬼を使いこなせたら、人じゃないですよ」
「彼はまだ皇妹殿下の意を受けて動いているのかどうか、ご存じですか？」
ルーギンは椅子を引き寄せて座りながら答えた。
「残念ながら。ところで、彼のことをどれくらいご存じですか」
「アルハンの降将で、もとは《黒狼公》に仕えていて、その縁で皇妹殿下の騎士団長となったこと……それから、アルハンの将軍になる前は、《沙漠の悪鬼》と呼ばれる盗賊団の頭目だったことですね」
隊商道を支配して悪名も高かった悪鬼は、どういう手蔓を使ったのかはわからないが、正式に仕官して、水の都として知られた沙漠の都市国家アルハンの将軍に出世した。アルハンの滅亡後は《黒狼公》に仕え、公の没後はその奥方であった皇妹の騎士団長となった。彼がヤエトと行動をともにしていたのは、その皇妹の命によるものだ。
「結構。悪くないかな、それだけご存じなら」
「もっと教えていただけることが？」
「彼は、はじめから帝国の回し者だったのですよ。正確には先代《黒狼公》の、というべきかな」

先代というと、自分が《黒狼公》を継いでしまったことが意識されて嬉しくないが、区別は必要だ。ヤエトも同じ言葉を口にせざるを得ない。

「先代の采配で、裏切りを前提に故国に仕官を？」

あり得ないことではない。故国に心を寄せる理由はない、と老騎士ははっきり告げたし、事情通のナグウィンも、その可能性を口にしていた。

「ええ。たしかな話だと、《金獅子公》が」

自分の父親のことなのに、よそよそしい口調だ。

「悲劇の将軍ではない、というわけですね」

名目上、ジェイサルドは帝国軍を挟撃するために動いていた、ということになっている。だが、肝心のアルハンは門を鎖して動かず、彼が率いた軍は孤立した。ジェイサルドは矢尽き刀折れるまで戦って捕虜となり、その勇猛を惜しんだ皇帝に助命されたというのだが、そういう筋書きだったのか。

ルーギンは違うことを考えているようで、ぼんやりとした口調でつぶやいた。

「彼が忠誠を尽くすのは、先代のみだそうです」

「しかし、先代はもう亡くなられた」

「だから今は野放しです。悪鬼の望みを知る者は、誰もいませんよ」

――名を。

それが望みだとジェイサルドはヤエトに告げたが、詳細は語られないままだ。

「先代には及ばないでしょうが、努力しましょう」

物思いにふけっていたらしいルーギンは、ヤエトの言葉におどろいて眼をしばたたき、次いでにっこりした。

「わかりました。では、彼には泊まってもらいます。金を貸したとか親戚だとか娘が孕まされたとかの有象無象は適当に処理します。公は気にせず、ゆっくり休んでください。明日は姫様に顔をお見せしないわけにはいかないですよ」

「努力します」

「それと、《金獅子公》にも一回は挨拶をしていた

だかねばならないかな。断れそうもありません」
「陛下にあれほどの嫌がらせをさせる男はどんな人物だろうと、興味が湧いたのでしょう」
ルーギンは声をあげて笑った。
「叙爵が嫌がらせですか？　わたしは先生がどういう人か知ってますから、そんな風に感じてらっしゃるのもわかるけど……陛下はご存じなのですか？」
「なんとなく、そんな感じが」
「でも、陛下に嫌がらせされるような事情がおありなのですか？」
ヤエトは枕に頭を埋め、布団をひっかぶって夢の国に旅立ちたい欲求にかられたが、渋々答えた。
「沙漠越えのときのことですが……陛下と気づかずに、突っかかったことがあります。兵たちが建物を壊し、本を積み上げて焼いているのを見て、つい。無意味なおこないは、やめさせろと」
ルーギンは眼をみはった。
「陛下に諫言を？　よく命が繋がりましたね」
「忘れてくださったと期待していたのですが……」
「ご記憶だったのですか」
「そのようです。北嶺に、陛下の非公式の伝達官がいたことは、ご存じでしたか？」
「いいえ。……ひどいな、どうして教えてくれないんです」
「軟禁されていて、お話しする機会を失いました」
「世の中では看病とか療養とかいうんだと思うけどな……まあ、閉じ込められてはいたかも」
「その伝達官を通じ、沙漠越えのときの一件に言及なさったのです。ご記憶だったとしか思えません」
「それはそれは……どんな流れでその話に？」
「腹の立つ奴、といわれました」
ははぁ、とルーギンは意味ありげな目つきをした。
「娘をたぶらかした、とか？」
「……いや、違います」
いわれた気もするが、誤解である。
「違わないでしょう。父親族が娘の周辺にいる男に

むかつく理由はそのへんに決まってます。へぇ、これはおもしろい」

どこがおもしろいのか。いや、当事者でなければおもしろいのだろう。ヤエトにとっては災難だが。

「違います。伝達官の命乞いをしたせいです」

うっかり答えて、あっ、と思った。この話は誰にもしていない。もちろんルーギンにも教えていないのだ。流してくれればよいが、騎士団長はそれほど鈍い男ではない。案の定、するどく問われた。

「なんの話です」

「貴殿や太守が、北方人と戦うために城を空けてらしたあいだに、いろいろありまして」

「ほう？　詳しく教えてもらいたいですね。先生は死にそうになって寝てらしたはずだ。まさか仮病だったとでも？」

「間違いなく死にかけていました。ですが、三の君はただ待つのはなまぬるいと思われたらしく、伝達官を使って事態の推移を早めようとなさったのです」

話せば話すほどルーギンの表情が険しくなる。もう全部ごめんなさい、で終えられないものか。

「つまり、こういうことですか。先生の息の根を止めるために、三の君が、あのウィーシャという伝達官をふたたび乗っ取って、襲った……と？」

「そうです」

「どうして助かったんです。あのときの先生の状態なら、小指一本でも殺せたはずだけどな」

助かって悪かったと謝りたいほど、声が冷たい。

「陛下が止めてくださいました。ご自分の伝達官を通じて、三の君を追い払ってしまわれたのです」

「なるほど、その伝達官は、ぬかりなく見張っていたわけだ。我々は油断し、陛下は油断なさらなかったということか」

「それは……彼は戦いに向いていないから残っていただけでしょう。ナグウィンですよ、商人の」

「関係ないですね」

即座に否定された。反論は許されないらしい。ル

ーギンは、ため息をついて言葉をつづけた。
「陛下のご命令があれば、彼は口実をつけて我々に同行するか、ひそかに追ったでしょう。……しかし、よくわからないな。なんで伝達官の命乞いという話になるんです。彼は使命を果たしたのでしょう？」
「つまり……陛下が、ウィーシャに死を賜ると仰せになったので、つい」
疚しいことをしたわけでもないのに、小声になってしまう。ルーギンの眼差しは、まるで氷だ。
「あの娘を庇ったのか！　呆れた人だ。決められたあるじ以外の言葉を運んだ伝達官を、許せるはずがないのに。だいたい、どうして黙っていたのかな」
「ですから、お伝えする機会を失いました。それからまた、わたしは高熱を発してしまい、長く意識が戻らずにいましたし……しかし、貴殿にはお話ししておくべきでした」
ルーギンは皇女の身の安全に気を配る立場だ。城内で剣呑な事件があれば、それを知り、対策をたてねばならない。
「まったくです。それで、三の君は中洲の砦なのか。ようやく腑に落ちましたよ。三の君がなにをなさろうとしていたか、陛下はご存じだ。ひょっとすると、我々以上に。……今の話をお聞きになれば、姫様もお考えを変えられるでしょうね」
「お考えとは？」
「お気づきでしょう。姫様は、三の君は誰かに陥れられたのではないかとお考えなのです」
「それは……」
反駁しかけたものの、ヤエトには語るべき言葉がなかった。彼自身、危惧しているのだ。
「姫様の名を呪わせたのが、確実に三の君だったという証拠はない。そうらしい、という傍証があるだけだ。伝達官を乗っ取った一件も、誰がやったことか確実ではないと、そう思いたがっておられるのです。しかし、今の話は無視できない」
「あまり、お聞かせしたくないのですが……」

ルーギンは眉を上げた。
「なぜ」
そう真正面から問われても困る。
「この話はなにも目新しい情報は含んでいないでしょう。わたしはそれまでにも、三の君の配下である呪師に命を狙われていたのですし」
「目新しくないなら、お聞かせしても問題ない。それに、伝達官を通じて暗殺をたくらめるということは、今後、つねに視野に入れておかねばならない情報です。先生も、ずいぶん甘い」
ぴしりと指摘され、ヤエトはますます布団の中に沈みこんだ。
「面目ない」
「姫様が三の君についてお考え違いをなさっていることに関しては、ご相談したいと思っていましたが……話にならないな。先生までそんな風だとは」
困った人たちだ、とつぶやいてルーギンは立ち上がった。
「太守……いや、北嶺王が同じ手法で狙われるかもとは、思いつきませんでした」
「馬鹿ですか？」
ヤエトはぽかんと口を開け、ルーギンを見上げた。なぜだかわからないが、騎士は怒っているようだ。
畳み掛けるように言葉が降ってきた。
「そういう話にしないと理解していただけないから、その例を出したまでです。問題の本質は、そこではない。ご自分の命など、なにほどでもないとお思いなのでしょうね、相変わらず。でも、違う。あなたを失えば、北嶺は終わりです」
「そんなことは――」
「あるのです。姫様が『誰か』など不要だと仰せになったのを、お忘れですか。姫様やわたしがすぐさま全幅の信頼を置ける人物が、そう簡単にみつかると？　問題はそこですよ。わかっているのかな」
氷のような一瞥に、冗談でなく胆が冷えた。
「わかります」

「わかっていないね」
即座に否定して、ルーギンは大きく息を吐いた。
落ち着こうとしているらしいが、深呼吸をしても、いつもの胡散臭いほどやわらかな笑顔は戻らなかった。彼のこんな表情は、滅多に見ない。
「とにかく、今は養生なさい。邪魔者はすべて、わたしが追い払います」
言葉通り、その日ヤエトのもとを訪れる者はもうなかった。
翌日、皇宮に上がるために、ルーギンは鳥を用意した。馬車で行ってまた体調を崩されては困ります、といわれては反論もできない。
「公式の行事で人が集まっているならともかく、今日は問題ないでしょう。派手に押し出すと決めたのです。自在に扱えるところを見せてやらねば」
ただし、行くのはルーギンとヤエトに騎士がもうひとり、それと厩舎のタルキンの四人だけだ。タルキンと騎士は鳥の番として同行する。物見高い貴族たちに見物されるだけならよいのだが、伝説に怯える南方人の召使いに、鳥が襲われては困る。
鳥たちは今のところ不調も見せず、食欲も旺盛ですと少年は報告した。北嶺の水や食べ物以外を受け付けない可能性も考えて、多少は飼料も持参したのだが、その心配はないようだ。
シロバの嘴（くちばし）にふれると、鳥は甘えるように少しヤエトの手を押し返し、それから琥珀（こはく）色の眼で彼を眺めた。いかにも、ヤエトの体調を案じている風だ。
いつものように足を畳んで腰を落としたシロバの鞍にまたがると、ヤエトは鳥の後ろ頭を撫でてやりながら、ささやいた。
「大丈夫だよ、たぶんね」
ルーギンの邸から皇宮までの距離は、鳥を使えばあっという間だ。高空まで舞い上がる必要すらない。もう少し高く飛んで眺めてみたいものだ、と思ううちに着いてしまう。
シロバはその巨体で可能な限り優雅に着地した。

今日は事前に連絡が行き届いていたようだ。黄金竜を配した騎士団の制服を身に着けた南方人が、鳥たちのための場所を確保していた。見れば、ヤエトが第三皇子のところへ滞在させられた去年の秋、北嶺から彼を先導してくれた騎士である。

視線が合うと、騎士はにこりと笑って一礼した。

「お元気そうですね」

珍しい言葉をかけられて、ヤエトはどう答えるべきか迷った。いや、実は昨日は倒れていました、と正直に答えるのはあまりに情けない。

「そちらもご健勝そうで、なによりです。あれから、ずっと都に？」

「北嶺には戻らず、都で尚書官殿のお手助けをせよと申しつけられていたのです。その節は、なにもお力になれず、申しわけありませんでした」

今になって知る新事実である。

「馴れ馴れしいぞ。こちらは《黒狼公》でいらっしゃる」

ルーギンが釘を差すと、騎士は姿勢を正した。

「申しわけありません」

「お気になさらず。ルーギン殿、お待たせしてすみません。どちらへ参ればよろしいのですか」

「姫様はすぐ先でお待ちです」

「わかりました。タルキン、鳥たちをたのむ」

少年は、はじめて見る皇宮の威容に気押された風であったが、ヤエトが声をかけると我に返り、元気に返事をした。

「はい、おまかせください」

騎士たちもいるし、ここは大丈夫だろう。

ヤエトはルーギンに従って皇宮の奥へ進んだ。取り次ぎ役の先導などはない。

「非公式の訪問と考えてよいのでしょうか」

ルーギンはヤエトをちらりと見た。ごめんなさい、と謝りたくなるような視線である。昨日の怒りがまだとけていないようだ。

「どういう意味です」

「わたしは貴族のしきたりや慣習には詳しくありません。赤子をお連れになっているようなものだとお考えください。本日のこれは、どの程度公的なものなのか、さっぱり……」

「皇女殿下にお招きいただいたのです。とくに秘すべき訪問ではありませんが、広く公知すべきものでもないというところです」

「なるほど」

いくつもの渡り廊下を過ぎた。人気のない小部屋を抜けて、やがて美しい中庭に辿り着く。

以前見たことがあるのと同じ中庭かどうか、ヤエトには判断がつかなかった。池があり、四阿がある。咲き乱れる花の種類は違うが、それは季節によるものと考えられなくもない。

四阿の柱に寄り添い、皇女は静かに立っていた。池を眺めるように視線を落としている。髪は今日も結い上げて、簪を飾っていた。昨日ほどではないが、それでも華美な装いではある。

——まるで、飾りものの中に埋めてしまいたいみたいだ。

白い首筋は、折れそうに細く思われた。

「姫様」

ふたりの部下の姿を認めると、皇女の表情は明るくなった。にこりと笑って、手招きをする。

「こちらへ参れ。飲み物を用意してある」

皇女は長い裾をさばいて四阿の屋根の下に入った。椅子はしなやかな蔓を編んだ座面が特徴的な南方の細工だ。座るとやわらかく体重を受け止めてくれ、ヤエトはほっと息を吐いた。

ルーギンも彼の横に腰を下ろしたが、まだ表情が硬い。皇女は、目敏くそれに気づいた。

「ルーギン、如何いたした？」

「いえ……なにも」

「そうか？　ヤエトはどうだ。一日で治ったか？」

「わたしは、いつもこうですので」

「違いないな。さて……そう時間もとれぬ。さっさ

と話すことを話してしまおう。まず、ヤエト。そなたのことだ」

皇女は小卓に頬杖をつき、噛み締めるようにつぶやいた。

「まさか《黒狼公》とはな」

皇女はいささか疲れた表情を見せて息を吐いたが、すぐに気を取り直し、言葉をつづけた。

「父上に確認しておいたが、かつての《黒狼公》の所領を、そのまま下賜してくださるそうだ。空位となっていたあいだは、皇家の天領扱いだったらしい。沙漠の近くだ。海側ではなく、山地の方だな。北嶺からだと、都より少し近いかな——鳥を使えばの話だが。山が多く、街道の整備も遅れているそうだ」

ヤエトは、真帝国の地図を脳裏に思い浮かべてみた。国がいくつあると思うかと皇女に尋ねられたときに、調べてみたのだ。たしか、第二皇子が王として治める国が、沙漠に面する地域だったはずだ。

「博沙国の方でしょうか？」

「境を接しているはずだ。とにかく……所領の引き渡しや確認の必要があるだろう。都でもあれこれ雑事が多いだろうが、適当なところで切り上げて、領地の安定に心を砕け。ルーギン、そなたも暫しは都に留まり、ヤエトを補佐してやるがよい」

ヤエトはまじまじと主君の顔を見た。皇女はいたって真面目な表情である。冗談ではないようだ。

「しかし、わたしは相としてお仕えすることになっていたはずですが」

「無論だ。だが、一国の相として存分にはたらくには、名ばかりの貴族になっても、意味がなかろう。そなたには家族どころか親類縁者のたぐいもいない。急な出世だ、今までの同輩が不意にそなたに顎で使われる立場に慣れるとも思えぬ。《黒狼公》の名に相応しくあるために、早急にそれらの問題を処理せよ、全力でやるがよい、と命じておる」

なかなかするどい分析だ。ヤエトは舌を巻いた。

「御意にございます」

頭を下げたヤエトの横で、ルーギンが口を開いた。
「思慮深いご判断ですが、しかし、姫」
「なんだ」
「その間、北嶺は如何なさるのです」
「なんとかする」
今度の返答は、あまりにも大雑把だった。ルーギンとヤエトは顔を見合わせた。
「失礼ながら、急なご出世でこれという部下が育っていないというご事情は、王も同じでは」
ヤエトが指摘すると、皇女はうなずいた。
「その通りだ。だが、わたしには部下がおらぬわけではない。北嶺の民にも忠良な部下を得た。それに、最大の敵である北方蛮族は退けたのだ。吹雪をあやつるのが彼奴らの武器ならば、天候が快方に向かうこれから、暫くは襲撃もあるまい」
「最大の敵は、お身内に」
ルーギンの声は、ひやりとしていた。
騎士の水色の眼は真剣で、たとえ皇女の勘気を蒙っても、という覚悟が見てとれた。
――珍しいな。
やはり、今日のルーギンはいつもと違う。
「わたしは、皇帝の座はほしくない」
あっけらかんと皇女は答えたが、ルーギンは手をゆるめなかった。
「しかし、兄君たちは如何でしょう」
「勝手に取り合ってくれればよい」
「関係ないでは済まされぬと、まだおわかりいただけませんか」
「巻き添えにされぬよう、意を配る」
「それは甘いお考え」
びしりと断じて、ルーギンはヤエトを見た。こちらに話をふられるのかと身構えていると、騎士は視線を皇女に戻して告げた。
「わたしは、自分の命を惜しいとは思いません。姫様を玉座に押し上げ、栄誉栄華をきわめたいとも。それは《黒狼公》もご同様でしょう。ですが、姫様

が利用されるとわかっていて、それを看過するなど御免です。巻き添えにされずに済むかもと期待しておいでなら、そのお考えはお捨ていただきたい」

皇女は口を引き結ぶと、ヤエトを見た。今度こそ話がこちらに向くと思ったが、またはずされた。

「うまく立ち回るというておる」

「周囲がどう見るか、おわかりですか。《黒狼公》は姫様のお気に入り、この度の叙爵も陛下が姫様に甘くていらっしゃるから。どちらも間違ってはいないだけに、始末におえません。その男を都に置いて行く……となれば、《黒狼公》は帝国の中枢に入り込まんとする野心家と、十人が十人は決めつけることでしょう。そのような評判をとった《黒狼公》が、有為の人脈を築けるとは思えません」

今のままでも十人中八人、いや九人はそう決めつけるだろうな、とヤエトは思った。うんざりする。

暫しの沈黙の後、皇女は大きく息を吐いた。

「わかった。そなたの言にも一理ある。だがな……我が副官をひしと我が身に巻きつけるように連れ歩くのも、よい考えではなかろう。そうでなくとも、胡散臭い噂がいくらもひとりで歩き回っているのだぞ。それを綱で結んで引きずり回す気はない」

「ああ、姫様のお耳にも入りましたか」

ルーギンの表情がやわらいだ。花がほころぶように微笑むと、彼は話が見えないままのヤエトに肩をすくめて見せた。

「公は、姫様の特別な寵臣におわすという噂が」

「は？」

素でおどろいた。多少、声が裏返ってしまったかもしれない。

皇女は顔をしかめた。

「特別な、というところに心をこめずともよい。宮廷の噂好きどものあいだには、男女がおれば、やれひっついたの惚れたのできたのという話にせねばならぬという規則でもあるようでな」

「で……」

ヤエトは絶句した。

それはない。なにもしていない。親子ほど年齢の違う少女、しかも皇帝の愛娘だ。一介の尚書官が、手を出すはずがないではないか。

「……ですが、わたしが左様な不埒者でしたら、とうに成敗されておりましょう」

「わかっておらぬな。わたしがそなたを好いておるゆえ、なにをされても拒まぬであろうと噂されておるのだぞ。成敗するはずなかろう」

真面目な顔で皇女が諭すと、ルーギンが吹きだした。咳込んでごまかしたが間違いない。あれは笑っている顔だ。

ヤエトには笑えない話だ。我が友と呼んだときの皇帝の眼差しを思いだし、背筋が寒くなる。

皇帝は噂を信じたのだろうか。いや、まさか。

彼は気を取り直し、できるだけ現実的なことを考えようとしながら口を開いた。

「なるほど、事情はわかりました。一時のこととはいえ、ご不快でしょう。そういうことでしたら、わたしは暫し、所領へ参ろうと思います。……噂も下火になるものと存じます」

「しかし、噂を消すために所領に参ります、と告知するわけにもいかないでしょう。それでは、騒いでくださいというようなものだ」

「痴話喧嘩でもするか」

皇女は、心の底からうんざりしたという口調である。皇宮に滞在しているあいだに、よほど噂好きの人々に悩まされたと見える。

「別の男を候補に立てればよろしいのです」

ヤエトの提案に皇女とルーギンは顔を見合わせた。

「ルーギンをか？」

「わたしは無理です」

ルーギンは真顔である。そこまで恋人に操を立てたいのだろうか。貴婦人のだれとでも噂になってしまう男だというのに、今さらである。

「皆が飛びつきそうな新顔にしましょう――つまり、

北嶺王がことのほか北嶺の経営に熱心でいらっしゃるのは、土地の男に心惑わされたからだと、底の浅い勘繰りを好むかたがたの勘違いを誘うのです」

「……イスヤームは既婚だぞ」

「グランダクは真顔でやり通せるとは思えないな」

「なにも事情を教える必要はないのです。周囲が誤解するような場面をととのえれば、それで。そうですね……《雪鳩》も連れて来ていましたね？　セルクを呼びましょう。彼なら大真面目に、『姫様以外にお仕えする気はない』とか――」

ヤエトはセルクが口走りそうな恥ずかしい台詞を考えてみようとしたが、挫折した。あれは、つねに彼の想像を凌駕する男だ。

「――まあ、なんでもいってのけるでしょう。間違いなく誤解してもらえるようなことを」

「たしかにそうだけどね……」

ルーギンは頭を抱え、皇女は顔をしかめた。

「結局、誰かと噂をたてないわけにはいかぬのか。だったら、そなたでも問題ないではないか」

「立場を考えれば、わたしは派手な噂になるわけには参りません。セルクには内政を任せるのですから、都で噂になってもあまり関係ないでしょう。無難な人選です」

「どうだかね。最悪の人選かもしれない」

ルーギンが混ぜ返したが、ヤエトは無視した。

「……とりあえず、寵愛がどうのという話はここまでにしましょう。わたしがすぐには北嶺へ戻らぬのであれば、今後のことについてお話しせねばなりません。わかりやすく申しますれば、いかにして北嶺を覇権争いの圏外に置くか、ということです」

皇女の表情が暗くなった。

ルーギンは居住まいを正し、うなずいた。

「わたしも暫しは公に従って都に残れと、姫様はお命じになられました。主君の命とあらば服するのが騎士のつとめとは申せ、主君をお守りするのも同様です。遠く離れてどうやって北嶺王の剣となり、盾

となることができましょう。ましてや、姫様におかれましては、いろいろと認識が甘くていらっしゃると存じておりますものを」

「兄たちを疑えと申しておるのだろう。それはもうわかった」

「左様な単純な話ではありません」

やんわりと口を挟むと、即座に睨まれた。

「単純なことか？」

「はい。単純な理解をなさろうとしておいでです。お考えください。いつか申し上げたように、皇家に生まれるとは、権力の座に結びつけられること。すべてを放棄して遠くに逃げたいと思われたとしても、欲のある者は信じようとしないでしょう。おひとりおひとりのお考えがどうであれ、もはや――」

「そのようなことは、わかっておる！」

「――おわかりなのでしたら、よろしいのです」

受け流してやると、皇女は怒りの持って行きどころがなくなったようで、ぷいとそっぽを向いた。ひとつ歳をかさねたといっても、まだ子どもだ。

ルーギンがヤエトに尋ねた。

「どの皇子殿下にも肩入れせず、のらりくらりと躱していけると思いますか？」

「それは、なんとも……。ですが、三の君とはあまり友好的な関係ではないと、早めに匂わせておく必要があるでしょう。今までがお親しかったですし」

皇女がふり向いた。

「なぜだ」

「三の君が皇帝の位を望まれるのであれば、不穏な手段と無縁では済みません。協力していると周囲に思われると、面倒なことになります」

第三皇子が後継者として皇帝から指名を受ける可能性は、万にひとつもない――と、本人も周囲も思っているだろう。貴族層の支持を集めるのは、もはや困難だ。策謀と暴力をもってしか、彼は帝位を手に入れることができない。

その上、本人の資質がある。

「あのかたは、剣呑な方へとお考えをお進めになられます。北方人を煽って北嶺を襲わせ、呪師を使い……同様の手を、その他の地域にも打っておられたものと考えるべきでしょう。今回はどうやら陛下が未然に防がれたようですが」

「そなたは、三の兄上が嫌いなのだな」

ぽつりとつぶやかれ、ヤエトは困惑した。そういう問題ではない。

だが、皇女が考えていることもわかる。皇帝にあのような仕打ちを受けた上、庇ってくれる者もなく孤立する兄を、血を分けた妹の自分まで見捨てられるか、と思っているに違いない。どう説得しようかと悩んでいると、ルーギンが口を開いた。

「自分を殺そうとした相手を好きでいられるほど、公が寛容でおられるなら、その方が問題ですね」

皇女は眉を上げた。

いかにも不機嫌そうな眼差しを投げられても、ルーギンは動じなかった。

「《黒狼公》が問題なお人なのは確実ですが、それは措いておきましょう。去年、三の君のお邸を脱出する折り、武装集団に襲われたとジェイサルド殿に聞きました。賊は、公のお命を取ろうとしていたと。これは三の君のご命令に違いありません。また、街道を旅していたときにも、呪師の使い魔に襲われたそうです。偶然、別の誰かが呪師を雇って公を襲わせたと、姫はそう仰せになりますか？」

「兄上は……」

「北嶺でも。たくらみが暴かれたというのに懲りもせず、伝達官の身体をあやつって、みずから手をくだそうとなさったそうです。公が生死の境におられるのを見て、もうひと押しだとでも思われたのでしょう――我らが北方蛮族と戦っていたとき、公は死の淵を覗きこまされていたのですよ」

皇女の眼が、少しずつ大きくなった。まさか、と喘ぐようにささやいて、ヤエトを見た。

「聞いていない」

ルーギンが、嘆かわしいといわんばかりの吐息を漏らした。
「困ったかたです。口をすべらせてくださらなければ、知らずに済ますところでした」
「わたしは聞いていないぞ！」
ヤエトはしかたなく答えた。
「いろいろ忙しく、お話しする機会を失いました。それは、ルーギン殿にも申し上げたのですが――」
「おわかりいただけましたか、姫」
ルーギンが言葉を遮ってくれて、ヤエトはほっとした。しかし、皇女の表情は硬くなった。
騎士の淡い色の眼は、ヤエトではなく皇女を見ている。まっすぐ、揺るぎなく。
「三の君には特段のご用心が必要です。感傷や同情にお心を曇らせぬよう。どうか正しいご判断を」
「……わかっておる」
皇女は両肘を卓上に突き、両手で頭を抱えていた。泣いているのだろうか、とヤエトは心配になった。
ルーギンは皇女から視線をはずし、なにごとも起きていないかのようにヤエトに尋ねた。
「しかし、三の君と姫様が不仲になったと、どう匂わせよう？」
「貴殿の方がよくご存じでしょう。高貴なかたがた特有の、婉曲な表現手段がいろいろとあるのでは」
「そうだな……花でも送りますか」
「花ですか？」
「永遠の別れという名の花があるのです。断りの返事を出すときに贈りますね」
「土地の花ですか」
「今がちょうど季節です。地味な、寂しい感じの白い花ですよ。夏なら夏で別の花があるんですが……わたしはそちらの方が好きですね。なんでも、有名な悲恋の結末を飾る花だとか聞きましたよ」
南方の神話や伝説は、それを語り伝える職能集団が滅びたため、断片的にしか残っていない。ヤエトは大いに興味を抱いて尋ねた。

「誰がいっていたんです」
「黒い眼のかわいらしい女の子ですよ」
「花売りですか」
ルーギンはうなずき、ヤエトはがっかりした。有名な悲恋とやらは、花売りが商品価値を高めるための作り話である可能性が高い。
「とにかく、それで誰にでも通じるはずです。大量に買えば話題にもなります。北嶺へ去るにあたっての挨拶と考える者もいるでしょうが、勘繰ってほしいあたりは、正確に読みとるでしょう。なにかあって決裂したな、と。これで如何でしょう、姫様？」
「好きにせよ」
皇女はまだ顔を上げていない。
これ以上の話は無理そうだ。同じことを、ルーギンも考えたらしい。騎士は皇女のかたわらにひざまずき、その長い袖を取ってくちづけた。
「万事、手配はしておきます。姫様はどうか、出立のご用意を。明後日には、お帰りいただかねばなりません。鳥たちにもですが、姫様の御身にも万一のことがあってはなりませんので」
「好きにせよ、と申しておる」
「我が剣のあるじに平安のあらんことを」
ルーギンは立ち上がりながら後ずさるという動作を完璧に、しかも優雅にやってのけた。そのまま四阿を出て行く。
ここで置き去りにされたら死ぬまで皇宮の中を彷徨うことになるかもと思いながら、ヤエトもルーギンを見習って跪拝した。
しかし、口にすべき言葉がみつからない。
早くしないと遭難だと思いながら顔をあげると、皇女と視線が合った。鼻が赤い。泣きそうなのを我慢しているように見える。早く退出してやらねばと思う反面、慰めてやらねばとも感じた。
「おやさしいことです」
「なにがだ」
「わたしの命などを案じてくださる。三の君は、命

を奪うよりも非道な行為をあなた様に仕掛けられたのですよ。それを許そう、なかったことにしようとお思いなのに、わたしの命があやうかったとお聞きになって、……怒ってくださったのですから」

「わたしはおとなしく殺されてやる気はないが、そなたは自分など死んでもかまわぬと考えているだろうからな。わたしが案じてやらねば、まずかろう」

「ミムウェ様」

名をささやくと、皇女は眼をみはった。不意に呼ばれて、おどろいたのだろう。童女のように、こくりとうなずいた。

「……うん」

「わたしのことを案じてくださる以上に、ご自分のことをお考えください。北嶺王のなさることは、そのまま北嶺の評価となりましょう。おつらいでしょうが、個人を捨て、王としてふるまわねばならぬ場面も増えるばかりで減ることはないでしょう」

皇女は少し姿勢を正し、はっきりと答えた。

「わかっておる」

ヤエトは微笑んで、うなずいた。

「それでも……どうか、ご自分のお信じになる道をお進みください。皆、それをこそ望んでおります」

騎士の作法をまねるのも変か、それとも貴族は皆ああするものなのかと悩んだ末に、ヤエトは結局、皇女の長い袖の先にくちびるをかすめさせ、静かに立ち上がった。

立ちくらみに襲われてよろけながら、なんとか不作法にならない程度の威厳はたもって退出すると、廊下でルーギンが待っていた。

「甘いことをいわれると、困るんだけどな」

「聞いていらしたんですか？」

「遅いと思って覗いてしまったので、最後の決め台詞だけね。甘やかさないでくださいよ、まったく」

「わたしもそう思いますが、貴殿も似たようなことをおっしゃったはずです。北嶺で」

「時と場合が違うじゃないですか。子どもじゃない

んですから、わきまえてくださらないと」
「赤子のようなものですし」
「赤子なら大人のいうことをきかないと」
「赤子にとって、大人は自分の欲求に仕えるべき下僕に過ぎませんよ。第一、言葉が通じません」
やれやれ、と騎士は肩をすくめた。
「次は、ミアーシャ様ですよ。待っておいでのはずです、この先で」
「……エイギル殿の？」
「奥方の。美人です」
「いや、それはともかく、なぜミアーシャ様が？」
「一回会わせてくれと、うるさくて。あなたも会ってみたいだろうと思ったので、約束しました。渡り廊下を通るだけです。長居はしません」
ミアーシャは女官と中庭を散策しており、そこに面した渡り廊下を、ルーギンとヤエトが通りかかることになっているのだという。
「この城には、中庭がどれだけあるんですか」
「数えたことはないな。自分が出入りできる範囲なら、頭に入ってるけどね。次を左です」
吹きさらしの渡り廊下には、白い花びらが舞っていた。春を告げて真っ先に咲く花なのだろうか。まだ日射しのぬくもりがありがたい季節だというのに、気ぜわしく散り急いでいる。
エイギル自慢の奥方は、花盛りを過ぎた木の根方に座っていた。子どものように髪を乱し、屈託ない笑顔を見せている。その笑顔がルーギンを認めて深まり、次いで視線がヤエトに移った。
肌は少し浅黒く、その眼はほがらかな茶色だった。波打つ髪も金髪というには茶がかった色だ。降り積もる花びらに飾られた姿は、妙に印象的だった。顔だちが、いや表情がはっきりしているのだ。
ルーギンがかるく一礼すると、ミアーシャは花びらを払って立ち上がった。あまり背は高くない。
「花びらが雪みたいだと思って、眺めていましたの。北嶺はきっとまだ寒いのでしょうね」

「その寒い土地にご夫君を置き去りにして来たわたしは、さぞ冷たい人間だと思われてしまったかな」

近寄って来たミアーシャは、ルーギンを見上げて少しいたずらっぽい表情を見せた。

「花のようなのはお顔だけ、団長殿は鉄でできている——と、夫が申しておりました」

「鉄ですか？　それは初耳だな。氷とどちらが冷たいでしょう」

「それは氷ではないかしら」

「氷に寄り添えば鉄も冷たくなりますよ」

「でも、火であぶれば熱くなるでしょう？　氷はあぶったら溶けてなくなってしまいます。熱くなったものは、もう氷ではないでしょう」

ルーギンは笑ってヤエトを見た。

「なるほど。氷よりは鉄の方が臨機応変と」

ヤエトが氷の尚書官と呼ばれているのを揶揄しているらしいので、現実的な回答をしてやった。

「わたしのことでしたら、かなりの頻度で発熱しますがね」

「……どうか、氷のままで。公、こちらが有名な、我が騎士団の副団長の奥方ですよ」

近くで見ると、ますます魅力的な女性だった。

純粋に造型を云々するなら、皇妹以上に美しい女性をヤエトは知らない。彼女は完璧な美貌の持ち主だ。それだけに、近寄りがたくもある。だが、ミアーシャは違う。すぐにも心を許してしまえそうな、親しみやすさがある。

「こちらは《黒狼公》でいらっしゃいます」

「まあ、このかたが？」

事前に約束をしているのだから、しらじらしいにもほどがある。しかし、ミアーシャの表情にも仕草にも、なんら作為は感じられない。

——つまり、かなりの役者ということだ。

ヤエトの危機を本人より早く察知し、救おうとしてくれた人物なのだ。見くびれば火傷をするだろう。

「いつぞやは、お世話になりました。お助けいただ

かねば、今ごろは――」

死体が河に流されていたでしょうと口にしかけて、とりやめた。初対面の女性との会話にふさわしい表現ではなさそうだ。

ミアーシャは微笑むと背後をふり返り、風に乱れた髪を撫でつけながら手招きをした。

「あなた、いらっしゃい。そんなところで隠れていてどうするの」

芽吹きはじめた若葉に紛れ、茂みの奥に座っている少女の存在に、ヤエトはそのときはじめて気がついた。女官だろうか。

「お預かりしている娘です」

「……は？」

「公がお救いになったと聞いておりますわ、三の君のお邸から」

そういえば召使いをひとり、なりゆきで第三皇子の邸から連れ出してしまったのだ。救ったといえるかどうかは微妙だと思う。少なくとも、ひどく危険な目に遭わせたことは間違いない。

「ああ……ずっとそちらで預かってくださっていたのですか？　伝達官にと皇妹殿下は仰せでしたが」

ミアーシャは目を伏せた。

「その才があるとは聞いています。でも、訓練を始めるには年齢が少し、いき過ぎているのではと。本人も、伝達官になるよりは元のように公にお仕えしたいと申しておりますし」

「なんの話です？」

興味津々といった面持ちでルーギンが割り込むのを無視して、ヤエトはミアーシャに笑顔を向けた。

「救ったのは、わたしではありません。皇妹殿下です。人生は自分で選びとることができるのだと、そう教えておられた――実に見事なお言葉でした」

「あら、でもあの娘が恩人だと思っているのは公ですの。ほら、いらっしゃい」

ミアーシャは、再度少女を手招きした。

立ち上がった少女は、ヤエトの記憶にあるより少



し背が伸びていた。ほっそりしているのは相変わらずだが、着ているもののせいか、見違えるようだ。髪も少し伸びている。いわれなければ、あの娘だとはわからなかっただろう。

記憶の底から、ぽろりと名前がころがり出た。

「スーリヤ」

「はい、旦那様」

「元気そうで、なによりだ」

「旦那様……いえ、公、も……お元気そ、う……」

そこで、スーリヤの声が詰まった。

いきなり両手で口を押さえ、眼がうるんだと思ったら大粒の涙がぽろぽろところがり落ちた。

仰天したのはヤエトだけではない。ミアーシャもおどろいたようで、まあ、と声をあげた。

「大丈夫？」

少女は無言で一礼すると、中庭を駆け去った。

見送った三人の中で、はじめに口を開いたのはルーギンだった。

「いったい、なにをやったんですか」

「見ていたでしょう。挨拶しただけですよ」

「そうじゃなくて。どうせまた無闇と善意をふりまいたんでしょう。これだから、あなたという人は」

とりなすように、ミアーシャが割って入った。

「あの娘は、ずっと案じておりましたの……病み上がりなのに無理をなさって、と。ようやくご無事なお姿を拝見して、緊張の糸が弛んだのでしょう」

「幽霊に会ったようなものでしょうか」

ミアーシャは眉を上げてヤエトを見た。感心しない冗談だといいたげな表情の彼女を見下ろし、彼は相手に先んじて口を開いた。

「それよりも奥方、お時間をとっていただけるなら、後日、ゆっくりお話を伺いたいのですが。思いがけないことながら、《黒狼公》の名をいただきました以上、これを守り育てて参る所存です。名ばかり受け継いだと謗られることがあってはなりません。先代のお妹君ならではのお話を、いくつもお聞かせい

ただけるものと期待しております。今後についても、相談に乗っていただければと切望する次第です」

お小言を食らいたくなければ、先制攻撃に限る。

ミアーシャはゆっくりと眼をしばたたき、はじめて見る相手のようにヤエトを見直した。

そして、ええ、とうなずいた。

「願ってもないお言葉です。是非、伺いますわ」

2

二日後、ヤエトは北嶺に帰る皇女を見送るため、皇宮へ上がっていた。

噂の相手をあらたに捻出する作戦の関係上、皇宮で男連れの皇女を目撃させねばならない。そこで、一行は全員がまず皇宮へ行き、理由も知らずに呼び寄せられたセルクと合流した上で、うち揃って北嶺へ向けて飛び立つことになっていた。

セルクを呼ぶ口実は、ルーギンのための替えの鳥を連れて来てほしい、というものだ。はじめに乗って来た鳥は日限の関係もあって北嶺に戻らせるが、危急の折には北嶺に急行できるよう、手元に一羽は置いておきたいという理屈である。

その方が安心なのは事実だ。厩舎長いわく、乗り手を選ばない鳥は頭のはたらきが鈍いそうだが、速く飛べればそれでよいという場合もある。

「公を乗せる鳥がシロバだけでは、不便だな」

「便乗させてもらうなら、なんとか」

皇女のクラルなら、乗せてくれたことがある。

「そのうち訓練してみましょう」

ルーギンは自分の鳥の嘴を両手で差さえ、その鼻先に額をつけ、なにごとかささやいた。そして、嘴をはなしてやると、笑いながらヤエトを見た。

「太らなければ、乗せてやってもよいそうです」

「ありがたいことです」

「わたしとしては、もう少し太ってくださってもよいと思いますけどね。倒れなければですが。運ぶと

きは、軽い方が楽だし」
「そういえば、肉付きがよくないと骨が当たって嫌だとかいってましたね。努力します」
「倒れない方を努力してくださるんでしょうね？」
「そうですね、たぶん」
神妙に答えてから、ヤエトはルーギンが視線を動かした方を見た。
皇女が姿をあらわしていた。
数名の女官や貴婦人を従えて、しかし本人はいつもの男装だ。慣れ親しんだあるじが戻って来た気がして、ヤエトは少しほっとした。
女装束の皇女は、どうも痛々しくていけない。
ヤエト自身は、官服の上にルーギンが用意させた上着を引っ掛けていた。家名にあわせて黒で仕立てさせた上、急ぎ仕事のせいで飾りも少なく、これならヤエトにも抵抗感はない。
ふたりの姿を認めると、皇女は庇（ひさし）の下を出、まっすぐに歩いて来た。引き連れていた女性はほとんどが足を止め、ひとりだけが従っている。
「ご苦労」
「あのかたがたは、お見送りですか？」
「うん？　ああ、見物人が必要だろうと思ってな。いかにも北嶺人を見たい会いたい、あらたな《黒狼公》も見たい、ついでに華の騎士にも会いたいという風なのを連れて来た。鳥たちに突つかれたくなければ建物からは出ぬようにと脅してある」
ルーギンは苦笑して、皇女の後ろに立つ女性に眼を向けた。
「わたしは、おまけですか。そちらは？」
「本命という名のおまけだな。皇女殿下は華の騎士様とのご関係はどうなんですの、家に年頃の娘が、いえ自分が、と遠回しに百回くらい打診されて疲れた。そしてこれは、わたしの伝達官だ」
皇帝以外の皇族は、それぞれふたりずつの伝達官を従える。一方を皇帝のもとに常駐させ、もう一方は任意の相手か場所に留めて連絡役にするのだ。

――補充か。

皇女のふたりの伝達官の内、ひとりは命を落としてしまった。前後の状況から判断するに、皇女を陥れる邪術の巻き添えになったものと思われるが、詳細は不明である。

とにかく、欠員ができた。それを埋めるのが、この女性なのだ。

「公に従わせますか」

ルーギンが尋ねると皇女は首肯し、伝達官の方をふり返った。

「このふたりを記憶せよ。手前にいるのが騎士団長のルーギン、奥が我が副官の《黒狼公》だ」

歳は三十前後といったところだろうか。黒衣に紫の肩衣、まとめた金髪に紗をかぶった姿である。ぼんやりした雰囲気の女性だな、とヤエトは思った。

声もまるく、やわらかい。

「よろしくお願いします」

「こちらこそ」

前任者は中年の、せかせかと歩き回る小男だった。彼は氷が好きだったと唐突に思いだし、ヤエトは鳥たちを眺めてつぶやいた。

「今からでも、売り物になるような氷が作れるでしょうか」

「……なんの話だ？」

「氷です。この速さで安定して北嶺と都を往復できるなら、氷を売れるのではないかと思います。夏場には、とくに高値でさばけます……城の氷室には毎年、氷を納めるはずです。備蓄用の飲み水としてですが、それは売り物になるかどうか。枯れ草などのごみが入らぬようにするには、手間がかかります」

「それで、今から作れるかと」

「そうです」

「ルーギン、奴らに訊いて来い」

皇女が命じると、ルーギンは一礼して歩み去った。はっと気づいて、ヤエトはあわてて引き留めようとしたが、間に合わなかった。

「どうした？」
「いや、……作戦上、王のお側にわたしが留まるのも、どうしたものかと」
皇女は笑った。
「今のところ、皆の視線は華の騎士に釘付けだ。それに、もうじきセルクが来て、全員の耳目をかっさらってくれるだろうからな」
「耳もですか？」
「奴の大声をもう忘れたか？　睦言（むつごと）をささやくには向かぬだろうが、大勢相手の見世物にはもってこいだ。ところでな……ヤエト？」
「はい」
「よいか、死ぬなよ」
「努力はしますが、人は誰もいつかは死ぬものです。それに、わたしは病弱ですし――」
「わからん奴だな。御意、と答えておけばよいのだ。死ぬことなどありませんと約して、わたしを安心させよ。それが、そなたのつとめだ」
けだし正論といったところだったので、ヤエトはしかたなく頭を下げた。
「御意にございます」
だが、なにごとも大見得切って引き受けるのは、騎士の文化だ。この剣に懸けてかならずと誓うなど、ヤエトの柄ではない。そもそも帯剣していない。
「しかし、毎日の連絡は復活させるべきだな」
皇女はいきなり現実的なところに着地した。
これも、妥当な命令である。四大公家の名を背負ったとはいえ、貴族としてのヤエトはまだ未知数だ。その不安定さを利用しようという輩も寄って来るだろうし、どんなたくらみに巻き込まれるか、知れたものではない。ヤエトという存在に集まる興味は、前年の比ではないはずだ。
前回は、同じ本の違う頁から文字を抜き出して暗号を生成した。今回も手法は同じでよいだろう。伝達官を通じれば即時の連絡は可能だが、複数の手段を用意しておく方が賢明なのは間違いない。

「また、本を用意します。ルーギン殿に、対になる本を持ち帰っていただきましょう」
「そうせよ」
ヤエトは周囲を見渡してから尋ねた。
「陛下の伝達官は……同道なさるのでは？」
皇女が失ったのは、自分の伝達官だけではない。皇帝から預けられていた伝達官も、今は不在だ。
「雪が溶けてからでよいだろう、ということになった。そなたも承知のように、陛下には我が伝達官をお預けしている。いざとなれば鳥もいるしな」
皇帝と皇女のあいだの連絡自体に支障はないだろうが、それにしてもとヤエトは眼をほそめた。
——まさか、断ったのではあるまいな。
伝達官を失ったことに、皇女は責任を感じている。できれば、持たずに済ませたいとまでいっていたほどだ。体よく先延ばしにしたのでは、と思ったが、それを尋ねる前に皇女が顔を上げた。
「ああ、そろそろ来るぞ」
つられて見上げた都の空は、北嶺に比べると若干くすんだような印象がある。そのどこにも、まだ鳥の姿はない。
——鳥が接近するのを感じとれるのか。
複数の鳥と心を繋げるのが尋常の能力でないことくらい、ヤエトにも見当がつく。少なくともルーギンやエイギルは、自分にはできないと明言していた。恩寵の力の強さによるのだろう。
戦に鳥を使う場合、敵にこの能力を持つ者がいると困るな、とヤエトは思った。奇襲ができない。竜種や伝達官には要注意、というところか。
そんなことを考えながら空を見上げていると、やがて黒い点が見えた。あれか、と思う間にその点は大きくなり、やがて翼を広げた巨鳥の姿をとった。
セルクを乗せた黒い鳥は、塔が林立する都の上空を旋回した。どこに降りるか探してでもいるのだろうか。あまり長く都の上空を飛んでいると、また騒ぎになりそうだと案じたが、ほどなくセルクは心を

決め、塔のあいだを縫って下降に移った。みるみる大きくなる鳥の姿はかなりの迫力で、なるほど、これが十羽以上の編隊であらわれたら逃げ惑う者がいても無理はない。

鳥たちが出迎えるように騒がしく声をあげた。

セルクは鳥が着地するより早くその背から飛び降り、皇女に駆け寄った。脇目もふらず、まっすぐに。

「姫様！」

たしかに、大声だ。皇女はちらりとヤエトを見てから、セルクとの距離を少し詰めた。

「よく参った。疲れてはおらぬか？」

セルクは皇女の前に膝をつき、あるじを見上げた。その表情は、潑溂としている。彼が長時間の飛行を存分に楽しんだことは、間違いない。

「俺は平気です。すぐにでも、姫様を北嶺にお連れできます」

「それはよかった。わたしも早く北嶺に戻りたい」

皇女の言葉は本心からのものかもしれない。いかにもほっとしたという声だったし、セルクに向けた笑顔は純粋なものに見えた。

「では、早速」

「待て待て、気の早い。あちらに軽食の用意をさせてある。せっかく支度をしたのだ、都の名物なりと食べて行け。あまり時間はとれぬがな、のんびりしているとまた引き止められてしまう」

「お命じくだされば、攫ってでもお連れします。姫様は、命より大事な宝ですから」

セルクは真顔である。

筋書きをととのえて芝居をつけても、こうはいかないだろう、とヤエトは感心した。天然の勝利だ。見物人たちはと見てみれば、皆が皆、大変ですわよ奥様！　という表情になっている。

皇女も眼をみはったが、すぐに破顔した。

「それはたのもしいな。とにかく、あちらへ。その方らも相伴してはどうだ、数は用意させたぞ」

部下たちにかるく声をかけると、皇女は先に立っ

て建物の方へ戻って行った。もちろん、セルクは忠実に従う。ルーギンが視線をやると、騎士のひとりが即座に後を追った。皇宮の中では滅多なことはないだろうが、無条件に安心もできない。

「わたしはあちらへ参りますが……公は？」

「鳥に人が近寄らないように、張り番でもしますよ。一応、高位の貴族になったようですから、発言にはそれなりに権威もあるでしょうし」

「なるほど、ではそのように。御免」

ルーギンはさっと身を翻して建物の中に姿を消した。他の騎士たちも従ったが、北嶺人は残っている。

ヤエトはイスヤームとグランダクに声をかけた。

「あなたがたは行かねばなりませんよ。行って、顔を繋いで来てください」

「女どもにか」

「北嶺の産物は、高級な嗜好品が多いのです。皇宮で、竜種の側に近寄れるほどの地位にある女性であれば、当然、財産家でもあるはずですから」

「しかし……」

「それに、セルクが妙なことを口走ったら、うまくごまかしてもらわねばなりません」

「俺たちが行く前に、もう口走り過ぎまくってると思うな。賭けませんか、副官殿」

「わたしは賭けませんが、早く行ってあなたがたが気のきいているところを見せないと、貴婦人がたのあいだには、北嶺人とはすべからくセルクのような人物であるべし、という認識が広まりますよ」

イスヤームはなんともいえない表情になり、グランダクは吹きだした。

「それはそれで、おもしろそうだ」

「俺は嫌だぞ、そんなのは」

ふたりはぐずぐずしていたが、ヤエトはほとんど蹴り込むように、かれらを屋内へ追いやった。

皇女とけしからぬ噂になっているのなら、自分は距離をとる方がよいだろう。へたに同席すると、恋の鞘当てを期待する貴婦人たちの妄念で、会話も行

動もすべて歪めて解釈されてしまう。できるだけ彼女らの視界に入らず、忘れてもらえるように念じるくらいしか、今のヤエトにできることはない。

残ったのは帝国人の騎士がひとりと厩舎の少年、それにヤエトの三人だけか——と見回して、自分の勘違いに気がついた。

皇女の伝達官が、静かに控えていた。

影が薄いのか、存在自体を忘れがちだ。だが、伝達官とは本来こうしたものなのかもしれない。すると、この女性は優秀な伝達官ということになる。

「申しわけない」

「なんでしょう?」

「わたしが行かなかったから、あなたも行けない」

伝達官は無言である。雑談をする気はないようだ。

ヤエトはタルキンの方に近寄った。この少年も役目上、鳥たちと居残るしかない。

「行って来なさいといいたいところだが、そうはできないな。すまないね」

タルキンはふるふると首を左右にふった。

「名物なら、いろいろ食べさせてもらいました」

「それならよいが……いつの間に?」

「ジェイサルド殿が、気を遣ってくださって」

ああ、とヤエトは曖昧な声を返すしかなかった。

——そう来たか。

実にそつのないことだ。北嶺人を押さえるなら鳥から、そして鳥を押さえるには厩舎からだ。

タルキンは、ジェイサルドが持って来てくれた菓子の名前や味などを熱心に語っていた。

「それで、名前は忘れてしまったんですけど、甘辛い味つけのが、すごくおいしかったです。……あの……尚書官殿?」

「なんです?」

少年は真剣な面持ちで尋ねた。

「ぼくは、また、都に来られるでしょうか?」

「機会はあると思いますよ」

少年はほっとしたようだった。

「それなら、よかった」
「なぜです？」
「仕事の手が空いたとき、ジェイサルド殿に連れ出してもらったんですけど……」
老人はすごい勢いで点数を稼いでいるようだ。
「見物がしたかったのですか？」
「はい。だって、鳥で飛ぶのに、塔の配置がわかっていないと不便ですから」
予想外の回答に、ヤエトはおどろかされた。
「塔の配置、ですか？」
「さっき、セルクも苦労してたでしょう。ここの空は複雑なんです……その……」
「北嶺とは違いますからね」
「そう、そうなんです。団長様のお邸の近くは調べました。階層を数えて、だいたいの高さを。でも、ほんとうは近くだけわかってもしかたがないんです。鳥で飛んだら、一瞬ですから」
——なるほど。
厩舎長が後継者にと見込むだけのことはある。大いに感心して、彼は少年に約束した。
「せっかく調べてくれたのだから、記録せねばもったいない。都の地図を買って送りましょう。ルーギン殿に言付けて、持ち帰ってもらいます。次の機会には、もっと調べられるといいですね」
「ありがとうございます！　次は、できれば上から調べたいんですけど」
気もちはわかるが、ただでさえ鳥の姿に怯える民の扱いに困っているのに、塔の高さや気流を調べるための飛行をくり返すのは難しい。
「それは、わたしの一存では許可しかねますね」
「そうですか。残念です」
「鳥たちの翼が羽撃くのは、都の空だけではありません。方々へ飛ぶことになるでしょう」
「もっと遠くへも？」
「きっとね」
少年は、夢みるような眼差しを空に向けた。不安

よりも期待が勝っているのだ。青い眸は、すでに彼方の空を映しているかのようだ。

——北嶺は、世界に開かれてしまった。

それを無邪気に歓迎できるほど、ヤエトは若くない。むしろ、胃が痛くなるような危惧を抱く。

鳥が翼を得たことで、北嶺には選択肢がなくなった。古い価値観と暮らしを守り、外の世界とは関係がないふりをつづけることは、不可能に近い。

流通が盛んになれば、物だけでなく人も入って来る。社会も変化する。北嶺がこれまで経験したことのない事態を、慣例では裁けない。といって、因習を排してあらたな秩序を無理に導入すれば、反感を得るのもわかりきっている。

その反感に乗じて、乗っ取りをはかる者もいるかもしれない。皇女とその部下を陥れ、別の誰かが権力を握ろうと決意する——それだけの価値が、北嶺には生じてしまったのだ。

しかも、そうさせてしまったのは自分だ。

今はまだ氷雪に護られているが、じきに峠が通行可能になる。去年でさえ、祭りに姿をあらわす商人の数が前年より多いとナグウィンは話していた。今年はその比ではないだろう。それに紛れて間諜もはなたれるに違いない——。

「尚書官殿……じゃなくて、公、とお呼びすればいいんですか？」

もの思いにふけっていたヤエトは、不意に現実に引き戻された。タルキンの問いの意味がわからずに少し考えて、それから自分が《黒狼公》とやらいう名前を押しつけられたことを思いだした。

「正式にはそうですね。しかし、わたし自身はなんというか……生涯一尚書官のつもりなので」

横で聞いていた騎士が、小さく笑ってから、あわてて咳払いをした。

「失礼つかまつりました」

「いや、かまいません。自分でも、妙なことをいっているとは思います。でも、本心ですからね」

「でしたら、通り名をそうなさっては？」
「通り名？」
「はい。十二大公家のかたがたは、家名でお呼びするものですが、それでは先代や先々代と区別がつきません。ご本名をお呼びするのもはばかられますし、公式の席以外では通り名で、となっています」
　貴族の風習にあまり興味を抱かず生きてきたヤエトにとっては、そういえばそんな話も聞いたことがあったかも、程度の情報だ。公的な記録には貴族の家名や本名は残るが、通り名までは残らない。
　タルキンが首を傾げて尋ねた。
「ではこれまで通り、尚書官殿でよいのですか」
「いや、通り名の場合は尚書卿とか……まあこれは戯れ言だ、本気にするな」
　騎士があわてて言葉を添えたのは、侮蔑の意味で使われるのを恐れてのことだろう。生まれついての貴族から見れば、尚書官など塵芥のようなものだ。
　ヤエトは微笑んで答えた。
「通り名というのは、自分で決めるものでもないでしょう。勝手に、周囲が決めてくれます」
　騎士は恐懼する風だったが、タルキンは裏の意味がわからないからか、屈託なく答えた。
「尚書官殿とお呼びするのも、やめてくれと、ずっとおっしゃってましたよね」
「ああ……そういえば」
　そっちも尚書官だろうと同僚たちに指摘してやったのが、なつかしい。
「じゃあ、尚書卿様？　シロバが、まだぐずっているみたいですから、しっかり説得してやってくれますか。帰れ、と」
「ああ、わかった」
　ヤエトを乗せずに帰ってくれとはたのんであるが、どうやらシロバは納得していないらしい。
　——ひな鳥なのだろうからな。
　ヤエトの面倒をみてやらねばと思いこんでいるなら、遠くに置き去りにするのはさぞ不安だろう。

こちらからは心が読めなくても、シロバはヤエトの考えをある程度は感じられるとわかっている。さっきまで考えていた将来の不安要素を心から洗い流そうとつとめながら、ヤエトはシロバに歩み寄った。視線が合うと、シロバはいかにも不機嫌そうに羽根を逆立てて見せた。心が繋がっていなくても、それくらいのことは伝わるのだ。

「シロバ」

ヤエトは巨鳥の嘴に手をさしのべた。見た目には冷たそうだが、ふれるとあたたかい。嫌がるように嘴をかちかちと噛み鳴らし、頭をふったシロバだったが、やがて諦めておとなしくなった。正面から向き合って嘴を手で押さえても、じっとしている。

「また、迎えに来てもらうから。それまで北嶺でゆっくりしていてくれ」

厩舎長の台詞を思いだして、念じてみた。

――わたしの面倒をみなくて済むあいだに、自分の雛を育ててはどうだ？

シロバにそれが通じたのかどうかはわからない。鳥は動かなかったし、琥珀色の眼からも、なにを考えているかは読みとれなかった。

巨鳥の眼は空の色だ、とヤエトは思う。夕映えの赤や昼間の青、明け方の銀色とは違う――違うが、これは空の色だ。思い出の中にあって、褪(あ)せていきながらも消えることはない、追憶の色だ。

ヤエトは子ども時代の情景を思い浮かべた。記憶にあるもっとも古い住居の輪郭。黄昏(たそがれ)時の空の色。そして、父の声。あの城塞都市の名は、なんといっただろうか。

沙漠の近辺には滅びて久しい都市国家がいくつもあった。その遺構を、帝国は利用していた。沙漠の隊商都市を侵略するための補給基地、あるいは前線基地として、いくつもの拠点が確保された。ヤエトと家族は、そうした砦から砦へと移り住んだ。

父は本来の意味での尚書官であり、歴史に詳しかった。古い都市を掘り起こして利用するにあたり、

意見を求められる立場だった。呪いや祝福が残っていないか、どんな記録があるのか、そもそも誰が造成したのか、あるいは誰が滅ぼしたのか。

変わった人だった。彼が見た限り、父は自分の信じるところを通す人であった。組織の中では大変なことだったに違いないと、今さら思う。

帝国の事務を動かしているのは古王国人の末裔だったのだということも、今になって理解できるようになった。官吏を束ねているのが帝国人だったら、史官の意見はそこまで重要視されないはずだ。

——だが、沙漠の東ではどうなることか。

真帝国の歴史は浅く、古王国人の絶対数は少ない。今はまだ、尚書局の上層部は古王国の血脈を伝える者で占められているが、この先はわからない。

シロバが嘴を動かして、ヤエトは自分が鳥を説得している最中だったことを思いだした。彼は苦笑混じりにささやいた。

「おまえの眼を見て、沙漠を思いだしたんだ」

巨鳥の翼は、沙漠を越える力があるだろうか——ひやりとしたものを感じた。誰かが鳥の能力を過大評価して、限界を超えた土地への飛翔を命じたら？はるかな沙漠の果てで衰弱して死を待つ鳥たちの姿が、ありありと想像できてしまう。

——尚書局に根回しをすべきかもしれない。

つねに過去を探り、歴史を重んじる古王国の慣習が染みついた老人たちが尚書局を支配しているあいだに、《化鳥の騎士団》の伝説について、よく伝えておけば、どうだろう。七日の日限は弱味でもあるが、周知することで得られる効果もあるはずだ。

ヤエトはシロバの嘴を放し、その付け根あたりから首の裏にかけて、ごしごしと掻いてやった。シロバは気もちよさそうに首をかしげ、もっとこすってくれと体重をかけてくるので、たまらない。ヤエトは渾身の力でシロバの頭を支える羽目に陥った。先のことを考えていられる状況ではない。

よろけながらも、なんとか要求されたつとめを果

たしているあいだに、建物から皇女と部下たちが戻って来た。もちろん見送りの貴婦人たちもだ。
皇女はいささか疲れた風で、セルクは晴れ晴れとした表情、ルーギンは視線が合うなりなんともいえない笑顔を見せた。
——行かなくてよかった。
よくわからないが、天然劇場の衝撃は想像を凌駕するものになったようだ。貴婦人たちは、獲物をとらえた狩人の顔つきである。
その彼女らに向かって、皇女は命じた。
「皆、中へ戻れ。鳥たちが落ち着かぬと、飛行にさわるのだ。今日は楽しかった。礼をいう」
断固とした口調で丁重に野次馬を追い払うと、皇女はあたりを見回した。
「ヤエト」
あわててシロバに別れを告げ、ヤエトは鳥たちのあいだをすり抜けて皇女のもとへ走った。
「我らはもう行く。いうまでもないだろうが、健康第一で暮らせ。よいな」
「身に余るお言葉に存じます」
「御意、と申せ」
「御意にございます」
皇女はヤエトをひたと見据えた。信じられない、という顔つきだ。しかし、すぐに諦めたらしく、小さく息を吐いて踵を返した。
「行くぞ。準備はよいか。イスヤーム、号令を」
「騎乗！」
イスヤームの声の大きさは、セルクに優るとも劣らない。その声が虚空に消えたかどうかのあいだに、騎手たちは鳥の背に飛び乗っていた。
ルーギンがヤエトの手を引いた。
「進路を空けないと」
よろよろと庭の端に移動するあいだに、イスヤームが次の号令をはなった。
「出立！」
帰路の先頭を行くのは、セルクらしい。ルーギン

の鳥を引き取って乗っているのだが、本来の相棒であるかのように見える。

セルクが鳥の上で姿勢を変えた。鳥の太い足が、かろやかに大地を蹴る。翼を広げて一回羽撃けば、巨体がふわりと宙に浮く。魔法のようだ。

もちろん、とヤエトは思った。

——魔法なのだ。

翼が陽光をはじいてかがやき、一気に加速した。鳥たちは、次々とその翼に風をとらえていく。

皇女がセルクの後につづき、イスヤームが、グランダクが……タルキンが、鳥を駆って飛び去った。

黒い羽毛をきらめかせて都の空を旋回し、編隊を組み直してから悠々と飛び去る鳥たちを見送って、ヤエトは息を吐いた。

かたわらで、ルーギンがつぶやく。

「行ってしまいましたね」

「はい」

「わたしたちもこれで邸に戻りますか」

これ、というのはセルクが乗って来た鳥のことだ。ルーギンが握った端綱の先につながれた眼は、きょとんとしている。あどけない表情だ。

「疲れているでしょう。ふたりも乗れますか？」

「大丈夫でしょう。力はあるはずだ」

ルーギンはジェイサルドと違い、ヤエトを鳥の背によじ登らせる手伝いをしようとは思いつかない。早く乗れという顔で見ているだけだ。そしてこの鳥も、シロバと違って乗りやすいように腰を落としてくれたりはしないのだ。

ヤエトは目の前にそびえる黒い巨体をみつめて、つぶやいた。

「この先、大変ですね」

3

都にいるあいだにやっておくべきことを整理し、順位をつけるのは大変だった。ヤエト自身がやりた

いことと、周囲からやって当然と思われていることには、ずいぶん差があるからだ。

ルーギンは、叙爵祝いだからと『貴族らしい衣装』をひとそろい、独断で注文してくれた。おかげでそれには時間を割かなくて済んだ。

まず、都に《黒狼公》家の邸が必要である。所領には先代の邸が残っているはずだが、都の邸宅はすでに売り払われている。都に邸を構えてもほとんど使う機会はないだろうが、だからなくてもよい、とはならないのが貴族の世界だ。皇宮からの距離や位置、広さ、高さのすべてに政治的な配慮が必要だ。使用人も雇わねばならない。留守をまかせるにたる人物を探すのが、もっとも困難に思われた。

皇女が看破したように、ヤエトには人脈がない。都にいるのは尚書官時代の知り合いのみ。つまり、彼を左遷に追い込んだか、それを黙って見ていた者だけだ。今さらどう話を持って行けというのか。

しかし、迷っている時間もない。ルーギンの邸への滞在が長引くほど、あらたな《黒狼公》は、必要以上に《金獅子公》家と親しいと見られてしまう。

辛抱強く面会の機会を待っていたジェイサルドを部屋に招いたとき、ヤエトは弱り果てていた。

老騎士は、会うなり笑顔を見せた。

「やはり、儂が申し上げた通りになりましたな」

「一代貴族には、なれませんでした」

「いつでもお時間をとってくださるというのは無理でしょうと。そのことです」

ああ、とヤエトは嘆息をして、ジェイサルドに椅子を勧めた。

「そうですね。お待たせして申しわけない」

「いや、わかりきっていたことです。それに、儂が予測していたより早く、お招きいただけました」

「お力をお借りしたい一心で」

ジェイサルドはゆったりとした動作で腰を下ろすと、微笑を消さないまま尋ねた。

「それでは、この老いぼれの仕官の望みをかなえて

くださいますか」

「ひとつだけ、わたしの質問にお答えいただければ」

「回答如何によっては望みを絶たれると？」

「どうでしょう……好奇心を満たしてもらえれば、それでよし、となってしまいそうな気もします」

「公の好奇心という器が満たされることなど、なさそうにも思いますが……ご質問とは？」

この老騎士を部下にできれば、今の悩みの大部分が解決する。彼は先代《黒狼公》に仕えていたのだ。その地位にふさわしいもの、宮廷が期待する平均値。ジェイサルドなら知っているし、采配もできる。

そして彼なら、過去の慣例にこだわり過ぎることもなく、ヤエトがなしたいこと、なすべきことについても意見をしてくれるに違いない。

危険な人物であるとは思う。商人に聞かされた、右手と左手で違うことができるたぐいの人間だという評価も、おそらく正当なものだろう。

だが、手が何本あってもたりない今、むしろジェイサルドのような人物がヤエトには必要なのだ。

——絶対の忠誠までは望まないが……。

それでも、どこまでなら信じられるかくらいは、見きわめておかねばならない。

「いずれ話すと約束してくださったことを、今、お話しいただければと」

「はて、なんでしたか」

「簡単なことです。なぜ、わたしに仕官なさりたいのか……なにを求めておいでなのかを伺いたい」

ルーギンがヤエトにと用意してくれた部屋は、古い建築様式をそのまま残した塔の一室である。西向きの窓からは、分厚い硝子越しではあるが午後の陽光を豊富に取り込むことができる。

ヤエトはジェイサルドを窓に向かい合う席に座らせ、自身は窓を背にして座った。これならヤエトの表情は逆光になって相手からは見えづらく、逆にジェイサルドの反応ははっきり見える。背中にあたる日差しがあたたかくて心地よい、という効果もある。

うっかり眠くなってしまいそうなほど快適だ。
床には分厚い絨毯が敷かれている。ルーギン曰く、ヤエトが倒れても痛くないように運びこませたのだとか。厭味と好意が半々で、いかにも彼らしい。
「儂には、探しものがありましてな」
ジェイサルドの眼は、今は光を孕んで黄金色に見えた。シロバの眼に似ている。なにを考えているのかわからないほど異質で、しかし向こうはヤエトの考えを読み切っているかに思える。
「名を求めておいでだと、おっしゃいましたが」
「左様。よくご記憶ですな」
「ご高名が天下に鳴り響いておいでの将軍が、この上、わたし風情に仕官することでどのような名を得られると思っておいでなのか、……見当がつきませんでした。それで、覚えております」
ヤエトは香茶を杯にそそぐと、ひとつをジェイサルドの前に置いた。香茶は本来、香草を水出しした素朴な飲料だが、ルーギンの邸で出されるものは、一事が万事別世界だ。この香茶も、庶民の飲み物とはまったく違う。香りがよく、味もまろやかだ。
ジェイサルドは杯に視線を落として答えた。
「儂は、おのれの名を知らぬ愚か者でしてな」
想像もしていなかった回答だ。
「どういう意味でしょう？」
「儂が、悪鬼と契約を結んだという噂は……商人めが話しておったので、ご存じですな」
「はい」
「事実です。儂は鬼神と名を取り替えたのです」
「は……」
口が開いたまま、閉じなくなってしまった。
なんだか、とてつもない話を聞かされそうな予感がする。すごく知りたいが、知りたくない。つまり、興味はあるが、知ってしまったが最後、厄介な事態に巻き込まれそうな予感がする。
しかし、ここで話を止め、もういいですと扉からジェイサルドを送りだしても、ヤエトの抱えている

問題はなにも解決しない。今さらひとつやふたつ、増えてもいいだろう。問題ないはずだ。たぶん。

ヤエトは話のつづきを待った。

「帝国のかたがたが、どのようにお呼びかは存じませんがな……沙漠には、鬼神というものがおります。人ではありません。魔物と申しましょうか……南方人が精と呼ぶものに似ていますが、それとも少し違う。魔界と人界の狭間に住み、現身をそなえ、魔法を使います」

「沙漠の昔話に登場するような魔物ですね」

「そういうものですな。これも以前、お話ししたと思いますが、儂は呪師に名を被せられそうになったことがあります」

ジェイサルドは、呪師の仕事が完成する前に相手を探し出して殺した、といっていたはずだ。

「自死の運命を被せられそうになったと……？」

「左様。呪師は儂の名を呼びました。呼ばれて呼ばれて、儂はすっかりおかしくなった……そんな力もないはずなのに、幽冥の境を乗り越えたようなのです。そして鬼神に取り引きを持ちかけられました」

ジェイサルドはそこで言葉を切った。

つづきは聞かなくてもわかる。半分までは。

——引き換えにするものは、なんだ？

名を取り替えることで、ジェイサルドは呪縛から逃れられる。呪師の術は、人の本来の名を押さえ、新たな名を被せるというものだ。名を取り替えたなら、鬼神の方に呪師の術が届いてしまうはずだ。

双方が得をしなければ、取り引きは成立しない。ジェイサルドの呪いを引き受けることで、鬼神はなにを手に入れたのか。

「おかげで儂は呪師を探しあて、依頼人の名を吐かせることもできました。そればかりか、鬼神の力の一部も得たのです。見た目は老いぼれですが、膂力（りょりょく）は若い者に劣りません。病にもかからず、傷の治りも早い。その上、少しばかりは不思議の力を扱う素養も手に入れましてな。呪師の使い魔を騙（だま）くらかす

ことができたのも、そのおかげです」
わずかに誇らしげだった表情が、そこでふと暗くなった。はじめて見る、自嘲の色だった。
「ですが……それ以来、儂は昔の名を失いました。忘れてしまったのですよ、おのれの名を」
「以前の名を知る者はいないのですか」
ジェイサルドは首を左右にふった。
「おりません。つけを払っているんですな。儂は誰のことも信じなかった。邪術に使われてはならじと、誰にも名を明かしていなかったのです。当時、盗賊団を率いておりましてな……そのせいで呪師に狙われるようなことになったのですが、とにかく、百人を超す部下の誰ひとり、儂の名は知りません」
家族は、と問おうとしてヤエトは口をつぐんだ。そんな当たり前のことで名前が取り戻せるなら、というに解決している問題のはずだ。
問わずとも、ジェイサルドは答えていた。
「しかも儂は天涯孤独の身の上です。アルハンの最下層の出身でしてな、家族はおりません。親兄弟の顔すら知らぬ、そういう者です。名も与えられず、城の下働きとして人目につかぬように暮らしておりました……まあ、左様な話はともかく、城の外へ出たときに、儂はみずから名告ったはずなのです」
波乱万丈そうな生い立ちにも興味はあるが、そこを聞かせてもらう機会は後日に譲るべきだろう。
「名告った前後の経緯をご記憶では？」
「覚えてはおりますが、ただ天啓のように名が思い浮かんだということしか。そう……自分も人になってよいのだと、あのときは思ったのでした。名告ることで、儂は人になったのです」
「その名を手放すほど、追い詰められたのですね」
さぞ思い入れのある名だったに違いないのに、呪師の術はそれほどのものなのか。
ジェイサルドはふと回想からときはなたれたような表情になり、寂しげに微笑んだ。
「まことに思慮のないことをいたしました。おかげ

で生き延びはしたものの、人としての名を鬼神にくれてやってしまった。今の名は、本来は鬼神の名。儂にはわかります。この名は未だ鬼神と繋がっている……。鬼神は儂に申しました。人の身では、鬼神のすべてを容れることはできない、と。それゆえ、名を交換するといっても、まるごとを入れ替えるわけにはいかぬだろうと。記憶も、性格も、魂もそのままで魄だけをわずかに入れ替えればよい……」

——魂魄二元論か。

人のたましいには魂魄の二種があり、魂が陽、魄が陰の気を宿すという説がある。ヤエトは宗教理論には詳しくないから概略しか知らないが、魂は日常知り得る人格を支配し、魄はもっと奥深い、その人物の変わらざる本質をあらわすという。

それが事実なら、こうして喋っているジェイサルドの上辺は人であっても、奥底は人ではない。

ジェイサルドの話はつづく。

「たしかに、鬼神の名は重いのでしょう。年々、儂は呑まれていくように感じます。幽冥の境で出会った悪鬼の姿も、声も、もはや思いだすことはできぬのですが……それでも、自分が奴に似ていくのがわかります。この身ひとつ、儂ひとりが呑まれるだけなら、愚かなことと笑えば済みますが……奴は、儂を手に入れたいわけではない。むしろ、この身を道しるべに、この世にあらわれんとしているのではないか、と感じるのです」

気がつくと、ふたたび口が勝手に開いていた。

とてつもない話を聞かされるに違いないとは思っていたが、予測をはるかに上回っている。

「つまり鬼神とやらは、本来の名が持つ牽引力を利用して、この世にあらわれるつもりだと？」

「異界の者どもにとって、名があらわすのはその本質。鬼神は現身をそなえる悪鬼ですゆえ、ずいぶん人に近い存在ですが、それでも……儂が勝手に自分につけたような名とは、質が違うのです」

なるほど、とヤエトは思った。

それと同時に、去年、都で得た幻視の中の言葉が頭の中で鳴り響いた。

——履行されなかった契約の残りを受け取ろうとする魔物たちを、本来の領分へ戻らせなさい。

あたたかだったはずの背中が、ぞくりと寒気を感じた。全身が総毛立ったといってもよい。

世界と神の繋がりは断ち切られると、あの幻視の中で聞いた。だが、この世に永遠はない。

——やがて神はよみがえる。世界とおのれを繋ぐ鎖を引いて、境界を突き破るでしょう。

予兆のままだ。

「ご自分のお名前を、取り戻したいのですね」

「左様です」

——血と悲鳴、死と破壊、絶望の朝。

ヤエトは無理矢理、不吉な幻視から心をもぎはなした。直後の伝達官の死ともあいまって、あの予言は彼の心に深く刻まれてしまっている。

馬鹿らしい、と彼は思った。否、思おうとした。

「しかし、……なぜ、わたしなのです？」

呪術をなりわいとする者に依頼すべき話だ。ジェイサルドのことだ、当然、そうした手は打っただろう。それでもどうにもならなかったにしても、なぜ、ヤエトなのだろう？

「名前の魔法には種類がふたつ。ひとつは呪師が扱う名被せ、そしてもうひとつは名明かし……こちらは昔語りに聞くばかり、人外の存在のみが扱い得るものだと考えておりましたが——」

老騎士の炯々（けいけい）たる眸が、ヤエトを見据えた。

嫌な予感がした——かならず当たるたぐいの。

「公が、その使い手でいらっしゃるのではないかと、思いはじめましてな」

なにげない口調だったが、眼が怖い。縛りつけられてしまったように、動けない。なるほど、これが鬼神の眼力かと妙なところで感心させられてしまう。そんな場合か、と自分でも思うが。

「残念ながら違います」

「皇女殿下をお救いになったときのことです。儂は、もう遅いと感じました。間に合わなかった、と。ですが、公は姫様を呼び戻された」
「間に合ったのです」
「間に合わなかったのです」
ジェイサルドは断言し、ヤエトの反論を封じるようにつづけた。
「儂には視えました。姫様は暗い影に覆われ、魂魄の光は失われていたのですぞ。それが、公が獄に入られてわずかのあいだに、すっかり元通りに」
「ですから、間に合ったのです」
「姫様のお名前を、ご存じだったのですな」
ヤエトは口を結んだ。できれば喋りたくなかったが、今さら隠せる話でもない――ヤエトと行動を共にしたジェイサルドとナグウィンにはわかったはずだ。ナグウィンを通じて、皇帝にも伝わっただろう。皇妹や第三皇子も、察しているに違いない。
ヤエトは皇女の名を知っており、そのおかげで皇女は救われたのだ、と。
「まさか、わたしが王のお名前を魔法で明かしたとでもお思いですか？」
「たとえそうでなくとも、魂魄の底まで届くような呼びかけが、おできになるということです」
「わたしは――」
ヤエトは逡巡した。
今度はジェイサルドが待つ番だ。老騎士はヤエトから視線をはずし、ゆったりと窓の外を眺めている。なにを考えているのか、さっぱり読めない。
「わたしは、左の眼があまり見えません。ただ……その眼が、尋常でないものはよく視えるようなのです。竜種にまつわる力が、はっきりと」
ジェイサルドはわずかに眉を上げた。これは、彼にとっても初耳だったようだ。
「左様なことが」
「わたしは古王国の末裔です……自主的に帝国に臣従を誓った国ですから、交渉には幅があったのでし

ょう。今となっては憶測するしかありません、史書を繙こうにも、沙漠の向こうまで読みに行くわけには参りませんので。はっきりしているのは、我が祖先は竜種と直接契約を結んだらしい、ということです。この視力は、その名残りでしょう」

手を握れば、ヤエトが幻視したものを皇女が共有できるのも、そのひとつだろう。だが、これについても話したくない。

慎重に考えを選り分けながら、話をつづけた。

「おかげで、視えたのです。呪術の貌というか、引き剝がさねばならないものが。竜種が相手でなければ、わたしの力が同じにはたらくとは思えません」

実際、ヤエトはジェイサルドの姿になんの不思議も矛盾も感じないのだ。

「なるほど」

「わたしは貴殿の助力が欲しい。ですが、見込み違いだったと思われたなら、仕官の話はなかったことにしてくださっても結構です」

「率直なお言葉ですな」

馬鹿正直だと評された、くらいのことはヤエトにもわかる。だが、無視して彼は言葉をつづけた。

「ただ、今のお話はそれとは別の問題です。貴殿のまことの名を探すのに、助力は惜しみません……お話ししたように、わたしの視力は竜種にしか及ばず、そういう面ではお役に立てないでしょうが、《黒狼公》という名が助けになることもあるでしょう」

「ありがたいお申し出です。しかし、なぜです？」

「気になる予言があるのです」

「予言、ですか？」

「わたしは予言はあまり信じないのですが、これだけは忘れられず、耳に残ってすっかり暗記してしまいました。こういうものです――予兆を見失わないようになさい。神与の力がよみがえり、沙漠を軍旅が渡ります。言葉と名前が始源の力を取り戻し、子ども騙しのまじないが人を呪い殺すでしょう。剣を鍛え、竜を呼びなさい。世界の境界は、長い時間を

かけて安定したはず。履行されなかった契約の残りを受け取ろうとする魔物たちを、本来の領分へ戻らせなさい……」

ジェイサルドは興味を抱いたらしい。わずかに身を乗り出して尋ねた。

「いつ、お聞きになったのです」

「三の君のお邸で、伝達官が亡くなる少し前です。偶然、耳に入ってしまっただけなのですが」

偶然というのは嘘ではない。聞こえるはずのない、過去の会話だったというだけのことだ。

「沙漠を軍が渡り……たしかに、子ども騙しのまじないが人を呪い殺す力をそなえはじめておりますな。その上、世界の境界を侵して出て来る魔物たちを警戒する言葉があり、……それが儂と名前を取り替えた鬼神の話と合致する、ということですな」

「はい。わたしはこの予言を戯言だと笑い飛ばせないのです。貴殿のお名前の問題は、この予言の一部だと思えてなりません」

「なるほど。わかりました」

「……どうやらわたしは見込み違いの人物に過ぎないようですが、仕官の話はどうなさいますか」

「望みを繋がせていただきましょう」

ジェイサルドは即断した。彼はヤエトを見据え、はっきり宣言した。

「そのような予言を耳になさったというのも、なにかの縁に相違ありません。公がお許しくださるなら、この命が尽きるまで、お仕えしたいと存じます」

ヤエトは肩から力が抜けるのを感じた。口の中がからからに乾いている。杯を手にして一気に飲み干すと、ジェイサルドに尋ねた。

「鬼神と名を取り替えて、命が尽きるということがあるのですか？　つまり……鬼神にも寿命が？」

「器は人に過ぎません。いずれ、死ぬでしょう。そのときには、自身の名を取り戻していたいものです。儂が望むのは、今となってはそればかりです。もはや現世には興味が持てなくなってしまいましてな。

地位も、名誉も、権力も。金も、力も……魅力を感じぬのです。公も、そのあたりには欲をお感じにならないようですから、お仕えしやすいですな」
「隠居欲くらいですよ、旺盛なのは」
「その割に、はじめにお会いしたときよりずっと、隠居からは遠ざかっておられるようですが」
「それは痛切に感じています」
ジェイサルドは笑い、ヤエトに倣って香茶の杯を干した。それから、真顔に戻って尋ねた。
「自分で申すのもどうかと思いますが、儂をお信じになるのですか。儂なら、先ほどの奇想天外な話を頭から信じたりはしませんぞ。それに、これまでの儂の経歴をご存じならば、悪人だったこともおわかりのはず。どんな嘘で他人を陥れようとすることかと、危ぶまれぬのですか」
ヤエトは微笑んで、杯に香茶を注いだ。
「わたしの欠点は……いろいろありますが、潔癖なところではないかと思うのです。正論を吐き過ぎて左遷されるほどの馬鹿ですからね」
はあ、とジェイサルドは彼にしては曖昧な返事をした。ヤエトの回答は、彼の想定しないところだったのだろう。気になって、思わず尋ねた。
「もっと目立つ欠点にお心当たりでも？」
「無論……お身体が」
なるほど、とヤエトは思った。自分では慣れきっていて、今さらなんとも感じないが、周囲にとっては迷惑この上ないほど虚弱、ということだろう。
「ともあれ、善悪などというのは所詮その時代、その文化に属する人々のあいだで了解されている基準に過ぎません。ただ、わたしは自分が納得しないことは、できない。やらないのではなく、できない。やろうと思いつくことすらない。これでは危ういそこを、学ばせてもらいたいのです。今の凝り固まった思考では、限界も知れたもの。一朝一夕に身につくものでもないでしょうが……発想を柔軟にしたいのです。せめて、いたらぬ部分を補佐してくれる

存在がほしい。貴殿はぴったりではないですか？」
「なるほど、悪人が必要だと」
「善悪の問題ではないという話です」
「しかし、信じるかどうかはどうします」
「信じる以外に道がないですからね。逆をいえば、わたしのことは信じてくださって大丈夫ですよ。わりと、嘘は苦手な方ですから」
「絶対に、嘘をつかないというわけではなく？」
「わたしは絶対などという言葉は使いません」
ヤエトは冷めた視線でジェイサルドを眺め、そして、ふと思いだした。
「如何なさいました？」
「え？　ああ」
知らぬ間に、笑みが漏れていたらしい。
――絶対にという言葉をお好きなのは、我らが皇女殿下だったな。
絶対に裏切らぬ、と皇女は彼に告げた。ヤエトに与えられた恩寵の力の秘密を、守ってみせると。
たとえ皇女の考えが変わらなくとも、約束を守れない状況に追い込まれる可能性もあるだろう。ヤエトは覚悟の上だが、まだ若い皇女はそれを許せないはずだ。みずからの誓いを破り、ヤエトを裏切らざるを得ないことになれば、苦しむに違いない。
それなら、裏切らせぬように気を配るのが、臣下としての彼のつとめだ。皇女をそんな状況に置かぬよう、この力は秘匿せねばならない。今まで以上に。
ヤエトは首を左右にふった。
「大したことでは。大変といえば、皇女殿下のご命令を厳守する方が難しいと思っただけです」
「ほう、どのような？」
「わたしに、死ぬなと仰せになりました」
「儂としても、当面は生きていただかねば困ります。仕官したとたんに主家がなくなるのは、あまり嬉しくありませんのでな」
「当面でよろしければ。それで思いだしました……ミアーシャ様と、連絡をとりたいのです」

「極秘にでしょうか？」
「いえ、目立ちたくはありませんが、会談の内容自体が外に漏れなければ結構です。不自然ではないでしょう、先代の部下だった貴殿を雇い入れたのです、先代の妹姫にご挨拶をという流れになっても」
「そういうことでしたら、まず皇妹殿下にご挨拶をなさった方が。儂がお仕えしていたという縁もございますが、先代の奥方でいらした上に、竜種でおわします。順序としては、先に置かれませんと」
皇妹に会いたいとは思わないが、ジェイサルドの言はもっともである。そういえばルーギンからは、彼の父に会ってもらいたいといわれていた。こちらも、なんとかせねばなるまい。
あまりの面倒くささに、なにもかも投げ出して走りだしたくなったが、ため息をついてその案をしりぞけた。どうせ息切れして倒れるだけだ。
「わかりました。では、まず皇妹殿下にご挨拶を」
「手配いたしましょう」
「……そうだ」
「如何なさいました」
「この際、改名してみては」
「改名、ですか」
ジェイサルドは眼をしばたたいた。その発想は、なかったらしい。
「先代への忠義はひろく知られるところなのでしょう？　でしたら、その名は先代にお捧げして二君に仕えず、仕官するあたって生まれ変わるつもりで名をあらためた……とでも説明なされば、周囲は納得してくれるでしょう」
ジェイサルドは顎をしごいて長いあいだ考えこんでいたが、やがてうなずいた。
「なるほど、名案です。ですが、それは通称にはせず、秘された名とすべきであるように思います。いずれ鬼神が儂のもとへ訪れ、儂を支配しようとしたときに、その名が鬼神の意を疎外し、儂を支えてくれるでしょうからな」

ヤエトは呪術に関する造詣は深くない。それでも一応、念を押した。
「かつて名前を秘されたのと同様の不都合が起きたりはしませんか？」
「慧眼でいらっしゃる」
ジェイサルドは答えてまた少し考えるようにしたが、今度はほどなく口を開いた。
「みずから名づけず、信頼できる誰かに名づけてもらえば解決します……それでは、名をいただけますかな」
「わたしが……今ですか？」
問い返しながら、ちょっと待て、と思った。信頼できる誰かがヤエトだと、いつ決まったのだろう。
「できますれば、そう願いたく」
ヤエトは困惑した。また、自分の思いつきに自分が困らされている。どうしてこう迂闊なのだろう。なんとかならないものか。
静かに待つ老騎士の姿を眺めて必死に考えている と、かつて習い覚えた言葉が思い浮かんだ。
「サーヤリム、では如何でしょう」
相手の表情が強張った。
——まずかったか？
サーヤリムとは、それ以上ないほど静かに、という意味だ。分解して直訳すると、沙漠の古い言葉で『死者のように静かに』という意味で、慣用句的に使用される内に、ひとつの語になったのだという。
さすがに死者のようにというのは縁起が悪かったかと撤回しかけたとき、老騎士は深く息を吐いた。
「やはり、儂の見立ては間違っていなかった」
「……は？」
「儂は、昔は名無しの孤児だったと、お話ししましたな。当時は『おまえ』や『おい』などと呼ばれておりましたが、その仕事の余禄のようなものを目当てに訪ねて来る者が、儂が騒いで他の者に気づかれるのを恐れて、こう声をかけたのです。ご存じですかな……サイー、サーディー、サーヤリム」

「静かに、もっと静かに……」
そしてこの上なく――死者のように静かに。
「長いあいだ、それが自分の名だと思っておりました。もう忘れてしまいそうなほど、昔のことです」
老騎士はうなずき、椅子から腰を上げると、ヤエトの前に跪いた。
いつの間にか、腰の剣を抜いている。相変わらずの早業だ。そのまま斬りつけられても防ぐことはおろか、声をあげることすらかなわなかっただろう。
だが今、騎士は通常の構えはとらず、剣の刀身を床と水平にし、両手で支えていた。
「我が剣と命を捧げます。どうぞ、お受け取りを」
ヤエトは途方に暮れて剣を見下ろした。
「あの……正式な作法を知らないのですが」
「受ける、と」
「受けます」
「それと、この剣にふれていただけますか。そうです、刀身の中央のあたりに。この剣が、殿を傷つけることがないよう」
指示に従うと、サーヤリムという名を手に入れた老騎士は、顔を上げてにこりと笑った。
「今後は儂の名に敬称をおつけになるなどもってのほかですぞ。貴族などというものは面子がすべて。四大公家に名をつらねられた以上、殿が敬意をお示しになるべきお相手は竜種のみとお心得を」
実現困難な任務を与えられた気はするが、この助言は正しい。しかたなく、ヤエトはうなずいた。
「……努力します」

4

皇妹との対面は、果たせなかった。
祭りが終わるや否や、皇子たちはそれぞれの任地へ散った。そして皇妹も、それを順に慰撫してまわるとかで都を後にしてしまっていたのだ。
皇帝は、皇子たちが名目だけの行政官でいること



を許さなかった。竜種の子たちは、別命あるまで都への帰還を禁じられた。任を果たせなければ逃げ帰ってもよいが、当然ながら王ではいられなくなる。継嗣にたてられる可能性もなくなるわけだ。

みずから任地へ赴き、民を治め、部下たちを動かさざるを得ない。《天地輪》で毎日の連絡が義務付けられるため、皇子たちはもちろん、近侍の者たちは身も細る思いだろう。失策があれば、すぐさま竜種全員に伝わってしまうのだ。

恩寵の力は、嘘を許さない。

無論、ヤエトも北嶺のことが気にかかっていた。

竜種同士で同時に心を繋ぐという《天地輪》の詳細も、都にいてはなかなかわからない。郡から国になることを北嶺の民がどうとらえているのか、鳥たちの繁殖計画は順調なのか、破壊された村の再建は進んでいるのか——皇女との連絡は伝達官を通じて可能だが、伝聞では感じとれないものが多過ぎる。

それでも皇女はヤエトに北嶺へ来いとは命じなかった。ヤエトもまた、帰らせてくださいとは願い出なかった。

都にいなければできないこともあるのだ。

まず、皇妹への挨拶をしたためた書状をジェイサルドに託して皇宮に送った。皇妹の不在時には女官長が書状を処理する。ジェイサルドは顔見知りなので、優先されるはずだ。女官長は皇妹の伝達官に言付けをしてくれるだろう。

予想に違わず、翌日には女官長が代筆した返書が届いた。皇妹はあらたな《黒狼公》が家名を継ぐことを喜んでいる——つまり、正式に支持するという意向を表明してもらったわけだ。

——まず、ひとつ。

これで、先代の公妃だった皇妹の後ろ楯を得た、と公称できる。面子や名前がものをいう貴族の世界では重要な一歩だが、これだけでは意味がない。

これからは、貴族たちの動向をつねにとらえる必要がある、とヤエトは考えていた。つまり、貴族階

級の協力者がいる。それも、騎士団の面々以外に。
すると、ヤエトがたよれる人物は、ひとりしかいないということになる。
ジェイサルドが買い入れた邸は、まだ建具も満足にそろわず、がらんとしている。見捨てられたような、逆になにかを期待して待つような、半端な感じがした。ヤエトは空の部屋部屋を見て回り、どこをどの用途に供するかを大雑把に決めていった。
中庭に面した中二階は非公式の応接室に使おう、と彼は考えた。庭の手入れが進めば、心地よい場所になる。あまり広くないから、来客との距離が近くなる。小声で話すのに相応しい部屋だ。
はじめて迎え入れた客は、先代《黒狼公》の妹姫であった。調度もととのわない状態で失礼をと恐縮するヤエトに、ミアーシャは微笑んで告げた。兄は、物が増えるのが嫌いな人でしたわ、と。
「それは、さぞ難儀なさったことでしょう」
「あら、どうして？」
「先代様ほどのおかたであれば、黙って座っていらっしゃるだけでも、降るほどに贈答の品が届けられたでしょうから」
「公もいずれ、そうおなりでしょう。そして、おっしゃるに違いないわ。物はもうたくさんだ、とね」
「わたしは先代様のようにはとても……」
「ご謙遜なさらないで。……わたしは喜んでいるのです。公が、家名を継いでくださることを」
ミアーシャは中庭を見下ろした。彼女の視線の先では、護衛の騎士と少年が剣の稽古をしている。
少年は、エイギルの長男である。かなり修練を積んでいるらしく、動きに無駄がない。腰が入っている、といえばよいのだろうか。挨拶をしたときに見た顔は、父親にそっくりだった。
「わたし自身は、喜んでいるとはいいかねますが」
ミアーシャは眼を上げた。吸い込まれそうな眸だと思う。エイギルは、これにやられたに違いない。
「なぜ？」

「ご存じかどうかわかりませんが、わたしは虚弱な質で、長生きはできぬだろうといわれています。自分でも、いつ死んでも不思議はないと感じています。そんな身で分不相応な叙爵を受け、空位であった《黒狼公》の名をいただいても……どうなります？」

長い睫毛に縁どられた眼が、ヤエトを凝視した。弓なりの眉がわずかにひそめられ、まあ、と低い声が聞こえた。

「本気でいらっしゃるのね。……でも、医師の見立てがかならず当たるとは限りません。長生きなさいますわ、きっと」

「妻を娶り、子をなす余裕があるとは思えません。ですので……もしエイギル殿とミアーシャ様がよろしければ、お子さまを養子にいただきたいのです」

ゆっくりと、ミアーシャは眼を伏せた。

まとめた金茶の髪がほつれ、うなじにかかっている。小さな真珠の耳飾りが揺れ、頬に影を落とした。表情は動かない。どういう顔を見せるべきか、考えてでもいるかのようだ。

「ずいぶん、単刀直入なおっしゃりようですこと」

「申しわけありません」

「でも、律儀なかたでいらっしゃるのね」

「よくいわれます」

ヤエトが認めると、ようやくミアーシャは顔を上げた。やはり表情は動かない。胆力のある女性だ。

「養子なら、他にいくらでも望む者はいます。紹介してさしあげることだってできるわ。公に利をもたらす縁組みは、何通りも考えつきます」

「話がうま過ぎて、信じられませんか？」

ミアーシャは首を傾げた。そういう仕草が、厭味にならない。大人の女性なのに、愛らしいと思わされてしまうのだ。エイギルは、これにもやられたに違いない。

「ジェイサルドが、あなたは信頼できるかただと保証しました。あれは……兄を裏切らない男です」

だが、ミアーシャはその妹に過ぎない。

「交換条件を出しましょう」
「どんな？」
「宮廷の噂を集めてほしいのです。去年、ジェイサルドを通じてわたしに教えてくださったように——皇妹殿下と親しく言葉をかわせる位置と、下級騎士の妻という位置。その双方を、あなたはうまく使い分けておいでなのではありませんか。そして、情報の取捨選択がお上手で、そこから妥当な推論をなさる……非常に賢いかたなのだと、思いました」
ミアーシャはにっこりと笑った。
「お口がお上手でいらっしゃるのね」
「それは、あまりいわれません」
「おもしろいかたね」
「不本意ながら、それはよくいわれます」
「お預かりしたままの、あの娘を養女になさってはどうかしら。いつまでお預かりすればよいのかも、伺っていませんわ」
中庭には、スーリヤの姿もあった。飾り柱の影に、ひっそりと立っている。皇宮に出入りする女官にふさわしい挙措が身についているかどうか、ヤエトには判断がつかない。かつて、そうだったように。
「それは失礼を。引き取った方がよければそうしましょう……ですが、ミアーシャ様のお手元で養育していただいた方が幸せというものではないですか。別れたときから、見違えるようです」
暫し、ミアーシャは答えなかった。ややあってから、彼女は表情をあらため、告げた。
「幸せを決めるのは本人です」
「いかにも」
「本人は、公にお仕えしたいと申しております」
「そうですか」
「それがほんとうに幸せに通じるのか、わたしには判断できません。でも、本人が望むのですから、そうさせてやりたいと思います。それと、お申し出くださった養子の件ですが……それも本人が決めることではないかと思います。ですが、あの子はまだ幼

くて、その荷は負えないでしょう」
　ヤエトは眼をしばたたいた。
　なるほど、この女性は一筋縄ではいかない。
「ミアーシャ様」
「はい？」
「たしかに、ご子息がどうお考えになるかも重要でしょう。ですが、わたしが交渉をしているのは、あなたです。先代のお妹君であられ、この家名を尊く想っておいでのはずのあなたこそが、もっとも重要な当事者でいらっしゃるのではありませんか？」
　ミアーシャは大きく息を吐いた。そして、笑いながらヤエトを見た。
「おもしろいかたね、やっぱり」
「確実に家名を残したいとお考えでしたら、お急ぎいただく必要があります」
「でも、養子縁組には陛下のご許可が必要です」
「やってみます。とにかく書面だけなら用意できますから、もし陛下のご許可がすんなりとはいただけなかった場合でも、わたしの死後、存分に戦って勝ち取ってくだされればよろしいでしょう」
「書面？」
「戸籍を書き換えます」
　ミアーシャは面喰らったようだった。
　貴族にそんな発想はない。皇帝の認可がどのような書式でととのえられ、保管され、公的な記録となるか――その仕組みを理解している貴族がいたら、むしろおどろきだ。
　だが、ヤエトはそれを知っている。昔の職場に行き、書式をととのえて書き直したものを、しかるべき場所に忍びこませることも、必要ならできる。やりたくないのは事実だが。
「どうして、そこまでしてくださるの？」
「空手形で動いていただくわけにはいきません」
「よいお考えではありませんよ。わたしがそれほど《黒狼公》家にこだわっているのであれば、養子の件が決定し次第、公を暗殺しようとするでしょう」

「ジェイサルドがいてくれる限り、暗殺される気がしないのですが」
「そのジェイサルドが、公よりわたしに忠実だったらどうなさるの」
いかにもありそうな話だ。
「もちろん、その場合は諦めます。わたしはその程度の男だったということです。ジェイサルドにとっても、ミアーシャ様にとっても。それに――」
「それに？」
「暗殺するかもと諭してくださるほど親切なかたが、実際にわたしを殺そうとなさるでしょうか？」
あら、とミアーシャは扇で口元を隠して答えた。
「油断を誘っているだけかもしれません」
「そうですね。でも、お手を汚される必要はないでしょう。この話の大前提は、わたしの身体が弱く、長生きできないということなのですから」
「でも、長生きなさらないという保証はありませんわ。ご自分のお子を持たれてしまったら？　養子が邪魔になるでしょう」
「長生きできたら、結婚などせず隠居します。隠居はわたしの夢ですから」
ミアーシャは眼を伏せた。その眼差しは中庭で遊ぶ子どもの方に向いているようでもあり、あるいは過去か未来か、今ではないいつかに向けられているようにも思えた。
「……公は、お考え違いをなさっておいでです」
「なにをでしょう」
「わたしの夫は、皇女殿下にお仕えしております。ですから公は、ただお命じになればよいのです。殿下のために、宮廷の情報を集めよ、と」
「なるほど」
「もう一歩、踏み込んだりはなさらないのですか」
なんのことかわからず、返す言葉に窮していると、ミアーシャは正解を教えてくれた。
「このような噂を宮廷で流せ、と」
それができれば助かる。ミアーシャなら、噂の出

所をごまかしながらやってくれるに違いない。
「いずれ、お願いしましょう」
「ひょっとして、エイギルがなにか申しました？わたしが《黒狼公》という家に執着しているとか」
夫婦の争いに巻き込まれたくないと思いながら、ヤエトは慎重に答えた。
「奥方のお気もちを考えればつらいことだが、すべては陛下の御心のままであると」
ミアーシャの表情が明るくなった。
人というのはおもしろい、とヤエトは思う。ひとりの人間が、いくつもの顔を持っている。もっとも、ヤエト自身は表情が変わらないといわれるので、あまり何種類もの顔はなさそうだ。いつもの顔、いつもと違う顔。きっと二種類くらいだな——と考えていると、ミアーシャが尋ねた。
「夫はお役にたっていますか」
「はい。それはもう」
「わたしも公を通じて夫の、姫様のお役にたちたいと存じます。もとより、わたしは噂好きなどうしようもない貴婦人のひとりですもの。今まで通りにふるまうだけです。集めた噂は公にお送りします。ですが、それはそれ、これはこれ。養子の件について、わたしの考えは夫と同じです。もし公が本気でお望みなのであれば、陛下にお申し出ください」
ミアーシャの手が、ヤエトの手にふれた。おどろいて見下ろすと、ミアーシャは真顔で告げた。
「公は、もう少し貪欲になられてもよいのです」
「貪欲に目指すとしたら、隠居くらいです」
素で答えたのだが、これがミアーシャをおもしろがらせたらしい。笑いながら、ごめんなさいと息も切れ切れになんとか謝って、そしてまた笑った。
暫く笑いに笑ってから、彼女は話しはじめた。
「わたしの母は……先代の母君とは違うのですけど、それはご存じかしら。《黒狼公》家は諜報の力で成り上がってきた家なのです。先々代も、情報を集めるために沙漠の隊商都市を往来していました。その

ときに母が見初められ、わたしが生まれましたの」
「そうだったのですか」
先代とは異母兄妹ということだ。
「ええ。わたしの母は、南方人でした」
「存じませんでした」
「父は母を正式に迎えてくれて、わたしのことも娘と認めてくれました。けれど、そういう事例は多くないのです。昨今、伝達官にと修行に出される子どもたちの多くは、半分は貴族の血を、半分は沙漠の民か南方人の血を引いているのをご存じ？　伝達官になれば、食べるのに困ることはないでしょう。公式に竜種に配されれば、周囲からは敬われます――でも、遠ざけられもするのです。伝達官は、人として扱われない」
「皇女殿下は、ご自分の伝達官のことを、親戚のようなものだと仰せでした」
「姫様にお仕えできた伝達官は幸せね」
「北嶺王にお仕えする者は皆、幸せです」
ミアーシャは、中庭に向けていた視線を戻してヤエトを見た。
「わたしはあの娘を伝達官にはしたくありません。皇妹殿下は、才があるのだからもったいないと、そうおっしゃるの。思いだしたように催促されます。いつ神殿にやるのか、と」
「本人に選ばせるのではなかったのですか？」
「申し上げなかったかしら？　本人は、公にお仕えしたいと考えているのです。けれど、皇妹殿下のご存念に逆らうのは、難しいこと。あの娘には、そこまでの我の強さはありません。恩人でもいらっしゃるし……もっとも、あの娘にとっては、公こそが大恩人のようですけれど」
ヤエトは困惑した。
「わたしは、なにもしていません」
「公にそのおつもりがなくても、あの娘にとっては、そうではなかったのです。わかってやってくれとは申しませんが、せめて否定はしないでください」

そこまでいわれては、どうしようもない。
「わからずに認めろとは、難しいことを」
「もちろん、わかってくだされば、もっとよろしいんですのよ？　……拝見したところ、人手は増えても困るということはなさそうですし、こちらに置いていってもよいかしら」
ヤエトは眼をしばたたいた。
「今、ですか？　あの娘を？」
「ええ。今でないと、決心しそびれてしまいます。荷物はあとでお送りします。寂しくなりますわ……なんだか放っておけない子で。わたし自身が、同じように帝国貴族と南方人のあいだに生まれながら、こうして貴族の妻におさまって、幸せに暮らしているからなのかしら。いたたまれないんです、あの子が幸せになってくれないと」
「おやさしいのですね、奥方は」
「いいえ、わがままなだけ。……娘ができたようで、とても楽しかったわ。服を見立ててやったり、一緒に料理をしたり」
エイギルが溺愛している娘がいたはずだが、なにかあったのか――と問いかねているあいだに、疑問が晴れた。ミアーシャが、中庭で剣術の稽古をしている息子を眺めながらつぶやいたのだ。
「自分が腹を痛めて産んだ娘が、ちっとも母親の相手をしてくれないなんて、思いませんでしたわ」
「そうなのですか？」
「父親や兄弟たちと同じにしないと気が済まないんですの。剣の稽古ばかりして……そのうち騎士団に入りたいといいだすのではないかと、心配です」
「皇女殿下のようですね」
「あら、そうおっしゃられると、不平がいえなくなってしまいます。姫様と同じなら、光栄ですと申し上げねばならないでしょう。ひどいかたね」
「これは失礼を」
怒ったふりで、眼はいたずらっぽく笑っている。だからヤエトも口先だけで詫びながら、内心ではエ

イギルの行く末を案じた。皇帝のように、娘のわがままにふりまわされる父親になりかねない。

「……とにかく、スーリヤには幸せになってほしいのです。公のお人柄を拝見してからと思っていたのですけれど……わたしが思った以上に――」

ミアーシャは言葉を探すようにしていたが、やがて眼をくるりとまわし、冗談めかして結んだ。

「――おもしろいかたで、安心しました」

「ミアーシャ様も、わたしの想像以上におもしろいかただと思います」

ヤエトが答えると、ミアーシャは微笑んだ。

「公にはとても及びませんわ」

5

ルーギンが都にいるあいだに済ませておくべき事案があった。《金獅子公》の本家訪問である。

四大公家の当主という名目では同格だが、年齢、財産、家柄、格式、人種、実績――なにもかも、ヤエトが並ぶのは畏れ多いという相手である。正直いって気が重い。体調不良のため、またの機会に……と使いを出したくなるほどだ。

ルーギンのおかげで、衣装棚には立派な品が着々と揃いつつある。問題は、どの場合になにを着用すべきか、ヤエトには見当がつかないということだ。

山ほど雑用を抱えたヤエトの騎士団長は、今日は使用人の雇い入れその他の手配に奔走している。彼がいれば、ヤエトに考える暇を与えずに着替えも一式用意しただろうが……そういうわけで、ヤエトはいつもの官服を着たまま途方に暮れているところを、迎えに来たルーギンに発見された。

「なにやってるんです、もう行きますよ」

「これでいいでしょう」

悩みに悩んで一周し、出発点に戻った感じだ。

「よくありません。なにを着るかわからなかったんですか？　そういうときは、女官を呼ぶんですよ」

「なるほど」
女官はミアーシャのところから引き取ったスーリヤだけなのだが、あの娘がその役に立つだろうか？
ルーギンは顔をしかめ、衣装棚から丈の長い上着を取り出すと、丁寧に、しかし有無をいわせぬ勢いでヤエトに押しつけた。
「もう時間がない。これでごまかしましょう。自分で着られますか？　女官を呼びますか」
ヤエトは服を広げて衝立に掛けてみた。なんとかなりそうだ。
「複雑そうな構造ではないので、大丈夫かと」
それはかまわないのだが、なぜまた袖口がびらっと広くて、袖が長いのだろうか。
釈然としない思いで上着の前を留めながら、皇妹からの返書があったことを報告した。
「書面で用が済んでしまい、残念でしたね」
「なにがです？」
「お目通りがかなえば、同行をお願いしたはずです」
騎士は微笑んだ。いつものことながら、胡散臭いほど魅力的な笑顔である。
「公は、もうご自分の騎士団をお持ちなのですよ。わたしが同行するのは不自然です」
「権力が相手のときは、お力添えが必要です」
「わたしの助太刀は無用では？　先生が負けるのは、常識くらいのものじゃないかな」
「人聞きの悪い。平の尚書官としての常識なら、きちんと持ち合わせていますよ」
「どうだかね」
ルーギンはヤエトをじろじろと眺め、乱れた髪をととのえさせると、まだ納得いかないという顔をしていたが、ため息をついた。
「まあ、いいでしょう」
「身だしなみにうるさいかたなのですか？」
「《金獅子公》の人物評価は減点法です。服だけで持ち点を使い切りたくないでしょう」
「その……わたしと過去に接点があったことは、ご

存じなのでしょうか?」
「それは、わからないな」
たよりにならないことをいって、ルーギンは大きく息を吐いた。彼もいささか緊張しているようだ。
「残りの二公家にも挨拶まわりをすべきですか」
「うーん。向こうからいってこないなら、放っておいても。下手に出過ぎても、馬鹿にされるからね。祝いの品だの手紙だのを貰ったりしましたか?」
「いいえ」
「では放っておくべきですね」
ルーギンはそう断じると、にこりと笑ってヤエトを見た。無理に気を引き立てているような笑顔だ。
「大丈夫ですか?」
「先生をひとりで《金獅子公》のところに行かせてごらんなさい。姫様に許してもらえないと思うな」
「そんなに——」
問題のある人なのか、皇女でさえ知っているような……と、問いたかったのを堪え、話のつづきを待つルーギンを見返して、尋ねた。
「——わたしは、たよりないですか?」
「難しいところですよね」
「なにがです」
「たよりになるような、ならないような……こう、摑みどころがないというか」
「では、《金獅子公》にもそう思っていただきましょう」
ルーギンは笑顔を見せた。今度は、先ほどのような悲愴感を帯びていない。
「そうですね。是非ともそうしてください」
《金獅子公》の邸は、区画の上では遠くない。だが、なにしろ敷地が広い。門に辿り着いたと思ったら、そこから建物までがまたえらい距離だ。
——第三皇子の邸よりも大きいんじゃないか。
高い壁で囲まれた邸は、戦時のそなえも考えた設計だろう。門から中に入るには狭い隧道を抜けねばならず、途中には落とし格子がふたつもある。攻め

入る敵は勢いを削がれ、守りやすくなるはずだ。
門をくぐってすぐの前庭が広いのは、攻め出すときのためか。兵を集め、馬を並べるには広さが必要だ。さまざまな色の石で幾何学文様を描きだした石畳の整然たる美しさと、噴水の与えるやわらかな印象でごまかされそうになるが、まず機能ありきの設計だとヤエトには見えた。
どんなに美意識が高くても、《金獅子公》も帝国人だということだ。
護衛は建物の奥への立ち入りを断られた。
護衛とは、ジェイサルドが早速雇い入れた騎士たちで、まだ顔と名前が一致していない。帰途に入れ替わっていてもわからないな、と薄情なことを思いながら、ここで待つようにと命じた。
「今宵はお泊まりになりますか、若様」
「いや、わたしは《黒狼公》と一緒に帰るよ」
それでは、と案内の老人はヤエトを見た。
「公も是非こちらにお泊まりください」
「父上のご意向もたしかめずに、勝手なことを」
すかさず割って入ったルーギンに、老人はかすかに頭を下げた。
「くれぐれも若様をそのままお帰しせぬようにと、奥方様より申しつかっておりますので」
「公はご多忙なかただ。こちらの都合を押し付けるなど、失礼にもほどがある」
「それはそれは」
しかし老人は前言をひるがえすわけではなく、目的の部屋に着くとまたふたりを見て告げた。
「こちらでお待ち申し上げております——客人がお着きだ。開けよ」
扉を守っていた兵に命じると、自身は一礼して暗い廊下の隅へと後ずさった。その姿を目で追っていたヤエトは、扉が開く音にあわてて前に向き直り、室内の明るさにおどろかされた。
部屋の片側は中庭に向いて開かれている——いや、腰高の壁の上が、すべて窓なのだ。それも、昨今あ

まり見ないような、透明度の高い硝子の窓だ。
これは金がかかっている、とヤエトは思った。沙漠のこちら側で、こういう硝子を産するとは聞いたことがない。今や宝石にも比すべき貴重品だ。
その上、一部には色硝子を組み合わせた窓があった。光を含んで金色に見える獅子紋の硝子窓は、既存のものを流用したはずがない。その黄金の光の中に立っているのが、《金獅子公》だった。
肩先まで届く金髪は、ゆるやかに波打っている。ゆっくりとこちらをふり向いた相貌はととのっていたが、猛禽を思わせるするどさだ。
——計算している。
この季節、この時間帯に、こうやって光があたることを知っている。それが見る者にどんな印象を与えるかも、もちろん考えている。そういう人物なのだと、ヤエトは部屋に入りながら考えた。美意識の高い実際家。なんとも面倒くさそうな相手だ。
《金獅子公》は控えめな笑みを見せ、口を開いた。
「よく参られた。ルーギン、紹介せぬか」
「……あれが《金獅子公》です。父上、こちらが《黒狼公》様です」
素っ気ない紹介だったが、《金獅子公》は気にせず、手をふって椅子を示した。
「叙爵のお祝いを是非とも直接お伝えしたく、お招きしました。よく応じてくださいましたな」
よくのこのこ来たな、と聞こえなくもなかったが、ヤエトは丁重に一礼して答えた。
「お心づかい、痛み入ります。ご子息にはひとかたならずお世話になり、つねづねご父君にお礼を申し上げたいと念じておりました。このたび、思いがけぬこととはいえ同じ身分に名をつらねることとなり、その願いもかないました」
椅子に座ると、ヤエトはちらりとルーギンを見た。騎士は視線を返し、口の端をかすかに上げた。なるほど、この調子でよさそうだ。
「愚息が、なにかお心にとまるようなことを？」

「これはご謙遜を。ご子息は、並ぶ者なき華の騎士。わたしがお仕えする北嶺王が、配下にご子息をお迎えできたことは、王の運のお強さのまたとない証左ではありませんか？」

「そのように高く評価され、息子がつけあがらねばよいのですが」

ヤエトはにっこり笑って答えた。

「そのときは、貴君にお叱りいただきましょう」

《金獅子公》は眼をほそめた。笑っているように見えなくもないが、たぶんこれは苛ついている。

まあそうだろうな、とヤエトは思った。先方から見れば、ヤエトは成り上がりの尚書官に過ぎない。ちょっと親切に呼んでやったら、対等の口をきかれたのだ。苛立たない方がおかしい。

「親のいうことは、きかない奴でしてな。そちらで躾けていただいた方がよいでしょう。ところで……北嶺の話が出ましたが、あの鳥は見事ですな」

「我が王が伝説のかなたより呼び覚ませし翼です」

「伝説とは？」

「土地に伝わる物語です。かつて、北方山中に王国があり、黒い巨鳥を駆る《化鳥の騎士団》を擁して各地を転戦した、と。我が王が北嶺においでになられたとき、鳥たちは天翔（あまかけ）る力を失い、地を走るのみとなっておりました。王は竜種のお力でその鳥たちに翼を取り戻されたのです」

「不思議な話ですな」

「まことに」

それ以上の説明をする気はなかったので、ヤエトは口をつぐんだ。

《金獅子公》の方は、もう少し情報を引き出したいらしい。青い眼を向けて、ゆったりとつぶやいた。

「あれは、素晴らしい」

「お近くでご覧になりたいようでしたら、ご子息の邸に一羽おります。もうじき帰らせる予定ですので、ご覧になるなら、お早めになさった方が」

「帰らせる」

「はい。ご存じでしょうが、北嶺王がすでにご帰還あそばしたのも、鳥を帰らせるため。いにしえより伝わる決まりごとに、鳥たちは七日の日限を過ぎて北嶺の外に留まることあたわず、とあります。《化鳥の騎士団》も、かならず七日で引き揚げたとか」
「それはまた不自由な話だ」
「力とは、不自由を産むものなのでしょう」
「……ラキニー姫が」
不意に、《金獅子公》は皇妹の名を持ち出した。
「皇妹殿下が、なにか？」
「あの鳥にお乗りになったと、お聞きしましてな。昨夏でしたか、まだ飛べなかったと」
「はい。皇妹殿下は北嶺をお訪ねになり、その折、お言葉を賜りました。今回の叙爵についても喜んでくださり、《黒狼公》家の名を守り、栄えさせるようにと励ましてくださいました」
《金獅子公》は、ようやくはっきりとした笑顔を見せた。笑ってもあまり印象がやわらかくならないのが不思議なところだ。
「幸運なかただ。是非、あやかりたい」
「お分けできるものでしたら、いくらでも」
人はそれを幸運というのかもしれないが、熱烈な隠居志願者であるヤエトにとって、今の状況は望まざるものである。こうなったら上をきわめて隠居という王道の流れを狙うしかないが、そういう方向に進むには加齢が条件である気がしている。つまり、長生きという新たな、そして不可能なのではないかと思える条件を課されてしまったのだ。
本心をいえば、家名など誰かほしい者に譲りたい。地位も財産もいらない。いや、食うに困らない程度の蓄財はしたいが、それ以上は望まない。無駄金があっても、国に搾り取られるか、盗賊に盗まれるかのどちらかだ。絶対にそうだ。
——《金獅子公》には通じないだろうな。
ルーギンは貴族にしては話しやすい相手だったのだ、と今さら理解した。ヤエトの隠居願望を理解す

る素地があるということは、彼も栄達には興味がないのだろう。

たぶん、貴族では少数派に違いない。

——皇女もそうなのか。

そういえば、隠居したいと率直に話したら、怒っていなくなってしまったことがあった気がする。皇女は少数派ではないのか……。

ヤエトがぼんやり考えこんでいるあいだに、《金獅子公》は新参者への態度を決めたらしい。

眼を上げると、立ち上がって告げた。

「なんのおもてなしもせず、失礼を。しかし、急な会談の予定をねじこまれてしまいましてな。あまりゆっくりできぬのです」

「それはお心の急くことでしょう。どうぞ、当方にはお気遣いなく」

ヤエトは立ち上がった。彼としては、こんな茶番はさっさと終わらせたいのだ。呼びつけた挙げ句、短時間の面会で追い出したのだから、《金獅子公》も彼に侮辱を与えた気分が味わえて満足だろう。

——つまり、あまり認められなかったのだな。

それでよいのかという気もするが、たぶんよいのだろう。そういうことにしておきたい。

「ルーギン、泊まって行くだろうな。母や弟妹に挨拶もなしというわけにはいくまい」

ルーギンが答えるより早く、《金獅子公》はヤエトに話を向けた。

「《黒狼公》も、是非ご一緒に。我が妻はお譲りできませんが、娘の方は、お気に沿うようでしたら考えましょう」

不意打ちである。うっかり口を開いて阿呆面をさらしそうになったが、なんとか堪えた。

「とんでもないことです」

《金獅子公》は笑みを深めて答えた。

「それは残念な。両家のよしみを深めるためには、悪い選択肢ではありません。機会があれば、またお会いしましょう。外で案内の者が待っています」

呆然としているあいだに部屋を追い出され、気がつくと、最前かれらを《金獅子公》のもとへ案内した老人とともに廊下を歩いていた。

「お部屋はいつものところで」

「帰るといっているだろう」

答えたルーギンの声には棘があったが、老人はまったく動じない。

「殿のご命令ですし、奥様のご要望です」

「帰るといったら帰る」

「兄上！」

廊下の奥から呼びかけられ、三人は足を止めた。声の主は、幼い少年だった。まだ六、七歳といったところだろうか。少年が駆け寄るのを待つあいだに、ヤエトはようやく正気に戻った。

——この廊下は壁だ。

やたらと長くて暗い廊下が多いと思っていたが、これは壁なのだ。ほそい窓からは矢を射ることができる。位置的に邸の外廓ではないだろうが、二重、三重にこういう構造をつらねてあるに違いない。

こんな邸を設計させた《金獅子公》は、剣呑な思考のできる、用心深い人物だ。敵にはまわしたくない。さりとて、積極的に味方にとも思えない……。

「お帰りになってしまわれるのですか？　ずるい。次にお戻りになるときには、わたしの剣の稽古を見てくださるというお約束だったのに」

「ファーン……」

ルーギンは弱りきったという顔をしている。それから廊下の奥を見て、ますます表情を曇らせた。

少年を追ってあらわれたのは、さらに幼い少女に手を引かれた、小柄な女性だった。

「お兄様」

少女が服の裾を踏みそうになりながら駆け寄って来たので、ルーギンは跪き、それを受け止めてやらねばならなかった。

「こら、兄上に遊んでいただくのは、ぼくが先だ」

「ふたりとも、おやめ。はしたないわ」

後から来た女性は、ヤエトに気づくと少し距離を置いて立ち止まった。
ルーギンは膝をついたまま一礼した。
「母上」
——母上？
ルーギンより若く見えるが、気のせいだろうか。側妾か？　いや、だったらルーギンが母とは呼ばない。つまり後妻と考えるのが妥当な線だ。
——産みの母は、この世の人ではないのか。
一気にそこまで考えて、ヤエトは少したじろいだ。女性は控えめな笑顔をルーギンに向けている。
「お元気そうで、なによりですわ」
「丈夫なだけが取り柄です」
「たまにはお顔を見せてくださらないと。お父様もご心配でしょう」
ルーギンは曖昧に微笑むと、ヤエトを見上げた。
「公、《金獅子公》の奥方をご紹介します。母上、こちらは《黒狼公》でいらっしゃいます」
「まあ、わたしったらこんな恰好で……」
女性はうろたえたが、どこが都合が悪いのか、ヤエトにはさっぱりわからない。今さら観察するわけにもいかず、彼は礼儀正しく眼を伏せた。
「《金獅子公》ご自慢の奥方にさっそくお目通りがかない、幸運です」
「自慢だなんて」
「先ほども、奥方は誰にも渡せないとはっきり仰せになりましたよ」
それと同時になにやらとんでもないこともいわれた気がするが、これがそれか、考えてもよいという娘の方か。いくらなんでも若いだろう——ひょっとして《金獅子公》は、ヤエトの年齢を知らないのか。いつものように、十歳も若く見られているのかも。
ルーギンにしがみついている少女の方も、異人種であるヤエトに興味を抱いたらしく、興味津々という風に見上げていたが、彼の視線に気づくと恥ずかしそうにルーギンの胸に顔を埋めてしまった。



ちらとしか見えなかったが、育ったら美形になりそうな顔だちである。成り上がり者にくれてやる必要はあるまい。

あれは冗談だと結論づけて、ほっとしたところへ、まるでそれが聞こえたかのように奥方が答えた。

「なにかの冗談ですわ。……ルーギン様、殿はお出かけになるようですけれど、夜にはお戻りになりますから、せめて夕餉（ゆうげ）まではご一緒になさって？」

「申しわけありませんが、わたしは――」

立ち上がりかけたルーギンの袖を、少年が引いた。

「兄上、約束ですよ」

「約束！」

少女も顔を上げ、口をそろえる。

「そなたらの兄には、《黒狼公》を無事にお連れするという使命があるのだよ」

「でも、先にした約束だもの」

「去年からの！」

兄弟のやりとりを微笑ましく眺めていたとき、なぜか、すうっと背中の空気が冷えたように感じた。

――なんだ？

来た方をふり向くと、《金獅子公》がゆっくりと歩いて来るのが見えた。廊下は狭い。道を空けなければ、と考えるあいだに《金獅子公》は歩を進め、ルーギンとその弟、妹たちを通り抜けた。

ヤエトは愕然とした。

――まずい。

恩寵だ。彼が視ているのは、現実ではない。過去の《金獅子公》の姿なのだ。

――まずいが……。

恩寵の力が暴走するとき、それはかならず彼に必要な情報をもたらすと決まっている。経験上、かなりの確信をもっていえる。

彼は今、これを視ねばならないのだ。

「公？」

声をかけたのが誰か確認もせず、ヤエトは《金獅子公》の幻影を追った。ほんの数歩。《金獅子公》は

足を止め、ほそい窓の外に声をかけた。
「わたしの申し出を、信じてくださるお気もちになられましたかな？」
押し殺した声が、窓の外から答えた。
「信じたいとは思う」
《金獅子公》の横顔は、さっきまで同じ部屋で語りあっていたのとは別人に見えた。口調はやわらかく、子どもをあやしてでもいるかのようだ。
「できる限りは、お力添えをいたしましょう」
「その限りとやらが、どこまでか……見きわめる日の遠からんことを祈ろう」
見えない糸に引かれるように、ヤエトは前に進んだ。《金獅子公》の幻影を突き抜けて窓に至り、その僅かな隙間から外を覗く。
くるりと踵を返す人影の、横顔が視えた。
そこにいたのは、第三皇子だった。
呆然と後ろ姿を見送るヤエトの耳もとで、《金獅子公》の声がささやいた。
「せいぜい足掻くがよい」
その全身から放出される敵意の凄まじさに、ヤエトは身体を押された。立っていられなくなって壁に手をつき、それでも支えきれず、ずるずると滑り落ちた。足に力が入らない。
「公！」
ルーギンの声が頭上から降ってきた。
大丈夫、と答えようとしたが、声にならない。
「まあ、どうしましょう。すぐに部屋を」
ヤエトはルーギンの腕を摑み、騎士の視線をとらえてささやいた。
「帰らせてください」
「お邸へ？」
眼を閉じて、うなずく。
話が通じると、ルーギンは躊躇しなかった。
「お気づかいなく。公は、わたしが責任を持ってお送りします。これにて失礼いたします」
「そんな。お顔の色がこんなに白く……」

「公が、お帰りになることをお望みなのです。慌ただしく辞去する無礼をお許しください」
狼狽する《金獅子公》の奥方をよそに、ルーギンはヤエトの腕を引いて立たせ、肩に回して支えた。
「歩けますか」
歩きます、と答えたのは覚えている。
そこから先は、あまり記憶がはっきりしていない。次に気がついたときには寝台に寝かされていて、ふたりの騎士が低い声で話しているのが聞こえた。
「では……ないのですか」
「わかりません。しかし……でした」
「……気がつかれたようです」
騎士たちは、静かに寝台に近づいた。ジェイサルドの方が、先に口を開いた。
「貧血ですかな。発熱は、なさらなかったようだ」
「頭痛は？　どこか痛むところはありませんか」
ルーギンの問いに答えようとしたが、口の中がべたつき、喉や舌がうまく動かない。視線を動かすと、老騎士がヤエトの意図を察してくれた。上体を起こさせ、水差しから汲んだ水をすすらせると、いかにも感心しないという風に眉根を寄せた。
「なぜ、いつも限界まで我慢なさるのでしょうな」
「公の最大の問題は、健康なのかな」
「わかりやすいところで申せば、左様かと。ですが、ご自分などどうなられてもよいと思っておいでなのが、問題の根ですな。うっかりすると、危険を顧みずに動いてしまわれる。お仕えする側にとってみれば、実に難しいかたでいらっしゃる」
「そうだな。でも、甲斐はあるでしょう」
「生き延びてくださればの話ですが」
本人を前に、ずいぶんな会話だ。ヤエトは咳をして、喉にからんだ痰を払った。
「……何日たちました」
「まだ、その日の内ですよ。どうです、寝込まずに済みそうですか？」
「済ませたいですね」

「それはよかった」
ルーギンは微笑むと、老騎士に視線を向けた。
「あとは、わたしが見ていましょう。貴殿は、途中になった仕事のつづきをなさればよい。こうして肩代わりができるのも、あと二日ほどですからね」
「願ってもないお言葉。殿、よろしいですかな?」
ヤエトがうなずくのを見て、老騎士はルーギンに、くれぐれもよろしくと念を押して退室した。
「もっと水を?」
ルーギンは椅子を引き寄せて座りながら尋ねた。
「いえ、もう結構」
「では横におなりなさい。まだ顔色が悪い。……わたしの家族は、そんなに怖かったですか」
「怖いというか……おどろきました」
ヤエトの回答に、ルーギンは眉を上げた。
「おどろく? なぜです」
「わたしは想像力がない。お母上や弟君、妹君の存在を、まったく考えていませんでした」
「《金獅子公》が後妻を迎え、子どもをもうけているからといって、倒れることはないでしょう」
「それで倒れたわけではありませんが」
倒れた理由を話すわけにはいかない。しつこく絡む痰を切ろうと咳込んでから、言葉をつづけた。
「あなたのご家族について考えたことがなかったと、今さら気がつきました。自分に家族がないので——沙漠のこちら側にはという意味ですが——気が回らず、お恥ずかしい」
「沙漠のこちら側の家族、ですか……」
ルーギンの淡い色の眼は、どこか遠くへ向けられているようだった。
沙漠越えを命じられたとき、ヤエトは二十歳くらいだったはずだ。するとルーギンは当時すでに十五歳。向こう側に置いてきたものも多いだろう。
「いないな、わたしにも」
ぽつりとつぶやかれ、ヤエトは眼をしばたたいた。騎士の視線はまだ、ここではないどこかを彷徨って

いる。沙漠の向こう、十数年前の世界をだろうか。
「今日、お会いしましたが」
「あの邸に住んでいるのは、あの男の妻と子どもたちだ。わたしの家族かと問われれば、……どうでしょうね。二度と会えないという覚悟の意味も知らず、沙漠の向こうに置き去りにしてしまった人たちこそが、わたしの家族です」
——沙漠を隔てて生き別れの家族がいるのか。
それも、ヤエトは想像したことがなかった。自分自身も沙漠の向こうに家族を残しているというのに。
ルーギンは静かに言葉をつづけた。
「わたしは、自分が死ぬだろうと思っていました。父はただ来いと命じただけでしたが、沙漠を攻めるために集められた兵は、真上陛下の……当時の皇弟殿下のために殉死するのだと思っていました」
「ああ。あのときは、そうでしたね」
ヤエト自身、死を覚悟していた。まさか生きて沙漠を越えてしまうとは思いもよらず。
旧帝国の皇帝は、皆が彼の命と帝位を狙っていると信じこみ、冤罪を押しつけては竜種を殺した。自分の順番が近いと見た皇弟、すなわち今の真上皇帝は、帝国の版図を拡張するという名目のもと沙漠に出撃し、血の粛正を逃げのびたのだが——出兵時に本来の企図を知っていたのは、ひと握りであろう。
「恥ずべきことだけれど、わたしは誇らしかった」
「恥ずべき……？」
ルーギンは、うっすらと笑みを浮かべた。
「わたしは弟に、母と妹をたのむといいました。弟が、自分も同行したいというのを叱ってね。……わたしは嬉しかったのです、父に選ばれたことが」
笑みが消えた。かすれた声で、彼はささやいた。
「今となっては悪夢のようだ。死ぬのは、父やわたしではなかった。残された家族だった……」
そこまでいわれて、ようやく気づかされた。
——生き別れどころの話ではない。
ヤエトは沙漠の向こうの家族を、そういう意味で

案じたことなどない。平の官吏の係累まで処罰してまわるほど、刑吏は暇ではないはずだ。

しかし、貴族となれば事情が違う。

沙漠越えに同行した貴族の一門が、猜疑心の強い狂える皇帝の眼にどう映るか。自明のことだ。叛逆者である。よくても自死。最悪の場合は投獄された挙げ句の刑死。死体はさらされたかもしれない。

――これが貴族の世界か。

呆然とするヤエトに、ルーギンは淡々と告げた。

「《金獅子公》は、家族を売ったんですよ」

「……は？」

「皇弟殿下のお供をつとめる大貴族が皆、一族郎党引き連れて行ったら……どうです？　あやしいでしょう？　だから、《金獅子公》は妻と子どもを皇帝の視界に残して行った。はじめから、見捨てるつもりでね。彼は恩を売ったんです。仕えても甲斐がなさそうな狂皇帝より、追い詰められた皇弟に賭けた。そして、賭けに勝った。とくに武勲をあげたわけでもないのに、四大公家でも第二位の実力を誇るのは、そういう理由ですよ」

どこの家がどういう経緯で皇帝の歓心を買ったとか、重用されているとか――そういう話は教えられていた。ヤエトの叙爵が決まった直後から、ルーギンが叩きこんでくれたのだ。

だが、彼はそれがどういう意味を含むのか、考えていなかった。暗記するので精一杯だった。

ようやく、理解した。《金獅子公》は、旧帝国でも威勢を誇った顕門の貴族。彼の同行が下級の貴族を安心させたというのが、表向きの説明。しかし、陰では狂える皇帝を欺いていたのだ。家族を犠牲に。

ルーギンはヤエトの顔を見て眉根を寄せた。

「ひどい顔色だ。病人に話すことじゃなかった」

「いや……こちらこそ、話させてしまって」

むしろ、今になってなぜ教えてくれるのかと問いたいほどだったが、ルーギンは肩をすくめた。

「勝手に話したんですよ。忘れてください」

「忘れません」
ルーギンは眼をまるくした。そして、笑った。
「なにも真っ正直に答えなくても」
「無理です。自分の想像力のなさを胆に銘じるためにも、このことは忘れません」
想像力か、とつぶやいてルーギンは眼を伏せた。珍しく、歳よりおさなく見える。
「ときどき、想像力なんてない方が楽に生きられるかもしれないと思うね」
「そうですね。それでも失いたくありませんが」
「だから、隠居できないんですよ」
問題の本質はそこなのか？　と思いながら、ヤエトは姿勢を正して告げた。
「お母上は、さぞお美しいかただったのでしょうね。今日お会いした《金獅子公》は、あなたとあまり似ておいでのようには見受けられませんでした」
「……あなたという人は」
呆れたようにいったきり、ルーギンは口をつぐんでしまった。
ヤエトは黙って待った。無理強いをするつもりはないが、話した方が楽になることもある。
こちら側の家族を見ると、ルーギンは思いだしてしまうのだろう。血の繋がった家族を知らずに裏切らされ、深く傷ついたことを。父親が新たな家族を手に入れたのも、許せないに違いない。
――潔癖なんだな。
ルーギンは、他人のあやまちは許せる男だ。だいたいのことは笑って見過ごせる。しかし、自分自身については完璧主義者なのだ。負けず嫌いもその一端をなしているのだと思えば納得がいく。
「そうですね。母に似ていると、昔はよくいわれました。沙漠の向こうではね。あなたはどうです」
つぶやくような問いに、ヤエトはかるく答えた。
「わたしは母には似ていませんね。兄の方が似ていました、性格も容貌も」
「兄上がおいでだったのですか？」

「尚書官のくせに我が道を行く父と、しっかり者の母と、威張るのが好きな兄と、愚痴っぽい姉と、わかりづらい妹がおりました」
「ああ、なんだか見えてくるようだな」
「すごい眼力ですね」
「きっと父君に似ておいでなのでしょう、公は」
「誰にも似ていませんよ。わたしはわたしです」
ルーギンは声をあげて笑った。
「思うんだけど、きっと公のご家族は皆が皆、そう主張なさるんじゃないかな。自分は自分だ、誰に似ているわけでもない、と」
全員というわけではないだろう、とヤエトは思った。とはいえ、たしかに兄はいいそうだ。妹もそうだろう。姉はそんな話題はやり過ごすだろうが、腹の底では似ていないと思っているに違いない。
「……むさ苦しいわたしの家族より、お美しかったに違いないお母上の話を聞かせてください」
「どうしてそう美人だと確信しているんです」
「母親が美人だと、面食いに育つといいますし」
「それは初耳だな」
「帝国一の美女に惚れておいて、なにをいいます」
「ああ、それね……ふられました」
「……ええ!?」
ルーギンは苦笑した。
「反応がいいな」
皇妹とルーギンの仲は、公的には進展の余地がない。皇妹は《黒狼公》の未亡人であり、竜種はもとより、貴族階級の寡婦の再婚は認められていない。
だが昨夏の様子では、ふたりの関係はつづいているようだったし、秋にヤエトが都から無事に脱出できたのも、皇妹がルーギンに好意を抱いていたおかげだと認識していたのに。
「いったい、なぜ。いつからです?」
「去年ですよ。夏に」
開いた口が閉まらない。夏?
「待ってください、じゃあ、あのとき……」

「飲んだくれていたのは、ふられたからですよ」
混乱する思考をまとめようと、ヤエトは必死であれこれの記憶を拾い集めた。いわれてみれば、あのときのルーギンの荒れようは異常だったし、以来、皇妹の話題が出るたびに、なんとなく微妙な反応を示していたような……。
機会をとらえては皇妹の話をふっていた自分の思いやりのなさに想到し、ヤエトは世界の果てに穴を掘って埋まりたい気分になった。
「そうでしたか。失礼をいたしました」
「どういたしまして。ほんとうは、もっと早く話すべきだったんです」
ルーギンの口調が真面目なものだったので、ヤエトも表情をあらためた。
「どういう意味です」
「誘われたのですよ。今の騎士団長は隠居するから、その後任をつとめないかと」
「……そんなことが」
知らないあいだに、ひどい陰謀が進んでいたものだ。皇妹とルーギンが別れようがくっつこうが、実をいえばどうでもよいことだが、騎士団長を失うのは困る。非常に困る。
「正直にいって、心は揺れたけどね。……皇妹殿下は、こうも仰せになりました。自分と来て、裏から帝国をあやつってみないか、とね」
「冗談にしては笑えませんね」
「そう……ちっとも笑えないね」
「仔細の説明は、あったのですか？」
「いいえ。それは同盟者になってからか……最後まで説明などなくてもおどろかないな。あのかたは、よくわからないのですよ。そこが魅力でね」
「その魅力に負けず、姫様を選んでくださったことに感謝します」
意外といえば、これほど意外な話はない。
――皇妹よりも皇女をとったのか。
なにもかも捨てて皇妹について行くかもしれない

と口走っていた騎士が、その舌の根もかわかないあいだに、正反対の未来を選んでいたとは。

「たっぷり感謝していいですよ。感謝されるのは好きなんだ」

「……しかし、なぜです。皇妹殿下よりも皇女殿下を選ばれた理由が、わかりません」

まさかとは思うが、長過ぎるむくわれぬ恋に疲れて、手近の若い娘に目が向いたとか？　皇女だって、きちんと女装すればかわいらしいはずだ。なんといっても、まだこれからという年頃だ。

「利用されたくなかった、というところかな。皇妹殿下は、わたしがわたしだからというだけで選んでくださるような甘いかたではない。わたしが《金獅子公》の継嗣だから……」

「まさか。それだけではないでしょう」

「でも、それもあるはずだよ。あのかたがわたしを評価するとき、あの男と家名の価値を無視するはずがない。姫様は、そんなことはないけどね」

「まあ……皇女殿下はそうですね」

いささか傍迷惑なことに、皇女は家柄など気にしない。でなければ、ヤエトは今ここにいないだろう。

「とにかく、わたしは姫様を裏切りませんよ。安心してください。誓いを立てて騎士になった責任というものが、ようやく身に染みて来たところだしね」

「今さらですか？　何年お仕えしてるんです」

「何年も。北嶺に来るまでは地方の転戦が多くて、主従といっても名目の上という感じだったのですよ。でも誘われたとき、わたしが抜けたらどうなるかと考えてみたら、けっこう怖くてね。たとえば、既成事実をつくって皇家の一員になろうという野心を持った男が、団長に就任しないとも限らないし」

とんでもないことを、さらりといった。

「それは、……下手をすれば首が飛ぶのでは」

「賭けない人には、わからないものかな。皆、自分だけはうまくやるつもりで手を出すものですよ。皇女殿下の騎士団長に抜擢されるというのは、野心家

が箍をはずすだけの威力がある事件でしょう」
「しかし……」
「自分を基準にしてませんか？　変人だという自覚を持ってもらわないと困るな。とにかく、野蛮な土地で、皇女殿下がたよりにする貴族といえば自分だけ……と勘違いした男が来てごらんなさい。たちまち下半身の導くままに突っ走ります」
「理性の導きを重視した人物でないと、皇帝陛下が任命なさらないのでは」
「それなら陛下にとって、公は下半身より理性を重視する男に見えている……ということかな」
　身も蓋もない評価だが、逆に思われることを考えればまだしもか。頭を抱えながら、ヤエトは上目遣いにルーギンを睨んだ。
「そういう貴殿はどうなのです」
「わたし？　わたしが姫様と既成事実を作るなんて、絶対にあり得ないね」
　そうではなく、皇帝にどう思われていると考えているのかを尋ねたかったのだが。
「絶対って……ずいぶんな自信ですね」
「絶対ですよ。だって、そんなことをしたらどうなると思います？」
「どうなるんですか」
「皇女殿下が産むわたしの子を帝位につけるため、《金獅子公》が全力を尽くすんですよ」
　ああ、とヤエトは呻いた。それは否定できない。
　ルーギンはうすく笑い、言葉をつづけた。
「あの男のことだ、皇子殿下を全員、うまい具合に処分しようとするでしょうね。皇帝の祖父として権力をふるうためには、真上陛下にも早めに薨去していただかないと困るでしょう。わたしのことも、邪魔になるかもしれない」
「……まさか」
「起きてほしくない『まさか』ですね。ですから、起こしません。ご安心を。わたしは、あの男に利する行為には加担しませんからね、絶対に」

「それほど——」

自分の父親を憎んでいるのか。

言葉にしてはならない問いのような気がして、ヤエトは口をつぐんだ。

だが、ルーギンは正確にそれを読み取った。彼は、あの胡散臭いほど魅力的な笑みを浮かべて答えた。

「あの男を許す日は訪れないでしょう」

ヤエトには、うなずくことしかできなかった。

——ルーギンは知らないだろう。

その《金獅子公》が、今は第三皇子に接触していることを。そうしておきながら、激しい敵意を抱いてもいることを。

半日と倒れずに済んだのだから、あの会話はごく最近のことだろう。それはわかるが、《金獅子公》の狙いがわからない。

おそらく、《金獅子公》は最大限に恩を売れる人物に次の権力を取らせる計算をし、行動している。

素直に考えれば、《金獅子公》は第三皇子の擁立をたくらんでいるのだろう。第三皇子になら確実に恩が売れるし、競合相手もいない。

裏を読むなら、そういう名目で接触しておいて裏切るということだ。本命は別にいるのだ。そうでないなら、あの敵意をどう説明するのか。

第三皇子を擁立しようとしながら、あんなに憎めるのなら、真上皇帝に対しても同じかもしれない。竜種への反発か、羨望か。特定の血筋に生まれただけで得られる特権を、呪ってでもいるのか。

ルーギンと《金獅子公》は似ていない親子だが、感情の強さだけは受け継がれたようだ。権力への執着を見せる父と、家族への愛着を忘れない息子と。前者は実を取りたがり、後者は名誉を重んずる。それぞれ違う方を向いているが、どちらも自身の信ずるところを譲らない強さがある。

「なにか、《金獅子公》のたくらみに気づかれたのですか？」

その種の問いかけを予期していたヤエトは、慎重

に自分の考えを告げた。
「具体的には、わかりません。でも、お話を聞くだに、このまま展開を見守るだけの人ではないと思いますね……わたしはもう少し都に留まるのですから、探れる範囲で探ってみましょう」
「いうまでもないでしょうが、わたしの父だからと遠慮なさる必要は微塵もありませんから」
ヤエトは答えず、ただ騎士の眼を見返した。
どうするのが彼のために最善といえるだろう。もし、叛逆の罪に問われることがあれば——父親だけでなく、ルーギン自身もその罪に連座させられるに違いない。あの奥方も、幼い子どもたちもだ。
といって、無為に見過ごせはしない。また皇女が巻き込まれないとも限らないからだ。
次代の皇帝の座を巡る争いに、竜種たちの命が懸かっているのは当然だが、それを支持する貴族たちも同様なのだ。読み負けたら、そこで終わりだ。
それが貴族の世界なのだと考えながら、ヤエトはようやく気がついた。自分自身もまた、その仲間入りをさせられたのだということに。

第



章

1

三の月が終わる前に、ヤエトは都での種々の手配を終え、なんとか四の月までに与えられた所領へおもむくことができた。

皇帝はかつての懐刀に与えた領地を天領として自分のものにしていたが、なんとも気前のよいことに、それをまるごとヤエトに譲り渡してくれていた。

――なにもかも、先代のお古というわけだ。

家名もだが、騎士団長はもとより、彼が連れて来た部下たちも先代に仕えていた者が多い。都にいてさえ、先代の影はヤエトに重くのしかかっていた。

その上、異民族の慰撫に手腕を発揮した先代《黒狼公》の後釜として、彼が治めた土地へ行くのである。どうしても気が重い。先代に優るという評価を得たいわけではないが、比較される覚悟は必要だ。

貴族になった以上、ヤエトはこの土地のあがりで食べていかねばならない。北嶺への支援も視野に入れれば、効率よく絞り上げる必要がある。自身は留守がちになるのだから、後顧の憂いなくまかせられる部下が必要だ。

現地には、先代の頃から仕え、天領になっていたあいだも代官をつとめていたという男がいる。当然、ジェイサルドとは旧知の仲だ。

都で帳簿を確認してきたが、天領になってからのこの土地は、いささか税収が減っている。その代官とやらが私腹を肥やしていてもおかしくないし、それが事実ならやめさせねばならない。開き直られても困るし、甘い顔を見せては馬鹿にされる。どう手加減するべきか。

あまりの面倒くささに、なにもかも投げ出したくなった。しかし、逃げるにしてもどこへ、というところで空想が止まってしまう。

《黒狼公》領は、帝国の諸領の中でも沙漠に近い土

地である。山脈と沙漠に挟まれた位置だ。

同じく沙漠に臨む博沙国とは境を接している。第二皇子が治めている土地だ。近いのだから、様子を伺いがてら挨拶に出向くべきだろう……と思いつく端から嫌になる。逃げるどころか、仕事が増えるばかりだ。ヤエトは深いため息をついた。

分厚い硝子越しに広がる空は、北嶺で眺めるそれとはずいぶん色が違う。やけによそよそしい。

土地に馴染むのに時間がかかるだろうとは予測していたが、空までそうとは思わなかった。邸もだ。他人の家にいる気がしてしかたがない。

邸自体は見事なつくりである。帝国が侵攻する前どころか、南方人の藩王が来る前からの古い建物だという。過去の因縁だのとはできるだけ無縁でいたいというヤエトの希望とは正反対の代物だ。

南方人はやたらと塔を建てたが、この土地に住んでいた人々も、その嗜好は共有していたようだ。ただ、南方の塔は基部はともかく屋根が円形になるものが多い。かれらの神話では、大地は方形、天は円形であるとされているためだと聞いた。

しかし、当地では天が円だとか、それを建物に敷衍すべきとかいう決まりはなかったようで、塔は上から下まで四角い。尖端に幾何学的な飾りがついているのが特徴だ。素材は石が主体だが、このあたりで産する石は軽いだけに組成が荒く、そのままでは水を通してしまう。そこで漆喰で固め、年ごとに塗り直す。その漆喰も、壁は石粉を混ぜた灰色、屋根や窓のあたりは防水性の高い純白のもので、この色の差を利用して、縁取りを美しく飾る風習がある。

意匠はさまざまで、かつては氏族によって使い分けていたらしいが、昨今では伝統的な柄は廃れてきたのだと、土地の召使いはヤエトの問いに答えて説明してくれた。この邸の飾りもそうした新しい紋様らしい。ヤエトもそうだが、先代もまた地縁性のない領主だったのだから、しかたのないところだ。

伝統的な柄を見てみたいといったところ、召使い

はヤエトを連れ歩き、あの塔の紋様がどうの、こちらの塔はこうの、と説明をはじめた。ヤエトはいつものように、帳面に召使いの話を書き留め、紋様も大雑把に写し取っていたが、召使いは違う違うとヤエトの手から筆を取り上げ、墨壺に先を浸してさらさらと紋様を描きあげてしまった。

どうやら元本職だったようだ。これはついていると、ヤエトはそれぞれの意匠の意味を問い、起源を問い、それが関連づけられている氏族の名を問い、その氏族の来歴を問い、その答を書きつけた。大雑把な市街図も書かせ、そこにそれぞれの塔の意匠を記入させ、歩いて行っては実物を眺めた。

護衛の騎士は、なにを酔狂なという顔をしていたが、ヤエトは気にしなかった。ささやかな趣味くらい許してほしい。歴史というものが存在しない土地で、過去を探るよすがになるものをみつけたのだ。これくらい、かまわないではないか。

古王国人のヤエトはここでも非常に目立つ存在で、視線は集めたが、声をかけられることはなかった。土地の民で気安く話した相手といえば、元職人の召使いくらいである。

会話をかわさずとも、観察はできる。ヤエトが見たところ、街路や市場で見かけるのは南方人が三割、沙漠の民が三割、残り四割が今まであまり見かけたことのない民族で占められていた。肌は黄味がかっており、頭髪は赤から焦げ茶、稀に黒。眼は多少の誤差はあれ、だいたい茶色という言葉でおさまる色合いだ。沙漠の民のように長いかぶりものをすることもなく、南方人よろしく髪を布で巻き上げることもせず、頭髪をさらしている。かれらが、南方人に蹴散らされて主導権を奪われていた、本来の土着の民なのだろう。召使いも、茶色い眼をしていた。

ここに到着して三日間は、そんな風に過ごした。今日はもう四日めである。代官は領地の揉めごとを仲裁しに出かけているとかで、まだ帰って来ない。事情を説明しがてら連れて来ましょう、とジェイサ

ルドが迎えに行って、ヤエトにできるのは待つことだけになってしまった。

「公」

呼ばれて、ヤエトは視線を窓から室内に戻した。

卓を挟んで座った皇女の伝達官が、曖昧な笑みを浮かべている。

「申しわけありません、気が散っていたようです」

「……疲れているのだろう、と姫様が仰せです。今日はもう、終わりにしますか？」

定期連絡を兼ねた歴史の講義中だったのに、ヤエトはぼんやりしてしまったらしい。疲れているといえば、たしかにそうなのだろう。

「いえ、大丈夫です。少し、この土地について考えていたものですから……」

伝達官は、やわらかな声で尋ねた。

「なにか気がかりなことでもあるのか、と」

皇女の言葉をそのまま伝えているはずなのに、この伝達官を通すと、別人と話しているようだ。

「そうですね……気がかりといえばそうですが、王がお考えになっているようなことではありません。この土地の神についてのことです」

「土地の神はなんだ、とお尋ねです」

ヤエトは本を閉じた。

「今日の残りの時間は、その話をいたしましょう。この土地は南方人の支配を受けて久しく、本来ここで信仰されていた神は忘れられているようです。ただ、これはわたしの憶測に過ぎませんが、どうやら水にまつわる神だったのではないかと」

ヤエトは例の帳面を持ち出し、開いてみせた。

「街に伝わる古い意匠を集めてみたのですが、氏族ごとに使い分けるそうで、これは古くは神官のものだったようです——抽象化されていますが、この水瓶という紋様は器から噴き出す水のようです」

彼のさし示す紋様を覗きこみ、伝達官は困ったように眉根を寄せた。

「これは、姫様にどうご説明すればよいのか……」

「機会があれば、王ご自身にご覧いただきます。わたしが北嶺に戻ったときにでも」
「では、そのようにお伝えします」
伝達官はあるじと心を繋ぎ、遠く離れても瞬時に意を送りあう。ただし、意志の疎通には言葉をもちいているらしく、伝えられることには限界がある。
もちろん、臨と呼ばれる状態になり、竜種が伝達官の身体を完全に乗っ取れば別だ。
「これがその氏族の傍系だというのですが、魚が跳ねているもの。こちらは別の氏族ですが、やはり神官の血筋だとかで、雫の形です」
「神官以外の氏族ではどうなのか、とお尋ねです」
ヤエトはにっこりした。皇女は聡い、と思う。なにごとも、特別な事例だけを取り出して論ずることは危険だと、直感的に知っているのだろう。
「はい。もっとも多いのは、この意匠とそれを展開させたものですね。これは剣。こちらは剣と盾、これも剣です。曲刀かな……」
「曲刀を使うのは沙漠の民だと仰せです」
「沙漠の隊商都市と、かかわりがあるのかもしれませんね。沙漠に、これに似たものが残っているかどうかを調べられればよいのですが……」
沙漠の都市はすべて、過去形でしか語り得ない。どの街も今は住む者とてなく、いずれ埋もれて消える運命である。
「公」
また呼ばれて、ヤエトははっとした。今度はそんなにぼんやりしていたつもりはないのだが。
「失礼しました」
「姫様が、今日はこれまでに、と仰せです」
「なにか不都合でも？」
「もう、いらっしゃいません」
ヤエトは眉根を寄せた。昨日も、こんな風に唐突に接続が切れたはずだ。
「今日は北嶺の現状について、もう少しお話を伺いたいと思っていたのですが」

「姫様も、そのおつもりでいらしたようです」
「お気が変わったのは、なにゆえでしょう」
伝達官は立ち上がった。
「わたしには、なんとも……失礼しても？」
「はい。お疲れさまでした」
ヤエトも立ち上がったが、伝達官が出て行くのを見送ってすぐまた腰を下ろした。
——摑みどころがないな。
自分もそういわれる方だが、あの伝達官もずいぶんだと思う。前任者と比べてはいけないのだろうが……どうしても思いだしてしまうし、思いだせば双方の差を考えざるを得ない。
すみやかに後任が配されたのは、訓練を済ませていわば予備役の状態にある伝達官がいるからだろう。しかし、皇女と今度の伝達官とのあいだには、深い絆はなさそうだ。
——深い絆など、ほしくないのかも。
伝達官の死はつらいことだ、と皇妹が話していたのを思いだすとともに、皇女のつぶやきも耳によみがえる——伝達官を持たないという選択をしてもよいのだろうか、と。
だが、実際は皇女に選択肢などない。皇家の支配力は、恩寵の力と伝達官の存在抜きには考えられないのからだ。
どうせ来てしまう伝達官を、ただの伝言役にしてしまうのはもったいない。かれらに行動の自由を持たせる方が、恩寵の力の効能に幅が出る。実際、去年ヤエトが都から脱出できたのは、伝達官が旺盛に活動してくれたおかげなのだ。
だが、それには皇女と伝達官のあいだに、もっと意志の疎通が必要だ。今のままでは駄目なのだ。
伝達官を使いたくない、親しくなりたくないと皇女が念じているのであれば、その感覚は当然、伝達官にも伝わるはずだ。そんな風に思われながら、伝達官が自発的に動いてくれるはずがない。皇女の心をほぐすためにも、まずヤエトが伝達官とある程度

は親しくなる必要があるだろう。
しかし、どうやって？　紹介されてからずいぶんたつが、まったく端緒が摑めない。
彼は頭を抱えて突っ伏した。
「面倒くさい……」
なぜ、次から次へとやるべきことを思いついてしまうのか。なにも考えるな、と自分に命じたい。
ジェイサルドが代官を連れて戻るまでは、趣味のことでも考えていればよい。うん、そう決めたと心の中でつぶやいて、ヤエトはさっき皇女に見せた帳面を眺めた。
――水の神か。
この土地は長く南方人の支配下にあり、古い神の名や伝説は失われているようだが、文化の根は沙漠に近いのかもしれない。
そういえば、沙漠の都市国家はどこも街ひとつで満足してしまう。帝国はもちろん、沙漠の東側でいえば、かつての南方王国は拡張路線をひた走ったようだが、それも立地による特色なのだろう。
南方の低地はだだっ広く、大河のおかげで土地は肥え、養える人口が多い。水運の便もあって、交通網も早期に発達しただろう。
沙漠はそうではない。水の湧く土地は点でしかなく、それを線で結んでようやく隊商道があるだけだ。だから、沙漠の民はその水を囲んで都市をつくり、その都市をかたく守った。それぞれに違う名の神を奉じ、恩寵の力を使って都市を守り立てた……。
沙漠の民がどんな神々を信仰していたのかは、実のところ、あまりあきらかにされていない。帝国と沙漠は出会った瞬間から敵対的な関係にあり、友好的に情報が交換される機会は滅多になかったのだ。医師神を奉じたシーハの民をはじめ、いくつかの都市は恩寵の力を喧伝していたが、黙して語らぬ都市も少なくはなかった。
アルハンもそうだ。王族に与えられた恩寵の力がなんだったかは、知られていない。

――父なら、どうしただろう。

沙漠の西には記録の蓄積があった。本があり、印刷技術があり、それが普及する前でも書写が盛んであった。あたらねばならない史料が大量にあるのは大変なことだが、今のヤエトには、ただ羨ましいとしか思えない。

いざとなれば過去視の恩寵の力があるが、かならず倒れるのでは、気楽に使うわけにはいかない。

そこで、はたと気がついた。

――この力の制御法がわかればよいのか。

暴走させるのではなく、必要なだけ力を使うことができればよいのだ。竜種や伝達官が、恩寵の力を使うたびに寝込むなどということはない。

ごく単純なことで、今まで気づかなかったのが不思議なくらいだが、……たぶん気づきたくなかったのだ。安全に力を使う方法があるかもしれないと。

――力を恐れているからだ。

正確には、恩寵の力が彼にもたらしかねない未来を、恐れていた。幽閉された先祖の姿を、ヤエトは忘れることができない。恩寵とは呪いの力であり、できればふれずに済ませたいものだったのだ。

少し前までなら、それでもよかった。恩寵の力などないものと自分で自分を騙して生きていくことも、不可能ではなかっただろう。

だが、状況は変わってしまった。

強まった恩寵の力は、無為に眠らせておくことを許してはくれない。ならば、自分から向き合うべきなのではないか。怖がりの子どもではなく、成熟した大人が力を引き受ければよい。

深く息を吐いて、ヤエトはまた窓の外を見た。

自分はまだ、あれが怖い。

眼を閉じればすぐ、目蓋の裏にあの光景が浮かぶ。狭い部屋、むせるような香の匂い、水音。

一族の保護と引き換えに力を捧げた祖先と、それを幽閉した皇祖のやりとりは、彼の人生を縛りつけている。暗殺者の正体を、その黒幕の名を求めて塔

に上った皇祖。手をとってともに時を遡行し、真実をあばいた祖先の声が、今も耳からはなれない。

——真実に支払う代償は、あまりに高い。

滲む墨色の奥に、光る鏡が視える。その鏡に映る人影が、彼に尋ねる。

——わたしの舌を切ってしまえばよいと……そう思うのか？

陰鬱な顔をした皇祖の姿は、そこにはなかった。丈なす白銀の髪が揺れ、蜘蛛の巣のようにひろがっていく。目隠しをした白い貌が、彼の方を向いた。白髪から勝手に老人と思っていたが、なめらかな肌は塑像のようだ。冷たく、美しい。闇にとけていく影は銀色で、全身が光を帯びているのがわかる。

——わかっているはず。与えられた恩寵の力を、切り落とすことなどできはしないと。

色のないくちびるが、冷淡に言葉をつむぐ。

その声が、世界に鳴り響く。どこまでも谺して尽きることなく、彼をとり囲む。

——そなたにとって、世界は開かれた本も同じ。失われた過去も、隠された真実も、そなたの眼からは逃れられぬ。なぜ厭う？　存分に使え。

視界が端の方から黒く塗りつぶされていく。長い髪も闇に沈み、次第に黒くなる。鏡の枠だけが、きらりと銀色にかがやいている。鎖に繋がれた腕が重たげに上がり、目隠しを解いた——。

ヤエトははっとして目覚めた。

間近に人の顔があっておどろき、彼は声をあげた。もう少しで椅子から落ちるところだ。

相手も狼狽したように後ずさり、しかし、なんとか逃げずに踏みとどまった。

「スーリヤ？　なにか、用でも？」

「いえ。あの……うなされておいでのようでした」

「ああ……ちょっと夢をみていたようだ」

ヤエトは手で顔をこすった。考えごとをしているつもりで、机に突っ伏して寝てしまったらしい。

「お邪魔してしまい、申しわけありません」

「いや、かまわない」
なんとか微笑らしいものを浮かべると、ヤエトはスーリヤを見上げた。
ほとんど押しつけるように預けられた娘を、そのまま都に置き去りにするわけにもいかず、こうして所領にまで連れて来ることになってしまった。
使用人を雇ったというより、良家の令嬢を預かっている気分だ。痩せているのは相変わらずだが、みすぼらしさはない。服装によるところもあるだろうが、本人の心の持ちようが大きいのではないか。皇女と同い年かもう少し若いくらいかと思っていたが、こうして見ると実は少し年上かもしれない。
「このようなところでお休みになっては、お身体にさわります。どうかお部屋に」
どこかたどたどしかった口調も、なめらかになった。少し低くてやわらかく、耳に心地よい声だ。
「いや、もう起きるから大丈夫」
このまま寝たら、さっきの夢のつづきを見てしまいそうだ。
――そんなに怖いのか。
大きく息を吐くと、前髪がひらりと動いた。伸び過ぎたかと思ってつまんでみるが、まだ許容範囲内のようだ。
「夜も遅くまでお仕事なさっておいでだと……」
そうでもない、と返事をしかけて気が変わった。
「誰がそんなことを？」
「こちらの奥様です」
奥様というのは代官の妻のことだろう。ジェイサルドの話では、かなりの遣り手らしい。到着時に挨拶を受けて以後、会っていない。横幅と厚みのある巨大な女性で、ほとんどの時間を調理場で過ごしている。そこから、この邸を動かしているのだ。
「見張られているのかな？」
冗談めかして尋ねてみる。
「いえ、旦那様が夜更かしをなさると蠟燭が減って大変だと、出入りの商人にこぼしておられて……。

でも、仕事熱心なかただと感心しておいでした」
説明するほど自分が代官の妻の陰口をいっているような気分になるらしく、娘は困惑した表情で口をつぐんだ。
「それで蠟燭の値段を値切っただろう？」
スーリヤはおそるおそるうなずいた。
なるほど、遣り手というのは嘘ではなさそうだ。
「あの……ご存じだったのですね。奥様が蠟燭屋に、《黒狼公》御用達の看板をかけたくないかと」
ヤエトはわずかに眉を上げた。それは少し、度が過ぎる。あとで確認しておかねばならない。
「ところで、ここに来たのはなにか用でも？」
「扉が開いていたので中を覗いたら、旦那様が……机の上に伏せていらして。お加減がお悪いのではないかと、お声をおかけしました」
命の心配をされたようだと見当がついて、笑いたくなった。居眠りをしただけで、具合が悪くて倒れたと勘違いされるようでは、どうしようもない。
「寝ていただけだから大丈夫だ。もう行きなさい」
「……はい。あの、旦那様」
「なんだね？」
「お茶をお持ちしてもよろしいですか？」
短時間とはいえ寝て起きたので、口の中が乾いている。なにか飲むのは悪くない考えだ。
「そうだな、たのむ」
「かしこまりました」
「滋養強壮とかそういうのはどうでもいいから、味を優先してくれ」
ジェイサルドがいたら、とんでもない味のものが出てくるに決まっているが、幸い留守だ。今の内に……と考えて、ヤエトは寝る前に考えていたことを思いだした。
――皇女に打診する必要があるな。
スーリヤが軽食と飲み物を運んで来たときには、彼は暗号文を書き終え、本を片手に間違いがないか確認しているところだった。

茶をすすり、添えられた焼き菓子を頬張った。香料が強くて舌にぴりりと来るが、口の中でほろりととける淡雪のような食感が、なかなか良好だ。
「うまいな」
感想を漏らすと、スーリヤは頬を染めた。
「奥方様にご伝授いただきました」
「ここの？」
「いえ、ミアーシャ様にです」
そういえば、娘ができたようで嬉しくてと話していたはずだ。なんとなく微笑ましい気分になった。
「おまえが作ったのか？」
「はい。よろしければ、もっとお持ちします」
ヤエトはうなずき、手に持っていた紙をスーリヤに差し出した。
「悪いがその前に、これを伝達官殿に届けてくれないか。この内容をそのまま、北嶺王にお伝えください、と」

2

追加の焼き菓子を食べ終わったところへ、竜気を纏った伝達官が入って来た。どう見ても皇女本人だ。
ヤエトは立ち上がって一礼すると、皇女を宿した伝達官の後ろに回って扉を閉めた。
「お久しゅうございます、王」
皇女はくるりとふり向いた。
「なぜ、わたしだとわかる」
「お話ししていませんでしたか？」
「なにをだ」
「臨の状態だと、伝達官殿のお姿ではなく、竜種のかたのお姿が視えるようなのです、わたしは」
皇女は眉根を寄せた。
伝達官より少し背が低く、引き締まった体型のはずだが、さしたる違和感もなく置き換わっている。自分でも、どうなっているのかと不思議に思うが、そう視えてしまうのだからしかたがない。

「……どうしてそなたは、そういう大事なことを話さぬ。わたしだけではないのだろう、視えるのは」
「はい。おそらく、どなたでも拝見できると思います。皇帝陛下のお姿も、はっきりと」
「それで、ナグウィンが陛下の伝達官だとわかったのだな」
「それは違います。陛下のお姿しか視えませんでしたので、逆に、誰に宿っておいでなのかはわかりませんでした。熱が引いてから気づいたのです。あのとき城にいたのが誰だったかを考えれば、推測は難しくありませんでした」
「あのときとは、そなたが殺されかけたときか」
あまり望ましくない話題になったので、ヤエトは話を逸らすきっかけを探して視線を泳がせた。
「いつも死にかけておりますし」
「視たのだな？」
「そうですね。陛下のお姿を」
「違う。そなたを殺しに来た伝達官の姿のことだ」
第三皇子でした、とは今さら答えがたい。
「視ました」
「どうしてそなたは、そういう大事なことを黙っているのだ！」
皇女は額に手を当て、ため息をついた。
「いかん。こんな話をしに来たのではなかった。本気か、ヤエト。伝達官の訓練をしたいというのは」
「左様な冗談のために、あの面倒な暗号で王のお手をわずらわせたりはいたしません」
暗号は、本の頁をめくって読みとかねばならない。ふたりの年齢差の二十二が鍵になる数字で、同じ本を双方が持っていればこそ、読み替えが可能だ。
「しかし、伝達官の訓練といえば、死人も出るような激しいものだぞ」
「訓練をそのままなぞるわけではありません。わたしには過去視の恩寵の力があり、いくら訓練をしても心話の力は発現しないでしょうし」
「ではなぜ」

「力の使いかたです」
ヤエトは皇女に椅子を勧めた。皇女が座ってくれないと、彼も立ったままでいなければならない。
すとんと腰を下ろした皇女と卓を挟んで座り、ヤエトは両手を組み合わせた。
「恩寵の力が強まっている今、いくら避けようとしても、この力を使わずに済ますことはできないと悟りました。ですから、伝達官のやりかたを学びたいのです。体力をそこなわずに恩寵の力を使うには、どこからどう力を取り出すのか……」
「そうすれば、そなたの身体に負担をかけずに恩寵の力が使えるというのか」
「かもしれない、ということです」
皇女は難しい顔をしてヤエトの組んだ手を見ていたが、やがてつぶやいた。
「また、暴走したのか」
そう来るとは予測していなかったので、ヤエトは返答に窮した。彼が適切な答を探し出すより、皇女が思い当たる方が速かった。
「《金獅子公》と面談した直後、倒れたと聞いた」
「あれは——」
「それだな」
「——そういうことです」
ルーギンのお喋りめ、と心中で悪態をつく。
騎士はヤエトが恩寵の力を持っていることを知っていても、それが過去視の力だとは知らないはずだ。古王国に与えられた恩寵だから、歴史を学べばおのずと知れるが、ルーギンが学舎でどの程度の勉学をしたか、遺憾ながらヤエトは知っている。
「なにを視た」
「まだ、お話しできません」
睨まれた。
「申せ」
「自分がなにを視たかも、よくわからぬ次第で」
「一緒に考えてやる。包み隠さず申すがよい」
時間がたってしまうと、《金獅子公》が話しかけ

ていた相手がほんとうに第三皇子だったのかどうか、ヤエトには確信が持てなくなっていた。

ミアーシャには、第三皇子周辺と、殊に四大公家の動きをよく見張ってくれるように依頼してある。去年のことがあるから、彼女は第三皇子がきな臭いのは知っている。なぜ親しいはずの同母の兄君を、と面倒な質問をされないだけ助かる。

都にいたあいだに、スーリヤの荷物を届けるという名目で人が来て、報告がもたらされた。第三皇子は都近くに残されたからと、皇宮に頻繁に姿をあらわし、目立つことも平気でやるようになったという。貴族とのやりとりも増えた。帝位への野心などなく、ただ生き延びたいばかり——と、あの綺麗な顔で不安げにいってのけたらしい。

一方、《金獅子公》は所領の見回りにおもむいて留守だという。これでは、なにかたくらまれてもわからない。《銀鷲公》はどうやら十二大公家の切り崩しにかかっている雰囲気があるが、はっきりしたことは摑めない。《灰熊公》は所領で馬の飼育に精を出しているという噂があるくらいだというので思いつき、馬の取り引きに注意するよう、都に残した家宰には命じてある。

家宰もジェイサルドの紹介だ。沙漠の民で、意外なほど若かった。ヤエトとそう変わらないくらいだ。盗賊団時代の仲間ではない、とジェイサルドはいった。発覚すれば公がお困りでしょうから、身元のきれいな、先のありそうな者を据えましょうと。

その家宰からも、ヤエトを追いかけるように報告が届いた。《金獅子公》が《灰熊公》のもとを訪ねたらしいという。これは、異例のことだ。

「ヤエト」

「申しわけありません。考えがまとまらず……」

「だから、一緒に考えてやるというておろう。さっさと白状せよ。覚悟はできておる」

「お耳に入れるような段階ではないのです」

皇女は視線を逸らさない。

「どうせ三の兄上が関係するのだろう」
「……王は勘が良過ぎます」
「勘を働かせねば臣下が報告もしてくれぬゆえ、しかたなかろう。それ、さっさと申せ」
かるい口調だが、ヤエトもその程度では騙されない。第三皇子がかかわると認めた時点で、皇女の表情はあきらかに暗くなった。
気の毒にとは思うが、今さら隠せない。
「それでは申し上げます。《金獅子公》の邸にて、《金獅子公》が窓の外にいる人物に向け、語りかけたのを視ました。その人物は、どうやら三の君でいらっしゃるように思われましたが、夜目でもあり、横顔と後ろ姿のみ、声も押し殺しておられ、確信が持てません」
「なんと申しておったのだ、《金獅子公》は」
「支援するという言葉を信じるか、と」
「兄上に似た者とやらは、なんと答えた?」
「信じたい、と」
皇女は無言で考え込んだ。
どうせここまで話してしまったのだ、ヤエトは自分を不安にさせた部分も明かすことにした。
「答えて、その人物は立ち去ったのですが……それを見送った《金獅子公》が、悪意に満ちておりまして。わたしが倒れたのは、その悪意というか、敵意にあてられたせいだと思います」
「悪意?」
「言葉としては、足掻くがよい、と」
「つまり、《金獅子公》は三の兄上の敵か味方か、よくわからぬということか」
ヤエトはうなずいた。
「はい。唆(そそのか)しているようには見えましたが……」
「いつ頃のことだ?」
「さほど体力を消耗しませんでしたし、おそらく新年祭より後のことでしょう」
「では、兄上の中洲送りが決まって以降かな」
「なんにせよ、三の君がこのままおとなしくしてく

だざると、期待はできないと思います」
「そうだな……わたしは考えかたを変えることにしようと思うのだ」
「考えかた、ですか？」
皇女は机に頬杖をついて、窓の方を眺めた。
「うん。あれしきのことでは諦めぬ、兄上は実に見上げた根性をお持ちだとな。命を懸けても帝位が欲しいとお思いなら、いっそ天晴れであろう」
それはたしかに前向きな考えかたかもしれないが、あまり歓迎できた話でもない。
「ご自分のお命だけで済めばそれも結構ですが」
「他人の命まで平気で犠牲にできるのだ、性根が座っておられる」
「はぁ……」
「そこまでして、なにかが欲しいというのはどういうものなのだろうな」
「そういう話をわたしにふられましても」
ヤエトが本気で困惑したのが通じたのだろう、皇女は声をあげて笑った。
「しかし、そなたにも欲しいものはあろう」
「それは去年、お答えしましたが」
「隠居か？　ま、長生きせよとしかいえぬな。長く生きれば機会が巡ることもあろう」
「王は、欲しいものがおありではないのですか？」
「そうだな、以前はそなたの忠誠が欲しかったが、それは手に入れた……と思ってよいのだろうな？」
ヤエトは少し考えた。忠誠を尽くす、とは考えたことがない。だが、この主君を裏切ることもないだろう。大雑把には忠誠心と呼んでもよさそうだ。
「おそらくは」
「その返答で満足せねばなるまいな、そなたが相手である限り。ところで、今聞いたこと、ルーギンに話すぞ。よいな？」
「……はい」
「思うのだがな、そなたはひとりで抱え過ぎだ」
半分以下の年齢の少女に説教される気分たるや、

なんともいいがたい。それが的外れな意見ならともかく、おおむね当たっているのだから困る。頬杖をついたまま、皇女はまだ窓の外を眺めていた。そういう姿勢をとると、よけいに幼く見える。

なんとか話題を変えようと、ヤエトは尋ねた。

「王がなにを欲されるか、まだ伺っておりません」

「秘密だ」

あっさりかわして、皇女はヤエトに向き直った。今度は自分の番だといわんばかりに、まっすぐ彼をみつめて口を開く。

「当面、そなたが欲するのはわたしの許可だろう。伝達官の力の扱いかたを学ぶことで、そなたが恩寵にふり回されずに済むならよい。だが、伝達官を真似て身につくものか？　却って命を縮めはせぬか」

「やってみねば、わかりません。どうせ惜しむほどの寿命でもありませんし」

皇女の手がヤエトの手にふれた。

「駄目だ」

「名案だと思ったのですが」

「そうではない。命を惜しめといっておる」

ヤエトは微笑した。またこの話か、と思う。

「命を惜しむ自分を、あまり想像できないのですが」

皇女の手に力がこもった。手を握っていれば、ヤエトは死なないとでも思っているかのように。彼女を置いて消え失せないと。

視線を上げると、眼が合った。皇女の眼差しは、強過ぎて痛いほどだ。

「死にたくないと思うことは、恥ではないのだぞ」

「恥、ですか」

「そなたはすぐに諦める。長く生きられぬといわれつづけてきたのなら、それもしかたなかろう。どうせ遠からず死ぬのだからと、ことごとに口にするのは、そうやって自分を納得させているのだろう」

言葉がないとはこのことだ。

薄々は、わかっていた。命を惜しまず、欲もなく、潔い人生をつらぬいているといえば恰好はつく。そ

の実、諦めようと足掻いているに過ぎない。浅ましいのだ——直視しないようにしてきたことを、年下のあるじに看破されてしまった。

無言でいると、皇女は吐き出すように告げた。

「だが、わたしは納得せぬからな。そなたがどんなに自分をごまかしても、周囲を煙に巻いても、絶対に見失わぬからな。そなたとて、生きたいはずだ。もっと長く、もっと自由にと望むことは、恥ではない。罪でもない」

皇女はもう一方の手で眼をこすった。また泣いた、と思う。ルーギンが泣かないというから信用したのに、これで何回になるか。

「王」

「なんだ」

「左様に喧嘩腰になられませずとも、よくわかりました。王はわたし以上にわたしをご存じです」

「参ったか」

「参りました」

皇女は強張った笑みを見せた。

「それならよい。無駄に命を削る気がないなら、許可しよう。伝達官には、そなたの望むようにせよと申し付けておく」

「かたじけなく存じます……ですが、王」

「なんだ」

「ひとつだけ、お考え違いをなさっておいでです」

「申してみよ」

引っ込めようとした手を、今度はヤエトが握った。わずかに顔を寄せ、皇女の眼を覗いてささやく。

「おのれの命をかろんじているように見えるのは承知の上ですが、いくらわたしでも、この身を無駄に捨てる予定はありません。引き換えにするならその甲斐のあるものと、とは考えております。その点、ご承知おきください」

皇女は暫し無言だったが、やがて、ふんと鼻を鳴らした。

「甲斐があるかどうか、おのれで判断できるかあや

しいものだ。わたしが決めてやるゆえ、そのときはまず相談せよ」
「御意にございます」
「絶対にだぞ。主命だからな」
皇女の眸が揺れた。紫が薄れ、黄昏の空のように遠くなる。あわててヤエトは引き止めようとした。
「王、まだお話しすることが……《天地輪》や、北嶺の――」
「明日にせよ。また機会もあろう」
その言葉を最後に、皇女の気配は消えた。
卓を挟んで座っているのは、呆然とした面持ちの伝達官だった。ヤエトは握っていた手をそっと引くと、伝達官に声をかけた。
「伝達官殿」
「……姫様が……」
卓に手を突いて立ち上がると、伝達官はゆらりと揺れた。だが、支えようとさしのべた手から、彼女は思いのほか素早く身を引いた。
「まだお動きにならない方がよいでしょう。今、皇女殿下が臨の状態でいらっしゃいました」
「わかっています」
尖った調子で答えて、伝達官はまた腰を下ろした。やはり、臨はかなり消耗するらしい。
せっかく学んでもあまり意味がないのでは困るが、と思いながらヤエトは伝達官を眺めた。
昨今伝達官になるのは帝国人とそれ以外の人種のあいだに生まれた子が多いと聞かされたのは最近のことだが、年齢からして、この伝達官は沙漠の西、旧帝国の出身であるに違いない。
「皇女殿下の伝達官として、長く訓練を？」
「もちろんです」
反射的に答えたのだろう、自分の声におどろいたように眼をしばたたき、伝達官はヤエトを見た。まるで、はじめて見る相手を眺めるように。
「すでに王よりお話があったかと思いますが……わたしは、恩寵の力の運用法を、学びたいのです」

「あなたには才がありません。姫様と、直接心を繋げることを期待しておいでなら、無理です」

ヤエトの言葉に答えた伝達官の口調はゆったりしていたが、不快さが滲んでいるように聞こえた。

――これは機嫌を損じたかもしれない。

紫の肩衣の重みを、彼はうっすらと想像することしかできない。即座に補充がなされたのだから、補欠扱いの伝達官候補が何人も飼い殺しにされていることは見当がつく。人生のやり直しができなくなるほど長い修行を経ても、全員がすぐに正式の伝達官になれるわけではないのだ。この女性もそうだ。不意の欠員にそなえ、自分の出番があるかどうかもわからず、何年暮らしたのだろう。

素人がその頭越しに皇女と話そうとしているように見えたなら、きっと腹立たしいに違いない。

「左様なことは、望んではおりません。ただ――」

「必要ありません」

「は？」

「公のご事情がなんであれ、わたしが知る必要はありません。命令はくだされました。伝達官としての訓練の基礎、呼吸法や制値法をお教えせよと。わたしは、それに従うだけです」

取りつく島もないとはこのことだ。ヤエトは説明を諦め、質問する側に回ることにした。

「呼吸法はともかく、制値法とは？」

「力の値を制御する方法です」

「すみません、力の値とはなんでしょう」

伝達官は眼を伏せ、ため息をついた。

「公は、卵を持つときにどれくらいの力をお使いになりますか？」

「力？　……ああ、なるほど」

「いきなり強く持てば、割れてしまいます。ですが、きちんと持たねば落としてしまい、やはり卵は割れるでしょう。適正な加減を知り、それにあわせて力を使う方法が、制値法です」

「よくわかりました。ありがとうございます」

「礼など必要ありません。わたしは姫様のご命令に従っているだけなのですから」
ことごとに折り目をつけようとする伝達官に反抗したくなって、ヤエトは告げた。
「必要でしょう。命令に従うと選んでくださったことに、感謝をせねば」
「選べません」
「選んでおいでですよ」
「あるじの命令は絶対です」
伝達官は立ち上がった。まだ少しふらついているので、ヤエトは彼女を制止した。
「お部屋にお戻りになるにしても、もう少し休んでからにしてください。倒れられると困ります。取り次いでくださるようでしたら、皇女殿下にお願いします。休むよう、あなたに命じてくださいと」
「……わかりました」
ヤエトは立ち上がると扉を開けて廊下に顔を出した。ジェイサルドの命令で、ヤエトがいる部屋は、かならず護衛が立つことになっている。その兵士に、伝達官にお茶と菓子をとたのんだ。
室内に戻ると、伝達官はぼんやりと椅子に座り、なにも見ず、なにも考えずという風情だった。
ヤエトも椅子に座ったが、手持ち無沙汰で困った。帳簿の確認でもしようかと思ったが、人がいると気が散るのだ。といって、伝達官を置き去りにするわけにもいかない。
気詰まりな沈黙をやり過ごそうと努力をかさねたあと、彼は諦めて、ため息をついた。
「命令という言葉は……尚書局では滅多に聞かないものなのです」
日々決まった仕事をこなすだけだから、あらためて命じられるという事態はほとんど発生しない。指示されなくても、やるべきことがわかっているようでないと困るのだ。
そんな職場でも派閥争いや権力闘争は存在する。
「助言してくれといわれて、ああしろ、こうしろ、

と指図したことはある……という程度ですね。それも、ちっとも実行されなかったし」

巻き込まれた挙げ句、更迭されたのはそのせいだ。

伝達官は彼の話を聞いているのかいないのか、無言でうつむいている。

「これが軍で、命令がかならず実行されるなら、ずいぶん違うだろうと思ったものですが……でも考えてみると、尚武官の世界でも、命令が絶対なのは建前だ。叛逆もあれば、怠慢もある。それでは困るから命令は絶対だという。敢えていわねばならないのは、実は命令は絶対ではないからでしょう」

ですから、と彼は言葉をつづけた。

「わたしは礼をいったのです。皇女殿下のご命令に従うという選択をしてくださった、あなたに」

失礼しますと戸口で声がして、スーリヤが盆を手に入って来た。茶と菓子を、伝達官の前に手際よく並べていく。

「お茶をどうぞ」

伝達官は口を開いた。

「訓練するなら、この娘の方が向いています」

スーリヤの動きが止まった。なんの話かわからないという顔をしている。

伝達官は言葉を継いだ。

「才があります」

とたんにスーリヤの表情が強張り、空になった盆を抱えた手に力がこもった。

ヤエトは伝達官に視線を戻して答えた。

「わたしに教えよと命じられたのに、向いているのはそこの娘だという。命令されたら従うだけの仕掛けで動くからくりのようなものなら、あなたはそんなことは考えないし、口にしない。そのはずです」

伝達官はヤエトを見た。はじめて、視線が合ったと感じた。だが、彼女はすぐに目を伏せた。

「……出過ぎたことを」

「それでよいのです。わたしが個人的に知遇を得た伝達官は、あなた以外にたったふたり。どちらも自

分の人生を生きようとしていました。わたしは、それでよいと……そうしてほしいと思っています」
「でも、死んだのでしょう」
硬い口調に、はっとさせられた。
伝達官はもうヤエトを見ていなかった。どこか遠くを見ているようだった。
彼女はゆっくりと立ち上がり、出口へ向かおうとした。ヤエトもあわてて席を立った。
「お部屋まで送らせましょう」
「いいえ……お気遣いだけ、いただきます」
ようやく、いつもの彼女らしいぼんやりとした口調になったと思ったら、そのまま扉を開けて部屋を出て行った。まだ足もとは少々おぼつかない風だ。
警護の兵と視線が合う。
「行け。お部屋まで、お見送りせよ」
兵は伝達官の後を追った。
ヤエトはその背を見送ってため息をついた。
また面倒くさいことになったものだが、発端は自分なのだから、文句を持って行く場所がない。
扉にもたれて考えていても、伝達官の気もちをやわらげる妙案は浮かびそうになかった。
「あの……伝達官様は、亡くなられたのですか。三の君のお邸にいらした……あのかたが？」
いつの間にか間近に立っていたスーリヤを見下ろし、ヤエトはうなずいた。
伝達官は死んだ。スーリヤが知っている小柄な男も、彼女が会ったこともない北嶺の娘も。
「お望みですか？」
「え？」
「つまり……わたしが、伝達官に……」
「おまえは伝達官になりたくないのだろう？　ミアーシャ様から伺っている。無理強いしたりしないから、安心しなさい」
「でも、旦那様が必要だとおっしゃるなら」
思いつめた表情だ。ヤエトは扉から背を離すとスーリヤの頭に手をあてて、少しだけ揺さぶるように

動かした。
「そんなことは誰もいっていない。皇妹殿下のお言葉を忘れたのか？　自分の人生なのだ、自分で選びなさい」
「……はい」
「それに、わたしは竜種ではない。伝達官を持つことはできないよ。そのわたしが、なぜ伝達官をほしいと思うはずがある？　さあ、わかったらもう行きなさい。くだらないことは考えないように」
スーリヤを部屋から追い出すと、ヤエトは元の場所に戻って腰を下ろし、窓の外を眺めた。
やはり空はよそよそしい色をして、彼の心を慰めてはくれなかった。

3

「なんともお待たせしてしまい、面目ないことで」
目の前で平伏している男が、かつて沙漠で名を馳せた盗賊団の一員だったことは、ジェイサルドから聞いて知っている。
戦闘要員ではない。隊商のあいだに入りこみ、噂を集め、盗賊団の手引きをする役目だ。
砂色の髪をした、中肉中背で特徴のない中年男。名をスラジャという。盗賊団の幹部をつとめていた時代には、三枚舌の異名をとっていたそうだ。ついでにいうと、彼の奥方は雌鳥と呼ばれていたらしい。金の卵を産むように資産を増やすのと、せわしなく歩いたり喋ったりしてうるさいところから、そう名づけられたそうだ。昔はあの奥方も、痩せていたのだろう。今では、立つのも億劫そうだが。
なんとも人の善さそうな顔だが、眺めるほどに、信用ならないと思う。騙しの技術は高いはずだ。夫婦あわせて黄金の手と呼ばれたそうだが、無から金を生み出すことは、あり得ない。その陰には、財産を剝ぎ取られた犠牲者がいる。
「どこでなにをしていたのか、報告を」

「場所は、沙漠の際の方になります。ムシュフという村落ですが、耕作地が荒れて植え付けができそうもないというんで、見に行っていました。それと、人殺しがありましたので犯人を捕らえ、裁きました」
こともなげにいわれて、ヤエトは眉根を寄せた。
「耕作地が荒れていたというのは？」
「土地の者は、もう駄目だと申しております。頑張っても収量が減る一方、とても税は納められぬと」
「年々、減っていたのですか？」
「左様です。それで見分に参った次第で」
土地が疲弊している、ということだ。
――塩害かもしれないな……。
少し、背筋がひやりとした。塩害なら、この先の増収は望み薄だ。
「対策は？」
「とりあえず、今年は耕地を休ませます」
「そうではなく、減収への対策は」
スラジャは肩をすくめた。
「難しいですね。あの様子では、まともに播種もしそうにないですし」
その、いかにも考えていなさそうな応対が、ヤエトに決意させた。いや、決意というほど能動的なものではない。口が勝手に開き、言葉がこぼれ出た……と、いうべきだろう。
「それは対策ではない」
「は？」
「対策ではない。感想だ。わたしが訊いているのは、対策です」
ヤエトは立ち上がり、床に座ったままぽかんとしているスラジャに近寄ると、彼の前に膝をついた。
そして、その眼を覗いて尋ねた。
「無策ですか？」
「えっ……いや、これから考えるところで」
「では早急に考えるように。あらためて教えねばならないとは思いませんが、確認しておきましょう。わたしが《黒狼公》です」

「それは……存じております」
「結構。わたしは、北嶺国の相でもあります」
「はい」
「北嶺国は貧しい。援助の必要があるでしょう。その財源に、わたしはここの収入をあてにしているのです。つまり、減収は認められません」
「いや、しかし」
「そうでなくとも、すでに減っているのです」
ヤエトは、手にした書類をぱらぱらとめくって見せた。都で作らせた写しで、天領だった期間の収入の一覧である。幸い、どの部署に行って誰に話を通せば即座に閲覧できるかは熟知していた。
尚書局に入り浸っているあいだに、かつて彼を北嶺に追いやった元同僚との素晴らしく心踊らない再会もあったが、それくらいは我慢すべきだろう。どちらがより不快だったかといえば、ヤエトより向こうだったように見えたから。
「先代が没して以来、下降線を辿りつづけているようですね。その間、あなたがずっと当地の代官をつとめて来た。そうですね？」
「仰せの通りです」
「収入を減らすしか能がない代官を、雇いつづけるような余裕はありません」
スラジャは、がばと上体を折り曲げた。額を床に擦りつけそうな勢いである。
「無能ぶりをさらけ出すことになり、申し開きのしようもございません。しかし、連作をすると——」
「連作をせよと、誰かいいましたか？」
「では、どのようにして」
「それを考え、実行するのがあなたの仕事です。できないというなら、他の人材を探します……で、どうします」
立ち上がったヤエトを、すがるようにスラジャの視線が追った。
「どう、とは……」
「代官をつづけますか？　つづけませんか？　留任

するなら、今後の俸祿は歩合制にしますが」
「歩合、ですか」
「収量が上がるほど、代官としての収入も増えるということです。ああ……歩合といえば、あなたはわたしの評判が上がるように、早急に手を打った方がいいですね。奥方が蠟燭屋に《黒狼公》御用達という看板を使うことを許可したそうなので、追認しておきました。看板の使用料は奥方が徴収済みだそうですが、報告は受けていません。まさか自分の財布に入れるつもりではないと思いますが……それは措いておくにしても、奥方はわたしの許可なく《黒狼公》の名前を使ったことになります」
どう思います、とヤエトはジェイサルドに話をふった。老騎士は冷淡に答えた。
「思慮深いとは申しかねる行為かと」
「まさに。あなたはどう思います、スラジャ？」
相手の顔からは血の気が引いている。
「それは……申し開きのしようもなく……ですが、無知な女のやったこと。どうかお許しください」
「わたしは重大な背信行為と判断します。勝手に名前を使われて金銭的な契約をされるのがどういうことか、奥方にも体験してもらいましょう。今年一年、くだんの蠟燭屋の原料費は奥方が出資するものとします。蠟燭屋の手間賃と、わたしの名前の使用料を引いた利益は、奥方の懐に入ります。売れなかったら丸損です。証書もあります、このように」
ヤエトは懐から出した紙をふって見せた。さっさと自分ででっちあげ、人を遣って蠟燭屋と交渉させた。いや、申し渡しただけのことだ。
スラジャは証書の動きに合わせて首をふり、目を動かした。滑稽な人形芝居でも見ているかのようだ。
「せいぜい《黒狼公》の評判を上げるのですね。その方が、儲かります。一応いっておきますが、原料費に公金をまわしでもしたら、奥方を捕縛することになるでしょう。捕縛だけで済めばよいですがね……過去の所行まで洗いだすと、わたしの一存ではどう

にもならないかもしれない。皇帝陛下がお受け取りになるべきもので、私腹を肥やしていたのだとすれば、の話ですが」

ここまで一気に並べ立てて、ヤエトは代官を見下ろした。男は泣きそうな顔になっている。その情けない表情が妙に似合うのが、おもしろい。

「誤解です、公よ。わたしども夫婦が、左様なおそろしい所行に手を染めていたとしたら——」

「していたのです」

「年々、税収が減っていたことは認めます。税率を上げることもしませんでした。怠慢だったと申せましょう。ですが、民の暮らしをつぶさに見れば、到底、増税を申しつけることなどできませんでした」

「馬鹿らしい。誰が増税せよといいました。はっきりいわねばなりませんか？」

代官は口をつぐんだ。ここでヤエトが、天領の税収を代官夫婦が自分たちのふところに入れていたのではないかと言葉にし、追求をはじめれば、後戻りができなくなる。それは理解しているようだ。

ヤエトは最前の紙束を、振ってみせた。

「帳簿はよくできています。この手腕を真っ当な方向に発揮すると約束できるなら、部下に迎えよう、と話しているのです。そんな技術も発想もありませんでは、話が後戻りするばかりで無駄ですね。我が騎士団長が、今の代官は優秀な男だ、今後も当地を任せるに足る存在だというから、こうして話しているのです。そうでなければ、到着と同時に捕縛して都へ送っていたことでしょう」

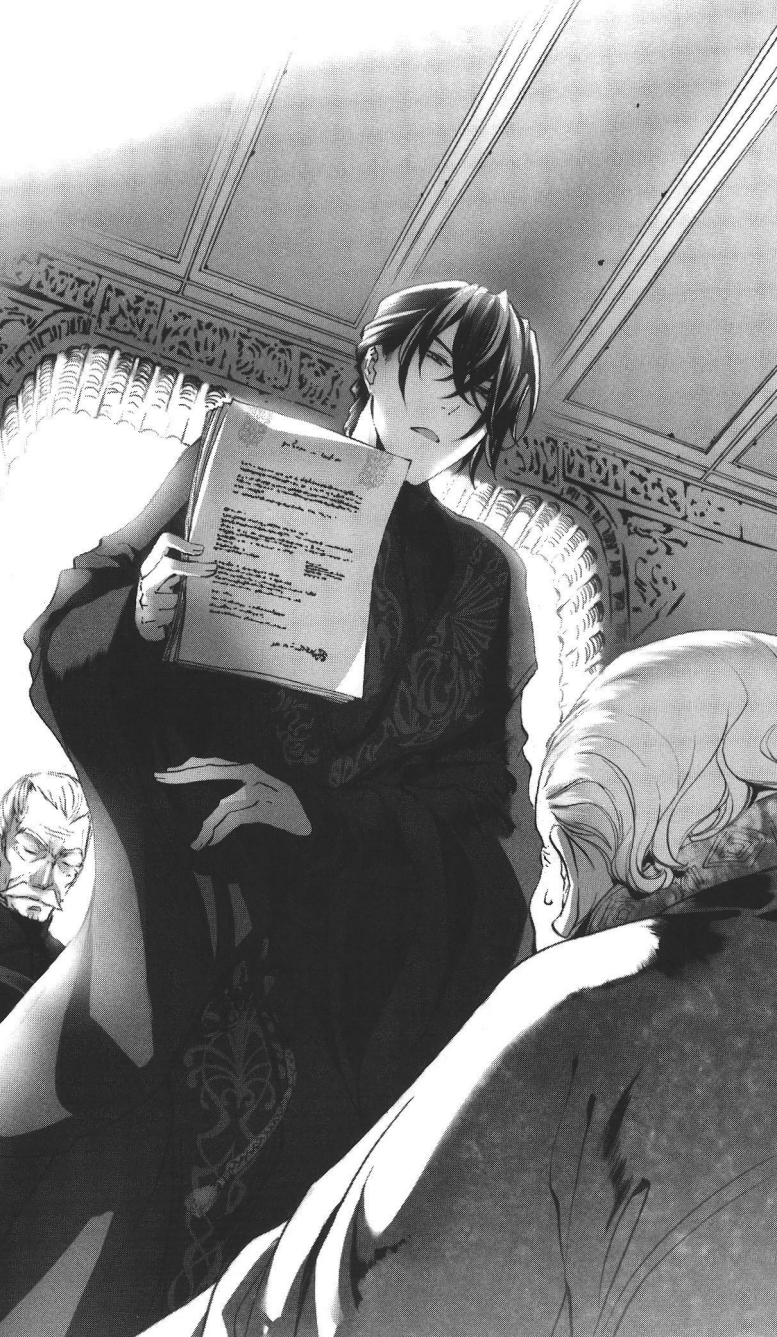
スラジャの視線が、ちらとジェイサルドの方へ動いた。しかし、老騎士の名を呼んだのは代官ではなく、ヤエトの方だった。

「ジェイサルド、この男は素早い決定ができないのですか？」

「儂の一味では、そういう者は長くは生き延びることができませんでした」

一味という言葉に、スラジャの表情が動いた。

ヤエトがジェイサルドの前身を知っていることが、意外だったようだ。迎えに行っておきながら、ジェイサルドはあまり詳しい説明をしていないらしい。自分の機転で生き延びろということなのだろう。
「では、すぐに決めてもらいましょう」
「お待ちください。ひとりのことではありませんので……妻にも話してみないと」
「あなたに会うまで、何日時間を無駄にしたと思っているんです。これ以上は待てません。公私の混同をただちにやめ、今後は誠実につとめると約束できますか。できませんか？」
スラジャはごくりと唾を呑み、うなずいた。
「……公が認めてくださるのなら、今後も代官としてお仕えしたく存じます」
ヤエトはにこりと笑って見せた。
「結構。では、収量を上げるための施策について、建案書を作ってください。できれば明日までに」
「明日……」
「知っているでしょうが、わたしは尚書官の出身です。書類の見方は心得ています。今さらつまらぬごまかしをせぬよう。これまでのことは不問に処しますが、今後については厳しく見ます」
「御意にございます」
「午後には蠟燭屋が出資金を受け取りに来るでしょう。くれぐれも、公金に手をつけないように」
「無論です」
「奥方にもよく説明してください。とくに、今後わたしの名を勝手に使うことがないように」
「仰せのままに」
「行きなさい」
「ははっ」
大仰な動きでひれ伏したかと思うと、スラジャは身軽に立ち上がり、ヤエトの気が変わらない内にと急いで退室した。
やれやれ、とヤエトは大きく息を吐いて椅子に腰を下ろし、近寄って来たジェイサルドを見上げた。



「うまく手綱をおとりになりましたな」
「もっと、やんわりやるつもりだったのですが」
「いや、あの男は図に乗るたちです。下手に出れば、あの善良そうな顔で嵩にかかって参りますぞ」
それは想像するだに鬱陶しそうだ。
「ほんとうに使えるのでしょうね？」
「少し、衰えたようです。以前はもっと気のきいた男でした」
容赦のない評価に、苦笑せざるを得ない。
「上に立つ者がいないと、おこないが弛んでしまうのでしょう。そういうものです。ところで、見に行った土地ですが……耕作できそうもないというのは方便ですか？　それとも事実ですか」
迎えに行ったジェイサルドなら、現地を見たのだからわかるはずだ。騎士は顎をしごいて唸った。
「事実だと思います。無理な連作をさせていたのでしょうな」
「代官は耕作に関する知識が不足しているのかな」
「あり得ますな。根っからの商人です」
となると、再建案もヤエトがきちんと端から端まで見てやる必要がある。
「不思議だな」
「なにがでしょう？」
「貴族というのは、もっと優雅で暇があって……こう……悠々自適の生活が送れるものかと思っていました。つまり、……隠居っぽいというか？」
「そうなさりたいのですか？」
「隠居はしたいです」
即応すると、ジェイサルドは真面目に答えた。
「困りますな。苦労して仕官がかなったというのに」
「一緒に隠居すればどうでしょう」
「魅力的なお話です」
「隠遁所は北嶺の近くにしましょう。鳥を借りれば、好きなところへいつでも行けますしね。でも北嶺だと寒過ぎるから」
「公の所領の山地側に、別荘を作っては」

「残念、そんな余分な金はありません」
「スラジャの奴からむしりましょう」
「夜逃げされますよ。絶対、事前に察知してね」
「ご安心ください。儂の部下だった者で、儂から逃げるのに成功した者はおりません」
なんとなく想像して、ちょっと怖過ぎる、とヤエトは思った。ジェイサルドと会話していて困るのは、ときどき冗談が冗談にならず、剣呑な方向に話が向いてしまうことだ。
それで、もうひとつの話を思いだした。
「人殺しがあったというのは、その耕作ができそうもないという村ですか」
「はい。もともと流れ者の多いところで、住人が一定しないのですが……どうも沙漠に根拠地を構える盗賊団がいるようで」
「どこかで聞いたような話です」
「悪鬼は隊商専門です。村は滅多に襲いません」
つまり、襲わなかったわけではないのだ。
「で、その盗賊団は、捕まったのですか？」
「逃げ遅れた下っ端が。それを処刑して終わりです」
「それでは終わったことにならない」
「まったくです」
あの男はほんとうに有能なのか、と尋ねかけたが、その問いを口にしないまま考えこんだ。
「……盗賊団と取り引きがあるのでしょうか」
「ありそうな話です」
「もしや、昔の仲間だとか」
「それはありません。一味で今も生き延びている者の動静は、すべて把握しています。儂に黙って野盗をはじめる者がいれば、大した度胸ですな」
「こういう話はよくわからないので、助言が欲しいのですが……放置しておいた方がよいですか？」
ふむ、とジェイサルドは考えるようにした。
「当地の現状をつぶさに調べてから決めても遅くはないと存じますが……殿は、盗賊団はお嫌いですか」
「わたしの常識でいえば、そうですね。なんらかの

意義があって必要なのかもしれないと考えることはできますが、嫌かと問われると……嫌としか答えられなくて困ります。わたしは神ならぬ身ですから」

「神、ですか？」

ああ、とヤエトはジェイサルドを見上げた。この男は沙漠の人間だ。西側の宗教観は、理屈の上ではわかっていても、身についているとはいえない。

「全智の神が真に全智であらせられるなら、なぜこの世の不幸を許されるのか、理不尽を見過ごされるのか……と、考えた修行者がいたのです。昔のことですよ。たしか古王国の第二王朝期だったかな」

「修行者ですか」

「修行者です。彼は神に会うために歩きはじめました。神が全智であり、彼の問いに答えてくださるお心づもりがおありなら、彼が辿り着いた先にきっと神はおられる、と信じて」

沙漠には、こういう伝説はないだろう。沙漠でやっても無駄死にするだけだ。

「それで、その修行者は神に会えたのですか」

「歩きに歩いて彼は死にましたが、死に至るまで、ついに全智の神のお姿を見ることはかなわなかったそうです。死の間際に、彼は自身のあやまりに気づいたといいます——神ならぬ身で、善悪を判断できようか。人の一生というわずかな時間、狭い見識で見る世界と、全智の神がご覧になる世界とでは、すべてにおいて基準が違うはずだと」

わけがわからないという顔をしているジェイサルドに、ヤエトは微笑みかけた。

「たとえば、わたしを北嶺に追いやった人間は、間違いなく左遷人事のつもりだったでしょう。ところがわたしは北嶺国の相となり、四大公家のひとつを継ぎました。これは人の価値観でもとらえ得る卑近な例に過ぎませんが、どんな悲劇も、あるいはどんな幸福も、全智の神にとってはひとしく、そこに在るべき光景に過ぎないのではないか、ということです。善悪や好悪、是非の別なく、すべて善しと認め

られれば、神に近づけるのでしょう。でも、わたしには無理だ。世の中、嫌なことばかりです」

ジェイサルドはうなずいた。

「お話はよくわかりました。しかし、すべて善しとしてしまう神を信じて、なにかよいことが……？」

「ありませんよ。全智の神ご自身は、現世にはまったく関係のない存在です。創造者であり、すべてを熟知なさっていますが、我らの祈りに応えることはなさいません。だからこそ、修行者の前にも姿をあらわすことがなかったのです。修行者はそれで納得できても、ふつうはそうはいかない。それゆえに、ことなる名、ことなる力を持つ神々を人は望み、この世に招き……恩寵の力を得ようとしたのです」

「なるほど」

「全智の神は、それも認めてくださいます。なにしろ、すべて善しとしてくださるのですからね」

すべて善し、とジェイサルドは髭の奥でつぶやいた。この老騎士の波乱万丈の人生も、全智の神は善しとするだろう。どれだけの人を裏切り、傷つけ、殺していたとしても。

この世のすべては神に許されている——そう考えることで心休まる者もいるのだろうが、たまに反発したくもなる。

全智の神は、もう少しましな世界を創造すべきだったのだ。極寒とか熱暑とかそういう極端な気候が必要だとは思えない。病の発明もできれば遠慮してほしかった。とくにあの我慢ならない吐き気と頭痛。あんなものを創造する必要がどこにあるのか。

楽園ならぬこの世を創ってしまった全智の神は、その責任をとりもせず、あたたかくも冷たくもない眼差しで世界を眺めているだけ。善し、というのは言葉を変えればそういうことなのだ。

「儂は修行者にはなれそうもありませんな」

「そういえば、アルハンが信奉していた神の名とその力を、知っていますか？」

ジェイサルドはうなずいた。

「清浄神ヤーリルです」
「はじめて聞きます」
「秘神でした」
それは……とヤエトは口籠った。
「すみません」
「公は、謝罪なさってはなりません。お立場をお考えください」
「努力はしますが……わたしは無駄に勇敢で無駄に背が高く、無駄に腰が低い人間らしいので」
「誰かにいわれたのですか？」
「ルーギンに。貴族としてのふるまいかたを教わったのですが、くり返し、叱られました」
ジェイサルドは笑った。
「なるほど。しかし、滅びた国の神を今さら秘する必要もありません。お気遣いはご無用にて。……元来、アルハンに湧いた水は、飲用に適したものではなかったと伝えられます。毒水であったと。人々の渇きを癒すため、清浄神ヤーリルがその血を地上に伝えられた……それがアルハンの王家だそうです」
「それでは、恩寵の力は水の浄化ですか？」
「左様でしょうな。王家の者にとって不浄は禁忌とされ、水源の上に建てられた高い塔を囲む城に住み、一生をそこで過ごしました」
「浄化の力があるのに？」
「それを失わぬため、です。立ち居振る舞い、飲食、着衣、すべてにこまかい規則があったのです」
「お詳しいですね」
「儂は、不浄のものを処理するために城にいたのです。本来なら、不浄を背負って儂自身も処理されるはずでした」
――なるほど、そういう出自か……。
古来、不浄の部分を特定の者に押しつけ、なかったことにしてしまう文化はいくつか記録されている。帝国の中枢では稀薄な概念だが、皇家が寛大に放置している異文化の中にも、それは観察できる。
「処理されなくて、なによりでしたが……波乱万丈

の人生を送っておいでだ。語り物にしたら、きっと受けますよ」

「失礼ながら、公もかなり珍しい人生を歩んでおいでかと存じます。それこそ語り物になりそうな」

ヤエトは苦笑した。なるほど、一介の尚書官から皇女の副官、そして《黒狼公》へと短期間で出世したのは珍しかろうが、高熱を発しては倒れているのでは、英雄物語の主人公にはなれそうもない。

「結末が、隠居していつまでも幸せに暮らしました、で終わるならよいのですがね。ところで、なんの話をしていたのでしたっけ？」

「盗賊団の存在を見過ごすか、ですな」

「そうでしたね。人を遣って調べてもらえますか。被害の実情など……代官や部下の誰かと繋がりがあるのか。所行は、見過ごせる範囲のものかどうか。そのあたりから確認しましょう」

ジェイサルドはうなずいて、そういえば、と口を開いた。

「思いだしました。アルハンの毒水ですが……」

「なにか由緒でも？」

「邪竜の血だというのです。以前、お話ししましたかな。邪竜が天界から墜とされたことで、地上が焦土と化し、沙漠が生まれたという——あの邪竜の心臓が、アルハンの地下に眠っているというのです」

「そんな伝説があるのですか」

初耳だ。やはり沙漠の伝説は、もっと調べねばならない。せっかく地理的に好条件な位置にいるのだ、今の内にせっせと聞き取りをしたいものだと考えているヤエトに、ジェイサルドは尋ねた。

「どう思われます？」

「どう、とは？」

「アルハンは滅び、浄化は止まりました。邪竜の血はどうなるのでしょう。子ども騙しのまじないが人を殺し、原初の魔法がよみがえるという予言がまことであれば、ひょっとすると、なにかおそろしいことが起きるのではありませんかな」

4

厩舎が用意できたと報せると、翌日には北嶺から騎士がふたり、やって来た。

鳥たちは北嶺の宝だが、飾り物ではない。使いこなしてこそ意味がある。そのための馴致訓練だ。

長距離飛行の体力配分は、経験で学ぶしかない。ただでさえ、冬場の鳥たちは運動不足だ。北嶺が本格的な春を迎えるにはまだ二か月ほどあるが、峠が不通でも空は通れる。迷子にならぬために、季節や天候に左右されづらい目印も策定したい。北嶺へ戻る方は鳥にまかせれば心配ないが、それ以外の方向を指示するのは人の役目だ。騎士にも訓練がいる。

厩舎は、都と《黒狼公》領の双方に新設した。中継基地が必要だと考えてのことだ。

位置を覚えさせることができれば、鳥だけを遣ることも可能になる。《黒狼公》邸の周辺は鳥がいるものと民が見慣れれば、危急の使者を飛ばしても、いつもの光景だと見過ごされることもあろう。

「なかなか結構な砦です」

エイギルの第一声は、それだった。鳥の体調によるが、彼と部下はここに二泊する予定だ。

「上空から見て、そう思いますか」

はじめての鳥の到着ということもあり、ヤエトは厩舎まで迎えに出ていた。都とは違って民が恐慌を来すこともなく、そっと胸を撫で下ろす。

「はい。川から少し距離があるのが惜しいですが……氾濫するそうですね」

「街は水浸しになってもある程度なら大丈夫とか。舟の備えもあるらしいですよ」

「それで厩舎も街壁の上ですか」

「鳥たちが、水浸しになるのを楽しんでくれるかどうか、自信がなかったのでね」

エイギルは笑った。

「泳げるかどうか、試してみますか」

「もう少し気候がよくなってからにしてください」
今日は日が翳っていて、風も冷たい。早く降りたかったが、エイギルはまだ動かない。
「ここも塔が多いですね」
「それもあって、街壁の上にしたのです。ただ、籠城戦になることも考えて、内側にもなにか用意するつもりです。邸の露台も使えます。高さはありますが、二羽も並べばいっぱいになってしまう」
戦になるなど考えたくもないが、それを想定しないわけにもいかない。騎士も、なんの疑問もなくその仮定を受け入れて答えた。
「作るにしても、簡略なものでかまわないと思います。どうせ長居はできないのですし。ところで……今さらですが、叙爵おめでとうございます」
ヤエトはわずかに眼を見開いた。そういえば、エイギルと言葉をかわすのは、新年祭に出席するため北嶺を発って以来だ。
「ありがとうございます」
「相変わらず、めでたくもなんともない、というお顔をなさっておいでだ」
その通りだが、立場上、本心を公言するわけにはいかない。ヤエトは素知らぬ顔で返した。
「エイギル殿こそ、わたしなどに会うより、都で家族の顔を見たいという顔をなさっておいでですよ」
「とんでもない！　いや、家族には会いたいですよ、無論。しかし、都には六日ほど前に行きました」
そこでエイギルは姿勢を正し、表情をあらためた。
「奥に、聞きました。養子のお話をいただいたと」
「おふたりで話し合われましたか」
「はい」
「どう思われますか。奥方には、好きにしろといわれてしまいましたが……正直なところを伺いたい」
エイギルは少し言葉に詰まったようだったが、すぐにヤエトの顔を見て、はっきり答えた。
「わたし個人の考えを申せば、息子に《黒狼公》家などという重荷を負わせたくありません」

「重荷、ですか？」
エイギルがそんな考えかたをするとは思いもよらず、声に意外さが滲んでしまったかもしれない。騎士は少し笑って、言葉をつづけた。
「わたしは親の家名を名告っていますが……家名は兄が継ぐと決まっていました。ただ、沙漠を越えたことで、ね。勝手に名告ってもよいような風潮ができてしまって。わたしもそれに倣った。下級貴族は、おおかたそうです。皆、陛下のお供をつかまつれと送り込まれた、捨て駒扱いの息子たちですから」
自嘲を含んだ声だったが、ともに笑えるような内容ではなかった。
――想像したこともなかった。
いわれれば、理解できる。
出兵当初、皇弟は名誉ある死を求めているのだと思われていた。沙漠越えの目論見を知っていたのは、ごく一部の名家の当主のみ。下級貴族は知るはずもない。
当時、エイギルはまだ少年だったはずだ。戦力といえたかどうか、あやしい。それでも彼は家名を背負って参集する騎士の列に並んだのだ。自分がけっして継ぐことのない名の、名誉と誇りのために。
「……白状すると、先代のお邸に出入りしたのは、栄達を狙ってのことでした。あのかたに認められれば、こんな偽物の、いいかげんな家名でも……高められる気がした。当時は、それを望んでいたのです。でも、……今はわからなくなりました。家名が大きく、重くなるほど、人はそれに引きずられる。わたしの家でさえ、息子の命で購わねばならない名誉があった。それが、四大公家ともなれば……」
そこでエイギルは言葉を切ったが、ヤエトはなんとも返すことができなかった。
目眩がした。
彼は思いだしていた――燦然とかがやく騎士たちの武装が砂埃に覆い隠されていくのを最後尾の馬車から眺めていた、あの日。自分自身も捨て駒だと感



じていたはずだった。犠牲の死者の行軍だと。

——忘れていた。

考えもせず、記憶が風化するにまかせていた。

視線を落とすと、街壁の下へつづく階段が見えた。地上では、深い影のあいだを人々が行き交っている。ひとつずつ踏みしめて上って来た過去を、どれだけ忘れてしまったのか。意識にものぼらないまま、しかし、階段はそこにある。過去は待っている。

——今のわたしに見えているのは、壁の上だけだ。

「失礼を申しました。公に向かってこんな——」

我に返ったエイギルが恐縮するのを遮り、なんとか微笑を浮かべて見せた。気を悪くなどしない。自分の想像力のなさに、うちのめされただけだ。

ルーギンの話を聞いた時点で、もっと察するべきだった。貴族社会の話はもう他人事ではない。

「気にしないでください。わたしも同感ですよ」

ヤエトは騎士の腕にかるく手をかけ、行きましょう、と街壁を降りるようにうながした。

「会って早々、面倒な話題を持ち出してしまいました。路傍で話せるようなことでもないのに。スーリヤが、あなたに会うのを楽しみにしていますよ。あのミアーシャ様の結婚相手は、どんな人だろうと」

「ああ、例の娘ですね。聞きましたよ。見目も気だてもよいというではないですか。どうなんです、氷の尚書官殿も、雪解けの季節を迎えそうですか？」

「またそういうことを……」

「その娘は尚書官殿……いや失礼、公にぞっこんだとか。奥にさんざん聞かされましたよ。男に襲われかけたところを、公が助けてやったそうですね。それも、熱を出して寝てらしたのに」

「熱を出しているときに、人助けは無理です」

エイギルは眉を上げ、いやいや、と指をふった。

「公なら関係ありません。どうせ、熱があるからやらないといっていたら、なにもできなくなってしまうとか、そういう風にお考えになるでしょう」

「わたしはそんなに勤勉な人間ではありません」

「そう思っておいでなのは、ご自身だけです」

エイギルは素晴らしい人物だが、ときどき非常に鬱陶しい。邸に戻り、エイギルと同行の騎士の世話をするようにと召使いに指示を出すと、ヤエトは伝達官のところへ向かった。騎士と鳥が無事に到着したことを、北嶺に報せておかねばならない。

伝達官との関係は、近くもならず遠くもならずで、まったく進展がなかった。修行も、あまりうまくいっているとはいえない。呼吸法を会得するだけでも大変なことだ。伝達官は、もうこのまま呼吸が止まって死体になってしまうのではないか、と思うくらい呼吸を遅くするのだ。ヤエトにはとても真似られなかった。制値法も自分ではうまくいかず、ただ、以前よりはっきりと竜気の流れを視ることができるようになった。竜気は伝達官自身の身体をとりまいているが、その根はどこか別の場所から来ているようだ。どこかというのはこの世ではなく、この世ならざる場所だとしかいえない。

——これが、封じが弱まったということか。

去年、幻視で語られた予言を正しく解釈できているなら、そういうことだ。女王を滅ぼすために、神の力は封じられた。それはきっと、悪神だけを封じて遠ざけるというような都合のよいものではなかったのだろう。すべての恩寵の力は根源から切り離され、消滅はしないまでも、弱まった——その封じが消えるときが、近づいているのだとしたら。

対処法も教えてくれ、とヤエトは思う。それも、できれば自分とはまったく関係のない、英雄にふさわしい人物に教えてくれるのがよい。いや、きっと英雄はすでに生まれており、必要な知識を教えこまれて、その日にそなえているのだろう。

そうであってほしい。

とにかく、恩寵の力が暴走するたびに倒れるのは、自分の体力だけで支えているから、という仮説は正解のようだ。次は力を得る方法を発見すべきだが、皇家の神と古王国の神は違う。伝達官の真似をして

も、必要な力の源泉に辿り着けるとは思えない。
ひとつ、おもしろい発見があった。制値法の訓練に必要な手順を踏むと、伝達官は心話の力を発動させてしまう。そのときに、妙な顔で告げられた。
——民の心は、見えずさわれずと学びました。ですが、わたしが公になにかお伝えしようとすると、明確な壁に阻まれます。それでいて、公がこちらになにか報せてくださろうとするときは、伝わってくるものがある……一方にだけ流れる水のようです。
うちとけない伝達官が、これほど長く喋るのは珍しい。よほど異常なことなのだろう。
おそらく、手を繋げばヤエトが幻視したものを皇女に伝えることができる現象と根は同じだろう、と思う。ヤエトの先祖は、幻視の力を皇祖に捧げるにあたり、視たものを伝えるための力も手に入れたに違いない。おかげで、ヤエトは竜気にあてられやすいが、その作用を視ることができてしまう。
——陛下と陛下のご一族は、我が一族を守り育ててくださるお約束です。
先祖が一身を捧げてとりつけた皇祖との約束は、守られたといってもよいのだろう。現に、ヤエトの代まで一族は生き延びている。とくに引き立てられもしないが、と考えかけてヤエトは顔をしかめた。
引き立てられ過ぎの男が、若干一名。自分だ。
ため息をついて、彼は扉を叩いた。
「伝達官殿」
黒衣に紫の肩衣を着けたいつもの姿で、伝達官は自室にいた。ヤエトの居室の隣だが、伝達官の部屋から物音が聞こえたことがない。彼が見ていないときは呼吸もしていないのではないかと思う。
「騎士二名と鳥が二羽、無事に到着したと北嶺に連絡をお願いします」
「はい」
「それと、かれらと晩餐を共にしていただきたい。騎士たちの顔と名前を覚えていただきたいので」
「わかりました」

やわらかな口調だが、どうしてこう、よそよそしく響くのか。

「では、よろしくお願いします」

ヤエトは早々に伝達官のもとを退散し、街壁の上にある厩舎へ向かおうとした。鳥の様子が気になったからだが、途中で代官に声をかけられた。

「殿、こちらにおわしましたか」

初対面で強気に出たのがよかったのか、スラジャは従順だ。裏でなにをやっているかはわからないが。

「村落別の戸籍ですが、最後のものが揃いました」

作り直せと命じてすぐに、スラジャは部下を派遣した。それも、あやしいところは二重に調査させるほどの念の入れようだ。迅速に進んでいるようだから部下も有能なのだろうし、どの人材をどこに投入するかの決断がうまいのもあるに違いない。この男には、人を使う才覚があるようだ。

ヤエトは、自分の欠点はなんでもすぐ自分でやろうとしてしまうことだと思っている。スラジャには、大いに学ぶべきだ——たぶん無理だが。

「耕地面積の調査結果も、少しずつ上がって来ています。作物も……不勉強を思い知りました」

手渡された紙束をぱらぱらとめくってみると、土地の作物らしく、名前がわからないものがいくつかあった。二割ほどが、正体不明といったところだ。

「都以外に、種子の仕入れ先は？」

「このあたりの、乾燥に強い作物は——」

スラジャが示したのは、ちょうどヤエトが知らない名前が並んでいるあたりだ。

「——都では買えません。土地の特産ですから」

「種子の備蓄は？　不作にそなえていますか」

「それは……未確認ですが、たしか」

「質と量を確認してください。古いものは播種の時期に安値で売り、収穫期に新しい種を買い直すように。売買の価格と取り引き相手には気をつけなさい。必要な者との直接取引を原則とし、転売で利鞘を稼ぐ者が出ないよう、監視の強化を」

「仰せのままに」
「それと、いざというときに買い付けができる先を開拓すべきですね。博沙国あたりはどうです？」
「わかりました、調べさせます。それから用水路ですが、三名に試案を出させました。図面はお部屋に置いてあります。二日後、本人たちにそれぞれ説明をさせます。よろしいでしょうか？」
「結構。手配してください」
「ではそのように。それから、蠟燭ですが」
「売れていますか」
「それはもう、春先の洪水のように」
満面の笑みに、つられそうになってしまう。ほんとうに、食えない男だ。
「奥方が、さぞお喜びでしょう」
「頑張っておりますよ。出資金を三倍にして取り戻す予定だそうで。近年稀に見る本気っぷりです」
「あまり無茶な売りかたをすると、短期的には儲かっても、その先の商売がつづかないのでは？　公家の看板を貸しているのですから、家名をそこなうのは許せませんが、おわかりでしょうね」
「それはもう。殿の評判を上げることばかり、日夜考えているようです」
どうやったら蠟燭が洪水のように売れるほどの評判を取れるのか、ヤエトにはさっぱりだ。それよりも、春先の洪水という言葉の方が気になる。
「ところで、洪水の季節は春なのですか？」
「はい。山脈の雪解けの水なのでしょうが、タグワーンの増水は急で、事前に察するのが困難です。冬のあいだの積雪の量にもよるのでしょうが、山の方が急にあたたかくなると、あふれるようで……」
ヤエトは微笑した。
「それは、今年はある程度は先読みができますね」
「えっ、……ああ、なるほど。北嶺と連絡が取れるからですね。どれくらいの精度で予測できるでしょう。洪水の害があるとないとでは大違いです」
「どうかな……積雪の量や、例年との気温差も、観

測して記録を保存しないと比較ができませんからね。今年はあまり期待できないかも」

スラジャの顔が、くしゃっと歪んだ。なんてひどいことを、という表情だ。

「そんな！　喜ばせておいて、それはないです」

「殿」

横合いから声をかけられ、ヤエトはふり返った。ジェイサルドだ。少し、難しい表情をしている。

「どうしました？」

「博沙王の使者と名告る者が参っております」

ヤエトは眉を上げた。博沙王とは第二皇子のことだ。向こうが先に人を寄越すとは思わなかった。

「用件は」

「殿に直接、お話しすると」

ただの挨拶ではなさそうだ。いったいどんな面倒を持ち込まれるのか、と今から暗い気分になる。

「なんだと思います？」

代官は首をふるふると左右にふった。

「存じませんよ。ここでのおつとめも長いですが、二の君が王として封じられて以来、博沙から使者が来たことなどありません」

ますます剣呑だ。ヤエトはジェイサルドに視線を向けた。老騎士の表情は厳しい。

「公のお命を狙う刺客ということも考えられます」

「……わたしを殺してなんの得が」

ジェイサルドとスラジャは顔を見合わせた。口を開いたのは、スラジャの方だ。

「あちこちが、いろいろと、でしょう」

「奥方が、出資分をちゃらにするために、とか？」

「あいつは殺しには手を染めません」

真面目な顔でいわれて、ヤエトは返答に困った。罪のない冗談のつもりだったのだが。

「なんにせよ、会うしかなさそうですね」

「ご安心を。殿には指一本ふれさせません」

「ただの使者である可能性の方が高いでしょう。そう意気込まなくても」

「襲撃するより、護衛する方が困難なのです。気を入れねば、出し抜かれます」
相手は第二皇子の使者である。うっかり怪我でもさせては、大問題に発展しかねない。
「わたしのことなら、心配しなくて大丈夫です」
ジェイサルドは無言でヤエトを見、スラジャが代弁を買って出た。
「殿を心配するのが我々のつとめなんです。なんでって、殿はご自分のことを心配なさいませんからね。心配されるのがお気に召さないのも承知の上ですが、どうしようもありません」
「使者に会うのに、いきなり斬りつけかねない勢いを見せられては困るのです」
「勢いがなければ人など殺せません」
答えたジェイサルドは、真顔である。
ヤエトは額のあたりを手でさすり、自分を落ち着かせようとした。熱意はありがたいが、どうしてこう極端かつ剣呑な方に話が向いてしまうのか。
「とにかく、穏便に済ませましょう」
歩きはじめると、ジェイサルドは彼に従った。スラジャは走ってどこかに消えた。使者を迎える用意があるのだろう。
「なんだと思います？」
同じ問いに、ジェイサルドはさっきとは別の答を用意していた。
「様子見であればよいのですが、なにか先方に問題があるのやもしれませんな」
ヤエトは考えこんだ。第一皇子が最有力の皇位継承候補であることは否めないが、第二皇子を支持する勢力も、黙ってそれを認めはしないだろう。第三皇子の陰謀からようやく逃れたと思ったら、今度は第二皇子に巻き込まれるのか。
「ジェイサルド」
「はい」
「やはり山地に別荘を建てて隠居しようと思うのですが。そこまでは二の君の使者も来ないでしょう」

「命じられればどこへでも参りますぞ、使者は」
「夢のない回答ですね」
「それは失礼を。次の機会がありましたら、夢いっぱいに答えてみましょう」
ジェイサルドの夢いっぱいな回答とはどんなものか、と想像をたくましくする内に、使者が待たされている部屋に着いた。扉を守っているのは一般兵ではなく、騎士たちである。
かれらの給金を払えるまでは、生き延びねばならないなぁ、とヤエトは思った。支度金は与えたが、正式の手当は税収がまとまる秋の収穫期に支払うのが慣例である。最低でも半年か。まったく、他者に責任を持つとは面倒なことだ。
「使者は中か？」
「はっ。正副の二名です」
「護衛は外で待たせてあります。儂の知っている顔はおりません。使者もです」
ジェイサルドがささやいた。なるほど、それで刺客の可能性を疑っているわけだ。
「わかりました。開けなさい」
騎士が扉を開き、ヤエトは自分に威厳があると思おうとしながら歩を進めた。どうせ、ぽっと出の若造と見られるに違いないのだが、だからといって、若造でございますという態度を示すわけにもいかない。だいたい、若造なのは見た目だけで、実際は精神的にも身体的にも隠居老人級なのだ。
使者たちはヤエトの入室を起立して出迎えた。一方は見るからに帝国貴族、もう一方は沙漠の民のようだ。どちらも頭に紗をかぶって額環で留め、前だけを撥ね上げて後ろに流している。沙漠の民の正装だが、砂礫を避けるために発達したものらしい。
ヤエトは奥の椅子に座ると、使者たちにも着席をうながした。
「お待たせしました。わたしが《黒狼公》です」
あっさり名告って彼は使者たちを眺めた。次はかれらの番だ。まず、沙漠の民の方が口を開いた。

「我々は博沙王の使者です。わたしは副使のシャーダワーン、こちらは正使の――」

水を向けられてようやく、正使といわれた方の男が大儀そうに名告った。

「《赤犬公》家のギスケルと申す」

――十二大公家のひとつじゃないか。

当主なら名を名告らず家名だけで済ますし、一族の者ならよほどの近親者以外は家名を使わない。だから、ギスケルは現当主の息子か兄弟といったところだろう。だが、これはおかしな話だ。十二大公家は、第一皇子を支持している。なぜ、家名を名告るような立場の男が、第二皇子の配下に？

内心の混乱を押し隠し、ヤエトは話をうながした。

「早速ですが、ご用の向きを伺いましょう」

副使は正使を見てから口を開いた。

「英明と名高い《黒狼公》にお会いでき、直接お言葉を賜る機会を得たことを光栄に存じます。我が主君、博沙王より、このたびの叙爵にあらためてお祝いをと……気もちばかりの品ですが、まず目録を」

副使が差し出した巻き物を、ジェイサルドがすかさず受け取った。指一本ふれさせないというのは、本気のようだ。目録はまかせることにして、ヤエトは返礼の言葉を捻りだした。

「非才の身ですが、陛下より賜った御厚情にお応えすべく、努力して参る所存です。博沙王様からも過分なお心づかいをいただき、感謝の念に耐えません。しかし……それだけのことで、遠路をはるばるお越しくださったわけでもないのでは？」

「ご明察です。実は、博沙国で強盗をはたらいた罪人を追って参りました。我々は博沙王の使者でもありますが、同時に捕吏でもあるのです」

「捕吏」

思わず復唱してしまったが、言葉を遮られても副使は礼儀正しくうなずいただけで、不快は見せない。

「はい。左様でございます。そこで、公にお願いしたき儀がございます。我々に、貴領にて罪人を捜索

するための便宜をはかっていただきたいのです。また、くだんの男を発見した場合にはこれを捕縛し、博沙国に連行することをお許しいただきたい。我が王より託された書状があります。委細はこちらに。どうぞお受け取りを」

副使の口上にあわせ、正使が懐中から巻き物を取り出した。ジェイサルドが進み出て、恭しい態度で受け取った。皇子の書状である。目録と違って、粗略な扱いは許されない。さっとあらためると、騎士は巻き物をヤエトに差し出した。くるりと巻かれた紐は朱と金の組み合わせで、皇家の徴である。紙には竜紋の透かしが入り、上質な手触りだ。

意外ではあるが、筋は通っている。《黒狼公》の主権を重んじ、許可をとりつけようと考える第二皇子は、慎重な政治感覚の持ち主のようだ。

ただ、これがすべて嘘でないという保証はない。領内を自由に移動し、調べる許可を与えてしまえば、どうぞ諜報活動をしてくださいとお膳立てをするようなものだ。罪人が逃げたというのが嘘でなくても、口実にしているだけかもしれない。

「長旅で、お疲れでしょう。急のこととて大したもてなしもできませんが、部屋を用意させますので、暫しそちらでお休みください。お申し入れへの返答は後刻ということで。よろしいですか？」

「結構」

尊大に答えたのは、正使の方だ。ヤエトよりよほど偉そうだ。さすが生まれついての貴族は違う、と妙なところで感心してしまう。

「殺気はありませんでした」

部屋を出るとすぐ、ジェイサルドが低く告げた。

「罪人が逃げたという話の裏は取れますか」

「部下に調べさせれば、おそらく……ただ、もう少し詳しい罪状など聞きませんと、あの話だけでは。それに、時間もかかります。往復に、どう頑張っても六日はかかるでしょう」

鳥を使えれば速いが、あれは目立ち過ぎる。言葉

を疑われたとあっては使者の面目が立たず、侮辱したのされたのという話になる。正使が十二大公家の名を出しているのが、ここで効いてくる。博沙国のみならず、《赤犬公》家も敵に回すことになりかねない。

「……あの《赤犬公》家が本物かどうか、晩餐の席で騎士たちに見分させましょう。エイギルに事情を話してください。我が騎士団からも、適任がいれば同席を。わたしは、これを読んでみます」

ヤエトは自室に戻り、あらためて書状を眺めた。紐の結び目は金泥でかためられ、竜をかたどった印が押してある。これが偽造なら竜種を騙ったことになり、関係者一同の首が派手に飛ぶ大罪だ。

なんとなく、ため息が漏れた。

かかわりたくないが、そうもいっていられない。ヤエトは封を切り、紐をほどいて書状を広げた。

第二皇子は能書家なのか、よい書記を雇っているのか。流麗な筆跡である。叙爵を祝う言葉につづき、使者の説明通りのことが書かれている。よしなにはからってほしいという言葉と大仰な署名、捺印。罪状の説明は別紙が添えられていた。皇子が目を通したという意味で、書状と同じ印が捺されている。賊は、沙漠に面した防衛線をなす小さな塞のひとつを襲ったらしい。守備兵数名を殺害し、食料の一部と金銭、武器などの装備を奪ったという。

――兵を殺し、軍の備品を奪う賊？

叛乱、という言葉が思考の隅にちらつく。

沙漠の辺縁部には、帝国への怨みを呑んで生き延びた者が少なくないはずだ。沙漠越え当時はたまた故郷をはなれていて難を逃れた者、人種的には沙漠の民でなくとも姻戚関係で結ばれていたなど、縁のある者が帝国に復讐を誓っても、おかしくない。

実際、《黒狼公》領でも「沙漠の方から来た」盗賊の害が報告されている。他人事ではないのだ。

――誰かが庇っているのかもしれないな。

ジェイサルドやスラジャだけでなく、ヤエトは先

代の遺臣たちを数多く抱えている。かれらの七割ほどが沙漠の出身だ。すでに隊商路を頻繁に往来していたという先々代の頃から、未だ帝国の威に服さない異国の民を積極的に雇っていたのだろう。

配下には、沙漠の民に同情的な者もいると仮定すべきだ。問題の逃亡者を巡って、第二皇子の部下たちと揉めでもしたら、どうなることやら。

「面倒くさい……」

すっかり口癖になった言葉をつぶやきながら、ヤエトは書状を見直した。第二皇子の署名は、もちろん本名ではない。二を意味する聖音ウィダが彼の呼び名であるが、それをどうやら古い文字で書いてある。帝国古来の文字で、考案したのは皇祖だと伝えられるが、この話はあやしいとヤエトは思っている。後づけの伝説くさいのだ。権威を持たせるためにやったことだろうが、そういうわけでこの文字には興味が湧かず、きちんと学んだことがない。直線が多く、単純だが猛々しい印象がある。

ヤエトはその署名をじっとみつめた。

——最近、こういう文字をどこかで見たな。

都だろうか……いや、都ではない。ここに来てからか？　先代の遺品にでも紛れていただろうか。

彼は、ため息をついた。こんなことを考えている場合ではない。部屋を出ると、隣室の扉を叩いた。伝達官はいつも通り、静かにそこに座っていた。

「なにか？」

「王とお話ししたいのです。できれば、臨で」

少し待ってから、伝達官は答えた。

「姫様は、今はご都合がよろしくないと仰せです」

「では、これだけお伝え願えますか。たった今、博沙国から使者が来て、我が所領に逃げた罪人を探すという名目で、その使者の行動の自由を要求されました。差し支えなければ、《天地輪》において二の君や博沙国がどのような状況であると説明されているか、詳しく伺いたいのです」

伝達官は少し遠くを見るように視線を泳がせた。

呼吸が遅くなったのがわかる。心を繋ぐためには、違う時間を生きているような状態になります、と伝達官は説明していた。今、彼女はその境地にいる。

訓練の成果は、ヤエトが恩寵の力を使う役に立つというより、伝達官の様子を見ればだいたいの状況がわかる、という方に発揮されているようだ。

伝達官の呼吸が乱れたときも、ヤエトは即座に異常に気づいた。

——なんだ？

伝達官の頬に赤味がさした。表情は暗い。困惑しているというより、もっと深刻な色合いを感じる。

「申しわけありません、今はお忙しいそうで」

「切れたのですか？」

「はい」

皇女は《天地輪》の話をしたくないのだろうか。いつも、忙しいとか後刻またとかいうばかりで、ちっとも具体的な内容を教えてもらえない。

——これは、駄目だな。

向こうの都合が悪くなるたびに通信を切られてしまっては、どうしようもない。エイギルにたのんで、北嶺に連れて行ってもらおうか——そんな考えが浮かぶと同時に打ち消した。よりによって今、ここを空けるわけにはいかないのだ。博沙国の使者に回答を与え、事態の推移を見守る必要がある。

遺憾だが、北嶺は後回しだ。

「わかりました。どうもお手数をおかけしました」

彼は伝達官の部屋を出ると、そのへんを歩いていた召使いを捕まえて、エイギルの部屋へ案内させた。

騎士が立ち上がろうとするのを制し、ヤエトは自分も彼と向かい合って座った。

「ジェイサルド殿より、お話は伺いました。《赤犬公》家のギスケル殿なら、面識があります。現《赤犬公》の末の弟君にあたられたはず」

「それはたのもしい」

——これは、まず間違いなく本物だな。

家名を利用したいだけなら、ヤエトの無知につけ

こんで、実在しない人物を名告るだろう。ミアーシャの手紙にあった、《銀鷲公》が十二大公家の切り崩しをはかっているという噂と関係があるだろうか。

エイギルはヤエトの顔をしげしげと眺めて評した。

「お顔の色が、あまりよくありませんな」

「ええ、いつもの通りに。ところで、夕食が終わったら飛べますか」

「それは、ご命令でしたら」

「命令です。都へ行ってほしいのです」

エイギルの表情が引き締まった。

「目的は？」

「二の君に関連する噂があれば、逐一教えていただきたい。些末なことでもかまいません」

「それを奥に伝えればよろしいのですか」

「はい。奥方には、あまり深入りせぬよう……」

「それは、いうだけ無駄でしょうな。張り切っておりましたから」

そういうエイギルも、なにやら生き生きしている。

どうしてこう誰もかれも仕事をまかされると張り切るのだろうか。ヤエトなら、まずげんなりする。

「鳥が保つようなら、戻って来てもらえますか」

「大丈夫だと思います」

「同じことを、わたしの家宰にも伝えねば。書面にして、後ほどお渡しします。夕食は、たっぷり食べてください」

「期待しております。そうそう、スーリヤに会いましたよ。素直な娘ですな」

雑談をしている暇はないのだが、と思いながらヤエトは応じた。

「奥方の教育がよろしかったようで」

「あの娘の血は、どうやら《銀鷲公》の筋らしいと奥が申しておりました」

ヤエトは腰を浮かせかけた姿勢のまま硬直し、あらためてエイギルの顔を見た。

「なんですって？」

「そんなにおどろかれなくても」

「いや、しかし……あの娘は」
　娼館にいたところを第三皇子の家宰に買い取られ、ヤエトが手込めにするのを期待して側に置かれたのだ……とは、いえない。
　ヤエトが絶句しているのをどうとったものか、エイギルは暢気に言葉をつづけた。
「召使いだったそうですね。《銀鷲公》はお認めにならないでしょうが、間違いありません。奥が調べ上げました」
「どうやって」
「血に訊くのです。占術ですよ。ご存じないですか」
「知りませんね」
「昔はわたしも馬鹿にしていたんですがね。最近は的中率が高くて、とても無視できません」
　そういう時代だからだ、と考えてヤエトは顔をしかめた。嫌なことを思いだしてしまった。
「左様な占いをする者がいるのですか？」
「貴婦人のあいだで流行しておりましてね。なさぬ仲の子ではないかと疑われたとき、潔白を証明するのに使うとか。ほとんどは、お遊びらしいですが」
「……母親が誰かはわかっているのですか？」
「え？　いや、それは調べていないと思いますね。貴族の血がどこから来たかを読んだだけで」
　ヤエトは息を吐き、今度こそ立ち上がった。意外な話だったのでつい乗ってしまったが、こんなことをしている場合ではないのだ。
「なんにせよ、子どもを売りとばした親です」
「そうとばかりも限りませんよ。攫われたということだって、あり得ますからね」
「申しわけありませんが、わたしは他に仕事がありますので……」
　エイギルは苦笑した。
「申しわけないなどと……ご依頼の件は、しかとうけたまわりました。あとひとつ、わたしの好奇心を満たしてくださいますか」
「なんでしょう」

「使者には、なんとお答えになるおつもりで」
ヤエトは即答した。
「要求を認めるしかないでしょう」
よほどの事情でもない限り、筋の通った話を持って来た使者を追い返すことはできない。その、よほどの事情が発生していないかどうかを皇女に確認したかったのだが、返事は得られなかった。
エイギルを都へ送るのは、念のためである。いくら鳥が速くても、彼が戻って来るまで使者への返答を保留するわけにもいかない。
ヤエトにできるのは、かれらに護衛という名の監視役をつけることくらいだ。
「罪人というのは、なにをやらかしたのです？」
「塞を襲って兵を殺し、武器や食料を奪って逃げたとか。食事のときに、もっと詳しい話を聞けるかもしれませんね」
齟齬やごまかしがないか、確認したい。エイギルはヤエトの意を汲み、うなずいた。
「聞き出します」

5

翌日から、副使は精力的に動きはじめた。
正使のギスケルの方は、邸から出ようという気配すら見せなかった。全体にただよう、やる気のなさといったら。感心させられてしまうほどだ。
彼が熱心になるのは食事くらいかと思っていたら、どうやら色ごとにも熱意を抱くらしい。邸で雇っている女官の数はあまり多くなく、若くて見目がよいとなると、三人くらいのものである。その三人が三人とも、ギスケルの応対を嫌がりはじめた。
「給仕は男にさせればよいでしょう」
代官に相談されたヤエトは、あっさり答えてから視線を上げた。
スラジャは困惑している。
「なにか問題でも？」

「ありていに申し上げれば、女を寄越せといわれております」
「相手をしてくれる女くらい、自分で捜せばよい」
「……そう申し上げますか？」
「わたしの邸の外で、と申し上げよ。それと、領民から苦情が来たら、博沙王に正式に抗議するともいっておけ。わたしが受け入れたのは、罪人を追って来た捕吏だ。放蕩者の手助けをする義理はない」
スラジャは首をすくめた。
「殺されそうです」
「あなたも荒事と無縁の人生を送ってきたわけではないのでしょう。なんとか対応してください」
「無礼をはたらかずに要求をしりぞけるとなると、どうしたものかと。しかも、あのかたの殺意の跳ね上がり具合ときたら……ほんとうに、殺されかねません。できれば、ご指示を賜りたく」
ヤエトはため息をついて立ち上がった。
「しかたがない。では、わたしがいいましょう」
「えっ。いや、そんな……それは困ります」
「なにが困るんです。殺されるとしてもわたしです。ああ、後始末は困るかもしれないな。……ま、それは頑張って」
ぽんと代官の肩を叩き、ヤエトは歩きはじめた。
「せめてお頭を連れて行ってください」
「お頭と呼ぶと首が飛ぶのではないですか」
「あっそうでした、どうか内密に。や、殿、お待ちください、今団長をお呼びしますから！」
あわてふためいてジェイサルドを捜しに行くスラジャを無視して、ヤエトはギスケルに割り振った部屋へ向かった。
ギスケルの部屋を守っているのは、ヤエトの部下である。博沙国から同行して来た護衛は全員、副使とともに罪人の捜索におもむいて、ここには残っていない。正使は放置されているといってよい。
重んじられていない正使という役を演じているのか、それとも真実そうなのか。

騎士はヤエトの姿を見ると姿勢を正した。
「誰も入れるなとご命令でした」
「そうですか。ギスケル殿、入ります」
騎士が止める暇を与えるものかと、宣言するなり扉を開けて、ヤエトは中に踏み込んだ。
そして、おやおや……と口の中でつぶやいた。
室内は酒臭かった。ギスケルは女官の腰に手をまわし、口説いている最中のようだ。ヤエトに気づくと顔を上げ、いかにも面倒くさそうにつぶやいた。
「不粋な真似を」
「それは失礼を。出自が出自ですので、貴族のかたがたの粋というものが、わかりかねるようです」
「公……」
騎士がヤエトの袖を引いた。残念ながら、ルーギンが用意してくれた服の袖はどれも官服と似たりよったりの長さだった。貴族の服は、だらんびらんと垂れ下がった布が多いと決まっているらしい。
ヤエトは騎士の手から袖を引き抜いて睨んだ。彼を案じてくれているのだろうが、大きなお世話だ。
騎士は困惑の面持ちで後ろへ下がった。
「主人が主人なら、使用人も泥臭い。垢抜けない女ばかりだな」
ギスケルは唾を吐いた。これが粋な行為だというなら、真似したいとも思えない。
「貴殿の趣味にあわせて雇い入れたわけではありませんので」
ギスケルの腕の中にいるのは、スーリヤだ。どうしてこういう巡り合わせになるのだろう。前回と違い、ヤエトは熱でふらふらではないが、相手も娼館のちんぴら女衒ではない。十二大公家の貴族だ。本物であることは、エイギルが保証してくれた。ちょっと脅した程度では引き下がらないだろう。
しかたない。ヤエトはつかつかと歩み寄ると、スーリヤの手をとり、力一杯引き寄せた。力を入れ過ぎて、自分がよろけたくらいだ。
不意をつかれたのだろう、思いのほか簡単に、ギ

スケルの腕はほどけた。
「おい、客をもてなす気がないのか」
女官を自分の背後に庇い、ヤエトは答えた。
「客でいたいと思われるのであれば、客としてのつとめを果たしてくださらねば困りますね」
「つとめだ？」
「貴殿は博沙王の正使であり、捕吏でいらっしゃると伺いました。それゆえ、客としてお迎えしました。ですが、どちらのお役目もまっとうに果たしておいでのようには見受けられません。従って、客としてもてなす必要もないのではないかと考えはじめているところです」
「……成り上がり者のくせに、生意気な」
ギスケルが顔をしかめたちょうどそのとき、廊下から声がかかった。
「殿」
ジェイサルドだ。これはまずい、とヤエトは思った。ギスケルを刺激し過ぎて剣でも抜かれれば、勢いで殺されかねない。ヤエトがではなく、ギスケルが、ジェイサルドにだ。
急いで、ヤエトは相手をやりこめにかかった。
「お忘れのようですが、わたしは畏れ多くも真上陛下より直言を許された身。四大公家の当主です。そのわたしを、成り上がり者の生意気のと馬鹿になさる。それなりのご覚悟がおありなのでしょうね？」
「成り上がりを成り上がりといってなにが悪い」
「そして貴殿は、たかが十二大公家の当主の弟に過ぎない。やるべきこともやらず、使者として赴いた先の領主と揉める……貴殿のような輩は成敗して差し上げた方が、博沙王にも喜ばれましょう。どう思う、ジェイサルド」
「御意」
ギスケルの顔色が赤くなったり青くなったりするのを眺めながら、こいつは本物の馬鹿なのか、それとも装っているだけなのか、と考える。ただの馬鹿であれば、第二皇子はほんとうにヤエトにこの男を

始末させたくて送りつけたのかもしれない。自分の手を汚さずに済むだけでなく、《赤犬公》家の恨みを《黒狼公》に押しつけることができる。

馬鹿にもいろいろと使い道はあるものだ。

「おこないをあらためないなら、出て行ってもらいます。護衛をつけ、博沙国まで送り届けましょう」

ギスケルの表情が、変わった。

「それは困る」

「わたしは困りません」

「わかった、女には手を出さない。公がこの女にご執心とは知らなかった」

ヤエトは大きく息を吐いた。そういう問題ではないが、それで話が済むなら早くて結構だ。

「邸の内でも外でも、面倒を起こされるようでしたら、即座にお帰り願います。警告はしましたよ」

「……賊を捕縛するまで、帰れない」

「あなたのご事情はそうでも、わたしの方はそうではありませんので。二度は申しません。次は、警告なしで叩き出します」

宣言すると、ヤエトはまだ硬直しているスーリヤの手を引いて外に出た。そのまま、廊下を別棟の方へ歩きはじめる。ジェイサルドが後を追って来た。

「殿、無茶をなさいましたな」

「わたしに仕えるなら、これくらいは慣れてもらわないと」

「なるほど、心得ました」

もういいだろうという程度に距離をとったところでヤエトは足を止めた。

手をはなすとスーリヤはよろけ、その場に座りこんでしまった。おどろいて、ヤエトは自分も床に膝をつくと、娘の肩を摑んだ。

「どうしました」

「わたし……ご迷惑を……おかけ……」

して、までいいきれずに、スーリヤは泣きだした。ヤエトは困惑してジェイサルドを見上げた。老騎士は肩をすくめただけで、動かない。しかたなく、ヤ

エトは娘を説得にかかった。
「迷惑をかけていたのは、あの貴族の方だ」
「でも、旦那様、が、……お立場が……」
「それなら案じることはない。それより、おまえは大丈夫か？　その……なにかされなかったか」
スーリヤはヤエトを見上げ、頭を左右にふった。そのまま倒れこんで来たのを抱きとめ、弱りきってまたジェイサルドを見たが、老騎士はさっきと同じように肩をすくめただけだった。役に立たない。
胸元で、スーリヤがささやいた。
「怖かった……です」
見下ろせば、色を失ったくちびるがふるえている。いや、くちびるだけではない。華奢な肩も、小刻みに揺れていた。
「あの部屋には、男の使用人しか入れないようにしよう。おまえももう近づくな」
「申しわけありません」
「だから、あやまることなどないと……」
「お役に立とうと、思ったのに」
なんとなく聞き捨てならない台詞のような気がして、ヤエトはスーリヤの顔を覗きこんだ。
「どういう意味だ」
「あのかたが、この先、旦那様が有利になるよう報告してくださると」
「なにを」
「よく、わかりませんけど……」
ヤエトは頭をかきむしりたくなった。今のところ頭髪の量に不足はないが、禿げてから後悔したくもないので思い留まる。
「おまえをかろんじるつもりはないが、女官が身をまかせたことで動く評価など、わたしは必要としない。今回だけではない。今後もだ」
「……はい」
「もっと、自分を大事にしなさい。せっかく得た自由なのだから。なにも、わたしに仕えてくれなくてもよい。まさかとは思うが、恩返しなどと馬鹿なこ

とを考えているのではあるまいな」
スーリヤはくちびるを噛み、首を左右にふった。否定しているが、あきらかにあやしい。
ヤエトはため息をついた。
「あのとき、危険をおかして書状をミアーシャ様に運んでくれたことで、おまえとのあいだに貸し借りはなしだ。三の君のお邸を出て以降のことは、皇妹殿下とミアーシャ様に恩を感じるべきだし——」
「わたしは、必要ではありませんか」
スーリヤがヤエトの言葉をさえぎるのは、おそらく、これがはじめてだっただろう。
かすかな声ではあったが、ヤエトが口をつぐむには十分な威力があった。
重たい沈黙を払うように、スーリヤは顔を上げた。
「旦那様の、お役に立ちたいと思っては……いけないのでしょうか？」
一瞬、眼が合った。すぐに、娘はうなだれた。
「……少し、思い上がっておりました」
そういわれると、困る。よくわからないが、困るものは困る。
三たび、ヤエトはジェイサルドを見上げた。なんとかしてくれ、と口を動かして伝えるとようやく、老騎士は苦笑混じりにスーリヤの隣に膝をつき、肩に手をかけた。娘はおどろいて顔を上げた。
「これ、あまり殿を困らせるな。そなたは殿のことをわかっておらぬ。配下の者に犠牲を強いて、殿がよろこばれると思うか？」
「……軽率でした」
「その通り。そなたは思い上がった。そして、軽率だった。どちらもわかっているならよい。部屋まで送ってやる。顔を洗って衣服をととのえなさい」
「はい」
スーリヤの肩越しに、ジェイサルドはいかにも意味ありげな目配せを送って来た。これがエイギルなら、乙女の純情がどうたらという話だろうと見当がつくが……と考えて、そのエイギルが運んで来た書

状を眺めていたところに邪魔が入ったのだと思いだし、ヤエトは急ぎ足で自分の部屋に戻った。いつの間にか護衛の騎士が従っているが、最近ほとんどその存在を意識しなくなっている。

慣れというのはおそろしい。

エイギルはすでに北嶺へ去っている。本来の予定よりずいぶん無理をさせたが、鳥の調子は悪くない、といっていた。日限を破る方が怖いと、騎士は報告もそこそこに飛び立ってしまった。

それからもう五回ほど読み直しているが、どうにも憂鬱にさせられる内容だ。

第二皇子の噂をと指定する前に、すでに報告を書きはじめていたのだろう。ミアーシャからの書面の前半は、第三皇子に関する話が多かった。

第三皇子はさかんに皇宮に姿を見せているそうだ。あの美貌だから、ご夫人がたには人気がある。どうも父君に嫌われておいでらしい……というところがまた保護欲をくすぐるようで、すでに皇宮では第三皇子の悪口はいえない雰囲気だという。

ぬきさしならない関係に陥っている貴婦人がいるという噂もあるそうだが、名前は書かれていなかった。おそらく、信憑性（しんぴょうせい）が薄いのだろう。なにしろ、男女がいればそういう話題に直結する世界だ。

十二大公家を巡る情勢も、変化が見えるらしい。

第一皇子を支持する十二大公家の盟主は、第四、第五、第七の三人の皇子の母后の生家、《白羊公》家である。三人もの男子がいるのだから、その子らのどれかを擁立（ようりつ）してはどうか……と、持ちかける者が絶えないらしい。《白羊公》は野心満々ながら優柔不断な性格で、それをぴしりと断ることもできず、といって賭けに踏み切ることもできず、逆にこの先どう出るかが読めない状況だという。

そうなると、十二大公家のあいだの亀裂も目立ってくる。本来は同格であるべき十二大公家だが、今は《白羊公》家が一歩抜きん出た位置にある。面子がすべての貴族社会だ、下に見られるのが我慢なら

ないという当主もいるだろう。皇宮の貴婦人たちのあいだでは、どの家が主催したどの夜会に誰が出席した、欠席した、という話が凄まじい勢いで回っているという。ミアーシャはそれを別紙にまとめてくれたが、見るだけで頭痛がしてきそうだ。出席したからといって親しいとも限らず、離反しようとしているのをごまかそうとしているだけなのかもしれないから、参考になるやらならぬやら、である。

とにかく、《銀鷲公》には願ってもない展開のはずだ。その《銀鷲公》が推す第二皇子については、手紙の後半でようやくふれられていた。ご存じかもしれませんが、些末なことでも書くようにとの仰せなので、と前置きをして――第二皇子は陛下のお子ではない、という根強い噂がある、と。

第二皇子の母親は現《銀鷲公》の妹にあたり、シーリン姫といった。彼女が輿入れしたのは旧帝国でのこと。無論、正妃として迎えられた。しかし、彼女は夫に馴染まず、初夜の床入りを拒んだ。そのとき、あるじに代わって皇帝の相手をつとめたのがラハーマ――第一皇子の母后だというのだ。

これもヤエトは初耳だったのだが、ラハーマはシーリンの侍女で、名もなき下級貴族の娘だったそうだ。めでたく懐妊して第一皇子を産んだ結果、彼女は貴妃となった。正妃には劣るが、公的に認められた側室ということになる。

しかし、真上皇帝はシーリンの没後も、ラハーマを正妃とすることはなかった。つまり、真帝国の歴史上、皇后という存在は未だ出現していない。

第一皇子の生母がくり上げられなかったのには理由がある。ラハーマは、すこぶる評判が悪いのだ。

貴族社会で成り上がり者が嫌われるのはヤエトもわかっているが、ラハーマはそれを差し引いても嫌われている。とにかく威張る、万事底が浅い、しかもその浅知恵で人を蹴落とそうとしては恨まれる……と、そういう人物なのだ。

第一皇子と玉座を隔てる最大の障害はこの母親な

のではないか、とまでいわれている。

そのラハーマが広めた噂のひとつが、シーリンは浮気をしていた、第二皇子は浮気相手とのあいだにできた子だ、というものだというのだ。

事実であれば由々しきことだが、シーリンもその相手とされる騎士も、ともに沙漠越えの前に命を落としている。死者を悪くいうのは礼儀にはずれたこととされる上、皇帝が第二皇子の出自を詮索するのに気乗り薄なのも影響して、表立ってその話をする者はいない。

しかし、この噂にはそれなりの信憑性がある。シーリン妃は、夫とは別に暮らしていた時間が長いのだ。名目は病気療養だが、実際は竜種の受難と呼ばれる粛正の巻き添えになるのを嫌った《銀鷲公》の願いで、沙漠の隊商都市に移されたのだ。皇家との血の繋がりが濃い《銀鷲公》家からは、すでに少なからぬ犠牲者が出ていたため、それは無理からぬ手配と思われたのだが、遠縁にあたる騎士がそこを頻繁に訪ねたのが、よくなかった。親しげに語り合う姿がしばしば目撃されたとあっては、噂にならない方がおかしい。

この頃にはシーリン妃も夫と床をともにするのを拒みはしなかったというが、とにかく、第二皇子が生まれたのはその時期だ。ラハーマが黙っていようはずもない。

ラハーマは、機会さえあれば第二皇子を馬鹿にし、不義の子と匂わせるため、臣下たちは我慢の限界を試されているようなものだという。《銀鷲公》はそのうち剣を抜いてラハーマの首を飛ばすのではないか、と期待されているらしい。予測ではなく、期待と書かれている。大した嫌われようだ。

グランダクが聞いたら賭けをはじめるな、と思いながらヤエトは頬杖をついて考えた。首を飛ばした方がよさそうだと判断すれば、《銀鷲公》は躊躇なくやってのけるだろうが、今はまだ時期尚早だ。ラハーマは第二皇子にとって邪魔な人物には違いない

が、無理をして始末するほどの存在でもない。むしろ第一皇子の足を引っ張ってもらわねば困るのだ。

逆に、第一皇子が冷酷な人間であれば、適当な時期に母親を除くだろう。たとえ本人が親子の情を重んじたとしても、周囲が許さないのではないか。

皇帝がラハーマを疎んじる気配を見せるか、あるいは重篤な病に倒れるか。それとも、死んでしまうかすれば、もう誰も遠慮はしない。あわれなラハーマ……彼女はそれを知っているのだろうか。

そんなことまで案じる余裕はないぞと思いながら、ヤエトはまたミアーシャの手紙に戻った。

最近、第三皇子は《天地輪》の内容を匂わせる発言をしているらしい。皇子たちの中に、謀反をたくらむ者がいる気配があるようだと……比喩を多用し、けっして直接的な表現はしないが、あきらかにそう示唆する発言をくり返しているようだ。

――三の君の口ぶりからは、問題があるのは二の君でいらっしゃる……という印象を受けました。

それが、報告の結びである。

ヤエトは大きく息を吐き、手紙を畳んだ。

第三皇子がどういう目的で第二皇子を陥れようとしているかはわからないが、《銀鷲公》がこれを看過することはないだろう。今後、きな臭い事態に発展するのは間違いない。巻き込まれずに済ませたいものだが、それも困難をきわめそうだ。

そもそも《銀鷲公》がどの程度、第二皇子を玉座にと望んでいるのか判断がつかなかったのだが、ミアーシャの手紙でなんとなく理解できた気がする。

正妃として姫を輿入れさせながら侍女に先を越され、やっと産んだ男子も浮気の結果と揶揄されたのでは、立場がない。あの大貴族が、泡沫貴族あがりの女官風情が産んだ子の下風に立つなど、あり得ない。《銀鷲公》は本気に違いない。

無論、第一皇子側も、そうですかとおとなしく玉座を明け渡すはずがない。すでに双方とも根回しを進め、策謀を巡らせているはずだ。

このぶんでは皇女も早晩、誰につくのかという決断を迫られるに違いない。

ヤエトは《黒狼公》である以前に皇女の副官だ。彼の行動は、皇女の意志を反映していると思われるだろうし、監視もされているだろう。第二皇子の使者の扱いは、いよいよ難しいということになる。

正直いって、ギスケルにはさっさと女官に手を出させた方がよい。不品行を理由に蹴り出せる。しかし、女官たちを餌にするわけにはいかない。怖かったと、あんなにふるえていたではないか。

——甘いな。

この程度の犠牲を強いることもできないとは。しかも、本人が望んでいるのに。だが、無理なものは無理だ。彼にはできない。

ため息をついて、ヤエトは手紙を燃やしはじめた。第二皇子の父が皇帝ではないかもしれない、二の君が謀反をたくらんでいると三の君が匂わせている……などと書いた代物を、手元に保管しておくわけにはいかない。たとえ皇宮の貴婦人たちのあいだでは常識になっている内容でも、だ。

「殿、失礼します」

ジェイサルドが部屋に入って来たときには、ミアーシャの手紙は灰になっていた。

「なにか？」

「北嶺より、使者が」

使者という言葉が嫌いになりそうだ。

「通してください」

ジェイサルドは廊下に向かって少し首をふった。一礼して入室したのは、厩舎の助手のタルキンだった。ヤエトは眉を上げた。騎士以外を寄越すという話は聞いていない。

開口一番、タルキンは願い出た。

「お人払いを」

「ジェイサルドはかまわない」

老騎士は室内に残り、静かに扉を閉めた。

タルキンは少し迷っていたようだったが、やがて

前に進み出て告げた。
「団長殿が今夜、おいでになります。俺は、先触れです」
――ルーギンが？
彼には北嶺にいてもらわないと困る。ただでさえ、皇女の様子がよくわからなくて不安だというのに。それに、先触れならそれこそ伝達官を通じて報せてくれればよいのだ……。嫌な予感がした。
「なにが起きているのです」
「その……姫様を連れておいでになります」
口がぽかんと開いてしまった。
「……今、なんといいました」
「姫様を連れておいでになります、団長殿が」
ヤエトはその言葉を頭の中で反復してみた。言葉の順番を並べ変えてもみたが、自分が誤解しているという可能性はなさそうだ。
「なんのために？」
「姫様が、鳥に影響を受けてしまって……鳥たちから距離をとった方がいいだろうと、厩舎長が……」
ここで少年は声をひそめ、きょろきょろと室内を見回した。
「極秘、なんですけど。大丈夫でしょうか？」
なにが大丈夫だというのか。
彼はこめかみを押さえた。頭が痛い。気のせいではなく、しっかりと痛い。
「今、ここには博沙国の使者がいるのですよ。極秘にというのは、ルーギン殿の指示ですか？」
「はい。《天地輪》のあいだ、姫様は北嶺をはなれない方が望ましいから、と」
なるほど、都に逃げ戻るのは原則禁止、領国を空けるのは非推奨、といった条件があったはずだ。
「しかし、鳥に影響を受けるとは？　ご自分が鳥になったおつもりで、ふるまっておいでなのですか」
タルキンは、真面目な顔でうなずいた。
「そんな感じです」
冗談が冗談にならない日常なんて断固拒否する、

とヤエトは拳をふり上げ、全智の神に届けとばかりに叫んだ――心の中で。

いったいどういう状況なのか、さっぱりわからない。伝達官に訊いてみることも考えたが、鳥になったつもりの皇女とでは、うまく心も繋がらないに違いない。そのせいで、やけに不自然に接続が切れていたのだろう。筋は通るが、納得いかない。

「……わかりました。この子に部屋を用意してやってください。それから、博沙国の使者をなんとかしないと……」

後半はジェイサルドに向けた言葉だったが、返って来た答は意外なものだった。

「スラジャにやらせましょう」

「できますか？」

「適当な嘘をつかせたら、奴は天才ですよ」

「……だったら、今日も自分でなんとかしてくれればよかったのに」

「殿が真面目なかたでいらっしゃるので、口先での対応を遠慮していたようです。次は自分で采配する、と申しておりました。懲りたようですな」

殺されかねないから嫌だといっていたはずだが、それもヤエトに遠慮して、真っ正直に応対したら殺されると訴えていたわけか。

なんという馬鹿馬鹿しさだ。

「彼はわたしを理解していますか？」

「……は？」

「下の者に犠牲を強いることがないよう、配慮できますか」

ジェイサルドがいったことなのに、本人は忘れていたらしい。ああ、と騎士はうなずいた。

「そういうことですか。一応、念を押しておきましょう。それで大丈夫のはずです」

「では、そうしてください。運悪くあの男に殺されでもしたら、仇はとってやると約束しましょう」

ジェイサルドはいかにも意外そうに尋ねた。

「殿が、ですか？」

「わたしが命じて、あなたが実行します」
「なるほど。殿も儂の使いかたがわかって来られたということですか」
「娘を泣きやませるのも、臣下の仇討ちも、なんでもまかせておけばよい……という程度にですね」
ヤエトは立ち上がり、意味がわからないという顔をしているタルキンの肩を摑んで、くるりと扉の方に向き直らせた。
「行きなさい。しっかり休むんだ。今は気が張っていてわからないだろうが、疲れているに違いないからね。ジェイサルドが部屋に案内してくれます」
「客室案内係もおまかせあれ。宿屋を開くときのための修練と思ってつとめましょう」
視線が合うと、老騎士は楽しそうに笑った。
ヤエトは笑顔を返したが、実際はまったくそんな気分ではなかった。皇女が鳥に影響された？
――なにが起きているんだ。

6

ルーギンが到着したのは、夜半過ぎだった。鳥は街壁ではなく、ヤエトの部屋の露台に舞い降りた。
寝ずに待っていたヤエトは羽撃きの音で気づいたが、扉を開けようと近寄るあいだにも、押し殺した声が聞こえてくる。
「観念なさい。つきましたよ」
「嫌だ」
皇女の声だ。
ずいぶん弱々しい調子におどろいて、ヤエトは急いで扉を開いた。
おかげで、否定的な台詞を吐いているあるじと、いきなり顔を突き合わせる羽目に陥った。
「ヤエトのところへ行くのは、嫌だ」
「……連れ帰ってさしあげてはどうでしょう？」
思わず、はじめに浮かんだ言葉が口をついて出てしまう。皇女は顔を背けただけで、答えない。ヤエ

トは皇女の両手を摑んで引きずっているルーギンの方を見た。こちらは、いかにも疲れてうんざりしたという顔つきだ。乱れた髪をかき上げながら、まったく、と顔をしかめてヤエトを見た。
「苦労して連れて来たとたん、それはないな」
「ありませんか」
「ないですね」
皇女は無言のままだ。
「……帰らないなら、とにかく中へ」
「わたしはすぐに帰ります。姫様を連れて来ただけですし、伝達官を乗せてすぐに戻りますよ」
業を煮やしたか、ルーギンは抗議の声をあげる皇女を抱き上げて室内に入り、寝台に放り投げた。
無論、ヤエトの寝台である。この部屋を皇女に明け渡せというのか、と思いながら露台に通じる扉を閉め、向き直ったルーギンの視線をとらえた。
「少しだけでも休んで行かれた方がよい。伝達官殿の準備もあります。こちらへ」
ルーギンはいかにも大儀そうに息を吐いて、肩越しに皇女を見た。
「おとなしくしていてくださいますね、姫」
「……」
皇女は答えない。
「なにかあれば、《黒狼公》の責任です。おわかりですね？」
やはり皇女は無言だったが、いうだけいって、ルーギンは満足したらしい。いつもの彼らしく、胡散臭いほど魅力的な笑顔が復活した。
「酒を所望してもよいかな。ここ三日ほど、一滴も呑んでいないのでね」
「量を過ごさないと約束していただければ」
「約束もなにもないでしょう。また以前のように瓶ごと取り上げられるだけだと思うな」
暢気な口調で告げるルーギンを続き部屋に案内し、ヤエト自身は廊下に顔を出してジェイサルドを呼んだ。皇女と入れ代わりに伝達官は連れて行くのかと



タルキンに訊いておいてよかった。おかげで伝達官に、いつでも出発できるように準備をとたのんでおくことができた。

「来ました。伝達官殿に、少ししたら出発すると伝えてください」

「かしこまりました」

「正使はどうなりました」

「大丈夫です。スラジャが連れ出しました。芝居を見せて、そのまま酒盛りです。勘定はすべて博沙国に回してよいか、と殿のご指示を仰いでおります」

それができればとは思うが、やり過ぎだろう。

「支払いは我が領の公費で。経費の一覧は作っておくように」

「心得ました」

扉を閉めてふり返ると、寝台に横たわったまま動かない皇女の姿がちらりと眼に入った。よほどふてくされているのだろうか。

続き部屋に入ると、ルーギンがもう勝手に呑みはじめていた。硝子の酒杯を片手に、棚に並べた酒瓶を物色しながらつぶやく。

「下戸っていうのは、嘘じゃないんですか？　趣味がいい。上物ばかりだ」

「……いざというときのために、酒だけはよいものを揃えておくようにしているのです」

「いざ？」

「個人的な話し合いで籠絡せねばならない相手が出現すると、困るので」

「相手が下戸だったらどうするのかな？」

「口当たりのよい酒を呑ませて酔い潰すのが効果的だと、ジェイサルドに教わりました」

ルーギンは咳込んだ。少し、むせたらしい。

「なんです、その実用的な教えは！」

「勉強になりますよ。ところで、貴殿にも教えを乞わねばならないのですが。タルキンの説明は、説明になっていないし……なにがあったのです。鳥たちから距離をとった方がよいからここに連れて来る、

といわれても。影響とはなんですか？」
ヤエトは真面目に尋ねたのだが、ルーギンは笑いながら答えた。
「そのままですよ。説明しづらかったのでしょう。鳥が発情期に入ったせいだ、とはね」
発情、とヤエトはくり返そうとした。だが、口の形がそう動いただけで、声にはならなかった。
そういえば、厩舎長がそんなことをいっていたはずだ。乗り手が鳥に引きずられることがある、と。
「しかし、クラルは使わないはずでは」
「厩舎長がいうには、例年より繁殖に力を入れたので、鳥たち同士に影響が出てしまったらしいですよ。厩舎を分けたりもしたんですが、なまじ感応力が強くなっているせいで、少し距離を置いた程度ではね。若い鳥は全滅ですよ。皆、頭に血がのぼってしまって。今、使えるのは年寄りの鳥ばかりです」
「……そうですか」
椅子にへたりこんだヤエトに、ルーギンが思いだしたように告げた。
「シロバはうまく相手をみつけたそうですよ。厩舎長から、是非お伝えしてくれと言付かりました」
「そうですか」
ルーギンは眉を上げた。
「感動がないなぁ」
「よくわからないのです、鳥に影響されるといっても……鳥同士のことはわかりましたが、その……」
「姫様は、どの鳥の心も読めてしまうのが災難のもとかな。かなり我慢なさったと思いますよ。でも、ご自分の言動に不安を感じられたのでしょうね。朝議も欠席なさり、部屋に閉じこもってしまわれて……どうしようかと思ったのですけど」
「どうしたのです」
「去年、先生がおっしゃったでしょう。扉さえ開けてもらえれば、あとは押し入って直談判すると」
ヤエトは呻いた。
「わたしが、左様なことを申しましたか」

「覚えてない？　衝撃の発言だったのにな」
とにかく、とルーギンは話をつづけた。
「今朝、実践しましたよ。厩舎長の話で見当がついたのでね。ナオ殿を説得して、タルキンをこちらに飛ばせ、口止めをして今に至ると」
「……いつまでお預かりすればよいのでしょう？」
「たぶん、二十日くらいかと」
ルーギンはにこにこしている。なぜこの局面で笑えるのか、ヤエトにはさっぱりわからない。
「鳥と心が繋がるとまずいのであれば、伝達官も同じことになるのでは」
「大丈夫でしょう、伝達官には無縁の世界だし」
「は？」
「おや、ご存じないですか。伝達官は、男女の仲になれないんですよ。女性なら子を産めないし月のものも来ない、男性なら勃たない」
爽やかにいいきられた。初耳である。
「知りませんでした」
「最近は、先生の先生になれる機会が多いな」
「それでその……北嶺王は、どういう状態でいらっしゃるのですか」
ルーギンは肩をすくめた。
「年頃の娘でほら、いるでしょう。ちょっと箍がはずれた感じの。あれです、あれ」
ヤエトは頭を抱えたくなった。いや、むしろ叫びながらこの場を駆け出したい。そうでなくても、女好きの使者の扱いに困っているというのに。
「……その状態で置いて行かれても困るのですが」
「じきに醒めます、大丈夫。それに、鳥たちだって相手を選ぶんですよ。姫様も、誰彼かまわず口説きやしません。……そうだな、もし迫られたら、ものにしてしまってはどうですか」
ヤエトは眼をみはった。ルーギンは酔っているのではないだろうか。今呑んでいるのは、何杯目だ。
「聞かなかったことにします」
「堅物らしいご返答だ。でも、悪くない縁組みだと

思いますけどね。身分も釣り合うようになったことですし。先生なら安心できるな、わたしも」
「下半身の導きに従うと、陛下に殺されます」
「ああ、そうか。それは困るな……」
「だいたい、身分の釣り合いなら貴殿の方が」
つい言葉を返してから、しまった、と思った。今のは禁句だ。どうして口にする前に気づけないのか。
ルーギンは、やさしく教え諭すように答えた。
「お話ししたでしょう。わたしが姫様とそんな関係になることは、あり得ませんから」
「……申しわけない。失言でした」
騎士は微笑んで、嘘ですよ、といった。
ヤエトがきょとんとしていると、冗談です、とさらに言葉をかさねた。
「姫様は、ぼうっとしておいでなだけです。男と見れば迫ったりはなさいません。安心したかな？ それとも、少しは気落ちなさいましたか」
どこまでが本気でどこからが冗談か、いまひとつ読めない。ヤエトは渋い顔で話題を変えた。
「下界の現状はご存じですか」
「エイギルから少しは聞いていますが、ほぼ入れ違いでね。時間がとれず、詳しくは知りません」
「第二皇子の使者が、ここに探りを入れに来ていますし、皇宮では第三皇子が第二皇子を陥れようとしているらしい。おそらくは、《天地輪》でも」
「あのかたも懲りないな。《金獅子公》に唆されたにしても、あまり同情できそうもない」
杯に酒を注ぎ足そうとするルーギンの手を、ヤエトは止めた。
「そろそろ自重してください」
「まだ身体があたたまってもいないんだけどな」
文句をいいながらも、ルーギンは逆らわず酒瓶を渡した。その瓶の軽さに、ヤエトは眉根を寄せた。
「……これだけ呑んで、身体があたたまらない？」
「北嶺の寒気が身体に染みて抜けないのかも」
「ふざけるのもたいがいになさい。さあ、立ち上が

って外に出て、頭を冷やすのですね。伝達官殿をお連れするまでに、正気に戻っているように」
「おお、なつかしい。学舎に戻ったみたいだ」
「ルーギン殿」
「はい、はい、はい」
騎士は立ち上がると、かろやかな足取りで部屋を出た。酔っている風ではないが、それでも素面とはいいがたい。
通りすがりに気になって寝台を覗く。枕辺の燭台が作る光の輪の中で、皇女の髪は赤味を帯びていた。頬が紅潮して見えるのも、そのせいか。一瞬、視線が合ったが、皇女はすぐ壁の方を向いてしまった。
機嫌をそこねるようなことをしただろうかと記憶をひっくり返してみたが、すぐに諦めた。どうせ、若い娘の考えることなど理解不能だ。
「なにか、お持ちするものはありますか？　お荷物は先に届いております」
皇女の身の回りの品は、タルキンが運んで来ていた。荷造りしたナオの混乱ぶりを示すように、やたらと衣服が多い。平地は北嶺ほど寒くないのに。
皇女の返事はない。ヤエトは諦めて部屋を出た。
伝達官は身支度を済ませて部屋で待っていた。いつもと同じように、よそよそしい。そして冷静だ。
「詳しいことは、同行の騎士がご説明します。皇女殿下の騎士団長ですので、安心しておまかせを」
「わかりました」
「入れ替わったことは秘匿する方針ですので、向こうでは外出などできかねると思います」
「かまいません」
少し躊躇したが、疑問に感じていたことを尋ねずに済ますことはできなかった。
「皇女殿下から、なにかお言葉がありましたか？」
「明瞭なお言葉は、ありません。ですが……安堵しておいでのようですので、こちらに連れて来られたのは好判断だったのではないかと。僭越ながら」
「そうですか」

ヤエトはほっとした。なにしろ、出合い頭に聞かされたのが、名指しでの拒否だ。一連の行動が皇女の意に反しているのであれば、伝達官の協力を得られるかも微妙なのだ。彼女は皇女個人、あるいは皇家に仕えているのであって、北嶺の家臣ではない。

ヤエトの部屋に入ると、伝達官はちらりと寝台の方へ視線を遣った。皇女は横たわったまま、動かない。伝達官は無言で露台へ向かった。

開け放たれた扉の外には、夜空を背景に羽毛をふくらませている黒い鳥と、その鳥の嘴を撫でる痩身の騎士の姿が見えた。夜のこととて風になびく髪は色を失い、ほとんど銀に近く見える。相変わらず絵になる男だ、とヤエトは感心した。

「道々、ご説明をお願いします。北嶺を、貴殿ひとりに背負わせるのは心苦しいのですが……」

「ご心配なく。こちらは別天地です。下界で暮らしておいでの公の方が、ご苦労は多いでしょう」

そこに苦労の種をまたひとつ蒔いて行く人間の台詞かと文句のひとつもつけたいところだ。

「いずれ隠居したときには、すべて楽しい昔語りになりますよ。過ぎてしまえば良い経験です」

ヤエトの返答にルーギンはにこりと笑い、失礼、とひと声かけてから伝達官を抱き上げた。姿勢を低くした鳥の背に伝達官を乗せると、自分もひらりとまたがって、騎士は手綱をとった。

「では、姫様をたのみます。御免」

鳥が立ち上がり、翼を広げる。二度ほど羽撃いたかと思うと、そのまま露台の手すりに飛び上がり、そして飛び立った。

——やはり、魔法だ。

あれほどの巨体がかるがると空を舞うのは、何度見ても眼を疑う。だが、これが現実だ。鳥は飛ぶ。乗り手の意のままに、昼夜を問わず。

見る間に遠くなる黒い影を見送って、ヤエトは息を吐いた。部屋に戻れば、あまり顔を合わせたくない状態のあるじが待っている。

——隠居したときに、楽しく語れるかどうか。

自分でいっておきながら、そうなる気がしない。なにしろ、畏れ多くも皇女殿下が色惚けになってしまわれたという顚末だ。墓の下まで持って行くしかないだろう。

語り物にしたら喜ばれるだろうとジェイサルドがいったように、昨今のヤエトの人生はやたらと華々しい。だが、光があたるぶんだけ影も深く、暗いものになっているように思われる。他者に語り得ない部分は増えるばかりで減ることはない。

それでも、これも現実の一部なのだ。詩人の作り話でも、時の流れですり減って形を変えた伝説でもない。今、彼自身に起きているできごとなのだ。

ヤエトは踵を返し、その現実に対処すべく部屋に戻った。

（下巻に続く）

あとがき

本格隠居願望ファンタジー『翼の帰る処』第二作をお届けします。

そんなジャンルあるのか、という感じですが……ひょっとすると、本格を標榜するのは思い上がりかも。なんちゃって隠居願望ファンタジーくらいでどうでしょうか。

ものすごく、どうでもいいですね。すみません。

さて。今回も主人公の隠居願望が達成されそうな気配はありません。

うっかり真面目に仕事をしてしまうからいけないのだとは、本人もわかっているようですが、生来の気質は容易に矯正できるものでもなく。皇女にはますます信頼され、皇帝には睨まれ、部下からは慕われて大忙し。望まぬ出世もしてしまい、第一章から昏倒寸前。栄達はめでたいものという常識に反して、地獄の底に突き落とされたような心境に。

ひとことで申しますれば「相変わらず」といったところでしょうか。

かわいそうですが、彼が気の毒なことになるほど読者の皆様にはお喜びいただける、いわば不幸なほどかがやく主人公なので、今後も夕空にかかる明星のごとく、いつ沈むかわからない儚げな位置で、きらきらと光っていてもらいたいと思います。

相変わらずといえば、作者もです。やる気の割に、話が長くなるという意味で。

次は一冊におさまる話にするつもりでプロットを作りました。本気でした。

しかし、前作から引き続き担当してくださっている編集の内田さんは、打ち合わせの席でそのプロットをご覧になると、確認するようにおっしゃったのです。

「これは……一冊じゃないですよね？」

えっ。いえっ、一冊です！　と反論したものの、一冊では無理かもしれないと、その時点ではじめてチラリと思いました。あれっ、まずいかも……これはひょっとして？

とにかく書きはじめましょうという結論に至ったその打ち合わせから、電話のたびに。

「どうですか、一冊になりそうですか？」

……無理でした。ご覧のように、一冊にはなりませんでした。おそるべし、内田さん。十何年この仕事をやってきたくせに量が読めない自分も、逆の意味でおそるべし。

プロットが示唆する話の分量がどうあれ、一冊に「したかった」というのが真相なのでしょう。願望と現実の違いが判別できていないとは、困ったことです。ヤエト先生に叱られてしまいそうです……ああ、なんだか口調まで思い浮かびますよ。

願望と現実が食い違ったと申しますれば、もうひとつ。

実は、今回は「ルーギンをカバー・イラストに！」を目標にプロットを作りました。前作で、事前に想定していたより出番が少なめに終わってしまったので、今度はカバーを飾っても違和感ないくらい目立たせたいと思ったのです。けっして、フルカラーでルーギンが見たいから（だけ）ではありません。

ところが。上巻はご覧のように武闘派老人と主人公に乗っ取られてしまいました。おかしい……なぜこんなことに。ああしよう、こうしようと話し合ってベストな着地点を探した結果ではあるのですが、当初の目標を思えば首を傾げざるを得ません。

もちろん、現実は現実で悪くないのです。むしろ、素晴らしい。ジェイサルドのするどい眼光に射抜かれる人続出でしょうこれは！

いやもうほんとうに、ことぎさんにイラストをお願いしてよかったと思います。ありがとうございます。今後もよろしくお願いいたします。

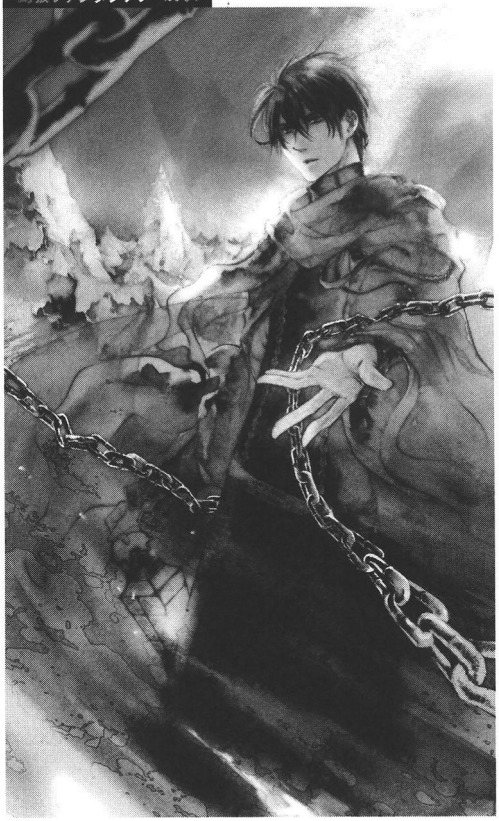
そんなこんなで現実は厳しかったわけですが、作者の予定と違っても、できたものさえおもしろければよいのです。結果オーライであれかしと、今は祈るばかり。読者の皆様に下巻が待ち遠しいと思っていただけるような、そんな本に仕上がっていますように。

その下巻の刊行は八月、カバーには今度こそルーギンもちゃっかり登場する予定です。内容は、……せっかく作ったプロットを無視して爆走、作者本人もびっくりの展開となっ

ております。こまかいところはお読みいただいてのお楽しみ、ということで。
それでは、また。

二〇〇九年七月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

翼の帰る処（ところ）上・下

NOVEL 妹尾ゆふ子

ILLUST ことき

「過去を視る」力を持つ帝国の史官・ヤエト。病弱な彼は、赴任先の北嶺で地味な隠居生活を送ることを夢見ていた。しかし、政治に疎い北嶺の民に悩まされ、さらには北嶺に太守として来た勝ち気な皇女に振り回され休まる間もない。だが、北嶺を知るにつれ、ヤエトはこの地に帝国の秘密が眠ることに気づいていく…。歴史の光陰が織りなす壮大なるファンタジーロマンの扉がいま開かれる──。

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

帝国の双美姫

1〜2

NOVEL ひかわ玲子

ILLUST HACCAN

古き神々に支配され魔がはびこるハラーマ大陸。かの地に人々が安心して住める領域を拡げようと、オカレスク大帝は戦いを繰り広げていた。その最前線で戦うのは、アムディーラ皇女とサファリナ皇女。美しくも勇猛果敢な二人を人々はこう呼んだ——「帝国の双美姫」、と。「女戦士エフェラ＆ジリオラ」から15年がたち、大陸の創世記である戦乱の物語が始まる!!

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

オタクホスト桜木玲音の災難

NOVEL 佐々木禎子

ILLUST 村崎久都

新宿歌舞伎町のホスト・桜木玲音は、実は『二次元キャラにしか萌えられない』という生粋のオタク。行方不明のキャバ嬢探しやらストーカー相談やら、次々と舞い込む厄介事に、玲音はガンマニアの弁護士、腐女子のコスプレイヤー、ネット中毒のゴスロリSEら、オタク仲間たちとともに立ち向かう！
すべての愛すべきオタクたちに捧げる抱腹絶倒のラプソディ――。

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼 FANTASIA NOVELS

ヴァーティゴ

NOVEL **深見真**

ILLUST **沈没**

２０３０年――極端に治安が悪化した東京。警視庁組織犯罪対策第五課に所属する刑事の夏目静香と新人刑事の羽柴澪緒は、銃器・麻薬密売事件の捜査中、凄惨な殺人現場に遭遇してしまう。ファイトクラブに出入りしている犯人の情報を掴んだ２人は、なりゆきで「レズカップル」として潜入することになったが…。電装をその身に纏った美女刑事コンビが、魔窟と化した東京を華麗に駆ける!!

幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

第一回

幻狼大賞 作品募集

夢に向かって挑戦していくその力を「幻狼大賞」に、ぶつけてよう!!
あなたの熱意が小説界の未来を切り開きます!

Novel 小説部門

幻狼大賞 **100万円**

優秀賞 **50万円**

奨励賞 **10万円**

学生特別優秀賞（学生のみ） **30万円**

学生特別奨励賞（学生のみ） **10万円**

Illustration イラスト部門

優秀賞 **30万円**

奨励賞 **5万円**

学生特別奨励賞（学生のみ） **5万円**

「学生特別優秀賞」「学生特別奨励賞」は本募集に応募された作品のうち、優れた内容ではあるものの上位の賞にはあと一歩届かなかった作品に対し、応募及び受賞時点で学生である方を対象に特別に選考される賞です。

幻狼大賞 作品募集

募集作品 ジャンルを問わず、エンターテインメント作品を募集。商業的に未発表作品であることが条件（同人誌や営利目的でない個人のＷＥＢサイト上で掲載された作品も応募不可）

応募締切 2010年3月末日　当日消印有効

発　　表 2010年6月末日（予定）
幻冬舎コミックスＨＰ、幻冬舎コミックス頒布物上にて

選　　考 幻狼ファンタジアノベルス編集部

募集要項

小説部門

◆フォーマットは、縦書き1600字（40文字×40行）を１枚とし、80～120枚以内。
◆用紙のサイズはA4を使用してください。
◆データの形式は問いませんが、フロッピー、CD等、データのみの応募はできません。必ずプリントアウト原稿でご応募ください。
◆原稿用紙は左肩をダブルクリップで綴じ、右下に必ず通し番号をふってください。
◆本文原稿のはじめには以下のような応募者プロフィールを2枚つけてください。
1枚目：応募用紙をA4の紙に貼り付ける。
2枚目：応募作品のあらすじ（800文字以内）。
◆感熱紙はご遠慮ください。また、鉛筆書きは不可です。誤字・脱字等の無いよう、しっかり推敲しましょう。
◆1人2作品までの応募と致します。

イラスト部門

◆用紙のサイズはA4以上を使用してください。
◆カラーイラスト2点、モノクロイラスト2点を1セットとしてご応募ください。
◆CG作品の場合は使用ツールとそのバージョンを明記のうえ、CD、DVD等のデータディスクとプリントアウトを同封してください。
◆応募用紙は作品の前に付けてください。
◆1人2作品までの応募と致します。
◆原稿返却を希望される方は、返送先の住所・氏名を書き、送料分の切手（作品を送る時と同額の切手）を貼った返信用封筒を同封してください。
◆発送の際は、作品が折り曲がらないよう、厚紙を添え、ビニール袋に入れることをお勧めします。

送付先

〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
幻冬舎コミックス　編集二部
「第１回　幻狼大賞」係

【注意事項】●同一作品による他の文学賞への二重応募は認められません。●条件を満たさない応募作品は選考対象外となります。●入賞作品の出版権及び映像化、コミック化、ゲーム化、ドラマCD化などの二次使用権は、すべて（株）幻冬舎コミックスに帰属します。別途、規定の印税をお支払い致します。●応募用紙は弊社HPより、プリントアウトして下さい。※いただいた情報は、応募者の皆さんの許可無く、編集以外の第三者に譲渡・提供することはありません。

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部

幻狼 GENROU FANTASIA NOVELS

Colophon

翼の帰る処［ところ］2——鏡の中の空——上

THE HOME OF THE WINGS——Volume two——First volume

二〇〇九年七月三十一日——第一刷発行

著者——妹尾ゆふ子 せのおゆふこ

発行人——伊藤嘉彦

発行元——株式会社 幻冬舎コミックス
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六四三四（編集）

発売元——株式会社 幻冬舎
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六二二二（営業）
振替 〇〇二〇-八-七六七六四三

コンセプトデザイン——コードデザインスタジオ

印刷・製本所——共同印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は
送料当社負担でお取替致します。
幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2009
ISBN978-4-344-81707-4 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344817074

1920293009001

ISBN978-4-344-81707-4

C0293 ¥900E

Published by
GENTOSHA COMICS

定価——本体900円+税
発行——幻冬舎コミックス
発売——幻冬舎



翼の帰る処 2——上
——鏡の中の空——

THE HOME OF THE WINGS——Volume two——First volume

蛮族との戦で傷ついた北嶺郡の復興のため、病弱な体を押しながらも奮闘するヤエト。そんな彼に、皇女の推薦で貴族に出世するという「悪い知らせ」が飛び込んでくる。失意の中、新年祭のために皇女と都に向かった彼は、その式典の最中、さらなる衝撃の事実を知らされることとなる……。
妹尾ゆふ子の人気ファンタジー、待望の続編が登場!!